
グラビティワールド

りい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グラビティワールド

【Zコード】

Z3869U

【作者名】

りい

【あらすじ】

かつて大人気だったVRMMORPG グラビティワールドしかし、15年の時を経てスペック的に限界が来てしまい、メーカーの必死の引き止め工作も空しく、遂に2年後にサービス終了という憂き目を見こととなつた。彼こと近藤零夜くキャラクター名：レオは、白いローブの男に誘われるまま、急に現れたネオン満載の怪しい門を潜ると、ついた先は異世界だつた。 本作品は完全に作者の悪乗りです。燃料は全て作者の悪乗り……の、ハズが最近わりと真面目に書いていたりします。

プロローグへ歩き出すまで

15年前、世界初のVRMMORPG グラビティワールド が発売された。

巨額の制作費がかかつたと云われるそれは、システム面での作りこみも素晴らしい、当時は爆発的な人気があった。

しかし世界初と言うのは問題も多く、搭乗型の操作媒体である「スフィア」も高額であつた上に少々脆く、改良版が出るまでは買い控えする人も居たくらいだ。

再現できるポリゴンは少し荒いものだし、10年経った今でも基本スペックはさほど変わらないので今では少々時代遅れに成ってしまったが……。

そう、今はもう殆ど人は居ないのだ。

理由は色々あるが、一番はやはり、4年前に発売された新作ソフトだろう。

最新型の「スフィア」と同時発売されたそれは、従来のものより数段上がったスペックを利用して現実と見紛う程の世界を創る事に成功していた。

会社の方もプレイヤーの引止めのため、様々なイベントやキャンペーンを行つたが、一時的な効果しか出せず、10以上あつたサークル（世界）が5つまで統合されたのを期に、残り1年半でサービス

スを終了すると告知した。

そんな寂れたゲームに、一人の男がログインしている。

近藤零夜ことキャラクター「レオ」は、発売当初からの古参プレイヤーの一人で、今年で28歳になる社会人だ。

彼が操作するアバターは黒髪のハイエルフ。15年の歳月で自分の分身様な存在になっている。

発売当初は両親が会社勤めで高給取りだったのもあり、「スフィア」も簡単に買つてもらえたのだが、ゲームを優先した生活をしていたせいで、彼自身はバイトしていた近所のホームセンターの平社員であり、多少の貯金も作りたかったので新型の「スフィア」とソフトが必須の新しいゲームには、手が出せなかつたのだ。

「やっぱ赤龍は倒すだけでテンション上がるな」

灰色の塊になつて消える赤龍を見ながら、レオは草原に座り込み、ドロップ品を確認する。

そこは「神域」と呼ばれる、天使や龍や天馬が徘徊する草原のようなエリア。

レベル130の火竜は、レベル150のレオにとって本来苦戦する敵であつた。

しかし、度重なるキャンペーンと過疎化による人口減少に対する緩和によって、プレイヤーの大幅な強化が成された結果、気楽に倒せる敵になつたのだ。

具体的に言うと、世界に一つだけのアイテムが、もう一つ取れるようになるキャンペーンと、本来メインジョブの半分のレベルまではしか能力を発揮できないセカンドジョブを、同じレベルまで引き上げるダブルジョブに変えたと言つもの。

それによる現在の彼のステータスは

種族：ハイエルフ

ジョブ：忍者150（上限）／学徒150

力 : 220

知恵 : 187

信仰 : 255

耐久 : 180

器用 : 240

俊敏 : 255

魅力 : 210

装備はメインジョブの忍者仕様。学徒は攻撃魔法はあまり使えないが、回復とサポート魔法が得意な特化ジョブ。ちなみにステータスの最高値は装備も含めて255までとなっている。

ちなみに、本来後衛向けのエルフにしては力が高いのは、ステータスを2ずつプラスする高難易度クエストを、複数クリアした報酬である。

本来なら小太刀の一刀流がメインの忍者では、これでも赤龍は相手には苦戦するのだが、レオの所有物の中でも……このゲームの中でも最強と言われる武器 天羽々斬り があるため、雑魚と言つても過言ではない。

天羽々斬り は、どんな物でも紙の様に切り裂き、斬撃時に両手武器並みの大きさに伸びる為、両手武器と同等の威力があるのだ。そのほかにも一つ、この武器には隠し機能がついているのだが、ここでは割愛する。

世界に一つだけの素材を三つも使ったこの武器にかかるれば、赤龍など何匹来ようと物の数ではない。

この刀については、一度あまりに強すぎるとして、一度弱体された事があるのだが、プレイヤーの猛反発を受けて元に戻した経緯がある。

「さて、約束の時間までもうちょいあるし、適当に狩つて待つかね」

レオは現状レベル150のキャラクター数人分の能力を持つため、過疎化が進んだこの世界では知人にパーティ規模の戦力としてよく頼られる。

その後、2~30匹の幻獣やら龍やらを狩つた頃、メールの着信を告げる音が聞こえた。

視界の隅の操作ウインドウ表示ボタンに指を当て、画面を引っ張ると新着メール1件と書かれてた場所をチェックした。

『手伝い頼んだのにすまん。急用で行けなくなつた……今度お詫びに勤務シフト都合するからカンベンして~(^-^)』

メールには職場の同僚から、今日の予定が無くなつた事を知らせるメッセージが書かれていた。

昨日会つた時の話から察するに、大方彼女からの小言に耐え切れず、そちらを優先する事になつたのだろう。

「全く、30分待たせてキャンセルの拳句にリア充とは……どうしてくれようか」

「 ウィンドウを閉じて平原を見渡した。最近では殆ど人を見なくなつた最高レベルのダンジョンに一抹の寂しさを覚える。

ここはレオ位の能力がないと、5～6人のパーティ以上でなければ危険な場所。

「 昔前はレベルを上げる為に人が溢れ返っていた狩場も、今では無人に近い状態だ。そこでふと、最近このエリアを探索した人が少ないのではないかと思い至る。

この所、運営側が殆どやけっぱちになつて色々なイベントを追加している（滅茶苦茶な内容が多く、あまりやっている人はいない）が、この 神域 でも何かやっているかもしね。久しぶりに見て回るのも悪くない。

それから数時間かけて 神域 を見て周り、そろそろ帰ろうとした時、ありえないモノが目に入った。

「なんじゃこりゃ……」

それは何の冗談か、暁の草原に白い門のような建造物が建つていた。そこまではいい、だが問題はその建物が色とりどりのネオンで虹色のゴテゴテした光を放つている事だ。

呆然としながら歩いて近づくと、白いロープを着た田つきの悪い魔術師風の男が現れた。

彼を見てレオは驚いた。

体の特徴を自由に選べる代わりにポリゴンの荒いプレイヤーと比べ、モンスター や NPC は総じてクオリティが高い。しかし、それを踏まえても田の前の男は信じられないくらい完璧で滑らかな CG で出来ていた。

「いやあ、ようやく人に会えました。もう誰も来ないんじゃないかな

と不安になつてゐた所ですよ」

田の前に立つた男が突然口を開いた。

自分から話しかけてくるNPCと言つるのは聞いた事が無いのだが、AIの試験導入でもしているのだろうか。

「えつと、これは何かのイベントか?」

取り合えず会話の選択肢も出ないので普通に返してみる。

「イベントと言えばイベントですね。私の人生の全てを掛けたイベントです」

「はあ……」

何とも重い返事が返ってきたが、ずっとここに居るしかないNPCとしては、人生の全てはこのイベントに掛かっているかも知れない。

「貴方は凄いですね。この辺りは魔物が来ないので私でも何とかなりましたが、近くの魔物を見たときは私では絶対に勝てないと確信しましたよ」

「まあ、そこそこ頑張つているので……」

とても謙虚な方だと、大仰に頷く男を見て、このAIエリアackson過多じゃないか?等と関係の無い事を考えていると、男が真剣な表情で見つめてきた。

表情が変る事自体が驚きなのだが、男から気迫と言うか威圧感のような物が感じられて、レオは一步後ずさつてしまった。

「貴方には是非、この門を潜つて頂きたい」

「え、ええ……」

先ほどから驚きの連續で、完全に相手のペースに乗せられてしまつているレオは、否定とも肯定とも取れる声を漏らした。

「門の向こうの世界は、ここよりずっと鮮明です。それに、沢山の出会いや冒険が待っています。多少の不便はありますが、冒険者の貴方なら、きっと気に入るハズです」

「うーん」

鮮明と言う事は、CGのクオリティが増すと言つ事だらうか。それに新しい冒険…… テストかなにかだらうか。

とは言え、胡散臭いのも確かだ。もし参加してこのキャラクターのデータが破損でもしたら田も当てられない。

「私の力では一人を送る事が精一杯ですが、貴方ならばきっと何の問題も無いでしょ？」

悩んでいる様子を見て、もう一押し大だと思ったのか、先着一名のみだと暗に告げてくるNPC。ここまで言われたら、ゲーム一ならば乗らねばなるまい。

「オーケー、行きましょう。このまま入れば良いだけですか？」

「おお……行つてくれるのですね。そうだ、それとカーブスと言つ人に会つたら、この手紙を渡してくれますか」

黒い毛皮で作られた便箋を渡され、それを背負っていた収納袋に入れた。

収納袋は入れた物の大きさを小さくし、沢山の物を入れて歩く事が出来る収納アイテムだ。

これがこのイベントのキーアイテムなのだろう。と考え、特に気負わず門に入る。

「んじゃ、入りますねー」

何やら男が真剣な目で見ていたが、その時はその理由が解らなかつた。

そしてその日、時間が経てばどんな死体も消えるゲームの中に、永遠に消えない白いロープを着た男の死体が置かれた。

入った瞬間、プツンという軽い音がした。

その音は聞き覚えがあった。数年前落雷によつてゲーム中に停電があつた時、強制終了させられた時の音だ。

何でこのタイミングで……と思ったが、冷静で居られたのはそこまでだつた。

気がつくと彼は裸で半透明な紫色の泥の中に居た。
何が起きたかと混乱している間に、全身に激痛が走つた。

「いきいいああああああ - -」

身体が解けてドロドロになつていた。

骨も内臓も皮膚も、脳以外が全て溶けているのを感じる。

「ひ・・・・・」

肺が溶け、声すら出せなくなつた。

その状態で、どんどんと泥の深くへと墮ちていく。
暫くすると、身体が少しづつ形を取り戻してきた。

どこか違うような気もするが、なじみの物のような氣もする。

「……………ああ」

何とか声が出せるまで回復してきたようだ。すると、田の前に入
った時と同じような門が見えてきた。

本能的に這い寄つて全力で門の外へ身を乗り出す。

「はっ」

気がつくと草原に倒れていた。

大の字になつてゼイゼイと荒い息を吐く。

額の汗を拭おうと、手を当てるど、「ゴシゴシした感覚が感じられ
て田を剥ぐ。

視界に入っているのは確実にレオの手だ。しかしその手には見慣
れたようで何かが違う、革と布で出来たグローブがつけられていた。
慌てて起き上がって全身をチェックするが、そこには在るのは グ
ラビティワールド でいつも操作していたハイエルフの身体に、ピ
ッタリと合つ忍び装束だけだった。

「マジかよ……」

呆然と呟いたが、答えをくれる物は居ない。

そこでふと、左手に引っかかっている紐に気がついた。

手繩り寄せると見慣れた収納袋があった。

しかし、ゲーム中での常に風船のように膨らんだ形ではなく、いかにも中身が入っているような潰れかけた形になっていた。

それを見ただけで嫌な汗がじわりと背中に浮かんだが、中身を確認すると特に変ったところは無かつたので、一応の安心ができた。

「データは破損していないみたいだ……しかしこの世界……」

物を掴むと掴んだ感覚があった。頬をつねると痛みがあった。

グラビティワールドではその辺りは、『何となく触れている』程度であったので、それにはかなり驚いた。

「グラビティじゃないのは確かだけど……とてもない完成度だ」

草の葉一本一本まで完全に作りこまれ、頬をなでる風の感触まである。

数種類出ている新作のVRMMORPGは、試しに一度だけ友人宅でやつた事があるが、それとも比べ物にならないリアリティだった。

「黙つても仕方ないし、ちょっと歩いてみるか」

立ち上がり見て回してみると、左側に森が見えた。右側は見渡す限りの草原なので、森に入る事を選択した。

森に入つて少し歩くと、狼のようなモンスターが群れで襲い掛かってきた。

荷物を置いて応戦したのだが、一太刀目を振つた後、絶句する程驚く。

「おいおい……」

胴を真っ二つにされた狼が、内臓をぶちまけて崩れ落ちた。その様子に硬直していると、四方八方から狼が襲い掛かつてきた。

慌てて全力で飛びのくと、あり得ないほど遠くまで飛びふんでしまい、思わずたらを踏む。

距離にして7メートル程だらうか。元のゲームでは移動速度が一定に決められていて、それを越えた速度で移動する事は出来なかつたはずなのだが、此方ではそれは関係ないようだ。

それでもまだ追い縋る狼達に、舌打ちしつつ応戦する事にした。刀身の短いサブウエポンでは頭部を狙い、天羽々斬りは無理せず胴体を狙う。
少し心配な要素もあつたが、喚き散らす鳴き声さえ無ければゲームの虎型モンスターより戦いややすかつた。

右手の天羽々斬りで斬る分には殆ど感触が無いから問題ないのだが、左手の武器で斬る時、肉や骨を断つ感触がモロに伝わってきて、気持ち悪い事この上なかつた。

およそ半数を切り伏せた所で、狼達は逃げていつた。
色々と違和感を感じて考え込みたい所だったが、むせ返るような血の臭いにその場に立つていられず、先に移動する事にした。

走つてある程度離れた後、ふと魔法を使つていなかつた事を思い出した。

移動速度がどこまでも反映されるならば、行動を早くする魔法、クイックで更に速度を上げられないかと思ったのだ。

「クイック

単語登録したハズの言葉を口にしても、変化は見られない。
仕方なくメニュー画面から選択しようとしたが、そもそも、常に
視界の端にあるはずのメニュー画面展開用のボタンが見当たらない。

「嘘だろ……」

狂つたように手を視界の端で動かすが何の反応も無い。

「GMコール！メッセージ発信！ええと……そうだ、ログアウト！」

必死にメニューバーの単語を連呼するが、反応は無い。

「なんでだよ…… GMコール！クイック！ログアウト！」

半泣きになりながら喚き散らすが、何の効果もない。

ログアウトが出来ない……その事実にゾッとした。だが、喚いて
いる内に辺りからガサガサと何かが近づいてくる気配がして慌てて
逃げ出す。

あんな弱い狼が居るような森だ、なにが出てきても勝てるだろう
が、ログアウトが出来ないという事実と、さつきの狼の血肉を見た
ときの嫌悪感が、レオをその場から移動させた。

「とにかく、魔法だ……魔法が無くちゃ怪我したら死んじまつ」

できれば何も無いさつきの平原に戻りたいが、森に入つてあちこ
ち走り回ってしまった。方向が解らなくなつた以上、どうにかここ
で生き残れるようにしなくてはならない。

呼吸を整え、再度魔法を呴く。

「クイック」

何も起きない、ガクガクと震える膝を抑え、どうすればいいか考
える。

メニューは開けない、グラビティワールドの魔法には、詠唱
なんて無かった。しかし、魔法が使えないれば「レオ」の実力の半
分も出せない事になる。

クイックには何時も助けられていたのに……と、使っていた魔法
の、体が淡い金色に光るエフェクトを頭に思い描いた瞬間。

体が金色に光り、軽くなつたような気がした。

「よしつこれか……」

思わず拳を握り締めた。その後ついた安堵の溜息で、力が抜けて
座り込んでしまった程だ。

その後回復魔法を一通りと、防御力強化の魔法を試して、取り合
えずは安心する事が出来た。

気を取り直して歩き、狼や大きめの鳥を蹴散らして数時間進んだ
所で簡素なバリケードを両脇に立てた道が現れた。

「街道だよな……さて、どっちに行くか」

土を固めただけの街道は、カーブが多く、見通しが利かない。

判断材料が無いので、森で拾つた木の棒が倒れた右側に進む事に
決めた。

胸を抉るような不安があつたが、その正体がなんなのかはなるべ
く考えないようにして前へ進む。

生身のような手足の感覚は氷のように冷たく強張り、微かに震えているような気がした。

プロローグへ歩き出すまで（後書き）

どうも、作者です。

勢いだけで書いてみました。一応第一部の内容はある程度決まっています。

誤字脱字・矛盾などの「」指摘お待ちしております。

更新については場合によっては遅くなるかと思いますがご了承ください。

草原を駆ける数台の荷馬車。

その前から2台目に当たる、真新しい木製の荷馬車で馬を鞭打ち、苦々しげに叫んだ中年の男だった。

「クソッたれ！」

商人のアルザダは、自分の迂闊さを大いに悔やんでいた。

事の発端は四日前、火山近くの村でつるはしや作業着を売り、手頃な鉱石を買い取つて商人仲間3人と金を出し合い、護衛の延長と追加を済ませた時に起こつた。

見るからに金回りの良さそうな商人が一人、入れてもらえないかと言つてきたのだ。

「流石に一人では心細いと思つていたので、宜しければ一緒に行かせて頂けませんかね」

小男が指した金額は金貨7枚、日本円で70万に相当する大金だ。こういった場合、隊列に加わるのには金貨2～3枚が妥当だ。

護衛に使う傭兵への給与の半額近い額に眉を顰めたが、積荷を見

て納得した。

汚い格好の瘦せ細つた男女が十数人、押し込められているのが見えた。

割合は圧倒的に女性が多い、所謂奴隸商である。

アルザダは個人的にはあまり気乗りしなかつたが、他の3人が乗り気だつた。この所魔物が多く出現し、損害が出やすく、護衛代もかさんでいたのだ。

「変な物は積んでないでしような」

奴隸商は裏社会と繋がりが深く、禁制品やら盗品やらを扱う事が多い。

「いやいや、さすがにこんな恐ろしい所で危ない橋は渡りませんよ」

この火山の村ドリュークは、採れる鉱物や宝石以外にも、現れる魔物の危険さに定評があった。

何時魔物が攻めてきてもいいように、町を囲む堀の他に、各家に必ず地下室がある程だ。

衛兵も魔物と戦いなれている為、この町で犯罪を起しけば、とてもではないが抵抗できない。

「最後の馬車にはかなり大きな荷物が積んであるようですが……」

「あれは奴隸達の食料ですよ。さすがに飲まず食わずに運べば死んでしまいますから」

そう言つて笑つた小男の顔は大いに気に食わなかつたが、他の3人が合意しているので何とも言えない。自分が外されると困るからだ。

結局一緒に行く事になつたが、その後三日間は全体的に特に問題は無かつた。

アルザダ個人としては、小男が奴隸に食わせる腐りかけの食事が余りに不憫で、自分の商品をこつそり食わせていたので多少の損害は出ていたが、概ね予定通りの行程だった。

問題が起きたのは四日目の昼過ぎだ。

草原を走っている途中、空から恐ろしい泣き声が聞こえた。見上げてみると全長15メートルはあるうかと言つ赤い翼竜が2頭、凄まじい速度で襲い掛かってきていた。

「レッドワイバーンだ……」

誰かがそう呟いたのが聞こえ、その姿を見て凍りつく。呆然と見上げている内に、翼竜は先頭の馬車に火炎の塊を吐き付け、道ごと馬車を炎上させた。

慌てて止めた馬車の列の周りを、数度旋回したレッドワイバーンは、奴隸商の連れていた3台の荷馬車の内最後の1台を襲うと、中から白い橢円形の物を取り出した。

卵だ。

竜種の卵などまじう事無き禁制品である。国家規模で討伐隊を組み、竜騎士用に取りに行く事はあると聞くが一般人がそれを行つたらどうなるかなど、目に見えている。

小男の姿は見えない。恐らく人の多く乗つた自分の馬車は危険と

判断し、周りの商人が呆然としている間に何処かの馬車へ乗り移つたのだろう。

片方のレッドワイバーンが卵を持って飛び立つていく。だが、1匹は残つて此方を見つめると怒りに満ちた咆哮を上げた。

ガアアアアアアアアアアアア - -。

その声が命図となり、商人たちは決死の覚悟で鞭を振つた。小男の馬車など放置し、護衛も馬車から出て戦うと言ひ選択肢を考えようともしない。

レッドワイバーンはまず、小男の馬車の奴隸達を纏めて貪り食つていた。

アルザダは彼らと多少話をしていたし、不憫に思つたが流石に戻つて助けるわけにもいかない。行つた所で纏めて喰われるだけである。

次に、護衛の傭兵が乗つた馬車が襲われた。人数が多くつたのが災いしたのだろう。悲鳴を背に必死に鞭を振るい、馬が出せる全力を出し忽くさせて前へ進む。

暫くすると向こう側に森が見えてきた。

だが、馬もバテ初めて背後の悲鳴はどんどん小さくなり、ついには聞こえなくなつた。

「頼むから、森まで頑張つてくれつ。森に着いたら離してやるから！」

一番後ろの馬車が、崩れる音が聞こえる。

商人仲間のオッティの馬車だろう、彼は最近2台の馬車を駄目にし、ボロい中古の馬車を買つていた。

悲鳴が上がり、すぐに聞こえなくなる。

見てはいけないと思いつつ、どうしても気になつて振り返つた。

視界の奥に崩れた馬車に襲い掛かるレッドワイバーの姿が見えた。

と、馬車の片隅に見覚えのある悪趣味な服を着た小男の姿が

「てめえー！よくも俺の馬車に乗れたもんだなあ、絶対に殺してやるぞ！」

「ひいっ」

小男は怯えたようにビクンと跳ねた。

よく見ると小男の他にも、3人の奴隸が乗り込んでいる。女性が2人に男性が1人だ、彼女達は唇を真つ青にして震えている。

荷物を全力で蹴れば、小男を馬車の外に落とせるかもしれないが、それをすると彼女達も一緒に落ちてしまうので何とか自重する。こうして物語は冒頭へ戻る。

「クソッたれ！」

そう呴いた瞬間荷馬車の幌の端を炎弾が掠め、前を走っていた馬車が炎に包まれた。

「うおおおおおおお」

大量の冷や汗をかきながら手綱を引っ張り、ギリギリで炎上する荷馬車を避けて森へと直進する。

馬車はもう、アルザダの所有する2台しか残っていない。

その時、奴隸商が信じられない事をした。

奴隸の首輪に付与された呪いを発動させ、苦しんでいる彼らを撒

餌さにするかのよつに突き落としたのだ。

「！」のクソ野郎！てめえも落してやるつか！？」

アルザダが荷物に足をかけたのを見て、小男は小さく悲鳴を上げてそれを中断したが、残っている奴隸は一人だけだった。だが、このままではどうあっても森へはつけない、最早ここまでかと思い始めたその時

道なりに進むと、森を抜けて草原へ出た。

どうやら、森の外側をつたつて歩いていたようだ。

田の前は何処までも続く平原……なのだが、遠くから荷馬車が土煙を上げて走つてくるのが見えた。

それに沿う様に、見たことの無い赤いワイバーンの様なモンスターが、空を飛んでいた。

どう見ても彼らにワイバーンをどうにか出来る力があるようには見えない。

今助ければ情報源として力になつてくれるだろうか。等と考えていると、荷馬車はあつという間に追いつかれてしまった。

慌てて防御魔法を使う。物理障壁プロテクトアーマーLV7、魔法結界レジストシェルLV7、体感時間を早めるクイック、そして瀕死からの気付け効果のあるオートリザレクトやある程度のダメージを肩代わりしてくれるエアースキン。

グラビティワールドでワイバーンと戦った経験から、レビュイトも使う。これは空中に足場を作る魔法で、思い浮かべると地面に見覚えのある模様が浮かんだ。

これでワイバーン程度なら一瞬で撃破できる……ハズだ。だが、ワイバーンの口についた赤黒い血を見て、どうしても体が竦んでし

まつ。

あの口で歯まれたり…………と黙りつゝ、膝も手も感覚が無くなる程に
冷え切り、震えが走る。

やつぱり、森に隠れよう。と思い、数歩後退したとき、先頭の荷
馬車が炎に包まれた。

「うわあ……」

馬車の先頭に座っていた男が、悲鳴をあげながら燃えるのが見え
た。

そのままではあの商団は全滅してしまひだらう。

俺なら、倒せるかもしない。

痛い思いは嫌だ。

今助ければ命の恩人だ、大抵の頼みを聞いてもらえたるだらう。

死ぬかもしれない。

この刀があるんだ、ワイバーン如きに負けるはずが無い。

でももし負けたら……。

燃え上がる荷馬車の脇から、2台の荷馬車が現れた。残っているのはあの2台だけのようだ。

それを見てもまだレオが迷っていると、先頭の荷馬車から人が落ちるのが見えた。

落ちた男性は地面を転がり、ワイバーンに食われてしまう。

レオこと近藤零夜は、平和な時代の現代人だ。そんな光景を見て黙つていられる筈がない。

だが、それでも死への恐怖で逡巡していると、今度は馬車から女性が落された。

サーৎと血の気が引くのを感じる。まさか先頭の馬車は、乗っている者を一人ずつ突き落としているのだろうか。

「やめろおおおおおおおおおお」

ワイバーンが女性の前に立つ。焦りによって走り出したレオだったが、最早全てが遅い。

視界内転移魔法のビューテレポートを使い、数秒でワイバーンの前まで駆け寄つたが女性は喰われた後だつた。

「ハツアアアアアアア」

全身を駆ける焦りが怒りに換わり、全力で 天羽々斬り を振るう。

ヤケクソ氣味にすれ違ひ様に振るつた刀によつて、ワイバーンの右翼の端が切れた。

舌打ちしつつ後ろを見ると、ワイバーンが飛び上がりながら炎弾を吐いてきた。

宙返りでそれを避けつつ、空中で姿勢を整える。

爆音が轟き、それをかわしたレオをワイバーンが驚愕の表情で見

るが、その顔を見ても怒りしか感じない。

ジグザグに空を蹴り、ワイバーンの上空に躍り出た。

クイックのお陰で周囲の時間が遅く感じる。ワイバーンが此方を見てから炎弾を吐くのが、スローモーションのようだ。

こうして見ると、敵はそれほどの脅威でもなかつた。むしろ炎弾が誘導してくれるゲームの竜の方が、戦いにくいくらいだ。

刀の扱いもどうこう原理か自在に扱えるし、敵の行動の予測までできる。

布で口元を覆われた忍び装束の中で小さく晒し、上空から螺旋状に空を蹴って距離を詰める。

炎弾が上空に向けて乱れ撃ちされるが、凄まじい速度で空を駆けるレオにはかすりもしない。

ガヒュッ

ヤケクソのように炎弾を吐きまくっていたワイバーンが、苦しげに呻く。

どうやら連打のし過ぎで喉が枯れたようだ。

「ハアツ！」

敵の顔の横を抜け、背後に回り体を回転させながら背中を滅茶苦茶に斬る。

浅いと感じたので、即座に反転して頭部に狙いを定める。

ギィイイイイ
　　ツ

悲鳴のような叫びをあげて背を反らせるワイバーンの首に、上昇

の勢いを乗せて左の刀を刺す。

「これで　」

そのまま刀を取つ手に、ワイバーンに張り付き、天羽々斬りを頭部に突き刺す。

「 終わりだあつ」

突き刺さつた 天羽々斬り は刀身を伸ばして頭部を串刺しにし、そのまま振りぬかれた刃はワイバーンの硬い鱗と頭骨を紙を斬るよう負荷無く切り裂いて真っ二つにした。

浮力を失ったワイバーンは崩れ落ちるように地面に落下し、数秒遅れてレオもその隣に降り立つ。

地に下りたレオは、その姿勢のまま固まっていた。

恐怖、焦燥、怒り、高揚、それら戦闘の余韻による震えで、動くことが出来なかつたのだ。

一度地面に尻をつき、何度目かの深呼吸を終えた後、左手用の刀を刺したまま放置していることに気付いた。

左手用の刀は、攻撃力や機動力強化用など用途別に数本持つてゐるが、首に刺さつているのは攻撃力強化能力のある來国俊という名刀だ。ワイバーンの死体と眠らせるのは惜しい。

ワイバーンの首に足をかけ、刀を引き抜いていると後ろから声をかけられた。

「あ、あの……助けていただいて有難うござります」

振り向くとガタイの良い中年男が、体を強張らせて立っていた。
こいつがさつき2人の人間をワイバーンの餌にしたのかと思うと、怒りが込み上ってきた。

自分がもつと早く助けに行つていれば、とは思うが、ハツ当たりでも非難の声を上げずには居られなかつた。

「何で人を突き落としたりしたんだ。もう少しで助けられたのに嘘だ。自分でそのことが解るだけに、自己嫌悪で胸が苦しくなつた。

彼らとて自分の身が可愛いのだ。それ以前に、一度は全員を見捨てようとした事は他ならぬ彼自身が一番よく解つている。

「い、いえ。彼らを落したのは、勝手に私の荷馬車に乗り移つていた奴隸商人でして……」

奴隸商人という言葉に、再度レオは体がざわつくのを感じた。
そして商人が振り返つた先、荷馬車が、1台だけ動いていた。

「あの野郎、俺の荷馬車を……っ」

その声が聞けるや否や、レオは視界内転移魔法ビューテレポートを使い、荷馬車の前へ移動する。

突然目の前に現れたレオに、奴隸商人の小男は小さな悲鳴を上げ手綱を引いて馬車を止めた。

レオはもう一度テレポートし男の背後にまわると、彼の首に刀を這わせて見下ろす。

「下りる。話はそれからだ」

両手を挙げて何度も首を縦に振る小男に、レオはうんざりしたようく舌打ちをして刀を収めた。

2台目の馬車の手綱を握っていた傭兵に、ワイバーンの鱗や牙、翼膜等の素材を集めさせ、二人の商人に話を聞く。

奴隸商人は、ああしなければ自分が喰われると思い、必死だつたと訴え、もう一人のアルザダと言う商人も、翼竜の卵を持ち込んだ犯人である小男を次の街の衛兵に突き出さなければならなかつたと説得され、奴に関しては簞巻きにするだけにして置く。

問題はその後で、この後向かつという街の名前を聞いて頭を抱えたくなつた。

ダール興商自治区。

はつきり言つて聞いたこともない。

どうやら多少大きい街のようで、知らないと言つたら大いに驚かれた。

「しかし、この道を通るとダール興商自治区には必ず行き着きますが……」

「実は、平原を抜けてきたんです。出身はかなり遠い東方の地で、日本……もしくはジャパンと言つんだけど、聞いたことはないです

か」

「いえ、残念ながら……」

日本を知らないのに、日本語で話しているのはビリビリの訳だらう
と思ったが、元々この言葉ですが。と返された。

「ところで、最初も聞いたけどアルザダさんはプレイヤーでもNPC
でもなく、ここはグラヴィティでもVRMMORPGでもない。
そうですね？」

「ええと、私としてはその言葉の意味が一つも理解できないので…
…恐らく違うかと思いますが」

少々睨みを聞かせて聞いたが、当然返答が変わる事は無い。
最初はメニュー画面が壊れているんだが、代わりにGMコールを
してくれないか。と、聞いてみたのだが、首を捻られるだけで何の
返答も得られなかつた。

仕方がないので、ゲームに関する情報を彼らから集めるのを諦め、
森の前まで行って収納袋を持ち寄り、このよつな袋を見たことがあります
か、とだけ聞いてみた。

「ええ、収納袋ですね。黒いものは初めて見ましたが、皮袋等に魔
術師が魔力を込めて作ったものを何度か見たことがあります」

ちなみに黒いのはケルベロスの革を使ったからなのだが、これで
この4次元ポケットもどきを街中で使つても怪しまれない事が解つ
てホッとする。これで収納袋については、街中でも堂々と持つて歩
けるだらう。

次の問題として、お金が全く無いと言つのがあつた。幸い収納袋
に耐久の作成スキルを上げる為の貴金属や賢者の石、スタールビー
等の宝石類が入つていたので、その中から金塊を一つ取り出し、商
人に聞いてみた。

「手持ちの金が無くて困ってるんだけど、これを買取つてもいいんじゃないでしょうか」

商人は少し驚きながらも金塊を手に取ると、大きく目を剥いた。

「これは純金ですか？」

「そのはず……そんなに珍しきですか？」

「いえ、金自体は金貨にも使われて居て珍しいと言つては無いですが……まあ、これほど純度の高い物は珍しいですね」

「どうも精製技術がイマイチなようだ。」

後々の事を考へると面倒になるかも知れないが、現状それ以上簡単に当面の生活資金を得る方法が思いつかなかつたので、売ることにした。

アルザダは金が本物かどうか疑つているのか、少し削つて確認してから金貨20枚程を手渡してきた。

それを懐に仕舞つて素材についての確認をする。

「ワイヤーベンの素材はアルザダさんにお任せしますね」

「ええ、色々と懇意にして居る所があるので、そちらに卸すと思つています」

「それじゃ、そろそろ発ちましょうか。ここも安全ではないですし」

せつせと荷台に素材を積み込む傭兵を見て、レオは腰を上げた。彼らの話では、翼竜はもう1匹居たそうだ。あまりここに長居するべきではないと考え、移動する事にした。

傭兵に声を掛けて切り上げさせ、後方の荷馬車に乗り込む。

アルザダの荷馬車に乗らなかつたのは、奴隸商人と同じ馬車に乗るのは嫌だつたからだ。

荷台に入ると傭兵が身を乗り出して握手を求めてきた。彼は30手前、現実での零夜に近い年齢のようだ。

「さつときは有難うよ。ギルってんだ、よろしくなエルフのあんちやん」

「ハハハハ、ずっと歩きだつたので助かります。名前はレオです

「しっかりアンタつええなあ。レッズワイバーんを瞬殺する奴なんて聞いたことねえぞ」

「そりなんですか、まあ俺としても空中戦はそれほど経験が無いので、上手く行つてホツとしている所ですが

「実際あれほどアグレッシブな空中戦は初めてだつた。ゲームならば炎弾は魔法判定で避けることが出来なかつたし、移動速度に上限があつたので、そもそもあんなに早く動けなかつたのだ。

「ホントかよ……つていうか、アンタも冒険者だろ? その変な口調やめろよ。折角強いのになめられるぞ」

「言われてみればそうだと思った。

「ハハハハが現実かどうかと言つ考えは後回しにするにしても、普通の口調にしてもそれほど悪印象は受けないはずだし、舐められて厄介

「Jとなるよりはマシだろ?」

「やつだな……その方がよさやつだ」

「変な奴だな、ま、エルフは大概変わつて聞くけど。ところで、魔法使いは前の荷馬車に乗つたのか?」

「いや、魔法使いなんて居ないぞ。向こうに乗つてるのは奴隸商人だけだ」

「マジかよ……って事はさつきの空を飛ぶ魔法もアンタが?」

Jの質問には困つた。さつきのレビューイトは大型の鳥や翼竜等が現れる少し前の、レベル20後半に覚える魔法なので、てつくり此方でも一般的だと思ったのだ。

戦闘に関しては素人の商人からすれば、「すごい」と一言で終わりだつたのだろうが、プロの傭兵から見ると別なのかも知れない。

「そうだけど、そんなに珍しいかね。結構一般的な魔法じゃないか?」

「いやいやいや、確かに北の魔術帝国の魔術師団には数人使える奴が居るつて聞いてるが、他だと富廷魔術師くらいしか使える奴いないんじゃないかな」

「やつだつたのか……」

これには参つた。巨鳥や竜種と戦うには必須な魔法だけに、これを使うと田立つと言われても場合によつては使わざるを得ないからだ。

常識的なことがあまり解らない以上、暫くの間は目立つ行動は避けたかったのに、これでは話題に上るのは避けられない。

「ちょっと頼みたいんだが、俺がむつきのレッドワーバーンだけ、あれを倒した事を秘密にして欲しいんだ」

「はあ？ 何でだよ、レッドワーバーンを一人で倒したって知れたら、確実に有名になれるぞ。冒険者なんて名が知れてなんぼなんだから、秘密にしたって損するだけだぞ」

「いやあ、俺は細々と旅をするのが性に合つてるからや、有名になり過ぎて軍隊とかに手をつけられるのは嫌なんだよ」

ホント変つてるなアンタ……。等と言いつつ、不思議そうにしているギルだが、恩もあるし黙つといてやると言つてくれた。
恐らく、アルザダも頼めば口をつぐんでくれるだろう。奴隸商については脅せばいいだけだ。

その後魔法の話を中心に聞いてみたのだが、どうもレオの知っている魔法によく似た魔法もあるものの全く知らないものが大半なようだ。

特に水を温めたり、水を回して洗濯する魔法等はゲームにはそもそも必要なかつたので存在しなかつた。

冒険者ギルドという所に行けば、初級の魔法なら教えてもらえると言つ事で、町に着いたら行つてみる事にした。

「しかし、空を飛ぶ魔法は覚えてるのに、生活に使う魔法は覚えてないなんてどんな魔術師だよ……東の国つてのは常識ねえな」

どちらかと言つと、温水や衣服を洗濯する魔法は失敗してもリス

クが少ない為、見習いの頃に最初に覚える魔法なのだそうだ。

「ま、主に戦つてばかりだつたからな。その他の事は宿に任せていた」

「おいおい、貴族じやないだし、こっちじや宿屋は洗濯なんてしねえぞ……」

「一人で旅して來たから、その辺は無ければ無いで大丈夫だよ」

旅をしていたと言つのは嘘だが、一人暮らしの経歴は永い。
短期間付き合つた恋人も居ない事は無かつたが同棲していた経験
は無いため、一人暮らしの間は家事は自分でしていた。

「大丈夫だろうと思うが、何か困つた事があつたら言つてくれ。大概夜は冒険者ギルドの隣にある酒場に居るから」

「二～三日したら顔をだすよ。よろしく」

事情通と顔見知りになれるのは助かるし、断る理由も無かつたので好意を受けておく。

ギルとしても強い知人は居れば何かと便利なのだろうし、恩はい
ずれ返すとして、暫くは頼る事が多いだろう。

休憩を挟んで五時間程走つた頃、大きな外壁が見えてきた。
石造りの高い壁は、それだけで見応えがあり、独特の威圧感を放つていた。

「随分立派な外壁だな。ダールつてのは商売の国じやなかつたのか？」

「ヒーは数年前まで国境の町だったからな。今は同盟を結んでるが、昔は何度か戦火に呑まれた事もあるらしいし」

「そうだ、前の馬車に声掛けくれ。さっきの話を向こうにもしてくる」

前の荷馬車に行ってアルザダにワイバーンの事について話すと、少々渋い顔をした。

「そうなりますと、レッドワイバーンの素材は大っぴらには売れません。まあ数日待つて頂ければ、商品を売ったお金で私が買い取ると言う形には出来ますが……あまり高くは買えないかと」

「それで構いません。あと金貨の方なんですが……」

両替を頼もうと懐に手を入れたとき、荷馬車の奥に商店の定まらない目で虚空を見つめる銀髪の少女の姿を見つけた。

10代後半だろうか、ボロ切れを纏い、しゃがみ込んで膝を抱えている。

奴隸商人が居たと言うことは、よく考えれば奴隸が居ると言つ事だ。そんな事にも気付かなかつた自分の迂闊さが嫌になる。

「おい、あの娘は何だ」

不快感から無意識に攻めるような口調になつてしまい、アルザダを大いに慌てさせた。

「えつ……い、いえ、彼女は奴隸商人の商品として、罪人の所有物は罰金が払えない場合國が没収する事に……」

「 そういう事は、彼女はこれから街で売られる事になるのだろう。レオは舌打ちすると一枚だけ取り出す気だった金貨を全て取り出した。」

「俺が買い取る。いくら出せばいい？」

「し、しかし奴隸の買取は基本的に貴族階級の方でないと……」

「ここまでの護衛の報酬。アイツに他に払える物が無いから、特別に彼女を譲り受けるって事でどうだ？」

正直これで駄目なら諦めるしかないのだが、アルザダは、そうですね……と、呟くと何度も頷いた。

「私の方でも荷馬車1台分の損失を出しましたし、その補償として
その金貨を受け取つた。と言う事にすれば、お役人は面倒で口を出
さないかもしません」

「よかったです、ならそれで頼みます。金額はどれ位でしょうか?」

「そうですねえ……奴隸の相場はよく解りませんが、少々少なめで金貨6として置きましょう」

「有難うございます。他に問題になりそうなことはありますか」

「ええ、一つだけ。と言うかこれが厄介な問題なのですが、奴隸についている首輪は、専用のアンロックスタンプと呼ばれる物でしか解除できません。無理に呪いを解こうとすると、首輪がはじけ飛んでとても危険です。これが貴族しか奴隸を買えない理由なのですが

……スタンプはとても高価で、基本的に貴族にしか売らないので、買つのはかなり大変です、貴族の知り合いがが居れば貸してもらえるかもしませんが……」

アンロックスタンプの存在はレオに頭を抱えさせた。

なるべく目立つ事はしたくない以上、派手に金を稼ぐことは難しい、かといって貴族の知り合いなど居るはずも無い。

「金は……追々何とかします。というか、彼女を売りに掛けたら買った人が何するか考えれば、今は選択肢がないですね……」

銀髪の少女はかなりの美人だ、彼女を大金を出して買った人間がどう扱うかなど目に見えている。

彼女を買ったからといって、如何するかなとレオとしては思つきもしないが、今は頭の中が滅茶苦茶だ。厄介事を考えるのは後回しにしたい。

「すみません、私としてもこればかりは何とも……」

しんみりした空氣を振り払つよつて、勤めて明るい声を出して言った。

「仕方ないですよ。それより、金貨つて大きな硬貨ですよね、銀とか銅とかあつたら両替して欲しいのですが」

金がそこそこ珍しいならば、金額の大きい通貨として扱われているだろつ。

そう言つて金貨を渡すと、ザルザダは7枚の大きな銀貨と28枚の小さな銀貨、それに20枚の銅貨を差し出した。

レオはそれを受け取つて礼を述べると、奴隸商人とOHANAS

H-Eして元の荷馬車に戻った。そしてギルに手綱を引かれた馬がゆっくりと動き出す。

そうして一行は最初の街、ダール興商自治区へ入っていったのだ
つた。

一章 荷馬車と炎（後書き）

ども、作者です。

通貨についての補則です、質により多少の誤差はあります

金貨10万円 大銀貨1万円 小銀貨1000円 銅貨100円
以下場所により鉄貨や粗悪な翡翠などの宝石といつか色のついた
石を小銭代わりに使っている。

といった脳設定になっています。

それと、どうでも良いかもしませんが、主人公の零夜の名前の
由来は、キャラクターの体が自分の体になるつてしまりレイヤー（
コスプレイヤー）じゃね？という酷い由来です……。レオはレ繫が
りで適当に決めました。

こんな酷い名前の主人公としようも無い作者ですが、続きを読む
でくれると嬉しいです！

ps 次話から街での生活（少々ギャグ多め）になります。頑張
るのでご期待ください。

投稿したばかりですが、読み返してみると句読点が多くて手
ンポが悪く感じたため多少改正しました。

レオ達の担当だった門番10代前半のような、少年と言つていい男だったのだが、事情を話すと慌てて引つ込み、その後額に深い皺を刻んだ歴戦の勇士然とした老騎士が現れた。

部屋の真ん中に奴隸の少女、レオ、アルザド、奴隸商人の小男の順で並び、対面に老騎士が立っている。傭兵のギルが居ないのは、彼は冒険者ギルドに報告に行つたからだ。

「それで、レッドワイヤーに追われた馬車が逃げて来たのを見て、目くらましを行つて森に招き入れた。と言う訳か……」

マーウィルと名乗った老騎士は、そう言つて年季の入つた鋭い眼光を向けてきた。

悪い事をした訳ではないのだが、嘘をついている為かその眼光がやたらと痛く感じられ、唾を飲み込みそうになるのを必死に堪える。忍び装束には口元を隠す伸縮性に富んだ布が付属されているのだが、流石に口元を黒い布で覆つた状態で聴取には出れないため、今は鉄板入りの頭巾と共に収納袋に入れている。その為表情を誤魔化す事ができない。

「ええ、森に入つて暫くしてから戻つてみましたが他の馬車は焼かれ、あるいは壊されていたので、仕方なく無事な荷馬車に乗つて來た次第で」

答えに窮していたレオに助け舟を出すように、アルザダが口を挟

む。

マー・ウイルも、レオの緊張でガチガチになつた態度に矛を收め、アルザダと話すように向き合つた。

「しかし、嗅覚の鋭いレッドワイバーンがそう簡単に諦めるとは思えんが……」

「我々も数時間隠れましたから。それに卵を持ち帰つた番いが心配になつたのではないでしようか。ともかくレッドワイバーンの再来に備えて、あの街道は暫く閉鎖すべきかと」

「いまだ納得しきれていないマー・ウイルだが、問題を一つずつ片付けようと直して奴隸商人を見下ろした。

「まあ、状況は解つた。それで、そこの丸太になつている小男が今回元凶か」

簀巻きもとい丸太の小男がビクンと跳ねるように震える。
アルザダも見抜けなかつた負い目からか、肩を落として頷く。

「はい。卵は間違いなく、奴の荷馬車に積んでありました。今思えばこれ程強欲そうな男が、例え奴隸商人だつたと言えど初めから金貨7枚の参加費負担を言い出すなんておかしかつた。自分の迂闊さが嫌になります」

頃垂れるアルザダの肩を軽く叩くと、マー・ウイルは小男を抱え上げて部下の衛兵二人に投げつけた。

衛兵は一人で何とかそれを受け止めると、「痛い、痛い」と泣き喚く小男を抱えて部屋を後にした。

「さて……そちらのお嬢さんは、奴の商品かな?」

レオはグッと歯噛みした。ここから先はさすがにアルザドに任せっぱなしとは行かない。

気負いして口を開きかけたレオを制すように、アルザドが一步前に出て話し始めた。

「実は、彼女はレオ様が報酬代わりに差し押されたのです。さすがにそれだけでは不釣合いなので、金貨を払つて。その金貨は私が潰れた馬車代として預かっていますが、必要とあらば國に返還いたします」

「ですからどうかここは見逃してください。と、暗に訴えかけるアルザド。

それを見て何やら少し悩むような、值踏みするような視線をレオに向けるマーウィル。

「俺としては、折角助けたのに無報酬ではと思つて差し押さえただけです。他意はありません」

何とかそれだけ目を見て言つと、マーウィルはレオの顔を見て何か感じ取つたのか、「ふむ……」と言つて微かに頷いた。

それから振り返つて机に向かい、何やら書くと、羊皮紙を3枚差し出す。

「奴隸一名、冒險者一名、商人一名、通行許可を出す。この紙を持って詰め所へ行け、身分証が貰える

「有難うござります」

そう言って書類を受け取ると、彼らは安堵の溜息をついて部屋を出て行った。

マーウィルがそのまま門の脇の詰め所へ向かつ彼らを眺めていると、ずっと黙っていた少年衛兵が後ろから声を掛けた。

「叔父上、宜しいのですか、あんなに簡単に奴隸の所有許可を下され

て」

奴隸制度は、貴族の地位を守る重要な柱の一つだ。そう簡単に特例を出していいものではない。

だが、マーウィルは彼らを見たまま軽く微笑むと、何でもない事のように言った。

「一昨日、ウチの息子の嫁が、孫娘を産んだのは知つてあるじやうう~何やら運命のようなものを感じてな」

好々爺のような口調になつた叔父に溜息をつきつつ、一応の反論を試みる。

「しかし、彼があの娘に酷い扱いをする可能性が無い訳じゃないで

しょう

「なあに、あの男は腕は立つようじゃが、根っから氣弱のようじや。押し倒す勇気など無いわい

「バレたら減俸では済まないかも知れませんよ

中々に不味い問題なのだが、マーウィルはこれに対しても肩をすくめて答えた。

「だからこそ、報告書には可能な限り余計な事を書いて、その事を小さく書くのじゃよ。ワシの報告書偽装技術にかかれど、誰かが漏らさん限り許可判を押されるまで誰も気付かんじゃろ？」「

悪戯をした子供のような老騎士の微笑み（ウインクつき）に、若い衛兵は一際大きな溜息をついた。

街に入ったレオ達は一旦別れ、それぞれの目的地へ向かった。ギルはまだ冒険者ギルドから帰ってきていない。アルザダは亡くなつた商人仲間の家と、金塊や鉱石を売るための鍛冶ギルドへ向かつた。

頭巾を被り布を口元に掛け直したレオは、アルザダに譲つてもらつた簡素なマントを少女に着せ、自己紹介を始めた。

「俺の名前はレオ。まあその……冒険者を始めようと思つてゐる、暫くの間よろしくな」

と言つて右手を差し出しだが、少女に変化は見られない。そのまま10秒程待つてみたが、光の無い碧眼を向けてくるだけで何も言わないので、泣く泣く握手は諦めることにした。

「え、ええと……それじゃ、取り合えず服を買いに行こつか、君ちよつとその……寒そうだしー！」

酷い格好だし。とは口が裂けても言えない。

その後見切り発車で歩き出したが、不安になつて後ろを確認するなどいやら付いてきているようでホツとした。

多少強引にでも移動を始めたのは、彼女の格好が余りに酷かつた

からだ。なるべく早く服を用意するか、人目につかない所へ行かせたい。

とは言え、女性経験が豊富とはいえないレオは、こんな状態の女性相手にどう接すればいいのかさっぱり解らないので、自然と会話は無くなってしまう。

20分程歩き回った頃だろうか、多少往復して時間が掛かつたが、アルザドに教えてもらつた洋服の専門店に着いた。
重苦しい沈黙に耐え切れなくなつていていたレオは、店を見つけた瞬間「あつたつ、いややつと見つかつたね」と言ったのだが、少の方は空ろな目で虚空を見つめるだけで何の変化もみえない。
それを見たレオは少女に背を向けて、震る瀬無さに震えたのだが……周りから変な目で見られたのでやめた。

その洋服店は出来合いの服は無く、寸法を測つて注文した後ある程度決まつた布を繋ぎ合わせて作るタイプだったので、自分と少女の分を頼んで置いた。少女の寸法を図る際、店員が少女の格好に顔をしかめたが、勤めて気付かない振りをする。

丁度職人が数人空いていて、急げば数時間で出来ると言われたので、通常の倍の大銀貨7枚を払つて急ぐよう頼む。

ちなみにレオが自分の服を頼んだのは、着物風の忍び装束がありに目立つ事を自覚したからだ。
他にも鎧やローブは収納袋に入っているが、基本的にアーティファクトや神話級の装備ばかりなので、何を着ても目立つ事請け合いでだ。

服の予約が終つたので、宿を探す事にした。

大きくて、清潔そうで、割合安めの……と、条件をつけたので探すのに少し時間が掛かつてしまつ。

その間文句も言わず黙つてついて来る少女だったが、余りの気まずさに精神が削られる思いだつた。

ようやく見つけた宿のカウンターで、女将と思われる女性に2部屋を2泊でと頼むと言つと、後ろに立つ少女を見た後、ギロリと睨まれ。

「大銀貨一枚……いや、大銀貨一枚に小銀貨5枚だ。嫌なら出いきな」

この女の敵め。と小声で言われ、泣きそうになりながら小巾着を見ると、洋服店で大銀貨を使って切らしていたので

「さ、金貨で払つてもいいですか……」

と、とても弱々しい小さな声で返事をした。

自分の部屋に収納袋を投げ込んで鍵を掛けると、隣の部屋に少女を招きいた。

部屋には、いずれも簡素ながらテーブルと椅子のセットとベッドが置かれており、床もカーペット等は無いが綺麗な状態だった。よろよろと頬りなく歩く彼女に座るように薦めると、ベッドから可能な限り離れた床にしゃがみ込んだ。

どうしたものかと頭を抱えるが、打開策は見つからないのでそのまま話す。

「ええとそれじゃ改めて、俺はレオ。忍者をやつてる……つもりだ。

君の名前は何て言つんだ？」

少女は暫く膝を抱えたまま動かなかつたが、20秒程して囁くよ

うに答えた。

「リサ」

ようやく名無しの少女を脱した事に安堵するが、これまで露骨に警戒され続けたダメージはかなり大きい。

（つて言うか、今まで我慢してきたけど普通ワイヤーネンの襲撃から身を守つてやつたんだから、もつけようと心を開いてくれても良くな？）

別に其れだけで惚れられたり等と過剰な反応は求めていないが、もう少し友好的な態度でも罰は当たらないのではないか。

しかし心を開いてくれるまで待つていては埒が明かないので、取り合えず今後の方針を語つて聞かせる。

「これから的事なんだけど、当面は俺は冒険者になつて彼方此方に顔を売る。その過程で貴族に知り合いができるたら、お金を払つてアソロックスタンプを貸してもらつなり代わりに買つてもらつなりするから、それまでの間は一緒に居よ」

相手にとつては良い事尽くめの条件の筈だが、此方の話を聞いていないのか信じていないのか全く返答は無く、小刻みに震えるばかりだった。

その後レオは出身やこの街についての知識があるか等の話題を振つてみたのだが、どんどんリザの震えが増して行つたので、会話を切り上げて食事を取りに行く事にした。

ロビーの横の酒場件食堂で軽食を2皿頼むと、ドワーフのコックが無表情で皿を突き出す。

何で男にまで……。と思つていると、チェックインの時から食堂に居た全員がレオを白い皿で見ていた。

ここに至つてようやく、自分が平民全員に白い皿で見られている事に気がついた。街中では貴族も居る手前スルーされていたのだろうが、宿の中ではそうは行かないのだ。良く考えれば、貴族は罪人や平民の奴隸を娼婦や耕作道具の様に使つているらしいのだから、同じような事をしているようにしか見えないレオに反感を抱くのは当然だろう。

しかし、だからと言つてリザに怯え切られている今、助けるために買ったと言つても誰も信じまい。

これから態度で改善するしかないと考え、皿を持つて黙つて部屋に戻る。

部屋の隅に蹲つているリサに椅子に座るよつを薦めると、多少訝しげにしながらも席についた。

料理をテーブルに置いて対面に座り、食べるよつに促す。

「どうぞ、何だかんだで暇が無かつたし、お腹も空いたでしょ」

そう言つて先に自分の分を食べて見せ、警戒心を解く。

街についてから歩き詰めだったので、リザもお腹が減つて居たのだろう、黙つて食べ始めた。

それを見て満足した様に頷くと、レオも自分の分を掻き込んだ。

食後、そろそろ服の出来を見に行こうかと思つた所で、はたと気がついた。

リサの体はかなり汚れているのだ。臭いもレオは慣れ始めて気にならなかつたが、このまま新しい服を着せたら汚れが移つてしまつ

だらり。

「あー、ちょっと待つて……」

そう言つてロビーに行くと、女将に風呂が無いか聞いてみた。

「風呂なんてある訳ないだろ。そんなモンが御所望なら貴族向けの宿に移りな」

話に听ると、魔法で温水を作る事は容易だが、下水処理が大変になると維持に手間や経費が嵩む為一般的の宿は風呂が無いのが普通だそうだ。

公衆用の風呂もあることはあるが、下水処理施設の近い町の反対側にしかない上に、その辺りは貴族の溜まり場なので平民は近づけないとの事。

仕方が無いので水桶と布を借り、それで拭かせる事にした。

水桶と布を持って部屋に入ると、それを見たリサが転がるよう椅子から下りて床を後ずさる。

口を真一文字にきつく結んで睨みつける様子に、レオは今日何度もか解らない溜息をついた。

恐らく綺麗にして襲うと思われているのだろう。

「あの、これから服を取つてくるから、体を拭いて……」

言い終わる前に首を横に振られた。

どうした物かと思ったが、こうなつてしまつてはどうじみつも無い。仕方なく水桶を持ってロビーに戻る事にした。

これ以上ないほど肩を落として猫背になつた状態で、呆れ顔の女将に頼み込む。

「ええと、これから頼んで置いたリサの服を取つてくるので、彼女の体拭ぐのを手伝つてあげてくれませんか」

「つたく……何でアタシがそんな事しなきやならないんだい」

「ほり、あのままで寝たらベットも汚れますし……こ、え、服を汚したくないだけです。神に誓つて本当に他意はありません」

ベットといつ単語が出た所で女将の雰囲気が悪くなつたので、慌てて言葉を変えた。

「その、お金が必要と申ひなら払ひますので、何とかお願ひします……」

「別に金なんか要らないよ。あのままじや困るのは確かだし、ただ一つ条件がある」

睨みながら言つ女将、「な、何でしょつ……」と若干ビビリながら聞くと、女将は低い声で続ける。

「アタシの宿であるの子を襲わないと約束する事。それが嫌なら今すぐここから出て行きな、勿論あの娘は置いてね」

「そんな事当たり前じゃないですか…………といふか、本当にそんなつもりは全く有りませんよ」

脱力しながら畳つと、女将はまだ信用はして居なそつだが一応の納得はした様子で頷いた。

水桶と布を渡して白室に戻る。収納袋はベッドの下の金庫に隠し、

サイフ代わりの手巾着を持つて街に出た。

洋服店に行つてみたが、完成までは後少し掛かると言われて街を散策する事にする。

宿に戻らないのは勿論、手ぶらで部屋へ戻つたら女将に出入り禁止にされそぞうだと思ったからだ。

つていうか、命がけでレッドワイバーンを倒して人助けしたのに、こんな仕打ちはあんまりだ……。

現状を省みると田頭が熱くなつてくる。

瞳に貯まるのはただの汗だと言い聞かせ周りを見ていると、鎧を来た男達が多く出入りする建物を見つけた。

奥にはカウンターがあり、その横の掲示板に張られた紙を男達が熱心に見ているのを見て、ここが冒険者ギルドではないかとあたりをつける。

周りを見回しながら中に入ると、受付の女性が声を掛けってきた。

「貴方、初心者ですよね？登録なつこから受け付けてますよ」

「あ、はい、そうです。いやーよく解りましたね」

レオが感心したように呟くと、受付の女性は微笑む。

「初心者に声を掛けるのも受付の仕事ですから。それに、貴方はとても興味深そうにキヨロキヨロしていたので誰でも気付くと思いますよ」

そう言って微笑まれたが、言われた通りなのでレオも苦笑してしまつ。

彼の好きなゲームのジャンルはファンタジーだ。冒険者ギルドなど、最も憧れる要素の一つである。

その冒険者ギルドの実物の中に今までに入っているのだ、興奮するなど言つ方が無理な話だ。

「取り合えず、名前と種族を聞かせて貰えますか」

「レオです。エルフで忍……アサシンのような軽装備での強襲が得意です」「

「こちらに来てから刀や和服を見たことはない。忍者と言つよりアサシンと言つた方が解りやすいだらう。」

受付嬢は、ふむふむと言いながら羊皮紙に何やらメモを取つていた。

「取り合えず自己紹介から、私はフィルと言います。説明を始めるので、良く聞いてくださいね」

レオが頷くとでは、と姿勢を正したフィルが、ギルドに関する説明を始める。

「まず、ギルドにはS・A・B・C・D・E・F・G・Hといついろスクがあります。これはパーティを組んだ時の上下関係を決める意味と、困難な依頼を受けようとする無謀な方を止める意味がありま

す」

「ここまで良いですか」と確認されたレオは軽く頷く。

「Sが一番上で、Hが一番下……なのですが、Hは基本的に孤兎や依頼で体に欠損を負つた元低ランク冒険者に、簡単な依頼を優先する為のランクなので貴方のように問題の無い方はGランクからになります。

ちなみにGランクとFランクはそれほど大変な依頼は無いので、貴方のように体つきの良い方ならすぐ越えられると思いますよ。一応試験とかありますが、E以下は戦闘訓練みたいなものですね」

「なるほど、試験を受けてランクを上げて、最終的にはSを目指すって事ですね？」

ある程度理解したつもりになつて返事をしたが、それを聞いたフィルは顔を顰めて否定した。

「あー、Sを目指すのは止めた方がいいです。よくSランクを目指すって言つて無茶する方が居るんですが、大抵はCかB辺りで無理をして死んでしまいます。

Sランクなんて実際は5人しかいなくて、その5人も転移魔術の権威と言われるホワイトパール様や、剣聖と謳われるブルーローズ様、数種類の翼竜を騎乗用として保有する獸王様など、若くして偉才を放つた方々が最後に到達する地点ですから」

「なるほど……」

納得したように頷くレオだが、ワイバーンを何匹か持つてるだけでそんなに偉いのかなと不思議に思う。

脱線した話題を区切り、フィルは書類を見ながら説明を再開した。

「そうそう、それと受けた依頼をキャンセルする場合報酬の1割を違約金として払つてもられます。違約金はそのまま報酬に追加され

るので払い戻しされませんので」注意ください、「

そこまで言つとふう、と呼吸を整えてレオを見つめた。

「まあ、大体の説明はこれで終わりです。他に解らない事があつたら、私が隣のアリサに聞いてください。問題が無ければこちらにサインを」「

「すいません。代筆頼めますか……」

「この世界の文字は英語と殆ど同じようで、レオも一応ある程度なら何とか読めるのだが書くとなると教科書に乗っているような文字しか書けないので、サインとは言え本場の達筆な文字の中に書くのは恥ずかしかった。

「…………… でしょう。基本的に森から出ないエルフの方は、魔術文字は書けても書類文字は書けないと良く効きますし…… 終りました。それと依頼ですけど、今の時期はウルフが繁殖期前なので報酬1割増しでオススメです。倒したら左耳を取ってきて下さいね」

「ありがとう。ところでウルフって、茶色い毛並みの犬より少し大きいやつだよね？」

「ええ、それがウルフです。それが人と同じくらいの全長になると
ワイルドウルフとなります」

ウルフ自体が解らなくてした質問だったが、ウルフとワイルドウルフの違いについて聞かれたと思ったようだ。

お礼をして早速掲示板を見に行こうとすると、フィルがちょっと待つてと肩を掴んだ。

「今認識証代わりのロケットを持つてるので、それに着いた小さな魔石に貴方の魔力を認識させて終了です。ちなみに初回はタダですが、無くすと再発行に結構お金が掛かるので注意してください」

銅製のロケットを受け取り、握り締めると中心に着いた小さな石が淡く光った。付属品として簡易なネックレスやブレスレット等数種類あつたが、ベルトに着ける金具を選んで固定した。

それを受け取つて今度こそ掲示板を見に行く。

討伐依頼の枠を見ると、ウルフ3・ウルフ5・ウルフ10と書かれた紙が複数あつた。10はランクFなので、ウルフ5と書かれた紙を引き千切つて受付へ持つていく。

「はい、ウルフ5匹ですね。一週間後までに持つてきてください」

「これって今日中に終らせて、次を受けても良いんですね？」

「かまいません……というより、複数受けてもいいんですが、夜の森は危険なので止めた方がいいですよ」

「それもそうか、明日にします。有難うござります、フィルさん」

「いえいえ、命は一つですから、無理はしないで下さいね」

フィルに軽くお辞儀をしてギルドを出て、洋服店へ戻ると服はすでに仕上がつていた。

さすがは商人紹介の店と言つべきか、仕上がりは中々よかつた。旅人用の、と前置きを言つていたので、前と後ろに分厚い布をあ

て、脇はチェック柄である。尻の部分には馬車に乗った時の為に、
厚い布が2重に掛かるようになっていた。

色はレオの分が黒と赤、リサの分が青と白を基調にしてある。デザイ
ンも悪くないものだった。

レオの服に関しては 天羽々斬り の刀身が黒地に赤い血管のよ
うな線が3本入ったものなので、それを見せて貰つたのだ
が、リサの方は何故青と白なのか解らなかつた。

他にも下着を数着買つて、袋に入れてもらつた。

それを持つて店を出る頃には、辺りは暗くなり始めていた。

宿に入った所で女将にチェックするかのような視線を向けられる。
どれだけ信用無いんだろうとへこんでいると、女将に声を掛けら
れた。

「体は拭いてあげたよ。しかし、アンタも大概変ってるねえ…… 魔
法が使える奴隸を買うなんてさ」

「えつ、あの娘魔法が使えるんですか？」

レオが驚きの声を上げると、女将はしまつた。という顔をした。

「あー、今のは忘れな。もしくはあの娘が魔法を使って抵抗した
ら、逆らわずに死ね」

「いや、死ねってそんな……」

自分の失言にイラついたのか、女将はレオの反論を無視して帳簿
に向き直つた。

いい加減不遇に慣れ始めたレオは、頭を切り替えて部屋へ向かう

事にする

自室に戻り、自分の分を置いてリサの部屋に向かつ。

扉を開けたレオは一瞬固まつて一度部屋の外へ出た。

（えーっと、リサの部屋は俺の部屋の向かいで、1回の突き当りから2番目……で、いいんだよな？）

うんうんと一人頷いてもう一度部屋に入る。

部屋の隅で不思議そうにレオを見ているリサは汚れていた時とは別人のように變っていた。

肌は驚くほど白く、アルビノを思わせ、透き通る青い目をレオに向けていた。汚れても解る程の整った顔立ちは、汚れを落とす事で更に際立つていた。

だがその美しい顔立ちすら霞む程の驚きが、彼女の髪だ。

銀色の美しい髪は、毛先が淡いスカイブルーに染まり、宝石のような輝きを放っていた。

しかし、リサが着ているボロは魔法で洗濯したようで多少綺麗になっていたが、ボロな事には変わりがない。

汚れを落としただけで別人のように變ってしまったリサに、若干緊張しつつ持つてきた衣類を渡す。

「これ、夕方に仕立てさせた服なんだけど……」

リサは無言でそれを受け取ると、警戒しながらもさすがなく微かに頭を下げる。

その仕草に胸を貫かれた中身28歳独身男のエルフは、若干上ず

つた声で続ける。

「や、それじゃあ廊下で待ってるから着替えたらい出てきてくれ。遅くなつたが夕食にしよつ

そう言つと逃げるよひに部屋を出た。

おっさんと呼ばれる始めるよひな歳になつて、10代中盤くらいの少女に見とれるなんて……。と、多少自分自身に呆れつゝ部屋に戻つて着替えをした。

因みに、忍び装束を脱ぐと下がふんどしだったのに愕然とし、急いで買つてきた下着に着替えたのはレオが墓まで持つていく秘密になつた。

宵の始めの食堂兼酒場は、冒険から帰つてきた冒険者で溢れ返つていた。

カウンターに行つてオススメは有るかと配膳係に聞くと、メインが2種類から選べると言つるので両方頼むと言つて人気の無い食堂の隅へ座つた。

特に話す事も無く　　といふか緊張で何も話せず　待つてゐる
と、15分程で料理が来た。

それを適当に受け取り、銀貨を払う。

一口食べてから、リサの何かを待つてゐるような視線に気付いて食べるよひに促す。

「どうぞ、何でも食べていよい

そう言つとリサは「さうを気にしながら食べだした。その様子に

安堵しながらも、改めて自分の前に置かれた料理を眺める。

夕方に軽食を食べたときは、リサの事で頭が一杯でろくに考えなかつたが、湯気を上げる鶏肉の炒め物のようなものを見て急に不安にかられた。

今までの所、彼はこの世界が「グラビティワールド」でないことは解っている。ただ、もしかしたら他のゲームではないかという思いを捨て切れていないのだ。

VRシステムには多少の味覚を偽装する機能もついている。ただそれは、何となく甘いような気がするとか、何となく辛いような気がする。くらいのもので、先ほど一口食べたこの鶏肉の炒め物は、塩気が少々薄い以外はハーブの味などの纖細な味付けがしてあって美味しいし、何より肉としか思えない食感とハーブの強い香りがあった。

将来的に実現可能かどうかはともかく、「零夜」が持っていた一昔前の「スファイア」では再現不可能なのは確実だ。

現時点でレオは、もしこれが異世界でもゲームでもなるべく問題が起きないように行動している。しかし、どちらか選べるならば、出来ればゲームでしたというオチの方が好ましい。

自分は帰れるのだろうか。そんな言葉が、ふと頭を過ぎる。すると、今まで必死に目を背けてきた不安や絶望が、堰を切ったように溢れてくるのを感じた。

目の前が真っ暗になるような錯覚に囚われ、更にそれが引き金となり、門に入った後の薄暗い紫の泥の中に浸かった時の不快感が身体を襲い、背中に冷や汗が伝づ。

カチヤカチヤと鳴る耳障りな音にハツと気付くと、自分の持つているフォークとナイフが皿に当たつて音を立てていた。

リサに訝し気な目で見られているのに気がついて、慌てて体裁を整える。

「な、何でも無いんだ。今日は色々あつたし、せつと食べて眠ろう」

誤魔化すために勢い良く鶏肉を搔き込み、なるべく味を感じないようにして飲み込んだ。

現実の料理に比べれば薄い味付けの料理も、今のレオにはしつこい位に感じられた。

部屋の廊下でまた明日と言つて別れようとした時、便利な物がある事を思い出した。

リサを待たせて自室に入り、収納袋から指輪を一つ取り出す。

かつて グラビティワールド が人気だつた頃、天羽々斬りの材料を2つも持つてている事で様々なプレイヤー キラーに狙われた。その時活躍したのがこの指輪で、近くに害意を持ったモンスター やプレイヤー（武器を抜いたり詠唱を始めたりする者）を感じする と、アラームが鳴る仕組みになっている。刀が完成してからは、意思を持つ武器として正式な所有者のレオにしか扱えなくなつたので長らく使っていなかつたが、リサの防衛には役立つてくれるだろう。レオ自身は泥棒程度なら襲われても返り討ちに出来るだろうと言う自負もあるし、簡単に効果を説明して指輪をリサに渡した。

「かなり大きな音だから、何かあつたら俺も起きる。だから安心して眠ってくれ」

リサは言われるがままと言つた風体で指輪をはめ、そのまま頼りない足取りで自分の部屋に入つていった。

彼女を見送つたレオは、鍵をかけてベッドに横たわる。

緊張の糸が切れ、静かな部屋で一人ぼっちになると、どうしてもこの世界の事を考えてしまつ。

不安。

この先どうなるのか、そもそもこの現象は一体何なのか。何時になつたら戻れるのか、それとももう戻れないのか。

絶望。

現実での身体はどうなつてゐるのか、ひょっとしてもう死んでいるのか。この世界で死んだらどうなるのか、怪我をしながら戦う事になつたら、それは痛いのか。

怒り。

あの白いローブの男は俺に何かしたのだろうか、だとしたら何をしたのか。

レオの中で黒い靄のような感情が渦巻く。

それを必死で堪える為に、ベッドの中で肩を抱いて震えた。

そして自分に言い聞かせるように呟つ。

「大丈夫、ログインしたまま12時間経つたら、強制終了が掛かるはず……さつとこのまま眠れば、〈スフィア〉で目覚める事が出来る」

精神的な疲れの為睡魔が襲つてくる中、縋るよつて同じ言葉を繰り返す。

どんなに毛布を着込んでも身体を丸めても、一向に暖かくならぬ寝床の中で、レオはゆっくりと眠りに落ちていく。

言い訳ばかりの無様な自分を、どこか冷めたもう一人の自分が、「本当はとっくに解つてるくせに」とあざ笑うのを感じながら……。

ダール興商自治区（後書き）

色々と頑張った結果、何とも微妙な雰囲気に……。

ちなみにレオがここまで露骨に怪しまれた理由は、純粹に格好が怪しいからです。門を抜けて街に入つてから口元を隠し直したレオは、装備重視のゲーマーとしては優秀ですが人としては残念な感じですね。

それはさておき、そろそろ感想……期待します！

誤字脱字矛盾の指摘から、ウケ狙つてるんだろうけど、あれは無いわ～とか、戦闘の描写をもうちょい（細かく）「大雑把」にしてとか、要望みたいな物でもいいのでは非欲しいです。

次は少々シリアス多め予定ですが、何とか読みやすくなるよう頑張ります！

あれ、悪乗りだけで書くはずが……

寝覚めは最悪だった。

今後も良くなる要素が無いので、明日もこんな絶望的な気分で起きるのかと思うと憂鬱になる。

時計が無くて時間は解らなかつたが、太陽の位置から何となく7時か8時くらいだろう。

ロビーで桶と布を借りて井戸の場所を教えてもらい、冷たい水で顔を洗つて部屋へ戻つた。

リサの部屋を小さくノックするが、反応は無い。あれだけ色々な事があつたのだ、毎過ぎまで眠つても当然だろう。

自室に戻つて1時間程何も考えずに過ごしたが、黙つていると余計に暗い気持ちになるので、朝食を取つて昨日のウルフ討伐依頼に向かう事にした。

リサの部屋には鍵が掛かっているため、ロビーで女将に小銀貨を数枚渡す。

「昼頃になつたら、連れを起こしてこれで何か食べさせてやつてくれださい」

食事の費用ならば小銀貨1~2枚で十分なのだが、多めに出したのはチップと手間賃だ。

「言われなくともそのつもつと」

そう言つと小銀貨一枚だけ取つて残りをレオに返してきた。

お人好しな女将に苦笑しつつ、返されたお金再度差し出す。

「それなら残りは彼女に渡してください。無一文じゃ不便だらう」

女将はそれを眉を顰めて暫く見つめると、唸るよつて言つた。

「それは良いけど…………ひょっとしてアンタ、良い奴なのか
い…………？」

そのあんまりな言い様に、脱力しながらレオも答える。

「俺そんなに悪そつに見えますかね…………」

「そりや、古今東西どんな逸話だつて真つ黒な服を着てナイフ持つ
てる奴は怪しいと相場が決まつてゐるからね。今日はまだしてないみ
たいだけど、昨日は顔を半分隠してたしあれで堅気かもと思つ奴は、
馬鹿かお役人くらいのもんぞ」

言われてみればこの世界の文化レベルはそう高くない。貴族や騎
士は別として民衆の学歴など無いような物だらうし、物語や逸話に
出てくる悪役は大抵黒と相場が決まつていてもおかしくは無かつた。
かといって、鉄よりもミスリルよりも硬く服のように軽く、さら
には身体能力強化の効果まであるこの忍び装束に代わる防具など、
この世界にはあるとは思えない。

それに収納袋に入れて出かけている間に盗まれたり、弱い防具を
来ていたせいで負けたりしたら悔やんでも悔やみきれないでの、諦
めるしかない。

「これは俺の持つてゐる最高の防具なので……怪しくてもこれを着る

しかりんですよ

「ま、好きで着てるんじゃないなら良いや。疑つて悪かつたね、今度それとなく客にも言つといてやるよ」

「是非お願ひします」

そう言つて宿を出て、門へと向かう。
衛兵に、ギルドの依頼の紙とロケットを見せ、門をくぐると歩いて1時間程の森へと向かった。

森に入つて20分程歩いたところでウルフの群れに出会つた。
舞うようなステップで刀を滑らせ、3匹程切り刻んだ所でふと気になり、力試しに4匹目のウルフに全力の蹴りを叩き込む。
するとウルフは凄まじい速度で吹っ飛び、木に当たつてグチャグチャに潰れた。

「うつわあ……」

自分でやつたのは解つているのだが、余りの凄惨な光景を前に少し引いてしまう。

スプラッタ回避するため打撃を封印し、刀に依る殲滅に切り替えたのだが、さつきの光景が敵を萎縮させたのか2匹程斬った所で散り散りに逃げてしまった。

仕方なく耳を切り取ろうとしたが、潰れた1匹には触りたくないし、天羽々斬りで誤つて耳を切つたのが1匹居て、更に死体の1つをウルフが引き摺つて行つてしまつた為、3つしか取る事が出来なかつた。

「これは効率悪いなあ……」

かといつて無理に追いかけても、置いていった死体を他の動物に取られたら元も子もない。

誰かに頼めれば良いのだが、どう考えてもレオよりランクの高いギルに小間使いを頼むのは不味いし、強さを余り知られたくない現状では、他の冒険者を雇うのも避けたい。

「ど、なるとリサくらいしか居ないんだけど……まあ、駄目元で聞いてみるか」

そうして切った耳をどうしようかと考え、皮袋か何か買ってくれば良かつたと後悔した。

2度目の群れで何とか予定の耳を揃え、門の前まで戻った頃には正午になろうとしていた。

戦闘で幾分か気を逸らす事に成功したレオは、調子を取り戻して街へ入つていく。

耳を手に持つたまま、ギルドに入ると、受付のフィルに呆れられた。

「初心者だとは思ってたけど、まさか皮袋も持たずに狩りに行くなんて……。左向かいの店に、血が滲みにくい3層の皮袋が売ってるから、次までに買つと良いですよ」

「ありがとうございます。いつもすいません」

「いいですよ、助言は大事な仕事ですから。けど、貴方は全体的にもう少し考えて行動した方が良いですよ」

「うう……す、すいません」

後頭部をガリガリ搔きながら反省していると、ファイルがそれを見て楽しげに微笑んだ。

「それと毛皮なんかもこちらで買い取るので、取れたらまとめて袋に入れて持ってきてください。あつ、でも毛皮は強制じゃないので商人の伝があればそつちに卸して構いません」

昨日言い忘れましたと言つて頭を下げるファイルに、手を振つて答える。

「いや、気にしないで、今日の分に関しては初めてだつたし、全力で攻撃したから……毛皮が取れそなのは無かつたんですよ」

依頼の紙と認識証、そしてウルフの耳を受付の上に置く。ファイルはそれを確認すると、報酬として小銀貨4枚を渡した。

「有難うござります。ウルフは群れの数に依つては難易度が上がる場合があるので、群れが合さつて大きくなりすぎると受けれる人が居なくなつてノルマが越えられない時もあるんですよね」

「ノルマなんて有るんですか」

「ええ、弱い魔物も大群だと討伐が大変ですからね。都市毎に国からのノルマが定められているんです、これに届かないと強制召集をかける事もあります。と言つても、滅多に越えられない事は無いんですけど」

冒険者と言えば気楽な旅人というイメージしかなかつたが、面倒な事も多少はあるようだ。

強制召集の頻度を聞くと、大体5～6年に1度位のようだ。この街にはそれ程長く滞在する予定もないし、恐らくここでそれに出てくる事は無いだろう。

同じウルフ5枚の紙を掲示板から引き千切り、登録を済ませた。

「さて、袋を買って戻ります。色々教えてくれて有難う」

「いえいえ、気をつけて行って来て下さいね」

用を終えたレオの後ろで、ファイルが次の冒険者の応対をしていた。入り口を見ると、更に皮袋を持った男がギルドに入ってくる。受付の仕事も楽ではなさそうだ。

10代後半位に見えるファイルの働きぶりに関心しつつ、冒険者ギルドを後にした。

宿に戻つてリサの部屋をノックすると、丁度食事を食べ終わった所だった。

食べ終わつた食器を廊下の返却棚に戻し、部屋に戻つて皮袋と鞘に入ったままのナイフを取り出した。

「ええと、実は頼みがあるんだ。今日実際にウルフ討伐をしてみたんだけど、耳を切る作業が意外と手間で、よかつたら一緒に来てそれだけでも手伝つて欲しいんだけど……」

正直死体の処理などあまり頼みたくなかったが、背に腹は変えられない。

リサは暫くの間じつとレオの顔を見て迷つてゐるよつたが、
駄目かなと思い始めた頃に頷いた。

それに気を良くしたレオは、おおつと声を上げて喜び、袋とナイフを手渡した。

「これで左耳を切つてくれるだけでいいから。あ、でもその格好で森に入るのは危険か……ちょっとまつて」

そう言つてレオは自室から収納袋を持ってきて、中身を探り出した。

レオが取り出したのは、グラビティワールドがまだ栄えていたとき、パーティで盾役をしていた頃のナイトの鎧だつた。

オリハルコンとアダマンチウムで作られた全身鎧は少々古い型だが、とても高度な防御力と魔法耐性を有している。

グラビティワールドならレベル制限があつて着れない筈だが、それについてはステータス画面から選択する訳じゃないし着る事は出来るだろうと思つた。

見る者が見れば愕然とするような伝説級の鎧を、「身長差があるからちよつと大きいけど、何とか着れるかなあ」等と軽い調子でリサに着せていく。

その途中で何となく、この状況を見たら、あのノリの良い職場の友人なら「ちよつ、初心者にカンストレベル装備とかレオさん自重www」等と言つてやうだなあと物思いに耽つてしまつた。

手が止まつたレオに、リサが訝し気な視線を向けてきたので、頭を振つて作業を再開する。

リサに鎧を着せた後、今度は収納袋の中から一メートル程の盾を

取り出した。

こちらは実は 天羽々切り と同じ神器クラスの盾の一種なのだが、誰でもクエストで作れる代わりにとても時間の掛かる物だった。それで、本職ではないと言う事もあって途中でやめてしまったのだ。それでもこの盾 イージス は、周囲に攻撃を緩和させる障壁を展開すると言う便利な能力を持っているので、それが此方でも発動されるならリサは怪我など負わないだろう。

しかし、盾をリサに持たせようとしたとき問題が起きた。

「痛つ」

今まで腕に着けようとした時、盾から電撃が発せられたのだ。慌ててレオが魔法で治療するが、リサは イージス を持つたレオを見ながら驚きと恐怖を顔に浮かべている。レオは混乱しつつも反射的に謝る。

「「」「めんわざといじゅ」「

そこまで言ってハタと気がついた。そう言えば神器クラスの武具には人格が宿っていると言う設定があった筈だ。

ちょっと待ってね。と言うと、部屋の片隅に行き、しゃがみ込んで イージス を睨みながら

「お前のこれからのは使命はリサを護る事だ。今度彼女に怪我をさせたら 天羽々斬り で真つ二つにしてやるぞ」

と、極小さな声で脅しつけた。

振り返つて此方を睨んでいるリサに笑顔を向け、低姿勢で頼み込む。

「今度は絶対大丈夫だから、もう一回だけ着けてみて

恐る恐ると言った様子でもう一度手を出したリサだが、今度は何事も無く掴む事が出来た。

こうして考え得る最強の守りを『えられたりサは、ぶかぶかの鎧でガチャガチャと音を立てつつ、レオに向き直る。

仕上げに頭全体に入る兜を被せて、鎧の方は着終わった。

最後にそこそこ強い剣を渡そうとして、ふと思いついた。

動物如きではあの鎧は貫けないが、この剣は別だ。転んだ拍子に刺さつたりしたら大惨事になりかねない。

ナイフは持たせたし、魔法も使えるらしいから大丈夫だろうと思いつて収納袋を閉じた。

「それじゃ、そろそろ行こうか。明るいうちに戻りたいし」

黙々とついて来るリサを背に、収納袋を自室の金庫に戻して宿を出た。

門で午前に会った衛兵に呼び止められ、依頼の紙をしたまでは良かったのだが、彼はリサの方を見て驚いた。

「そいつは誰だ」

慎重に不釣合いな鎧を着て黙つてついて来るリサを、不審に思つたのだろう。

どう答えたものかと焦つたが、衛兵が「凄い鎧だな……貴族の息子か？」と呴いたのを利用する事にした。

「え、ええ。実はお忍びで実践を経験したいとの事で、親の鎧を借りたらしいのですが……ウルフを少し狩るだけですし、見逃してもらえませんか」

衛兵は少し考えるよつに顎に手を当てて首を傾げたが、暫くして溜息交じりに頷いた。

「貴族に田をつけられると面倒だしな、その代わり帰りもこの門を使えよ」

そう言つて別れ際に「あんたも大変だな」と、小声で囁いてきた。それに曖昧な笑顔を返し、森へ向かつ。

鎧を着たりサガ少々息を荒げているが、狩りは概ね良好だった。朝に暴れた場所とは違う方向へ向かっていたのだが、中々ウルフに出会えなかつたので少々街から離れた所まで来てしまつた。

2度の襲撃を乗り越え、10個の耳を取る事が出来た。現在は3度目の襲撃で5匹のウルフが現れ、その内の2匹を屠つた所だ。残りも片付けようと刀を握りなおした時、天羽々斬りが淡く光つているのに気がついた。

グラビティーワールドには、ゲームに良くある『必殺技』が無かつた。

理由は、体を使ったアクションが苦手なプレイヤーが、一定レベル毎に覚えなければならぬ必殺技の動きを、全部覚えるのは無理だろうと判断した為だ。

メニュー画面から選べば可能だらうが、ナイト等盾を持つジョブは両手が塞がつている。

それでも暫くは1撃が3回攻撃になるスキル等でお茶を濁したのだが、魔法に比べてエフェクトが地味だ。という意見が多く寄せられ、仕方なく最上位の武器にのみ『固有技』と言ひ形で必殺技を着けた。

使うには何度も刀を振つて血を喰わせなければならないのだが、武器が淡く光つているのは、それが仕様可能になつた合図だつた。これまでは直ぐに戦闘が終つてしまつた為、使えなかつたのだ。別に使つまでもないのだが、試してみたいと言う気持ちもある。後ろのリサを確認すると、何処と無く疲れも見え始めているようだ。

早く終らせる為だ。と、自分に言い訳しつつ、刀を握る手に力を込める。

天羽々斬り の固有技は『断裂』で発動条件は、刀を強く握り締めて回転し、正面に向けて斬撃を放つ、だ。成功すれば狙つた敵の体が微妙にずれて真つ二つになる筈だ。

愛刀の晴れ舞台に興奮しつつ、慣れた調子で回転しながら先頭のウルフが分断される光景を幻視する。

そうして力を込めて刀を振つた、瞬間

目の前の森が、刀の軌道をなぞる様に扇状になぎ払われ

た。

一人はあんぐりと口を開けてその光景を眺めていた。斬った本人のレオですら驚いているのだから、リサなど完全に硬直してしまっている。

何度か瞬きをするが、目の前の光景は嘘でも幻でもない……と、理解した時、もし人が居たら大変だと思い至った。

レオは意味も無く木の影に隠れ、某家政婦よろしく顔だけ出して広場になつた森の様子を見る。

前方100メートル近くまで見渡せる広場だが、ウルフの物の他は血の跡などは無いようだ。

安堵の溜息をついて振り返つたレオは、自分を呆然と眺めるリサの視線に気がついた。

酷い痴態を見られてしまつたレオは、咳払いをして体裁を取り繕う。

「ふ、ふふふ。ウルフ共め、思い知つたか！」

何の意味も無い言葉である。

だが、レオが何か口にした事に驚いたのか、リサは体を震わせた。1歩どころか3~4歩も後ずさり、震えて鎧が金属音を立てていた。

心中で「やつちまつた……」と呟き、取り合はず武器を仕舞う。

「ええと、それじゃそろそろ帰ろうか……」

一緒に冒険して多少は心を開いてくれたら……と、思っていたのに余計に距離を置かれてしまった現状に落胆しつつ、街へ向かう事にした。

しかし、ウルフに出会わなかつた事でかなり遠くまで来てしまつていたので戻るにも時間がかかる。

行きはウルフを探しながらだったので、会話が無くても何とも思わなかつたが、帰りはある程度警戒するだけで良いので、静寂が痛い。

必死に話題を探していると、1つ気になつてゐる事が有るのを思い出した。

彼女の魔法の事だ。この世界の魔法は グラビティワールド とは別物のようなので、前々から興味はあつたのだ。

「そりいえば、女将さんから聞いたんだけど魔法が使えるんだって？」

何の氣無しに聞いたつもりだったが、リサは大仰に体を強張らせた。

ウルフでも居たのかと思い、辺りを見回すが、特に敵の影は無い。自分の言葉のせいかとも思つたが、ギルの話では魔法はそれ程珍しい物でも無いようなニュアンスだったので、何が不味かつたのか解らなかつた。

「ちなみにどんな魔法が使えるの？」

不味いかなとも思つたが、気になつたので駄目元で聞いてみた。

「下位と中位魔法を、少し……」

初めてのまともな返事に、レオは少し面食らって足を止める。そのまま顎に手を当てて、少し考え込む。

レオのダブルジョブの片割れである『学徒』は、回復とサポートに特化したジョブだ。攻撃魔法も使える事は使えるが、本職の半分以下くらいまでのレベルの魔法しか使えない。

回復とサポートに関しては本職の僧侶ほど万能ではなく、個人に対する魔法が主流だ。

有体に言えば、魔法の、特に攻撃面に不安を持つていたのだ。彼女が攻撃魔法を使えるなら、大幅な戦力増加に繋がるかもしれない。つていうか下位とか上位とかどんなもんなんだ……。

「こちらの世界はそもそもレベルと言つ概念が無さうなので、漠然としたランクがあるのだろうか。

気になつたので、自分にレジストショルレフをかけて、彼女に向き直る。

ワイベーンに苦戦する世界なのだ、多少の攻撃魔法を受けても問題ないだろう。

「ちょっと魔法の威力を確認したいから、俺に向けて雷の魔法を擊つてみてくれないか」

グラビティワールドでの雷の魔法は、出は早いが威力が小さいと言う特性があった。

それを聞いたリサは、驚いたように固まつたが、次第に鎧の隙間から見える眼光が鋭くなつていいくを感じた。

「手加減しなくてもいいよ、全力でどうぞ」

レオが微笑んで手を広げると、リサはレオに手を向けて呪文のような言葉を呴いた。

「雷神雷公・我が手に怒りの矛を」

呪文を唱えるという行為に驚いたレオに向けて、腕程の太さの雷撃が飛来した。

しかし、レオが展開したレジストシェルに阻まれ、レオの体に到達する前に消えてしまう。

呆然とレオを見つめるリサに気付かず、レオは首をかしげる。レジストシェルは本来魔法を軽減する効果しかなかつたはずだ。どんなに弱い魔法でも消えると言うのはおかしい。

ひょっとしたら手加減してくれたのだろうかと勝手に納得して、リサに声を掛ける。

「あー、手加減とかしなくて良いよ。俺はこのくらいの魔法なら受けても大丈夫だから」

そう言つて右手を木に向けて振る。

学徒が扱える最強の雷魔法「ライトニングボルト」は、手が水平になつた瞬間発動された。

右腕全体から無数の雷光が走り、指の先30センチ程のところで収束し、直径50センチ程の一本の稻妻となつて木を黒こげにした。

轟音を上げて着弾した稻妻をみて、リサはペタンとその場に膝を突いた。

そして、レオがリサに向き直ったのに合わせるよつ元ひよつ

「ううううああああああああああ」

と、叫びながら泣き出した。

あまりにも予想外なその攻撃にレオは慌てふためくが、リサはそのまま力の限り泣き続けた。

彼女 リサ・グラント の不幸は、10年前に始まった。

彼女達一家が住んでいたのはとある貴族領で、そこに彼女達の部族、ディアマンティ人と呼ばれる銀髪の一族が暮らしていた。魔術帝国の端にひつそりと暮らしていた部族には、一つの特徴があつた。

優秀な魔術師が生まれる確率が高い。と言つ物だ。

ただでさえ姿美しい銀髪の部族に、優秀な遺伝子という要素が加わり、彼らの価値は必要以上に高くなつていた。

しかし、彼らは基本的に同属同士で結婚するため、滅多にその血が外に出ることは無かつた。

それでも問題が起きなかつたのは、領主の一家が1代に1人娘を

王家に妾として嫁がせていたからだ。

だが近年王家の発言力が低下し、200年ほど前にあつた戦争から発言力を増していた奴隸商人と貴族が結託してその貴族領を瓦解させようとした。

リサの父親は行商をしていた為、いち早くその事態を察知し、近所に触れ回つて街を出た。

その後その貴族領は崩壊し、領主一家は捕らえられ、多くの民も奴隸として売られたが、リサの一家は逃げ延びていた。

ところが安心したのも束の間、数年後にリサの姉が逃亡先の街の貴族に見初められてしまつ。

折角逃げてきたのに、またも狙われてしまつた娘を護ろうと、父

親は必死の抵抗をした。
彼は行商と言つ仕事柄売られていつた同族の奴隸の末路を知つて

いたのだ。

商人仲間と協力して、のらりくらりと要望をかわす父親に業を煮やした貴族は、盗賊を雇つて彼らを襲わせた。

リサの父親は冒険者を傭兵として娘と妻につけ、自分は別れて反撃の為に知り合いの商人達と出て行くが、そのとき私財の殆どを失つてしまつた。

だがそれが仇となつて、彼は騎士団にマークされてしまう。

命からがら逃げ出していたリサ達一家は、それを知つて安堵するが、追い詰められた貴族は最後の手としてリサ達にあらぬ罪を着せてその首に懸賞金を掛けた。

こうなつてしまえば形の上では罪人である。

そしてその話は、リサ達を護衛していた冒険者達にも聞こえて來た。

「聞いたか、あの母娘今は罪人扱いらしいぜ」

「マジかよ……って事は、それ護つてる俺らも罪人じゃねえか」

「見つけましたっつって突き出しちまわねえか？姉の方意外は生死は問わないって言つし、妹の方は未だしも母親はかなりの上玉だぜ」

水を汲みに行つていたリザは、その冒険者達の会話を聞いて慌てて家族の居るテントへと向かつた。

事情を聞くと、母親は残りの路銀を全て姉妹に持たせて逃げるように行つてきた。

「ミナ、貴方はお姉さんなんだから、リサを見捨てちゃ駄目よ」

姉のミナはその言葉に強く頷いて、リサの手を引いてテントを出る。

リサは母親と一緒に来てくれと頼んだが、「すぐ追いかけるから」と頑として譲らなかつた。

暫くしてテントの方から怒声と悲鳴が聞こえたが、ミナに抱えられたリサにはどうする事もできなかつた。

それから幾つかの街を転々とした。

風の便りに件の貴族が捕まつたと聞いたが、戻つてみても父親の消息は掴めなかつた。

北で落ち合おうと言つていた父親の言葉を頼りに、姉妹は北へ向かつて歩いたが、火山の村ドリュークに辿り着いた所で、路銀が尽きてしまつた。

年増も行かない少女達に、火山の村で食べ物を得る方法など、身売りか泥棒しかなかつた。

父親が助けに来てくれる信じていたリサは、身売りしようとする姉を止めた。

ミサの方も、逃亡生活が慣れていた事もあり、見つかっても何か逃げ切れるだろうと思っていた。

だが、それは大きな間違いだった。

火山の町リューグは周囲の魔物が強力な事で有名で、街の衛兵もそこいらの軍人より遙かに優れた腕を持つていたのだ。

姉妹の付け焼刃の逃亡術など、全く相手にならなかつた。

そうして捕まつたりサとミナは、盗んだ物を返すお金も無いと言う事で揃つて奴隸になる事になつた。

「大丈夫よりサ、何があつても私が何とかしてあげるから」

ミナはそう言って、奴隸になつて泣いてばかりのリサを励ました。それから数日後に現れた奴隸商人に買われ、彼女達は荷馬車に乗せられ、ダール興商自治区を目指すこととなつた。

4日後、レッドワイバーインが現れた。

卵を密輸していた奴隸商人は逸早くその事に気付き、一番値の張るリサ達姉妹と護衛用の男を一人、自分の馬車から連れ出すると、衣類や農具の詰まつた最も軽そうな荷馬車に移動した。

あまりの出来事にリサが震えて呆然としていると、ミナがその手

を強く握つて声を掛けてくれた。

「だ、大丈夫よ。きっと逃げ切れる」

折角掛けてくれた励ましの言葉だったが、生まれて初めて聞く姉の震えた声に、リサは益々不安になつた。

怒声や悲鳴、爆音が連續して轟き、一瞬静まり返つた時、奴隸商人の叫んだキー ワードが耳に入る。

「束縛の首輪よ力を放てつ！」

所有者の告げるキー ワードに合わせて首輪から呪いが放たれ、3人の奴隸はもがき苦しんだ。

そして奴隸商人まず男を突き落とした。彼は後続の馬車馬に轢かれ、ボロボロになつて馬車の下を抜けていった。

次に手を伸ばされたのはリサだつた。だが、止めに入つたミサとの間でもみ合いになる。

何とかリサも立ち上がるが、時既に遅く、ミナが荷馬車から落ちていくところだつた。

互いに伸ばされた手が空を切り、ミナが落ちていく光景が、やたらとゆづくり感じられた。

「……姉……ちや……」

地に落ちたミナは、後続の荷馬車を操つていった傭兵が馬を離した隙間に入り、そのまま荷馬車の後ろに行つた。

やがて断末魔のような骨を碎くような音が聞こえたが、後続の荷馬車によつてその光景が見えなかつたのが幸だつたのか不幸だつたのか、リサには判断が着かなかつた。

こうして彼女は、今までの人生の全てを失った。

気がつくとリサは、冒険者に買われて街に立っていた。ずっと呆然としていてレッドワイバーんからどうやって逃げたのか解らなかつたが、もう何もかもどうでも良かつた。

だが、宿にベッドを見ると、急に恐怖が蘇つてきた。そしてミナの最後の表情を思い出す。彼女は地に落ちる寸前、リサを心配するような表情をしていたのだ。

ミナを助けられなかつた自分は最低だと思つ反面、ミナが最後まで護つてくれた自分を、何とか護らなくてはと思う。幸いリサには切り札がある。故郷に居た頃裕福だったので、街に来た魔術師に魔法を教えてもらつていたのだ。例え主人を殺した罪でその後死罪になろうとも、最後まで抵抗しようと心に決めた。

リサを買った冒険者は何とも警戒感の無い輩であった。
服を買い与え、奴隸から開放すると言つ話はどうしても信じられなかつた。

だが、奴隸から開放すると言つ話はどうしても信じられなかつた。彼女の頭の中には、家族を裏切つて母を犯した冒険者の姿が、今も鮮明に残つているのだ。

しかし、流石のリサも街の外へ一緒に行こうと言われた時は驚い

た。

まともな武器を持たせて貰えないでの、信用されている訳では無いだろうが、街の外では主人を殺してもモンスターに負けて死んだと言ひ張る事もできるからだ。

だが、すぐに甘い相手では無いと考え方になる。

彼の放つた斬撃は、森をなぎ払った。

その上考えられない事なのだが、それを行つたのは彼が持つ小さな刀なのだ。

魔術師の素養があるリサは、小さな刀が斬撃の直前、周囲のマナを物凄い勢いで貪り喰うのを感じた。

あんな武器は、見た事も聴いた事も無い。肉弾戦では絶対に勝てないと呟つ事を見せ付けられた。

それから暫くして、彼は魔法の事を聞いてきた。

一瞬冷や汗が走つたが、何とか普通に返す。

すると彼は驚くべき提案をしてきた。

「ちょっと威力を確認したいから、俺に向けて雷の魔法を撃つてくれないか」

意味が解らなかつた。雷の魔法は、当たると体が痺れて少しの間動けなくなる凶悪な魔法だ。

リサとてティアマンディ人の端くれだ、並みの魔術師より強力な魔力がある。

全力で相手を痺れさせ、得意の氷の魔法でトドメを刺そうと思つていると、なんと相手から手加減は要らないと言つてきた。

中位以上の魔法を受けて無事な人間が居るはず無いのに、馬鹿な奴めと思いつつ、全力で魔法を放つた。

「雷神雷公・我が手に怒りの矛を」

しかし、リサの渾身の魔法は当たる事無く消える。

何が起きたか解らず呆然としていると

「あー、手加減とかしなくて良いよ。俺はこのくらいの魔法なら受けても大丈夫だから」

と言つて見たことも無いような強力な魔法を、それも無詠唱で放つた。

絶対に勝てない。

そう思つと、盾で怪我をした際、回復魔法を使つていた事が更に恐怖の事実として蘇つてくる。

以前奴隸商人がこんな事を言つっていたのだ。曰く

『僧侶は滅多に買わないだろうが、回復魔法が使える魔術師に買われないように祈りな。奴等死ぬ寸前までいたぶつて魔法で直すのを延々と繰り返して、壊れるまで遊ぶんだ。あれを見たときは流石の俺も声をかけられなかつたね』

彼の移動速度の速さは戦闘で見ている。逃げるのは絶対に不可能だ。

不意に膝が力を失い、ペタンと地面に座り込む。

それを合図に、堰を切つたように絶望の涙が溢れ出た。

本気で困った。

どれだけ必死にあやしても、リサは一向に泣き止む事が無かつた。

どうしようかと思っていると、泣き声に引かれてウルフが現れ、
ウルフを狩るとその血の臭いと泣き声で更にウルフが現れ、血の臭
いが濃くなると見たことも無い白い大蛇が現れ、それを倒すとダチ
ヨウに大きな羽を着けたような巨鳥が現れ……

SP持続回復の魔法で、肉体的には疲れなかつたが精神力は別だ。
1時間半ほどリサに声を掛けながら敵を倒していると、モンスター
の死体が一山出来上がつた。

泣き疲れたりサを背負つて帰る頃には、精神的にヘトヘトで、こ
の時ほどMPがマナポイントでなくメンタルポイントなら良かつた
のにと思ったことは無かつた。

不幸中の幸いというか、門番は泣きながら背負われているリサを、
実戦の恐怖で泣いてしまつた貴族の子供と勘違いし、そのまま通れ
と合図を送つてくれた。

「一旦散に宿に戻ると、懐から金貨を取り出し「甘いもの片っ端か
らお願いします」と、言い残して部屋へ向かつた。

リサの部屋に戻ると取り合えず重そうにしている鎧を外し、椅子

に座らせた。

甘味をテーブルに並べると、一応腹は減っているのかゆっくりと食べだす。

それが一区切りついた所で、レオは切り札を切る事にした。昔彼女と別れた時は惰性が理由だったので、こんな修羅場は初めてだ。

故に切れる手札は一つだけ 即ち土下座だ。

いくら女性に疎いレオでも、あの号泣が自分のせいなのは解る。なので、誠心誠意全力で土下座して、理由を教えてもらう事にした。解らない今まで地雷を何度も踏むのは嫌だからだ。

泣き疲れて気が抜けたのか、彼女はつらつらと自身の生い立ちを語りだした。

最初の頃はレオも相槌を打っていたものの、途中から何もいえなくなってしまう。

ミナがレッドワイバーンに喰われる話の直前まで来て、レオは目を瞑つた。

あの時躊躇つた数秒のせいで、リサがこのような状態に成つてしまつたと気付いたからだ。

「あの時、奴隸商人は私を突き落とそうとしてた……本当なら死ぬのはお姉ちゃんじゃなくて私だった……」

「それは違う

「違わない……っ

また泣き出しあつになるリサにて、レオは無機質に告げる。

「あの時俺がレッドワイバーンにビビら無けりや、君の姉さんは死なかつた」

「何を……」

「覚えてないのか、俺はあの後レッドワイバーンを殺したんだ。ホントは簡単に殺せたのに、始めてみるアソツにビビつて躊躇つてた。あれが無ければ君の姉さんは生きていた」

そこまで聞くとリサは拳を振り上げ、レオの胸を全力で叩いた。ダンッと言う音が、部屋に響く。

「アンタなんて……冒険者なんて……」

そのままレオの服を掴んですり泣くりサの背を、レオは優しく摩つた。

摩りながらも、レオは冷静に彼女を見ていた。即ち、これは別にレオに心を開いた訳ではないのだ。

ずっと一人で気負っていたから、それが折れて人肌が恋しくなつただけだ。ここに宿の女将がいれば、間違いなくそちらに抱きついただろう。

彼女の冒険者　特に男　への不信が、この程度の事で解消される訳がない。

けれど、レオはそれでもいいと思つ。

彼はこれまで、これがゲームか異世界かと言う問いの結論から逃げていた。

だからこそ、リサを「我侭な登場人物」としてしか見ていなかつた。

たのだ。

その結果がこれだ。いつまでも彼女の異常に気付けなかつたせいで、彼女がここまで追い込まれる羽田になつた。

(28の男が現実逃避してたせいで、15～6の少女を泣かせるなんて、本気で最悪だ)

彼はここを現実だと認めた。その上で、優先順位を決める。

リサの奴隸解放。

自分に何が起つたのか調べる。

帰る手立てを探す。

これを絶対に変えない優先順位として決める。

数十分か、数時間が、長い時間の後に彼女が手を離す。途中女将がフライパンを持つて様子を見に来ていたが、状況を見て黙つて帰つたようだ。

リサは自己嫌惡の為か、思い切り渋い表情で目を逸らしている。その肩にそつと手を乗せると、怖がるよう体を竦ませた。

「リサ」

可能な限りの優しい音色で語り掛ける。

「今日は無理につき合わせてごめん。疲れただろう、もう寝るんだ」

そう言つて手を離し、扉を開ける。
リサはけらを見ずに俯いたままだ。

「おやすみ。また明日」

扉を閉め、自分の部屋に戻る。
着替えて直ぐにベッドに横になつたが、昨日のように震える事は
無かつた。

「リサ、必ず……」

疲れのせいで言葉は途中で途切れてしまつたが、その先は言つ必要が無いほどに決まりきつっていた。

おお作者よ、完徹くらいで死んでしまつとは情けない。

1時くらい今までに出来るだらうと思つていていた時期が、僕にもありました。

（現在時刻朝4：50

こんば……おはよう御座います。屍です。

評価有難う御座います。思わぬ高評価に、プレッシャーで震えている作者です。

これでリサの伏線は粗方回収したはずです……何か忘れてなれば……。

それと、現状ツンツンなリサさんですが、もう少し暖かい田で見て貰えると嬉しいです。

PS強引に仕上げたので、後々あちこち変更するかも知れません。
ご了承ください。

盾の効果変更しました

一人の冒険者

明け方、まだ街に殆ど人が居ない時間に、レオは冒険者ギルドの前に立っていた。

夜中も営業しているギルドだったが、流石に入通りも殆どない早朝なので戸は閉まっている。

門の方も同じで、用があれば通して貰えるだろうが一応扉が閉めてあつた。

通常であれば衛兵に話せば空けてもらえるかもしれない、しかし生憎昨日の依頼の紙には出国の判だけ押されて帰国のものが押されていない。

昨日の衛兵も居ないようだし、面倒なので忍者のスキルである「透身」を使う。これは姿音臭いを消す低レベルのスキルで、上位には自分より強いモノを欺くための気配を消す「無心」や、神や龍をも欺けるようになる最終スキル「一体化」があるので、今は「透身」で十分だろう。

スキルは S P と M P を消費する。
スタイル^{スタイル}

スキルの発動は初めてだつたが、魔法と同じようにエフェクトを思い描くことで発動できた。

外壁の上にビューテレポートで移動し、もう一度使って草原に出た。

更にクイックやテレポートを使い、あつという間に森に着く。

「……」

森に入る前、一度だけ街を振り返つたが、黒い影は何も言わずにそのまま森へ入つていった。

太陽が真上に差し掛かる少し前、レオは冒険者ギルドへ向かつていた。

ギルドに入る時、燃えるような赤い髪をしたドワーフとぶつかつた。

「おつとごめんよ。おーい、ゲオルグは居るか……全く、他人に剣の修理頼んだまま消えるなんぞ、どんな神経してやがる」

レオはそれに特に反応する事無く、カウンターのファイルの前へ向かつた。

「ウルフの耳です、それと昨日の依頼証。それから、沢山持つてきたのでその分の依頼をクリアした事にして貰えませんか」

カウンターに置かれた皮袋は、パンパンに膨れ上がり、中には昨日の討伐の分と早朝から狩つた分、合わせて4～50匹分もの耳が入っていた。

周囲の冒険者が、驚いてレオを見つめる。さすがのファイルも驚いたようで田を丸くして皮袋の中身を確認した。

「ええと、それは良いですけど、昨日の今日で良くなれただけ狩れましたね」

「別に……運が良かつただけです。所でランクアップには後どれく

「ここでの依頼をクリアすれば良いですか」

生氣の抜けた田で皮袋を見つめるレオの様子に、フィルは眉を顰めた。

「これだけあれば十分足ります。それとランクアップの試験ですが、捕まえて来たウルフ4匹との多対一の戦闘訓練なので、この耳の量から見るに、訓練の必要無しと判断される可能性が高いです」

期待通りの答えだつたが、特に反応せず淡々と質問を続ける。

「それじゃ、もしランクアップに必要な耳に余りがあつたら、それをFランクの依頼用に回してください。午後からまた行くので、ウルフ以外に良い獲物が居たら教えてもらえると助かります」

掲示板まで一緒に来るよう促して立ち去りつとするレオの肩を、フィルが慌てて掴んだ。

「待つてください。それは許可できません」

止められたレオは、苛立たしげにフィルを睨んだ。

しかし、レオの鋭い眼光正面から受け止めたフィルは真剣に続ける。

「レオさん、貴方自分が今どんな顔をしているか自覚していますか」

顔と言わても鏡など殆ど無いこの世界で、自分がどんな顔をしているかなど確認しようの無いレオは疑問の声を上げた。

「見えないので解りませんが……何の事ですか？」

するとフィルは頭を振つて、諭すように続ける。

「レオさんは、この街で昔戦争があつた事は知っていますか」

それについてはギルから聞いた気がする。確かあれは石造りの外壁について聞いたときだ。

レオが頷くと、フィルは彼の顔を真つ直ぐ見て続けた。

「私の父は10年前、戦争で死にました。その父を最後に見た時の顔と、今の貴方の顔はそっくりです」

そこまで聞いても意味が解らないと訝しんでいると、彼女は困ったように微笑んで続けた。

「母に後で聞いた話では、父は、母と私を護ると言って昼夜を問わず戦っていたそうです。何が原因か知りませんが、今の貴方も同じようなものではないですか？」

「けど、だからって……」

「まだ納得出来ないなら、前例の話をしましょ。前にも、似たような顔をした冒険者を1人見たことがあります。その時は私も気のせいかもと思つていましたが、数日後、彼は死にました」

どういう事が解らず困惑するレオに、フィルは優しく止めを刺す。

「彼は腕のいいBランクの冒険者でしたが、普段通りなら絶対に掛からないような幼稚な罠に掛かつて死んだそうです。レオさんは腕に自信が有るようですが、今の貴方はいつも通りの判断が出来てい

ると言いたれますか？

何も答えられない。

昨夜の出来事で気が逸っていた今のレオなら、落とし穴のような古典的なトラップに掛かつて串刺しになつていたかもしれない。

「急いで行動する事で良い結果に繋がる事も勿論あるでしょう。でも、ランクアップも確実でない今の状況で急いでしも、それはただ焦つているだけですよ。それでも未だ行くといつのなら、私の権限で依頼の受注を止めさせてもいいですか」

ファイルの尤も過ぎる指摘に、碌な反論も出来ずに言い負けたレオは溜息混じりに頭を搔いた。

「やれやれ……降参です。本当にファイルさんには敵わないな」

それを聞いたファイルは満足げに頷いて、向日葵のような明るい笑顔を作った。

そしてどこか誇らしげに胸をそらす。

「当然です。父さんが死んでからずっとこのギルドで働いてるんですけど。最初は小間使いだったけど、それでも年季が違います」

「そう、でしたね。俺はまだ駆け出しの冒険者だった……」

「解つたら、報酬で買い物にでも出かけてください。気分転換になりますよ」

何とも女性らしい意見を口にして銀貨を差し出すファイルに、苦笑して頷く。

礼を言つてギルドを出ようとすると、入る時にぶつかつたドワーフに声を掛けられた。

「お前さん、フィルちゃんには負けたようだが、モンスターには滅法強いみたいだな、気に入つた！珍しい武器を使つてるようだが……あれだけ斬つたんだ、多少は痛んでいるだろう。これも何かの縁だ、昇進の祝いに研いでやる！」

刃物の手入れなど解らない上に、作成スキルでの修復も失敗が怖くて出来なかつた（ゲームでは武器は失われないが、現実では別だと思つ）ので、その言葉は渡りに船だつた。

「おお、是非お願ひします。俺の名前はレオ、この武器はカタナと言こます」

レオが手を差し出すと、ドワーフはまめと火傷だらけの手で力強く握り返してきた。

「俺はバルドイン、バルドと呼んでくれ。取り合えず工房にいこうか」

バルドの工房は鍛冶ギルドや織物ギルド等が立ち並ぶ、所謂工業地帯にあつた。

小さな工房だが個人で職場兼店として運営しているらしく、手前の部屋には武器が所狭しと並べられ店番のドワーフのおばさんが座つているが、奥の部屋の扉からは微かな熱気が漏れている。招かれるまま中に入ると、釜から溢れ出ている熱気が頬を炙る。作業台の前に座つたバルドは、左手用の來国俊を指差した。

「まずそつちからやる。見せてくれ」

腰の來国俊を鞘^{さや}と取り外し、バルドに手渡す。
刀身を見たバルドは目を輝かせて笑った。

「これは良い剣だ……いや、カタナだつたか。どっちにしても、この薄さであれだけ斬つて殆ど刃毀れが無いとは……何で出来てるかわからんが、随分と頑丈だな」

「ま、まあ、結構良い物だからな」

装備を褒められたゲーマーが照れて頭を搔いている。
上機嫌に始めて見る刀を眺めていたバルドだつたが、次第に顔が
険しくなってきた。

「お前ちゃんと血脂ふき取つてないだろ……いつも何で拭いてる」

「ええと、その辺の草とか、皮袋の端とか……」

「はあっ！？ テメエこんな名剣を使い潰すつもりか！」

突然豹変して立ち上がったバルドの剣幕に圧され、レオは一步身
を引いてしまう。

バルドが拳を握つて睨んでいると、「す、すいません……」と情
けない声を出したので、脱力して溜息を突いた。

「まつたく、これじゃ作つた奴が浮かばれんな……後で手入れ用の
布を何枚か持たせるから、次からはそれで拭け。今すぐ研いでやる
から、ちょっと待つてろよ」

最後の優しい言葉は、刀に向けて掛けられたものだ。

真剣に刀を研ぐバルドの横顔は、豪快な鬪たてがみのような鬚と良く合つて赤獅子のような印象を持つ。

じつと顔を見つめるレオに気付いたのか、刀を研ぎながらバルドが声を掛けた。

「どうした、俺の顔に何かつことるか」

「いや、見事な鬚だと思って……」

それを聞いたバルドは目を見開いてわなわなと震え、刀を置いて立ち上がる。レオの両肩を掴んだ。

「お前さんこの鬚の良さが解るのか……っ」

何でこんなに驚くのか良くなかったが、元の身体で鬚を生やそうとして上手く行かなかつた彼は取り合えず頷いた。

「エルフは何万歳になつても、アゴをツルツルにして俺らの鬚を馬鹿にする、いけ好かない奴等ばかりだと思つてたが、お前は最高だ！」

「はあ……」

そう言つてレオの肩を数回叩くと、機嫌を直して研ぎを再開した。研ぎ終えた刀を綺麗に拭き、油を塗つて、一度ばらして掃除した鞘に戻すと、それを手渡して 天羽々斬り を指差した。

「次はそっちだ、ほれ、早く出せ」

そう言われたレオは少々困つてしまつ。

昨日リサに、初めて イージス を持たせようとした時の事を思
い出したからだ。

「実はこれ曰くつきの代物で……俺以外が持とつとすると怪我をす
るから、帰つて自分でやりますよ」

「何言つてやがる素人が、何でもいいから見せてみろ」

呆れ顔で言うバルドに仕方ないなと思いつつ、 天羽々斬り を
取り出す。

すると取り出した直後からバルドが驚愕で目を見開いた。

「な、そのカタナも魔法の武器だつたのか……しかも何て魔力だ、
さつまのカタナより強いじやねえか」

この言葉にはレオの方が驚いた、それは暗に魔力と言つものを知
覚できる事を指している。

形も光も匂いも無いものを、どうやって感知するのかさっぱり解
らないレオは、素直に感心した。

「良く解りますね」

「そりやあ小僧の時から、何十年も鉄を打つてゐからな、剣の事な
ら大抵解る。しかし、鞘に入つてゐる時は何も感じなかつたのだが
……」

それを聞いて思い当たる事があつた。

確か世界に一つの材料である『夢界の王の魂』が鞘に使われてい

るはずだ。

「ああ、それは多分鞆の中で刀が眠っていたから……だと」

「言いながら、やつはいつか世界に意思のある道具などあるのかなと思い至った。

案の定バルドは口をポカンと開け、呆けたようにレオを見ている。

「IJのカタナには人格があるのか……？」

最早言い逃れの出来ない状態に成ってしまったので、諦めて自供する事にした。

「は、はい。実はさつき言つた他の者には使えないってのは、そういう理由なんで……できれば秘密にして欲しい事なんだけど」

「ああいや、別にそれについてとかくもつもつは無い。それにしても、IJのカタナは素晴らしい。完璧と言つていい」

呆然と眺めながら、ドワーフの国の人間でも作れんだろうと小さく呟く。

感動したよつて言つバルドは、何となく恥ずかしさを感じてくれる。

「あの、そろそろ良いですか、刀も問題無いみたいだし……」

「ねへ、良いぞ。しかし良い物を見せてもらつたな……カタナか……」

「……」

惱むように唸るバルドに、不意に思い立つた提案を出してみる。

「作るなら見本用に一本貸しましょうか、宿に戻れば回りようのが数本あります」

「本当に、是非頼みたいが……幾ら出せばいい?」

「お金はいいです。扱いになれてもらえれば研ぎも頼みやすいし、強いて言うなら研ぎの代金として貰しますよ」

バルドはクソクソと楽しそうに笑うと、立ち上がって最初に持っていた剣を取った。

「お前さん本当に不思議な奴だ。さて、俺はまたこの剣の持ち主のアホを探しに行かなきゃならん、残念だが今日はここまでじょつて了解、愛刀を研いでくれて有難う。今度来る時は予備の刀を持つきますよ、楽しみにしててください」

「おひ、楽しみに待つているぞ」

そう言って、二人は連れ立つて工房を出た。
別れ際に無骨な腕を笑顔で振るドワーフは、本当に楽しそうに見えた。

バルドの工房から帰る途中、近くの織物ギルドで、おかしな物を見つけた。

店の隅にぶら下げられていたのは、かなり粗悪ではあるが、どう見てもゴムだった。

割りと高品質そだつたアルザダの紹介してくれた洋服店でも、ゴムの類は一切見られなかつたので、この世界には無いのだつと思つていたのだ。

興味深そうに「ゴムを見ていたのに気付いたのか、店員が説明に來た。

「こりゃしゃいませ。お田が高いですね、こちらは南方より試験的に取り寄せた伸縮性のある素材で、ゴムと書つものなのです」

「まう……」

興味がありそつな声をチャンスと捕らえたのか、すかさず定員が置み掛ける。

「ズボンの腰の部分とかに括り付けると、どつても便利なんですよ。まだ試作品なので、あまり強く引っ張ると切れてしまいますが……」

確かに現状の布キレのようなベルトで縛るのは大変だが、このゴムはかなり脆そうだ。

強度はどのくらいなのかと聞くと、「そ、それは……」と田を逸らされた。

「で、でもこちらのリボンのように小物に編みこんだモノは、中々長持ちするんですよ」

そう言つて定員が取り出したのは、赤と白の綿糸で作られたレスのリボンだつた。

それがゴムの力で微妙に縮んでいる。

そんな物を男に進められても思つていたレオだつたが、暫く見ているうちにある事を思いついた。

「あの、このリボン」れぐらいの長さに切って、フックで留めて輪になる様にして貰えますか」

定員は腕より少々太いその輪に首を傾けつつも、「解りました」と言つてリボンを持つて作業場へ消えていった。

眩しい光に目を覚ますと、真上に上った太陽が枕元を明るく照らしていた。

一日連續で昼に起きた自分に呆れつつ、泣き疲れて氣だるい身体を横に向ける。

寝ぼけ眼でベッドから部屋を見渡すと、昨日の光景が思い起こされた。

自分の醜態から目を背けるように、相手の事を考える。

未だ彼を信じられる訳ではなかつたが、あれだけの事があつたのだ、これまでのよう無視し続ける訳にもいかない。

それに、彼が最後に言つた「おやすみ」という言葉は、どこか優しかつた父に似て、と思つてしまつた瞬間、鳥肌が立つた。

(私は、あれだけの覚悟をしてたのに、自分の力が及ばないと解つた途端、あんな奴をお姉ちゃんの変わりにして縋りつとしたの……?)

吐き氣を堪えるように毛布の中で丸くなつたりサは、拳を握つて

不快感が過ぎ去るのを待つた。

暫くそのまま蹲つていたが、落ち着いたのでベッドを出て立ち上がる。

毎まで寝ていたので流石に空腹だ。黙っていても腹は膨れないので、銀貨を持って部屋を出ることにした。

宿に戻つて早朝には居なかつたカウンターの女将に声を掛ける。

「すいません、宿泊の延長をしたいんですが

「アンタか。ウチは別に構わないけど、アンタ駆け出しの癖に宿暮らしで金持つか?」

「正直キツイですが、今の彼女を連れたまま雑魚寝の宿に泊まる訳にも行かないですね……」

リサの境遇を考えれば、冒険者ばかりの安宿は問題を起こすしろ巻き込まれるにしろ、厄介な事になるのは目に見えている。

それに収納袋の中身を考えれば、雑魚寝は不味い。盗まれる覚悟でそんな事をするくらいなら、中の金塊をもづ一つ売った方がマシだ。

「ま、あの娘は頼りないって言つた……ほつとけない感じがするからね」

それに同意するようにうんうんと頷いていたレオだが、「アンタもだけど」と付け加えられて固まつた。

部屋を田指す途中、リサが昼食を取っているのが目に付いた。ついでなので軽食を頼んで対面に座ると、リサが田に見えて食べる速度を上げた。

それに苦笑しつつ、一ひと数日でかなり不遇慣れしたレオは気にせずにはいられない。

「今日は良く眠れた?」

リサは何か言いそうになつて途中で止めたが、顔色は良さそうなのでよしとする。

「今日はギルドでバルドっていうドワーフに会つてね、彼には刀を研いで貰つただけなんだけど、帰りに良い物を見つけたから買ってきたんだ」

そう言ってレースの輪を取り出した。

彼女が不思議そうに見ていると、フックを外して帯にした状態で手渡す。

「首輪の上から着けてみたらどうかと思ってね。そのままじゃ外に出にくいだろうし。試しに着けてみて、大きすぎたら調整してもらうし、苦しかつたら買い直すから」

リサは緩慢な動きでそれを受け取ると、奴隸の首輪の上にレースの輪を巻いた。

特に苦しそうでも無くズレそうでもない。そして青と白のみのリサの格好に、赤のレースはアクセントとしてとてもよく似合っていた。

た。

「よし、大丈夫そうだね」

満足げに頷くレオに、田を逸らしたまま無表情を貫くりサだつたが、やがて諦めたように溜息をついた。

「……どうも」

そう言って食器を持つと、席を立つて足早に食堂を後にした。感謝の気持ちが欠片も感じられない礼だつたが、今のレオにはもう特に気にならなかつた。

部屋に戻つて収納袋を取り出し、中から金塊を出してテーブルの上に置く。

午前中にバルドの工房に行つた時、物を作つて売れば良いのではないかと思つたのだ。

幸い金やオリハルコンがある程度ある。後はゲームでのスキル通りの加工を出来るかどうかだ。

「ええと……金の腕輪は確か……」

必死に作つた時の光景を思い起こすと、魔法を使った時のような感覚が起こり、少しずつ金塊が浮き上がって、高温に熱せられて赤い液体状になつて行つた。

その様子に興奮しつつ、腕輪の形状を完全に思い出す為に田を瞑つて集中する。

「確かにDNAみたいなに模様が入っていて、内側は角をつけずに滑らかで……」

と、なにやら焦げ臭い匂いがして目を開けた。

腕輪のイメージの余りの金が、零れてテーブルを焦がしていた。

慌てたレオは腕輪のイメージを崩してしまい、腕輪の分の金もテーブルに落ちる。

ここまで来ると炎が上がり、テーブルが燃え始めた。

パニックになつたレオは、慌てて立ち上がり後ずさるが火の勢いは衰えない。

部屋に煙が充満し、更にパニックになつたレオは、テーブルに水の攻撃魔法を放つた。

最低レベルの魔法と言えども流石に攻撃魔法、火を消したまでは良かつたが、それに留まらずにテーブルを粉碎して床を水浸しにした。

血の気が引いたレオは、何とか誤魔化そうとテーブルの破片を持つて部屋をウロウロと歩き回るが、やがて部屋の扉が開く……

ゆづくじと首を曲げてその先を見ると、満面の笑みを浮か

べた女将が、右手でフライパンを弄んでいた。

……

女将にこいつてつと絞られたレオは、テーブルを弁償し、肩を落として宿から出るところだった。

そこで、田の前にアルザドが居る事に気がつく。

「おお、やはっここの宿に泊まつていましたか。昨日から何度もこの辺りに来ていたのですが、見つかってよかったです」

「ああーすみません、そう言えば貴族の事を頼んだのに落ち合ひの場所を言つてなかつたですね……」

修羅と化した女将に絞られた直後のレオが、必要以上に猛省するのを、アルザダが手を振つて遮つた。

「いえいえ、私もある時は洋服店の事を伝えて、もつ大丈夫だろうと安心していましたから。本来なら宿も紹介すべき所でしたし」

取り合えず座りませんか。と言うアルザダの提案を受け、宿の酒場兼食堂に2人で入り、軽い酒を頼んだ。

席に着くと、アルザダが金貨の入つた袋を渡してきた。

「レッドワイバーンの素材の代金です。それと、言ひ忘れていた事が一つあります」

「なんでしょう」

「滅多に無いとは思いますが、念の為。奴隸の首輪の発動条件ですが、主人が『束縛の首輪よ力を放て』と言つのが呪いを発するキーワードなので、気をつけてください」

言われてみれば、間違えて言つてしまふ事もあるかもしかつた。

「なるほど、気をつけます」

「それと貴族の件ですが、難しいかもしません。レオさんは、この街が商業が盛んな街だと言つ事は知っていますか」

「街の名前からそうじゃないかとは思つてましたけど」

「ここは国境の街なので物流が多く、現れるモンスターもドリューク村方面以外は弱いものばかりなので商売が盛んなのです。それにょつて成功した商人が多く居ます」

アルザダが「こ」で一旦話を区切つたので、理解した意味を込めて頷く。

「こ」の地の貴族も税でそれなりに潤つてはいるのですが、國同士の条約で税にも上限があり、貴族より商人の方が資産を持つている場合が多いのです。

問題は貴族が、地位が下のはずの商人達が自分達より裕福な生活をしている事へ不満が根強い事で、その為、貴族には金銭に関してかなり汚い者が多くいます」

「つまり、この街で貴族相手に頼み」とをするのには、とにかく金が掛かる。と言つ事ですか」

「ええ、しかも聞いた話によると、昔同じよつに奴隸を解放しようとした商人が、前金を3回払つた挙句に反故にされ、文句を言いに行つたらそもそもその行為自体が違法だと、捕まえられてしまった事もあつたそうです」

元々それを承知で取引したはずなのに、貴族の方は仲間と結託しており何の罰も受けなかつたと言つ。

「良心的な方も居るには居ますが、周りの目が怖くて助けてやる事はできないと言されました」

「これはつまり、この街では奴隸解放は困難だと言つ事だ。ある程度ギルドでランクを上げたら、他の街に移つた方がいいかもしけれない。

「解りました。調べてくれて有難う御座います」

「いえいえ、恩人の頼みと言つのもありますし、私も共に窮地を脱したあの娘を何とかしてあげたいですから」

「後は、何処に移動するかが問題か……」

「それについては私の方でも考えておきましょ。私は良く西門から3軒目の問屋に居るので、用があれば来て下さい」

会話の合間にちびちびと飲んでいた酒が空になつたのを合図に、

アルザダが立ち上がった。

レオも立ち上がり一度礼を言つて握手する。

「そうそう。それと、ギルの奴が探していましたよ。ギルドの隣の酒場に居ると思いますから、行ってみてはどうでしょうか？」

時刻はもう直ぐ夕暮れになるかと言つところだ。酒場に行くには丁度いい時間帯かもしない。

「あー、そうですね、今から行つてみます」

宿を出た後、冒険者ギルドの方へ向かつていると、露天で首を傾げて商品を見るリサの姿を見つけた。

一般の市民のようにのんびりと買い物をする少女を見て、レオは満足げに微笑んだ。

酒場に入るとギルが手を振つて来た。

「いらっしゃも振り返して席に行くと、隣に女性が座つてゐるのに気付く。

筋骨隆々のギルの隣に居ると華奢なように見えるが、鎧の隙間から覗く腕には筋肉が見えていた。

「ようやく来てくれたか、座つてくれ。いらっしゃはレオスさん、新人だが、腕は確かなエルフだ」

「ようしぐ

握手しようと手を出すと、その手を全力で握られる。

レオが何とかそれを押さえると、彼女は上機嫌に自己紹介を始めた。

「おっホントだ、なかなか根性あるね。アタシはゲオルグ、自由奔放が心情の冒険者さ。男の名前だけど、厄介事を避ける為の偽名だからまあ気にしないで」

この人がゲオルグかと何処か納得したようにしみじみ思っていると、ゲオルグが眉を顰めた。

それを見てやれやれと首を振りつつ、ギルが口を挟んだ。

「どうかでお前の噂を聞いて、自由奔放って所に疑問を持ったんだろ。ウルフ討伐の強制召集蹴つてAランクからBに特例で落とされた冒険者なんて、お前くらいのもんだ」

呆れたようなギルの口調と、納得したようなレオの仕草が気に食わなかつたのか、ゲオルグはそっぽを向いて酒を煽つた。

その姿に苦笑しつつレオが席に着くと、横においてあつた予備の酒を薦めつつギルが聞いてきた。

「それで、例の嬢ちゃんはどうなつた、目処はついたか

「やっぱそう簡単には行かないわ、この街では駄目だりつてや」

渋い顔をして酒を飲むレオに、ギルも難しい顔をして「そつか…」と呟いた。

「なになに、何の話？」

こじけても誰も反応しないので諦めたのか、ゲオルグが話しに加

わってきた。

「奴隸の女の子を助けようつて話なんだけど、上手く行かなくてね……」

「あー、なるほどねえ。ホンツトにこの貴族つて頭固いしケチだし最低だよね、あいつらがもうちょい聞き分けがあつたらアタシのラブだつて」

「もうお前だまつてろや」

ギルの鋭い突っ込みにゲオルグは再び機嫌を悪くし、舌打ちしながら目を逸らした。

彼はそんな相方の仕草を無視し、レオに向き直る。

「まあ、街を移動するのが決まつたら声を掛けてくれ。古参の俺達の方が他国への護衛の依頼やら、配達の依頼やらは耳に入つてくる」

「その時は頼むよ」

そんな男2人の気の合ひ会話が氣に食わなかつたのか、ハブられたゲオルグが嫌味を言つてきた。

「しかしまあ、女の子1人の為に逃避行とは、ビニぞの騎士様じゃあるまいし」

「お前そういう言い方はねえだろ……」

流石に不味いと思ったのかギルが止めに入ったが、レオは苦笑して手を振つた。

「別に愛の為にとかそんなんじゃないよ。俺は俺の理由で彼女を助けるし、彼女は単純に生きよつとしてるだけだ」

この返事にはさすがのゲオルグも田を見張った。ギルは面白そうに笑っている。

だが、暫くしてゲオルグはその顔を獰猛な笑みに変え、レオを見定めた。

「なかなか面白そうじゃん、そん時はアタシも連れてってよ。これでもアタシは実力はアランク、足手まといにはならない筈さ」

その提案には正直面食らつたが、「まあ予定が合えば」と曖昧な返事を返した。

だがそれがいけなかつたのか、ゲオルグは勢い良く立ち上がり、握り拳を掲げた。

「よしつ、途中の依頼を蹴つてでも絶対付いてくからね。黙つて行つたら承知しないよ！」

その様子を呆気に取られて見ているレオに、ギルが溜息混じりに補足した。

「残念だつたなレオ、こりやもつ決まりだ。こうなつたコイツは振り払うより放置した方が楽だ。俺も着いてつてやるから、まあ何とかなるだろ」

なにおーと喧嘩する2人を眺めながら、こいつらと旅したら楽し
そุดだとレオは思った。

それから空が暗くなるまで仲良く飲んで、宿に戻る事にした。

「透身」と「無心」を使って安全に女将の居るロビーを抜けて、部屋の前まで行くと、入り口でリサに会った。

「リサ、さつき買いたい物してたみたいだけビ……」

途中まで言つた所で、鼻を押さえて顔を顰めるリサの真意を察し、

「あ、おやすみなさい……」

とだけ言つて部屋へ入つた。

昨日の夜との状況の差に、毛布を被つて「どうしてこうなった…」と、反省したのは言つまでも無い。

一人の冒険者（後書き）

「、こんなにアクセスが増えたからって、（リサがレオを）好きになつたりしないんだからねつ、カン違いしないでよねつ！」

作中にラヴが足りないので後書きでシンデレしてみました。

どうも、作者です。

急増したアクセスのお陰で昨日は一日パークつてました。
修正もちょろちょろ行つたのですが、まだ色々と不備があると思うので、気になるところがあつたら感想等お願いしたいです。

つていうか、こんなに期待してもらつたのに説明 + 登場人物紹介パートですみません……何分始めたばかりで、色々と不足しているので……

PS 前話のイージスの性能変更しました。

パニクつてた名残のせいか読み返してみると誤字ばかり……修正しました。o_r_n

人型の魔物（上）（前書き）

人型の魔物（上）

昨日初めて飲んだ酒が効いたのか、起きたのは既に口が6割ほど上っていた頃だった。

カラカラの喉を潤す為に食堂に行こうと思いつが、軽い一日酔いのままでリサに会うのが嫌で、廊下やロビーをそれと無く確認しながら移動する。

水を貰い、スープを頼んで席で突っ伏していると、女将がやって来た。

「部屋をボロボロにして飲んで帰つてくるとは、いい身分だねえ、ちょっと教育が足りなかつたかな」

女将の声が耳に入った途端、弾かれたように起き上がりゴクリと喉を鳴らすと、必死の弁明を試みた。

「い、いやあ仕方なかつたんですよ。冒険者の先輩に進められて…」

…

「はいはい、やましい思いがあるまま酒飲んだ冒険者は大抵そう言うんだよ。次からはもっとマシな言い訳を考えな」

対面に座った女将は、呆れたように手を振る。

遺る瀬無い感情に包まれながらも、再度怒られる流れでは無いようなので溜息をついた。

「それはそうと、あの娘何時まであのままにして置くつもりだい」

急に真剣な表情になつた女将が、レオの目を見て聞いてきた。「人で居る事の多いリサの事だろ。」

確かに首輪の問題は解決し、多少は外に出れるよつになつたが、この街は近いうちに出て行かねばならない。友人を作れとも言えないし、かと言つてレオも彼女ばかりに構つては居られない。

ここに留まるなら良いが、不信感が強いままのリサを連れて旅に出るのは、不安があるのも事実だ。

「何とかしてあげたいのは山々なんですけど、現状俺ができる事全てやつてこの状態なので……」

「不甲斐ないねえ、まあ私から見てもあの娘は取つ付きにくいけど。何だつたらアタシが少し話してやろうか」

さり気なく頼んでくるかのような口調を不思議に思つたが、少し考えるとレオに配慮しての事だと解つた。

恐らくもつと早くリサと話したかったが、所有者であるレオの性格が不明だったので、余計な事を言わないと遠慮していたのだろ。う。

「是非、お願いします。冒険者の、特に男には強い抵抗があるので、出来ればそこは気を利かせてあげて下さい」

自分で言つて少し悲しくなつたが、現状は認めるしかない。

女将は何処かホツとしたように息をつくと、いつもの笑顔に戻つて続けた。

「アンタならそう言つと思つてたよ。さて、スープも出来たようだ、水ももう一杯飲むかい」

「3杯程まとめてお願ひします……」

あいよ。と言つて苦笑すると、女将は食堂のカウンターへ向かう。リサの事は女将に頼めるようなので、昼には戻れないかも知れないが一度ギルドに行って依頼を受ける事にした。

ギルドに行つてファイルに挨拶すると、「ちょっと待つてください」と言われた。

暫くそのまま待つていると、鎖のついた赤色の水晶のよつなものを持つてきて、にこりと微笑む。

「おめでとう御座います、ランクアップです。魔晶石の色を移すので、ロケットを出してください」

ロケットと魔晶石を重ねると、ロケットが赤く光った。

恐らく衛兵がロケットを確認していたのは、識別とランクを確認する為だったのだろう。

「これで完了です。それと、昨日の戦績を見て、ギルド長の判断で条件付で更にランクアップできる事になりました」

「本当ですか、ちなみに条件と言つのは

「レオさんは今まで、ギルド近くの東門から出していましたよね」

その通りだつたので頷く。

「Eに上がる為には、西門から出た先にある森で、ゴブリンとホブゴブリンを倒してもらわないといけません。知能も低いし強さはウルフと同等らしいですが、一応規則なので」

その話は正直気が進まなかつた。

実を言えば、人型のモンスターには今まで出会つていない。恐らく東門の先には居ないだろう。

正直ホッとしていたのだが、旅先でそれらに襲われるならば、それを殺せる事も必要な要素の一つだ。冒険者の前提条件だと言われてもおかしくは無い。

「解りました、行つてきます。因みに数はどの位ですか？」

「形だけの条件なので、ゴブリン5、ホブゴブリン1でいいそうです。余り奥に行くと彼らの集落が有りますから、行き過ぎないようにして下さい」

そう言つて手渡された紙を受け取り、レオは内容を確認して懐に仕舞う。

敵の特徴　特にゴブリンとホブゴブリンの差　　を聞いてお礼を言つと、ギルドを後にした。

ギルドの外に出て空を見ると、太陽はまだ昇りきつていなかつた。急げば正午には戻れるかもしれない。

西門から外へでて、1時間ほど歩いた所にある街道脇の森へと向かつた。

少しするとゴブリンが8体現れた。グラビティワールドでも狼男のような魔物はいたが、醜悪な子供のようなゴブリンを斬るのは中々に覚悟が要つた。

一瞬氣絶させて耳だけ取ろうかと思ったが、ランクアップが掛かっているのだ、下手な事はできない。

叫び声を上げて倒れるゴブリンに顔を齧めつつ、一度5匹倒した所で他の3匹は逃げ出した。

「しかし、それにしても……」

他の冒険者からするとウルフと同じらしいが、何やら戦いにくさ以外にも手こずった気がした。

ウルフの時と比べれば消極的だつたが、それでも必要な事だと言い聞かせ、暫くゴブリンを斬つて歩く。

少し体が大きめで、赤い肌の色が濃いホブゴブリンを見つけて倒す頃には多少は戦いなれていたが、妙な違和感は残つたままだつた。

結局西門に戻つた頃には正午を過ぎてしまい、リサの様子を見るのは諦めて、ギルドに行こうとした矢先、近くの問屋前でアルザダとギルが話をしているのを見つけた。
声を掛けてみると、丁度行き先の事を話していたようだ。

「公国の近場は駄目そうだし、ナルバ共和国に行つたほうが良いかも知れませんね」

公国というのは、ここダール興商自治区を含むガサン公国だ。
ダールは公国と共和国の国境なので、外国だが、近場と言える。

国外に行くと言つのは面倒じゃないかと思つたが、アルザダの話では商人護衛として行けばそうでもないらしい。

「ナルバ共和国に行けば可能性が有るんですか

「あの国は奴隸制度発祥の地です。その為かなりの数の奴隸が居ますが、全体的にはここより待遇は良いのです。スタンプ持ちもこの国より多いですから、行ってみる価値はあるかと」

レオが興味を持ったように考え込むと、ギルが口を挟んだ。

「俺は、あそこの貴族はあまり信用できないと思つんだが。まあ、ここよりはマシか」

「何か問題でも？」

「人によるが冒険者を舐めてやがる。騎士団が強いという自負からだろうが……アルザダが交渉すれば、大丈夫かもしけんけどな」

アルザダの方を見ると、「勿論同行しますよ」と言つた。レオが少し困ったような顔をすると、笑つて手を振る。

「ドリューケから持つてきた鉱物の残りも、新しく仕入れた物もありますから、赤字にはなりません」

「そうですか、なら数日後にでも発ちましょ。俺も今からギルドに行ってランクアップの試験をしてくるので」

「解りました、詳しい話は2日後にギルド隣の酒場で落ち合つて詰めましょう」

そう言つと、アルザードはお辞儀をして問屋の中に入つていく。彼を見送り、ギルドに向かおうとするといふと、ギルに声を掛けられた。

「そりいや、ランクアップするつて、今のランクは幾つなんだ」

「Fだよ、特例ですぐ上げてもうえる事になつたから、もうすぐEかな」

「まてまてFって……ってそいつか、今までギルドに入つてなかつたのか。よし、俺もついて行こう。Fのランクアップなら俺が居た方がいいはずだ」

「やにやと笑いながら着いて来る、突っ込み担当だったハズのギルに首をかしげながら、今度こそ冒険者ギルドへ向かつた。

食堂の椅子に座つて外を眺めていると、不意に女将が向かいの席に座つた。

「どうした、何か考え方かい」

彼女は少し額に浮かぶ汗を拭きつつ、笑いかけてくれた。身体を拭くのを手伝つてもらった時から、女将は良くりサを気遣つて声をかけてくれる。

「いえ、別に……」

「なんだいなんだい、仕事が珍しく早く片付いたんだ。ちょっとくらいい話し相手になってくれても良いじゃないか」「

そう言つて、じつと見つめてくる女将を見るのが気まずくて、俯いてしまつ。

「はい……」

言いにくい事だったので、ついつつかえてしまうが、女将は黙つて待つてくれた。

暫くして何とか言葉を紡ぎだす。

「私は、ずっとお姉ちゃんに護られていました。お姉ちゃんが死んで、彼に買われて、必死に抵抗するつもりだったけど、今思えば自分之力で状況を何とかしようなんて、今まで一度も考えてこなかつた」

俯いているのも気まずくなつたので、顔を上げて外の喧騒を見る。

「でも、昨日外にでて街を見て周つたら、急に懐かしい気分になつて……あの頃に戻りたいと思つたんです」

あの頃、まだ故郷に居た頃。自分と母と姉の3人で、父が仕入れを行つてゐる間、良く買い物に出かけていた。

今は自分一人しか居ないけれど、活気のある街はどこか暖かくて、懐かしい気持ちになつた。

「だけど今の私には、何にも出来る事がない……」

遠い目で外を見るリサに、女将は言つ。

「あの男を手伝つてやれば良いじゃないか。アイツが悪い奴じゃないって事くらい、リサだつて解つてるだろ。アイツの言つてる事が本當なら、手伝えば手伝つた分だけ、リサが自由になるまでの時間は短くなると思うよ」

「でも……」

言い淀んでしまつリサに、呆れたように女将が続ける。

「嫌だと思つたら止めればいいんだ、そんなに難しく考えなくともいいわ」

「けど、私はまだ信じられなくて」

「別に信じなくつて良いだろ。アイツが襲つてきたらタマでも蹴つて『貴方は最低のクズです』とか言えれば、アイツの事だ、泣きながら逃げていいくに違いないさ」

その様子が何となく頭に浮かんだリサは、クスリと小さく笑つてしまつ。

それを見て満足した女将は、「わい」と言つて立ち上がつた。

「そりそろ仕事に戻るか。元氣出たなら、また街でも歩いてきな

「はい」

女将に笑いかけたりサは、立ち上がつて宿を出て行く。

それを横目に見た女将は、鼻歌交じりにロビーに歩いていった。

ギルドについて皮袋と依頼証を取り出し、ファイルに預けた。ファイルはそれを確認して別な書類に何か記入すると、カウンターに銀貨を置く。

「確認しました。少し待ってくださいね、今　」

「ああ、ファイルちゃん、模擬戦の相手なら俺がやるぞ」

突然割つて入ったギルに、ファイルは驚いたような目を向けた。

「え、でもCの中でも上位のギルさんが相手だと……その……」

「大丈夫、下手な事はしないさ」

「ならないんですけど……ちゃんと手加減してくださいね」

その言葉にギルは苦笑してレオを見る。

そういうえば戦闘訓練みたいなものって言ってたなあ。などと考えていたレオは、それに気付いて視線を合わせた。

「手加減なんて要らねえよな、レオ」

「ん、ああ。良いんじゃないかな?」

その様子に、呆れたように「怪我しても知りませんよ」と呟き、
フィルはギルドの奥へ向かつた。

ギルドの裏手にある小さな訓練場は、夕方や夜には眞面目な冒険
者が詰めているが、昼間は皆出歩いていて人は居なかつた。

フィルとギルド長だという老人の監督の下、木製の得物を持った
2人の男が開始の合図を待つてゐる。

「それでは、始めッ」

老人の合図により、2人はゆっくりと距離を詰めた。

2人は軽く剣を合わせ、お互いの力量を測る。

ナイフの形の木刀は、刀に慣れたレオには少々扱いにくく、力で
ねじ伏せるタイプのギルの剣は流すので精一杯だつた。

それでも上手く使って牽制を加えつつ、時には身を翻して予想外
の行動を取るレオの動きは、対応が難しく、ギルも攻めあぐねてい
た。

先に息が上がってきたギルが勝負を仕掛ける。

低い姿勢から繰り出された足払いを、レオが宙を舞つてかわした。

レオが空中から首めがけて木刀を振るうが、ギリギリで避け、着地点に向けて強引に剣を振るう。

「グツ」

2本の木刀を何とかあわせ、後ろに飛んで威力を軽減する。

距離が開いた隙にギルは剣を持ち直し、完全に体制の整つていないレオに向けて大きく振りかぶった。

しかし、レオが前傾姿勢になりかけるのを見て、慌てて剣を振ろうとする。

直後に姿勢を戻したレオに、ギルもフェイントだと気付いたが時既に遅く、次の瞬間に止めかけた剣と首に向けて、尋常ではない速度で体重と勢いが乗った木刀が襲い掛かる。

「まいった」

首に添えられた木刀を見て、ギルは少し残念そうに呟いた。

「さすがだ、やつぱり駄目だったなあ」

「それでもないさ、着地の一撃はかなり危なかった。対人戦はあまり慣れてないから、本気でやつたけど思うように行かなかつたよ」

グラビティワールド での対人戦とは、プレイヤーキラーとの

戦いの事だ。

確かに一時期狙われていたが、基本的にはモンスターと戦うゲームなので、全体から見れば極僅かだ。

「そういうや、確かにフロイントは一回しか使ってねえな」

「うへ、後でその辺ちょっと教えてくれると助かる」

恐らく、ゴブリンに妙に苦戦したのはその辺りが理由だろう。知能がある相手と戦いなれないのだ。

その当たり前のような二人の様子を呆然と眺めていたフィルとギルド長は、一度互いに顔を見合わせてしまつ。

「腕は立つだろ?とは思つてましたが、ここまでは……」

「こっそりにしてしまつか……？」

呆然と呟くギルド長に、慌ててレオが止めに入った。

「ま、待つて下さ!。ただでさえ特例2回で田立つんですから、これ以上されたら悪田立つしちぎます。取り合えずはEでいいですよ」

本来名を売つて貴族に繋がりを持つつもりだったが、こここの貴族が駄目だとわかつた以上、あまり田立ちたくはない。

せつかくの提案を断られたギルド長は少々顔を顰めたが、一理あると思ったのか、諦めてフィルと共にギルドへ戻つていった。

ランクアップの作業を終えて、ロケットの光を赤から黄色に変え

たレオは3時間ほどギルと訓練をした。

日が傾きかけて来たので訓練を終えて、ギルドを出る。

「どうだ、汗も流したし、今日も付き合っていいかないか」

酒を飲む仕草をして誘つてくるギルに、レオは困ったように視線を背けた。

「昨日あの後けよつとな……今朝一日酔いもしたし、今日は止めとくよ」

今日も飲んで帰つたりしたら、明日の朝フライパンを持った女将に出会う事になるかもしれない。

残念そうに「そうか」と言って酒場に入るギルの向こうで、トランプのような物で遊んでいる男達がみえた。

「あれは……」

「ん、トランプがそんなに珍しいか？確かにちよつと高くて、持つてる奴はそつ多い訳じゃないが」

トランプの存在に興奮したレオは、売つている店を聞いて後で買つていこうと心に決めた。

幾らここが現実だと認めたとは言え、望郷の念が消えた訳ではない。

元の世界の遊びに再会できると興奮しているレオに、呆れたようにギルが声をかける。

「そんなに喜ぶ事かあ？トランプなんて、結構一般的な……」

と、そこまで言つて何か思い出したのか、ギルが入りかけた酒場から戻ってきた。

「そういうや、前に一般生活用の魔法覚えるって言つてたが、もう覚えたのか？」

「あ」

折角教えてもらっていたのに、冒険者ギルドに入った時の興奮から、すっかりその事を忘れていた。

間抜けな声を上げたレオに苦笑しつつ、ギルが一緒に冒険者ギルドへ戻るよう促した。

「生活用の魔法ですか？」

受け答えたフィルが、考るよつに首をかしげた。

「ええ、魔法は使えるので、覚えられると思つんですよ。有れば便利なものも結構あると聞くし、覚えておこうかと」

「因みにどんな物を？」

「洗濯とか、綺麗な水を作るとか、お湯を沸かすのとか有ると聞いたんで、良かつたらそういうの教えて欲しいです」

「それ位なら、魔術師を探すまでも無いですね。実は私も多少魔力があるので、訓練所で教えてあげますよ」

訓練所に行つて待つていると、フィルが桶を持ってやって來た。

「それでは、まずはちょっと見ていてくださいね」

やう言つてファイルは桶を置き、その上で指を下に向けると、「靈
よ」と呟く。

指先から水道を捻った時のように水が出て、暫くすると桶が一杯になつた。

「こんな感じですね。使う魔力も少ないので呪文も簡潔です」

その後「回れ」と言つと、今度は桶の中の水が回りだす。
それが止まると立ち上がり、「どうぞ」と水の入った桶を指した。

レオは少し緊張しながら桶の前に立つ。周りではファイルと、何故かついてきたギルが様子を見ている。

「回れ」

さつきの光景を思い出しながらレオがそう言つと、とてつもない勢いで水が回つて周囲に飛び散つた。

「　　」

「　　」

ずぶ濡れになつた3人は暫し無言になつたが、ファイルが場をとりなすように声をあげる。

「　　ええと、水、無くなつちゃいましたし、次は水を出す魔
法をしてみますか」

何となく先の予想がついたのか、レオが指を桶に向けると、ギルは慌てたように数歩身を引いた。

「靈よ

すると、お世辞にも靈とは呼べない量の水が一気に溢れ出し、水鉄砲となって発射されて桶が地面を滑つていった。

流石のフィルも、これには困ったと頭を抱えた。口元を隠して震えているギルは、笑つていてる訳では無いと信じたい。

「えっと、レオさんは手加減という言葉を知っていますか?」

「ハイ

そうですかー知ってるんですかー。と再度頭を抱えるフィルに、レオは目を瞑つて肩を落とした。

落ち込んでいるレオを何とか励まそうと、フィルがフォローを入れる。

「ま、まあ皮袋を買つたお店に行けば、金属製の水筒もある筈ですよ。それじゃ、次は……お湯を……」

そこまで言ってフィルは自分の体を見た。

さつもの『水』で、ずぶ濡れになつている。

隣のギルを見ると、彼も同じ事を考えていたようで、2人は視線を合わせて背中に伝う冷や汗を感じた。

「さよ、今日はここまでにしましょう。私もそろそろ、ギルドに戻

らないといけないし…」

「あ、ああ、俺もそりや、ゲオルグと飲む約束があつたんだ」

「いやひ、ちよひ……」

片手を上げて引き止めようとするレオから逃げるよひに、2人は訓練所から消えていった。

部屋に戻つて忍び装束から服に着替えていると、誰かが扉をノックしてきた。

「ちよひと待つて……じうぞ」

てつくり女将かと思つたのだが、扉を開けて一ひらを見ているのはリサだった。

「へ、リサ？ あ、じうぞ入つて」

悩むように逡巡しているリサに声をかけ、部屋に招き入れる。椅子にリサを座らせ、レオは少し離れて立つ。

テーブル脇の椅子は、昨日巻き込まれて1つ壊れてしまつたため、修理中で1つしかなかつた。

「それで、何か用かな」

「……」

中々言い出せないリサにえもいわれぬ焦りを感じたレオは、何の話か考えた。

街中を歩いているよつなので、買い物の相談かと思つ。

「あ、なにが必要なものがあるな?……」

「違うんです」

否定したあと、また暫く黙り込む。

首を傾げたレオに、意を決した様子でリサが話し出した。

「……次から私も、街の外に行く時に連れて行って欲しいんです」

「外へ連れてつてくれって、依頼に……?」

これにはレオも戸惑つてしまつ。

依頼を手伝つと言つ事は、冒険者の同業になると言つ事だ。彼女の心情を察すれば、少々急すぎる変化に思えた。

「無理はしなくて良いんだよ。信じられないかも知れないけど、俺も結構強いし……」

リサに見られた痴態の数々を思い浮かべ、後半は声が小さくなつてしまつた。

しかし、リサは真剣な表情でレオの手を見つめ、「冗談では無いと訴えかけている。

暫く見ていても表情を変えないリサの真意を察し、レオも真面目に答える事にした。

「解つた、正直リサが居ると色々と助かる。これから宜しく頼むよ

リサはそれを聞いて何処かホッとしたように肩の力を抜き、一度立ち上がりてレオの方を向く。

そして奴隸商人に仕込まれた通りの挨拶をした。

「ようしきお願いします。レオ様」

それを聞いたレオは笑つて軽く頭を振り、「様なんて着けなくていいよ」と、言

おうとしたのだが、そこは流石にレオも男。頭を振るまでは実行出来たのだが、そこまでで止まってしまった。

れ、れれれおさま？レオ様あ！？い、いや駄目だ、俺はリサを奴隸から解放しようとしているんだから……でももう一回くらいなら……

…

ハツハツハツと笑いながら暫し壊れた人形のように頭を振り続けるレオを、リサが不審に思い始めた頃、ようやく決断したレオが言葉を続けた。

「も、もういっ……ゲホゲホ。俺に様なんて着けなくていいぞ、別に俺は貴族でも何でもないんだし」

「も、もういっ……」と深呼吸をするレオに、不思議そうに「はあ」と曖昧に頷くと、挨拶をしなおした。

「よろしくお願ひします、レオさん」

うんうんと微妙な表情で頷くレオに、これで良かったのかなあと少し不安になるリサだった。

話が終わり、リサを部屋から出そうとした時、レオはいい事を思いついてリサを引きとめた。

「リサっ、ちょっと頼みたい事があるんだ」

突然真面目な顔で呼び止められたりサは、少々顔を強張らせると、レオが切羽詰つた声で頼み込む。

「魔法を教えて欲しいんだ……」

以前に強力な魔法を見せ付けられていたリサは、少々面食らうが、知りたいのは生活用の魔法だと言う事で納得した。

真面目な顔で頼み込まれた時は、一体何を頼まるのかと思つたが、簡単な事だったので安堵の溜息をつく……が、数分後、彼女は別な意味で溜息をつく事になつた。

師匠に教えてもらつた魔力制御の基礎を、2時間かけて説明した頃には、夕暮れになつていた。

それでもほんの少しづか弱まらなかつた水鉄砲に、リサは頭を抱える。

レオの方は生まれて初めて感じる体内の魔力に、とても上機嫌になっていた。

何でも頼んでいいよと言わされたので、リサは片っ端から高いものを頼んでやつた。

「あ、そりそり。食事が終ったらさよとトランプでもやるわ」

「どうんぶ?」

懐から出したトランプに、リサは小首をかしげる。

しかし料理が来たので一度仕舞い、食後に説明する事にした。

「食べたらやるわ、幸い報酬の銀貨が結構あるしポーカーでもしようか」

そうして食後にポーカーをしたのだが、最初の3戦程はルールが良く解らず、リサが連敗してしまった。

リサの顔がどんどん険しくなつて行ったが、4戦目にわざと1回負けると、ほんの少し嬉しそうにしていた。

その顔を見ただけで、トランプを買ってきました甲斐があつたなと思う。

例えその報酬として、リサに大銀貨を3枚払う事になつ

たとして
た。

いつもこう事つて、良く有りますよね。

え、何かつて？

連敗している初心者をかわいそうに思つて、わざと負けたら、本当にツキが逃げていつてその後連敗してしまつ事です。因みに作者はあります。ギャンブルつて難しいですね。

ようやく仲間が1人増えました。これからが本番なので気合を入れなおしています。

そろそろ説明も終わりです。近く、動き出す事になると想つのでご期待ください。

さあちょっとこの調子が悪い……大丈夫かな

人型の魔物（下）

朝、服のまま外へ出ようとすると、女将に呼び止められた。

「よつれオ、昨日は良い見世物だったよ」

痛いところを突かれたレオは、ぎこちなく振り返る。

「見てたって……仕事はどうしてたんですか」

「仕事なんて手につく訳無いだろ、3戦勝つた後のアンタの負けっぷりつて言つたら……ブツ」

昨日の光景が思い出されたのか、女将が噴出した。
その場に居るのが辛くなってきたレオが、振り返つて宿を出ようとしたのだが、何とか堪えてレオを呼び止めた。

「ああ、ちょっと待ちな。昨日はみんな面白がつて見てたからほつといたけど、ウチは博打は禁止だ。次やつたら引っ叩くから覚悟しな」

「はい……」

「ま、昨日で多少は懲りただろうがね。皆に力モだと思われたんだ、今日は早めに帰つてきな。ウチに居る限りは守つてやつから」

女将の優しさに、不遇慣れしたレオはついつい瞳を潤ませてしまった。

「あ、有難う御座います」

肩を竦めながら、さつさと行けと手を払って笑いかける女将にもう一度礼を言って、レオは宿を出た。

小太刀を持つてバルドの工房に行く前、ギルドの左向かいの店鉄製の水筒を買いに行つたが、鉄板が薄く、少々強度が不安だった。後で鍛冶師に会いに行くのだし、駄目元で強化を頼もうと思い、取り合えず買つていく。

バルドの工房兼店が見え始めた時、店からエルフが出て行くのが見えた。この街で始めて見るエルフに興味もあつたが、工房に用もあるし、道の反対側に行つたので諦める事にした。

レオが店の中に入ると、奥の工房からそれを見つけたバルドが「待っていたぞ」と、声を上げた。

「良く来てくれた、座つて話そ。工房に来てくれ」

中に入り、椅子に座つてポケットから刀を取り出した。

それを見て目を輝かせたバルドは、慎重に受け取つて刀身を見た。
「それは回避……というか、攻撃に対する対応速度を上げる魔法がかかっている……はずです」

「ほう、それはまた便利な……」

奮め回すように全方向から刀を見るバルドに苦笑しつつ、來国俊も取り出す。

「言われた通り手入れしてみました。それと今回は他にも一つお願いがあるんですが」

持っていた刀を置き、先に來国俊を確認し始めた。
前回余りにも酷い扱いを受けていたと知ったので、心配だつたようだ。

「ふむ……カタナの方は大丈夫なようだな。それで、頼みつてのは何だ」

「こ」の水筒の鉄板を補強して欲しいんですが……」

「んな事鍛冶ギルドに頼めよ つて、もしや旅に出るのか?」

腕を組んで聞いてくるバルドに、レオが頷く。

「ええ、数日後にナルバ共和国の方へ行きます」

「それならこのカタナを貸すのは不味いだろ、それに着いてく訳にもいかねえんだ。代償の研ぎだつてできん」

「刀は予備がまだ幾つかあるから、大丈夫です。それと、研ぎの代わりに水筒の強化と、ナルバ共和国に居る腕の良い鍛冶師を紹介して欲しいんですが」

確かにコイツは素人には……と、納得したように頷いたバルドは

取り合えず水筒を見せると言つてきた。

水筒は一般的な橢円状の物で、それを見たバルドは少々顔を顰めた。

「これは面倒だな、1から作つた方が楽だろつ。他に何か要望はあるか」

「それなら全体は薄く、口を大きくしてもえますか。水は自分で作れるんで、空にして常に持ち歩けるよつ」「元ツリみや

「解つた、明日……いや、明後日には仕上げよつ。半端なものは渡したくないしな」

お礼を言つて握手をすると、今日は多少暇があるのかお茶を持つてきた。

ドクダミ茶のような香りがする薬草茶で、レオは一口飲んで驚いた。

「随分と美味しい茶ですね。何処で買つたんです」

「ああ、いや、実はさつさつ来たエルフに貰つたんだ。気に入つたらアイツが前に持つってきたメモをやうづ。俺はそれを見ても薬草の見分けがつかなかつたが、お前さんなら解るだろつ」

そう言つてバルドは作業台の横にある机からメモを一冊持つてきだ。

軽く中を見ると、様々な薬草の効能や特徴が書かれていた。

「ありがとう、旅の途中で見かけたら集めてみようかな。ところでここにはエルフって結構来るんですか」

「おう、この街はドワーフの鍛冶屋は軒しかないからな、鎌やナイフなんか良く買いに来る」

ファンタジー系のネタでは、ドワーフとエルフは仲が悪いのが通常じゃないかと思ったのだが、ここでは違うようだ。レオが少し考えるようにしていると、バルドも思いついたような声を上げた。

「そう言えばお前さん、弓は使わないので、エルフは例外無く弓の名手だと聞いたが」

それを聞いたレオは小さく唸った。手裏剣や投げナイフのスキルはあったのだが、弓は現実でもゲームでも経験が無い。

ちょっと不味いだろうかと思いかけた時、バルドが慌てて付け加えた。

「ま、まあ……何事にも例外はつき物だよな」

気まずそうに田を逸らすバルドに、何とも言えない気持ちになりつつ、取り合えずは誤魔化せて良かつたと胸をなで下ろした。

工房で朝食をご馳走になつた後、バルドに貰つた紹介の手紙を持つて部屋に戻る頃には、気分は少し浮ついていた。
昨日リサが、これからは一緒に依頼をこなすと言つてくれたからだ。

忍び装束に着替えて収納袋を取り出し、部屋をノックすると中から返事が返ってくる。

「じゅる」

部屋に入つて挨拶をすると、早速今日の予定を問う。

「数日後にはここを発つから、旅の準備に服の注文をした後、ちよつと依頼を受けようつと想つんだ」

そう言つて収納袋を探るレオを、リサが制止した。

「あの、その前に一ついこですか

「ん?」

言いつつ収納袋を探り続けるレオを、呆れ混じりの困つたような声でリサが止める。

「あの鎧は、無いと思つたんです」

「えつ……」

リサの最もな指摘に、小心者で心配性なレオは眉をハの字にして、収納袋から顔を上げた。

白漫の装備が否定されて悲しいと言つのもある。

「で、でも危ないし……」

「それを言つなら、あれを着ていると、ござと言つ時に走れないです。それに、レオさんは足が早いので着ていいくだけでも大変でした

「『じめん……』

「それとまた門の衛兵さんに、事情を聞かれると思ひますよ」

「「うう……」

それでも何とかリサに鎧を着せようと食い下がるレオだったが、やがてリサの視線がどんどん冷めていくのを感じて、盾だけを持たせるに止めた。

あの後レオの持つロープを着せようかとも思つたが、元々長身のレオでもブカブカだつたロープをリサに着せても結果は見えているので、新しく買う事にした。

一応丈を合わせられないか洋服店で聞いてみたが、魔法が掛かっているので加工が難しく、時間が掛かると言つので今回は諦める。既製品の灰色のロープを着せ、レオの持つていた地味目の装飾の青い杖を持たせると、どう見ても魔術師なりサが出来上がった。服の寸法だけ測りなおして、ギルドを目指す。

「しかし、やっぱり胸鎧だけでも……」

「まだ言こますか」

リサの呆れたような声にしゅんとなるレオだが、通りの向こうからゲオルグの声がして驚いて顔を上げた。

「よひ、レオじゅねえか。おひ、そっちが前言つてた女の子か」

隣のギルも「よつ」とリサに手を上げる。

「ああ、彼女はリサ、ディアマンティ人の魔術師だ。少しあはギオルグとギル。Bランクの冒険者で、これから一緒に旅をする事になつてる」

レオが簡潔に仲介をすると、リサもおずおずと頭を下げた。それを見てギオルグは笑つて右手を差し出す。

「よろしくね、リサちゃん。アタシはギオルグ、訳あつて男の名前だけど、こう見えて正真正銘女だ」

女性と言つ所で多少警戒感が薄れたのか、リサも手を右手を出して握手をした。

「ま、正真正銘、意外にも。だけどな」

「何か言つたかい」

おどけた調子で言つたギルだが、ギオルグの鋭い眼光を前に「いや、別に……」と、視線を逸らした。

そんな2人の様子に、リサも楽しそうに少し笑うと、顔を戻して挨拶をする。

「よろしくお願ひします。ギオルグさん、ギルさん」

あつという間に仲良くなつた3人を見て、心を開き始めたリサに嬉しくなりつつ、これまでの苦労を考えると遺る瀬無さを感じてしまふレオだった。

話を聞くと、丁度旅費の準備に一稼ぎしようとしていた時、りしく一緒に行かないかという話になった。

「珍しくオーガ群れが出でるらしくてね、これから討伐に行くんだけど、レオ達も一緒にどうだ」

話によるとオーガと言つのは、人より少し大きめの、ゴブリンのような人型の魔物だそうだ。

少し強い部類に入る魔物らしいが、対人戦の訓練をしたかったレオには丁度良かつた。

「行つてみようかな。けど、エラソクでも受けれるものなのか？」

「単体ではそこまで強く無いからな。群れとなると別だが、俺達と一緒になら問題ないだろ？俺とレオでギルドに行つて受けてくるから、一人は先に行つてくれ」

「あいよ、女をあんまり待たせんなよ。リサちゃん、行こうか

「はい」

そうして男女に分かれて少し歩いた所で、何度も背後を確認したギルが小声で相談を持ちかけてきた。

「ちょっといいか、ゲオルグの事なんだが……」

「ん、どうした？」

その困ったような口調に、少々真剣な雰囲気で答える。

「アイツの性格は知ってるよな」

「ああ、悪い奴じゃないよな」

「そり、悪い奴じゃないんだが……アイツの頭の事情も知ってるよな」

何の話か大体察したレオも、一度背後を確認してから頷く。

「レオの実力の件なんだが、あまり知られたくないなら、街を出るまでも良いからアイツには秘密にして置いた方がいいぞ」

「そうか……」

正直今日立つて引き止められたりしたら面倒だ。ゲオルグには悪いが、ひとまず秘密にして置く事にした。

ギルドに行くと、フィルは昨日の2人の訓練を見ていたので、特に問題無いだろうとオーガ討伐の依頼証を渡してくれた。

西門の前で合流し、4人で森を目指す。

その途中、リサが前に渡した指輪をつけ続けてる事に気がついて、外すよう頼んだ。

「戦闘中には、何回か敵に狙われる事もあるだろ？」「その度に警報が鳴つたら皆驚くから、外しておいて」

「あ、すみません」

そう言つて指輪を外すリサを見て、ゲオルグはニヤニヤと笑つた。

「大仰な盾に警報つきとは……しかも、聞いた話じや全身鎧まで着せようとしてたみたいじゃない」

恐らく女性2人で待つていた時に話したのかもしれない。レオは勤めて聞こえないふりをして森を見たが、長い耳が真っ赤になつていてバレバレだった。

唯一の救いと言うか、残念なところは、リサが良く解らないと言う顔をしている事だろう。しかし、放つておけば気付かれそうだったので、慌てて話題を変えた。

「そ、そう言えればオーガは何匹くらいの群れなんだ？」

「ククッ……ああ、5~6くらいってフィルちゃんは言つてたな」

後ろでこつそり笑つていたギルが、助け舟を出した。
ゲオルグは、まだからかい足りない様子だったが、森の前に着いたので顔を引き締める。

「んじゃ、行くよ。レオはEランクだから、無理せず援護とリサの護衛。まあ、やれそだと思ったら自由にしな。リサは魔法でアタシ等の援護を」

「はい」

1番ランクの高いゲオルグの指示に頷き、4人は森へ入つていつた。

森に入つて2時間ほど雑魚を蹴散らして歩いた頃、ようやくオーガの群れを見つけた。

聞いた数より少々多く、10を少し越えるくらいだ。

まずゲオルグとギルが襲い掛かり、側面をレオが牽制する。

少し離れた敵にはリサが魔法で氷柱を飛ばし、4人が連携にな始めた頃。

左側面から、敵の増援が来た。

それを見たゲオルグは驚愕する。

「ジャイアント……」

見上げる程の巨人は、ジャイアントと呼ばれており、Bランク以上でも安全に倒すなら2人、それ以下なら4～5人は要るという化け物だ。

更にその外にオーガが数匹、ゲオルグの近くに現れた。

「不味い引けつ、アタシが

ギャイイイイイイイイ
……

は？」

自分が引きつけると言おうとしたゲオルグの前で、巨人の持つ斧の先端が3割程、切り取られて宙を舞つた。

ん、随分でかいなあのオーガ、リサの方に行きそつだし俺が相手するか。

ジャイアントを最初に見つけたレオは、特に気負い無くその巨人へ向かう。

あれだけ大きければ、動きも鈍いだろうと思つたからだ。

最初はジャイアントも雑魚を扱う気持ちでレオに斧を振った。レオの方も動きは遅いだろうと思っていた事もあり、意外と早いその斬撃に少々面食らい、刃を全て落とすつもりが、3割程しか斬れなかつた。

両者共に驚きで一瞬距離を取つたが、鉄の斧を呆氣無く斬られたジャイアントは、最も優先すべき敵としてレオを認識した。

襲い来る巨人に舌打ちしつつ応戦する。

敵の動きは想像以上に素早く、リーチの差もあって中々攻めに転じられない。

(つていうか、リアルでこんな相手に魔法禁止の縛りプレイをする事になるとはね……)

ゲオルグの前で魔法は使いたくなかったが、巨人は中々に強敵だった。

一方、巨人の方もレオが右手に持っている 天羽々斬り の威力を知つて、左側を攻める為に四苦八苦していた。

しかし経験の差か、やがて完璧なタイミングで巨人の斧がレオに迫る。

それを強引に左手の刀で受け流したレオは、転がるように巨人の懷に入り、刀を振るう。

火花を散らせながらも、折れる気配の無い左の刀に巨人も慌てて後退するものの、下段から伸びた刃を避け切れず、右の脇腹から胸までの斬り上げを食らつた。

体制を崩したレオも一回引き、両者の距離が開く。

チラリとゲオルグの様子を見ると、増援のオーガに集中していた。

その隙に、せめてこれだけはとクイックを使う。

ゴッ オオオオオオ！

突然魔法を使つた相手に驚いたのか、巨人が慌てた様子で叫びながら突撃して来る。

レオも刀を構え直し、巨人に向けて走り出した。

限界まで引き絞った斧がレオを襲う。

寸前に左の刀を捨てたレオは、倒れこむように地面に伏す。

胸を狙つた斧は、本来ならばそれでも僅かに当たつていただろうが、刃を削がれていた事で完全に空を斬る。

斧が過ぎた直後、レオは左手と足に全力を注いで飛び上がった。

宙を舞いつつ、アドレナリンとクイックで限界まで引き伸ばされた時間の中、視界の端に見えた巨人の首に刃を這わせる。

流石に強引に飛んだせいで、しゃがみ込むような無防備な格好で着地してしまい、慌てて周囲を警戒した。

周囲の安全を確認した後、レオが緊張と興奮で荒れた息を整えつつ立ち上がった頃に、背後で巨体が崩れ落ちる音を聞いた。

一息着いてゲオルグ達を援護しようと振り向くと、オーガは全員逃げ出していた。

「あれ？」

間抜けな声を出して首を傾げるレオを、オーガを倒して援護しようとしていたゲオルグは口を開けて眺め、ギルは苦笑しながら、リサは無表情で周囲を警戒していた。

「H立ちしたゲオルグの前で、レオは何故か正座している。どうして正座を選んだのかとHつと、ここ数日で身についたレオの勘が、今は正座だと告げたからだ。

「へええ～、つまりこの事。アタシが馬鹿で、口を滑らすかもしないから、秘密にして置いた。と……」

鞘に入った剣でペシペシとレオの顔や肩を叩くゲオルグに、必死の弁明を図る。

「ち、違いますよ、別にわざわざこの事でも無いかなあ。なんて……」

ゲオルグ的眼光により、言い訳は途中で途絶えてしまう。必死にギルに助けを求める視線を送るが、ギルは笑いを堪えるような妙な顔をして周囲を警戒するフリをしている。

いっぽうしてしまおつかと思うが、口裏を合わせていたと知られたら、頬を撫でる鞘着きの剣から、鞘が取られる事請け合いである。

「ジャイアントを単独で瞬殺できるのって、何の事でもないんだー。ふーん」

剣呑な雰囲気に、背中を伝う冷や汗が倍増した。

「で、でもホントなんか気迫を感じ無かつたと言いますか、弱つてたような……」

「はあ？ つたぐ、何言つて……」

だが、ジャイアントの死体を見たゲオルグは眉を顰めた。

「おいギル、レオもちよつと手伝え」

リサを警戒に残し、3人で巨人をひっくり返した。

「これは……」

死体を仰向けにして見ると、ジャイアントは確かに瘦せていた。ジャイアントは元々少しアバラが見えるのだが、この死体はそれが多い。

しかも良く見ると頬もこけている。

魔物は強さで上下関係が決まる。この森の中で、ジャイアントは間違いなく一番強いだろう。そのジャイアントが痩せ細っていると言ふのはどう考へてもおかしかった。

「レオの話は置いといて、コイツは全員で倒した事にしてでも、早く帰つて報告した方がいいんじやねえか」

「そうだな、何だか妙な感じだ。上に報告を入れておいた方がよさそうだね」

ギルの言葉にゲオルグも頷いて、オーガとジャイアントの耳を持つて街へ戻る事にした。

報告を終え、酒場に行くとアルザダが待っていた。
5人分の席を取つてくれたので、皆でそこに座る。
席に座るとアルザダがリサに声をかけた。

「大分顔色も良くなつたね。食事はちゃんと食べているかい」

「はい、あの時はお世話になりました」

奴隸の輸送中に食べ物を分け与えていたアルザダは、父親と同じ商人と言う事もあってリサにはかなり好印象だつた。

因みにギルがさほど警戒されなかつたのは、アルザダと共に食べ物を配つていたからでもある。

ただ、それを見たレオが「何で俺の時だけ……」と、誰にも解らないよう小さく肩を落としたのは仕方のない事かも知れない。

少しして飲み物が届けられた。レオとリサ意外は酒だ。

「では、再開と新しい出会いに」

アルザダの挨拶で乾杯も終つたところで、旅の計画を練る前に、
今日あつたことを話し合う事にした。

「最近魔物が増えてるつてのは良く聞くけど、西の街道でジャイアントが出るつてのは、さすがに予想外だね」

「そうだな、しかもジャイアントが瘦せてたなんて聞いたことねえ」

神妙な顔で考え込む冒険者2人に、アルザダが不安げに声をかけた。

「ギルド長はなんと?」

「調査をしてみるつてさ。まあ、北の街道の近くだから流れで来た可能性も無くは無いが……向こうでも滅多に見ないからね」

「それでは、暫くは様子を見た方がいいのでしょうか」

少々気弱になつたアルザダに、ギルが首を傾げる。

「どうだらうなあ、正直、この後変化があるとすりや、悪い方だと思つぞ。行くなら早い方がいいだらう、ともなきゃ暫く様子見かな

「待つてくれ、アルザダはもう仕入れをしてしまつただらう。今から中止になつたら、かなり不味いんじやないか」

皆の視線がアルザダに集まる。

アルザダは、少々困つたように頬をかいた。

「そうですね……」の辺りが特産の食料も結構買つたので、暫く行かないとなるとかなりの赤字になつてしまつます

暫し沈黙が場を支配したが、レオは迷いを振り払つよに頭を振つた。

「俺としてはアルザダの助けも必要だし、ここに居続けても良い事は無い。行く事にするよ」

「ま、そうだね。アタシらが居れば、大抵の敵が出てきても問題無いだろう」

リサは少し不安そうだったが、この際仕がない。

「で、出発はいつだい」

「一日後でどうだ、間に合いますか？」

アルザダは頷いた。

「私はもう殆ど準備は終っています」

「俺とゲオルグは、元々冒険者だ。出るなら直ぐにでも出れるぞ」

「なら明日俺達の荷物のチェックを頼む。準備は念入りにしたい、
出発は一日後だ」

それから夕食をとつて酒場を後にした。

宿に戻つて部屋に入ろうとするとき、背後から呼び止められた。

「あの……」

「ん、リサ、どうかした？」

彼女は少し迷うように言い淀んだが、

「……いえ、何でも無いのです」

と呟つて部屋に戻つてしまつた。

何を言いかけたのか少し気になつたが、良く解らなかつたのでレオも深くは考えなかつた。

人型の魔物（下）（後書き）

これで説明と紹介ばかりの一章は終わりです。

特に話しに進展もなかつたのに読んでくれて有難う御座いました。

一章は序盤笑いも少なく、地味な展開ですが、後半はちょっとは盛り上がるカンジになると思うので、もう暫く我慢してお付き合いください。

今回はちょっと最後不気味な雰囲気を出したくて、後半笑いを少なくして予定していた物より少し短くなりました。雰囲気は出ているでしょ？……？

さて、次回はちょっと時間が飛んで旅立つところからの予定です。これからはシリアス成分が増えるかと思いますが、よろしくお願ひします。

一日後、街を出る挨拶をして周る事にした。

「女将さん、今までお世話をになりました」

レオの生真面目な挨拶に、女将は苦笑してしまつ。

「別に今生の別れでもないんだし、ただの宿の女将にそんな丁寧な挨拶は要らなこわ」

「いえ、女将には本当に世話をなつたので」

そう言つて頭を下げるが、流石の女将も氣恥ずかしくなつたのか、頭を搔いて背を向けた。

「テーブルは弁償して貰つたけど、椅子の修理代はまだ払つてもらつてないんだから、絶対に今度払いに来なさいよ」

「はい、必ず

頷いて、宿の外で待つリサの元へ向かつ。

「リサは挨拶は済んだ?」

彼女は黙つて頷く。

元々この街での知り合いなど、女将くらいしか居ないのだ。

「俺はもう少し回る所があるから、西門のアルザダの荷馬車へ先に向かつて」

「はい」

そこで一里リサと別れ、冒険者ギルドへ向かつた

ギルドに入ると、フィルがいつもの笑顔で迎えてくれた。

「街を出るんですってね。レオさんは強いから大丈夫だとは思いますが、くれぐれも気をつけてください」

「解つてます、もう叱られるような事はしません……多分」

言葉を濁らせたレオに、仕方がないなと呟つゝ視線を向けながらフィルが呟つ。

「奴隸の女の子を助けるんですってね。大変だと思つたけど、無茶は禁物ですよ」

「あー、その話は誰から……」

「ゲオルグさんからですけど」

当たり前のように答えるフィルに、やはりゲオルグは信用できないとレオは胸にしつかりと刻み込む。

「恥ずかしいから、余り言ふらして欲しくなかつたの……」

「良いじゃないですか、別に責められるような事でもないし」

「うう言つていつかの向日葵のような笑みを浮かべるフィルに、レオも苦笑を返した。

「ま、ううですけどね。それじゃ、いつかまた来ますから、それまでお元氣で、色々教えてくれて有難う」

「お礼はいいですから、また来ると言つただけは守つてくださいね？」

その言葉に、レオは力強く頷く。

最後にレオは、バルドの工房へ向かった。

「こちにちは、水筒は出来てますか」

「おう、仕上がつたぞ。それと刀の方だが、本当に預かっていいのか？」

バルドの作った水筒は完璧だった。

これならば忍び装束の中に入れておいても邪魔にならないだろ？

「良いですよ。ただし、貸すだけですから」

「必ず取りに来る。だろ？勿論構わんさ、四六時中眺めて、何回か試作も作ったし、いつでも取りに戻つて来い」

それはもう殆ど要らないんじゃないかと思つが、そんな無粋な事は言わない。

「絶対に、取りに戻ります。水筒有難うございました」

「今から行くんだろ、見送りに行くぞ。西門だつたな」

店番のドワーフのおばさんに声をかけ、2人は連れ立つて西門へ向かつた。

西門に行くと、仲間はもう準備を終えていた。

門の前に停めてある荷馬車は2台あり、それぞれにアルザダの商品が所狭しと積まれている。

「おっ、ゲオルグも一緒か。ゲオルグ、レオの事頼んだぞ。ちょっと頼りないが、コイツには俺も借りがあるからな」

「アタシに頼まれても困るよ……レオつて滅茶苦茶強いんだから……」

…

その返事はバルドも意外だったのか、少々目を見開いた。

レオは心中で、「ホント簡単にバラすなあ」と思ったがバルドになら良いかと黙つておく。

「ほう、そうなのか。ゲオルグのお墨付きとは……本当に見かけに

依らないが強いんだな

何とも失礼な言い草に、レオは苦笑してしまつ。
それを見て面白そうに笑つたバルドは、肩を叩いてレオを送り出した。

「それじゃ、達者でな

「ああ、バルドも」

「じゃあなバルド、今度来た時はまた剣の手入れ頼むわ」

「研ぎ終わるまで待つてるなら、また手入れしてやる。今度は途中で消えるなよ」

しつけえ奴だ。と肩を竦めて荷馬車に乗るゲオルグに続いて、レオも荷馬車に乗り込む。

衛兵には、リサの所有権について尋ねられたが、正規の書類もあるので通る事が出来た。

大分小さくなつたダール興商自治区の外壁を見ながら、この先の旅に思いを耽る。

それから一日、荷馬車はのんびりと街道を進んでいた。
2度ほど「アブリンに出会つたが、問題にはならなかつた。

「しかし、朝から晩まで水鉄砲撃つて、良く魔力枯渇を起こさな

いなあ……」

ずっと魔力制御の練習をしているレオに、ギル呆れたように声をかけた。

現在こじらの後続の荷馬車には、ギルとレオとリサの3人が乗っている。

レオとリサ以外は手綱を握れるので、ローテーションを組んでいるのだ。

「だつてこれ、生活用の魔法だろ。フィルも消費は少ないって言ってたし」

「ここの世界の魔術師が全員レオみたいだつたら、井戸なんてそもそも掘る必要無いんだがな……」

言われてみればそうだ。この勢いで10人が水を出し続けば、数十世帯分の水は優に用意できるだろ？

宿の隣に井戸はあつたし、これは普通ではないと思つた方が良さそうだ。

「ふーむ、そういう物なのか」

「これ以上頭が痛くなる事言わないでください。ほら、また背中から魔力が溢れ過ぎてますよ」

薬草の本を読みながらリサが困つたように言つた。

リサも根気良く教えているが、中々上手く行かない。練習を一日休んで、気晴らしに話題を変える事にした。

「これから行くナルバ共和国って、どんな所なんだ？」

「ああ、レオは最近ここの辺に来たんだつけ……元は同名の帝国だつたんだが、200年前の戦争中に、神の怒りを買ったとかで滅ぼされたらしい。本當かどうか知らんがな、その後元属国だった国が合わさつて今の国になつた」

「神の怒りとかあるのか……」「……」

「そりやあおつかないつて話だぜ、それからは神の威光に逆らおつなんて國は無くなつたくらじだ」

と、ギルが肩を竦めながら言つ。

「この世界の神がどんなものか解らないが、実際に危害を加えてくると嘗つのは驚きだつた。

「やついえば、ここの辺の國つて公國、共和国、魔術帝国の3国だけなのが?」

「いや、その他に教国がある。こつちは小さいが、殆どの神が祝福してゐる国だから、発言力はデカイ」

これにはレオも多少驚いた。

「神が祝福してるとか、解るのか

「ああ、何でも愛の神イシスの言葉を聽ける巫女が、その國に居るらしい」

「神の声……か」

自分の身に起きた事を聞いてみたい。と一瞬思つたが、先にリサを何とかすると決めた以上、頭の端に留めて置くくらいがいいだろう。

そこまで考えて、初日に貰つた手紙の事を思い出した。達筆すぎて何が書かれているか解らなかつたが、この世界の人には解るかも知れない。

「なあ、これ何て書いてあるか解るか」

収納袋から取り出した黒い手紙を取り出し、ギルに渡した。それを見たギルは「随分達筆だなあ」と、顔を顰めていたが、やがてその顔を驚愕に変えた。

「お、おいおい……『親愛なる友カークスへ、ホワイトパールより……お前、あのホワイトパールと知り合いなのか……?』

ギルの余りの変貌ぶりに、レオは戸惑つてしまつ。しかし、ホワイトパールと言ひ名はどこかで聞いたような気がした。

「知り合いつて言つつかー回会つただけだけだけど……有名人なのか」

「お前、世界に5人しか居ないJランク冒険者を知らないとか、ホントに冒険者かよ……」

そう言えばファイルに説明を受けた時に、そんな名前を聞いたかも知れない。確か転移魔法の権威とか。

「なるほど……それでか。しかし、あの悪趣味なまじゅ

」

と、いいかけた所で、ギルが全力でレオの口を押さえに掛かつた。口を押さえたギルは、少し震えながら辺りを見回している。

「バカ！もし聞かれてたらどうするんだ……ホワイトパール様は神出鬼没で有名なんだぞ！」

その言葉に不安になつたのか、リサも何處と無く怯えたように身を竦ませた。

ギルの手を何とか振り払い、眉を寄せながら聞く。

「そんなに怯えなくても、喧嘩つ早い雰囲気の奴じゃなかつたけど」

「あの方に敵対した奴は、例外無く無人島へ飛ばされたって話を聞いても、同じ事が言えるのか……？」

「……」

そういう事なら全力で訂正したかつた。

専門職の魔術師では無いレオは、長距離の転移は出来ない。空を飛ぶ事は出来るが、距離によつては不味い事になるだろつ。

「しかも、いつどこで現れるか解らない……そして、自分の趣味を否定されると、子供のように怒ると言つ話だ」

あのネオン満載の門の趣味も、本人の前では褒めた方が良いらしい。

「カーブスつて人に渡せつて言われたけど、誰だか解るか」

「さあな、さつきも言つたが神出鬼没で有名な方だ。Sランクの冒

冒険者にしては珍しく、個人情報も殆ど出回ってねえし

「そりゃ……」

冒険者の事でギルに聞いても解らないと言つ事は、現時点では諦めた方が良いだろう。

それに余りそちらに集中して、リサの事が疎かになつては本末転倒だ。

手紙を収納袋に戻し、この件は保留する事にした。

「しかし、随分と魔物が少ないな」

「ああ、この辺は国境で軍が介入しにくいし、盗賊が多いからな。奴等だつて、ねぐらの近くに魔物が居れば狩るだろつ」

盗賊と言う言葉に、レオは正直身が竦んだ。

これまで人型の魔物は倒してきたが、人間を殺した事は無い。

「そう、か……」

「対人戦の事気にしてるなら、大丈夫だぞ。魔物を倒してるつつても、ゴブリン程度だし、俺達の敵じやねえよ」

その的外れな補償に、レオは肝が冷えた。
ギルは暗に、この世界で盗賊を殺すのは当然だと言つていいからだ。

それから4時間程して、遂にその時がやつて來た。

水鉄砲を撃つて、リサに魔法の指導をして貰つていると、突然

ビイイイイイイイ
ツ！

と言ひ警報が、指輪から発せられた。

「リサッ」

荷馬車の上で警報が鳴ると言ひことは、遠距離からの詠唱か弓矢しかあり得ない。

音に驚くりサを抱えるように守ると、盾の結界で弱体化した氷の魔法がレオの腕を凍らせた。

「敵しゅ……敵襲だ！」

無理に動かそうとした右腕の皮膚が、凍っていた為に裂けてしまつた。

急いで治癒魔法を使い、ギルと共に外に躍り出る。

多少呆然としていたリサも、少し遅れて杖を構えて立ち上がった。

「ゲオルグ、敵だ！」

「聞こえてるよつ

20人弱の盗賊が森から現れる。

ギルとゲオルグは気にせず盗賊をザクザクと斬っているが、レオは武器では手足を狙い、打撃での気絶をメインにしている為、殲滅が遅かつた。

4人程処理した時、背後で微かな悲鳴が聞こえた。

見るとレオが抑え切れなかつた盗賊3人が、リサに襲い掛かる所だつた。

「 ッ！」

レオは反射的に手を振つて魔法を使う。いや、使つてしまつた。咄嗟に出の早い雷撃の魔法を発射してしまい、雷光が盗賊3人を貫く。

雷光に貫かれた3人は、煙を上げてその場に崩れ落ちる。突然の殺戮に凍り付いてしまつたレオに2人の盗賊が斬りかかるが、殲滅を終えたギルに斬り伏せられた。

「大丈夫か」

「あ、ああ……悪い」

震えを隠すために急いで荷馬車に乗り込んだが、ギルは特に気にならなかつたらしく、黙つて後に続いた。

盗賊を倒してからのレオの様子は、明らかにおかしかつた。

レオは、嘘や誤魔化しが下手だ。

ギルやゲオルグは、冒険者としてのレオの実力を買つてゐる為、気付いていないようだが、彼らより少し付き合いの多いリサの目には一目瞭然だつた。

ずっと楽しそうに聞いてきた魔法の話は一切しなくなり、先ほどから黙つて薬草が書かれたメモを読んでいる。

ギルの話にもまともな返事はしていないし、集中しているような顔を作つてはいるが、田はほんやりとしていた。

「そろそろ一旦休憩だ。つたぐ、本氣で尻が痛いぜ」

森の中の道が開けた所で、前を走るアルザダの荷馬車が止まった。その横に着ける形でギルの荷馬車も止まる。

荷馬車を降りるなり、レオは「薬草を探してみる」と言つて森の中へ入つていった。

他の者は特に気にせず腰を下ろしていくので、リサは黙つてレオを追いかけた。

少し奥に入った所で、レオがじつと薬草と思われる草を見つめているのを見つけた。

リサが近づいたのに気付いたのか、彼は薬草を摘み取る作業を開始する。

「どうかした？」

声は普段道理だったので、考えすぎかなとも思ったが、一応聞いてみる事にした。

「レオスさん、もしかして人を殺すのは初めてですか」

ほんの一瞬だったが、薬草を摘むレオの手が止まったのが見えた。

「そんな訳無いだろ」

「……やつぱり、私が悲鳴をあげたから　」

「違うわ」

田を薬草に向けたまま、レオが呟いた。
初めてのレオの強い否定に、リサは一瞬身を強張らせる。

「違うんだ。本当に人を殺したのは初めてじゃない」

ばつが悪くなつたのか、レオが口調を和らげて言い直した。
だが、ここまで来ればもう確定だ、それ以外に考えられない。
暫し沈黙が下りるが、どうしても聞いてみたい事があつて、リサ
は声を上げた。

「あの……」

ここ淀むリサに、昨日の夜と同じ雰囲気を感じたのか、レオも顔
を上げる。

「どうして　」

「おーい。何やつてんだお前が、そろそろ行へー」

ギルの呟き声に、リサは再び口を噤んでしまう。

氣まずい雰囲気に耐えられなくなつていたレオは、立ち上がる
リサを促すよつて歩き出した。

「行ひつ、監待つてゐる」

リサは遺る瀬無い気持ちになつたが、今更言い直すことも出来ず、荷馬車へ向かつた。

「ウエヒヒ」

田の前の森の中で、ゲオルグが吐いている。レオの位置からは見えないが、流石に1人では危険なので、森の中ではリサが看病している。

「だ、大丈夫か……？」

切つ掛けは夕食の際、レオが取つた薬草を煮た料理を出した事だつた。

普通に食べても美味しい、山菜に近い薬草だと思ったのだが、出来上がつた煮びたしから、どう考へてもメモと違う匂いがする事にリサが気付いたのだ。

慌てて食べるのを止めたレオ達だが、ゲオルグだけが食べてしまつていた。

「「めん、ちよつ、ちよつとほつ」としてて、間違えたんだ。決して悪氣があつた訳じや……」

「アハ、アツハハハハ」

狂ったようなゲオルグの笑いに、姿も見えないのに震えて数歩後ずさる。

「ハハッ……殺してやる……殺してやるよおー。」

それを聞いたレオは、全身に冷や汗を流し、走ってギルの荷馬車に逃げ込んだ。

荷馬車に逃げ込んだレオが、メモの内容を全て暗記するまで、そういう時間は掛からなかつたという。

それから更に一日が経つた。

朝食の折、全員が集まつたのだが、皆一様に渋い顔をしている。一日前に出て以降、盗賊は一度も出でていない。

正直レオは助かつたが、その代わりに魔物が多く出てきていた。

「どうもきな臭いね」

あの時はゲオルグもかなり怒つていたが、旅路の異常さに怒りはなりを潜めていた。

「ああ、オーガもちよくちよく見るしな、この間のジャイアントみたいに瘦せてる奴が多いのも気になる」

元々この街道には多少のオーガが出ていた。

それが増えて、狩っていた盗賊が撤退したと考えればありえなくも無いが、以前のこの街道を思えばやはりおかしかつた。

「や、やはり引き返した方が……」

魔物との連戦に弱気になってきたのか、アルザダが控えめに言った。

しかし、ここで引き返せば荷は完全に「ゴミ」になってしまつ。

本人もその事が解つてゐるだけに、落ち着かない様子でレオ達を伺つていた。

「ここまで来たんだ、どうせなら2～3日で生ものを売つてしまつて、それから戻つても殆ど変らないだろ?」「

「そうだね。急げば今日中には着くはずだ」

一応意見を聞こうかと思つて視線を向けたが、リサは困つたように俯いたまま、何も言わない。

それをフォローするように、ギルが締めくくつた。

「とにかく、行くしかないんだ。アルザダとゲオルグの荷馬車は交代しつつ、俺の荷馬車は後の2人が警戒して、なるだけ急いで街に入ろう」

その言葉に頷いた仲間は、急いで朝食を搔き込んだ。

そして、数度のゴブリンやオーガの襲撃を抜けた後、一向は2番目の街、ナバル共和国のハウラ城下街に着いた。

一章 盗賊と手紙（後書き）

前言通りの地味回です。すみません……。

何とか他の言葉も乗せつつと思いましたが、これしか言えません、
ホントすみません……。

街の中に入つてみると、心配していた混乱は無く、普段道理と思われる活気に満ちていた。

アルザダと別れ、宿を取つてリサを休ませると、前衛3人はバルドに紹介してもらった鍛冶屋に向かう。

「ゴブリンやオーガとの連戦で、武器を酷使していた為だ。

その店先で、店主と思われるドワーフと、ヒルフの少女が楽しそうに話していた。

だが、こちらに気付いて笑いかけ ようとして、後ろの仲間2人をみて顔を顰めて去っていく。

何で出会つ女性全員に嫌われるんだろうと思つたが、良く考えるとゲオルグも女だった事に気付いた。

「何か失礼な事考えてない？」

「えつ、いや、何も……」

「そう、ならないけど」

本当に何となく思つただけなのか、ゲオルグは深く追求してこなかつた。

だがレオは、元Aランク冒険者の勘の鋭さに肝を冷やす。
鍛冶屋のアイゼンに紹介の手紙と武器を渡して、来た道を戻る。

それから長旅の疲れもあり、レオ達は宿に戻つて直ぐに眠つたの
だが　その夜、一度目の魔物の襲撃があつた。

翌日にはちよつとした騒ぎになつていた。

午前中、冒険者ギルドに情報を確認しに行つたゲオルグが、レオ
とギルの待つ宿の食堂へ戻つてきた。

リサは長旅の疲れか、それともレオへの指導の疲れか……ともか
く、まだ眠つている。

席に着くと、ゲオルグは顔を顰めて首をひねる。

「奪われたのは、外壁の、外の畑にある食料だけらしい。偵察は出
したようだし、他に被害が無いから大きな騒ぎにはなつてないけど、
これはいよいよヤバそうだ」

それを聞いた2人は唸つた。

街の中に居る住人達はまだ危機感が薄いが、異常を感じていたレ
オ達は別だ。

「直ぐ戻るにも、多少の準備は必要だぞ。武器は今日中に出来るら
しいが、夜に発つ訳にもいかん。疲れもあるし食料も……そう言え
ばアルザダはどうした」

思い出したように聞くギルに、レオが頭を搔きつつ答えた。

「すまん。実は駄目元で奴隸を解放してくれそうな貴族を探して貰

つてるんだ

「やうだつたか。まあ、それが当初の目的だし、多少は調べないと
な

「ああ、どの道出るのは明口になるだろつと思つて、無理を言つて
調べてもらつてゐる」

軽く頭を下げるレオに、「氣にするな」とギルが手を振つた。
と、暫く黙つていたゲオルグが苦しげに呻く。

「規模は小さいとは言え魔物の群れの侵攻なんて、御伽噺でしか聞
いた事なかつたけど……もし本当に來たら、ギルドから強制召集さ
れるかもね」

「ああ、ランクの低いレオは別だが、BやCの俺達は恐らへ駆り出
されるだらうな」

「すまない、こっちに來たのは俺の判断ミスだつた……」

皿を伏せて落ち込むレオに、2人は笑いかける。

「別にいいや、アタシら好きで付いて來たんだから。それにダール
に居たつて、魔物が来ない補償なんて無いんだ」

「ゲオルグの言つ通りだぜ、特に俺達は無理言つてついて來たんだ
からな」

その時、食堂の扉が開き、アルザダが帰ってきた。

「おお、良かった。レオさん、ちよつと良いですか」

レオが断りを居れて食堂を出ると、アルザダが興奮した様子で外へ連れ出した。

「実は、何人かの奴隸を解放していると言つ貴族の噂を聞きまして、話を聞いてみると金貨15でスタンプを貸してもらえた方も居たようだ、頼んでみたら面会の機会も得る事ができました」

「本当ですか、良く受けでもらえましたね」

「ええ、何でもこの国では有数の資産家だそうで、多少の我慢も効くやうなので」

これは嬉しい誤算だ。準備は他の者に任せても、行つてみる価値はある。

「ここで待つてください、リサを起こしてきます」

「あ、ちよつと待つてください」

喜び勇んでリサを連れてこようとするレオを、アルザダが引き止めた。

「この前のギルの話ではありませんが、貴族の方は少々困った性格の方も多いのです。まずは我々だけで行つて、取引を成立させた後で、彼女を連れて行つても遅くは無いはずです」

「なるほど……」

一度金を受け取った後ならば、さすがの貴族もそう易々と話は変えまい。

それに、奴隸については良く知らないアルザダが無理をして駆け回つて掘んだ情報だ、ある程度は慎重に行動した方がいいだろう。

「解りました。取り合えず俺達だけで行きますか」

「それが良いかと。さて、お待たせしているはずなので、急いでいきましょう」

アルザダに促され、レオは貴族の住む高級住宅街へ入つていった。

貴族が多く住む高級住宅街の中ほどまで行った時、バスラ公爵の屋敷が見えてきた。

平均して大きな家が立ち並ぶ通りの中でも、その家は一際大きく見える。

使用人に案内されて執務室に入ると、多少顔立ちの良い、筋肉質な中年の男が出迎えた。

「これはアルザダさん、どうも初めまして」

「こりやかにアルザダと握手を交わしたバスラだったが、レオを見て若干顔を顰めた。

「もしや、こちらのエルフが依頼主ですか？」

「はい、冒険者のレオさんと言います」

「どうも、始めまして」

レオが手を出したが、バスラは握り返さずに椅子を勧めた。

「どうぞ。しかし、開放するのは人間の女性と聞いていたんですがねえ」

その言葉には流石のアルザダも面食らつた。

「いえ、開放するのは人間の女性ですよ。リサさんと言つ方です」

「ほう……」

バスラは少々訝しげな視線をレオに向けた。
レオは何故そんな視線を向けられたか解らず、困惑してしまつ。

「ちなみにランクはいくつで?」

「Eです」

それを聞いたバスラは薄く笑う。

流石のレオも少々怪訝に思い始め、アルザダが何とか場を取り成そうと声を上げた。

「ええと、それで報酬の件ですが……」

「ああ、金賃15と決めているが、正直それはどうでも良い

多少高くとも払えるよつこと、金賃を全て持つてきた2人は驚いた。

だが、その後の言葉で凍りつく事になる。

「やうだな、二田ほどその奴隸を貸してくれるならそれで良いんだ

「は？」

思わず呆けた声を上げるレオに、バスマは笑つて続ける。

「私は、気に入つた女しか解放しないと決めていてね。本当に親しい相手の頼みでもない限り、必ずこの条件をつける事にしているんだ。なあに、安心してくれ、他人の物を壊すような事はしないさ」

その言葉を聴いたレオは握った拳が無意識に刀に伸びかけ、慌てたアルザダが声を上げる。

「待つてくださいー先ほどと話が違うじゃありませんか」

「大っぴらに言つ事でも無いのでね、いつも家に入れてから話しているんだ。それに、こちらもエルフが主人だったとは聞いていない

あまりの発言に、更に怒りの声を上げようとしたアルザダ、だったが、レオの冷たい言葉に身を竦ませた。

「アルザダ」

レオの実力を知るアルザダは緊張に身を強張らせるが、バスマの方はEランクの冒険者に負けるはずが無いと嘲笑を浮かべている。

「暴力に訴えるのはやめた方がいいと思つよ。私はこれでも、数年前まで騎士団でそれなりに上位に位置していたからな」

できれば「レオが本気になつたら、お前なんて素手でバラバラにされるぞ」と、教えてやりたかったが、隣のレオが突然立ち上がりたので恐怖で身動きが取れなくなる。

「帰る」

それだけ言ってバスラに背を向けるレオに安堵しつつ、アルザダは彼の後を追つた。

「私の要求を蹴つたら、後々後悔しますよ。私の他にエルフにスタンプを貰す者など、絶対に居ないと書いておきましょ」

背後からバスラの嘲りが聞こえてきたが、2人は振り返る事無くその場を後にした。

バスラの屋敷を出てから数分して、がっくりと肩を落としたアルザダがレオに謝罪した。

「本当に申し訳ありません。まさかあんな事を言われるなんて……」

「別に、アルザダさんのせいじゃないですよ。それより、明日には発ちますから、準備をお願いします」

「解りました……レオさんはどうしますか」

「刀を取ってきます。あ、保存食を売っている店を教えて下さい。

終つたら宿の食堂で落ち合いましょう」

「それでは夕刻でいいですか」

その答えに頷いて店の場所を聞いたレオは、アルザダと分かれて商業区の広場へ向かう。

1人になったレオは、先ほどの事を考えていた。

盗賊を殺した時、あれほどの罪悪感に包まれていたのに、バサラの事を本気で殺そうかと思っていた事に、ショックを受けているのだ。

人型の魔物を多く殺して、普通の人間の感覚が麻痺して来ているのかも知れない。

それともう一つは、リサの事だ。

ひょっとしたら、リサの人生全体を考えれば、先ほどの申し出を受けた方が良かつたのかもしれない。

だが、レオとて薄々気付いていた。

初めの内は、どちらかと言うと罪悪感や、他の事が上手く行かない自分から目を背ける形でリサを助ける事に専念していたレオだが、徐々に好意の方が強くなっていた。

「情けねえ」

吐き捨てる様に呴いても、胸に残る靄が消える事は無かつた。

商業区にある広場の脇の、保存食専門店に向かう途中、中央で奴隸のオークションが準備されているのに気がついた。檻に入った奴隸の中に、女性のエルフが居た。

彼女は檻を掴んでレオに助けを求めるような視線を向け、レオは反射的に財布を確認してしまう。

しかし、そこまでで思いとどりある。

ダーレの街で、強ければ何でも思い通りに成る訳ではない事は痛感していた。

自分がただの1人の冒険者でしかない事は、フィルに叱られた事で嫌と言つほど理解している。

渋い顔をして目線を逸らすレオに、エルフの女性は力なく座り込んだ。

なるべくそれを見ないようにして店に入り、昨日鍛冶屋の前であつたエルフの少女に腕を掴まれた。

「なつ、ちよつと」

そのまま人気の無い路地まで引っ張られ、ようやく手が離される。

「なんだ一体……」

「お願い、お金を貸して!」

突然、お金の無心をされたレオは困惑した。

「待ってくれ、何で俺に頼む」

「他にこの街に出てきている者が居ないので、貴方だつて解るでしょう」

何を言つてゐるんだ。と返そうとして、ハタといどどりある。

そういうえば自分はエルフだが、エルフとしての常識は持っていない。

「ええと、何の事だか解らないんだが……」

なるべく疑われないよう「やんわりと聞いたのだが、エルフの少女は困惑の表情を浮かべた。

「何を言つてゐるの、貴方くらいの歳なら……」

途中まで言つた言葉が途切れ、目が見開かれる。

「貴方、もしかしてハイエルフ……？」

「えつ、解るのか」

確かにゲームの設定ではエルフでは無くハイエルフだった気がする。

「失礼な口をきいて、申し訳ありませんでした。黒い髪のハイエルフと言うのは、初めて見ましたのです……」

突然腰の高さまで頭を上げた相手に、レオが混乱する。

「ちよ、ちよっと止めて下さい。それより、どういった事だか教えてくれませんか」

「はい。私はセシリ亞、この近くの静寂の森と呼ばれる所から来ました。貴方はどちらの森の方でしょうか」

「俺はレオ……その、東の方の島国から来たんだ」

異世界から来たとは言いにくく、何とか誤魔化そうとしたレオだったが、それを聞いたセシリアは驚いたように呟いた。

「もしや、最近発生したのですか？」

「発生？」

「ハイエルフの方は、樹齢数万年の靈木が昇華して成ると聞いています。といつても、こちらの大陸では若葉が薬草として使われて乱獲され、実際に生まれた所を見たことはありませんが……東の島国には、その事を教えてくれるエルフは居なかつたのですか？」

内容は少々的外れだが、勘違いされたままの方が良さそうなので頷く。

するとセシリアは少し考えた後、困り顔で呟いた。

「少し時間も有りますし、こちらの大陸のエルフの事情を説明します。貴方様にとつても、聞いておいた方が良い話だと思いますので」

「様は止めてくれ、こちらのハイエルフは偉いかもしけんが、俺はただの冒険者だ」

セシリアは「解りました」と呟いて説明を始めた。

「3千年前まで、この地に住む者と魔物は定期的に戦争をしていました。最近の状況は、昔の戦争時に酷似しているらしいのです」

「待て、魔物と言つるのは野生生物じゃないのか？」

そんな素朴な疑問に、セシリ亞の方も首をかしげた。

「魔物は魔界からやつてきます。この世界と魔界は重なり合つて存在していて、その歪から抜け出て集落を作っているのが、森に居る魔物です。勿論、ウルフ等は元からこちらの動物ですが」

魔界から来る者というのは、ゴブリンやオーガといった者達のようだ。

勿論人型以外にも居るようだが、今までは魔物の弱い場所にしか行っていないため、名前を出されてもわからなかつた。

「と言う事は、近くそこから魔物が攻めてくるのか

「はい。ですが、エルフにとつての問題はそれとは別で、これまでの3千年の方にあります」

意味が解らなかつたので、レオは口出しを止めて聞くことにする。

「3千年前の戦争は、こちらに住む者の完全な勝利で終りました。ですが、向こうの魔界は魔物の地、それ以上侵攻する物好きはおらず、魔物との戦いの為に増強されていた人間の軍は、やがて力を持て余し人間同士で戦争を始めます。

私達この大陸のエルフは、その間森から出ずに不干涉を貫いていたのですが……200年前、当時この場所にあつた帝国で力を増してきていた、一部の貴族と奴隸商人が、エルフの長い耳はゴブリン等のとがつた耳と同じ魔物の証しだ。と言つ、根も葉もない噂を流したのです。

帝国はその頃長い戦乱と、貴族の優遇で腐敗を極めており、民衆の不満の捌け口としてエルフに戦争を仕掛けました。

エルフも応戦しましたが、かつての戦友達の子孫を相手に序盤で剣先を鈍らせ、不利になつてそのまま数に圧されてしまったのです。

結局最後は見かねた人間の神が、天罰を下し、神々が直々にエルフに謝罪して戦争は終つたのですが、神の口ぞえが有つても所有物となつてしまつたエルフの奴隸は見つけるのが難しくて、所有者が死んで売りに出されるのを探し出す為に、私のような若いエルフが旅をしているんです。

奴隸制度を守りたい諸国が緘口令を敷いたので、今では殆どの人間がその事を知りません。けれどこの大陸のエルフは、その事を永遠に忘れないでしょう

道理で街では殆どエルフを見なかつたはずだ。

「でも、そのわりに昨日は楽しそうに話してたけど……」

「ドワーフは別です。元は仲が悪かつたですが、彼らは一方的に攻撃されるエルフを見かねて、かつて自分達が住んでいた鉱山や洞窟にエルフを匿つてくれたんです。表面上は悪口を言い合うこともありますが、心の底からドワーフを嫌つてゐるエルフは、今はもう居ません」

言われてみれば街でエルフを見かけたのは、全てドワーフの店の近くだ。

人間とは種族を別にするドワーフは、当時周囲の人間より冷静に状況を見られたのかかもしれない。

そこまで言うと、セシリアは再度頭を下げた。

「東方の島国から来た貴方には、関係の無い事情かもしだせんが、あの子は私の幼馴染なんです。でも、オークションを考えるとどうしてもお金が足りなくて……金貨5枚、いえ4枚で良いんです。何とか貸してもらひませんか」

レオは唸つた。

正直リサの事や状況を考えると、金を失うのは厳しい。だが、ここまで聞いて断れば、森に戻った彼女から事情を聞いたエルフ達から、冷やかな視線を向けられるかもしれない。少々悩んだが、金塊もあるし今後の為にはどうしようもないと結論付け、貸す事にした。

幸い交渉の為にワイバーンの素材の代金も持つて来ていた、手持ちは多い方だ。足りなかつたと言つ事になれば田も当てられないので、多めに貸す事にする。

「オークションなら予想以上に高くなる事もあるでしょう、10枚渡して置きます。明日にはこの街を出るつもりですが、余った分は返して下さいね」

「ありがとうございます！」

下ド座しようとするセシリ亞を、こんな所ゲオルグやギルに見つかつたら何日も笑われる。と焦つて止めた。

ついでに宿泊している宿を告げ、向こうの宿も聞いた。

「商業区の十字路にある大きな宿です。私も魔物の事をドワーフに警告して回っているので、数日は滞在します。何か用があつたら来て下さい」

恐縮して何度も頭を下げるセリシアをなだめ、当初の目的だった保存食の店に向かう。

その後アイゼンの鍛冶屋に行くと、既に研ぎは終っていたので、それを持つて宿へと戻った。

夕刻、宿の食堂で反省会をしたのだが、皆一様に渋い顔をして押し黙っていた。

アルザダがあの後調べた所、バスラはこの国全体でも有数の貴族で、発言力もそれなりに大きいと言つのが解ったからだ。

「すみません、私の調査が不十分だったばかりに……」

「いや、アルザダさんは悪くない。さつきのエルフの話を考えれば、責任の一回は俺にもあります」

セシリアに聞いた話は既に皆にしている。

落ち込んだ雰囲気を壊すように、ゲオルグが一気に酒を煽つて言った。

「あーもう、それはこの際しちゃがないよ。それより、魔物の軍の話は本気でヤバい。準備も済ませたし、金を返してもういたら午前中にも出よう」

「そりだなあ、俺も強制招集は避けたいぜ。アルザダ、荷物の方は？」

「まだ多少売れ残っていますが、もう諦めますよ。午前中に出る方向で、異論ありません」

皆の息が合つた所で、レオが頷いた。

「解つた、それじゃ今日はもう解散にしよう」

そう言って隣で終始無言だったリサを見ると、怯えるように顔を伏せていた。

彼女はレオのように力を持っている訳でも無い、ただの商人の娘だ。奴隸の解放も上手く行つていないし、戦争が近いと聞けば恐ろしいだろう。

レオはそんなリサの頭に手を乗せ、ポンポンと撫でる。顔を上げたリサを安心させるように、微笑んで言葉をかけた。

「大丈夫、俺が何とかしてみせるよ」

やつれた顔に無理やり笑みを乗せるレオを見て、今度こそリサは死んだ父のようだと思った。

部屋に戻つて数刻後、そろそろベッドに入ろうかと言つ時、ノックの音が響いた。

「どうぞ」

ギルかアルザダかと思つたが、入ってきたのはリサだった。

部屋に入ってきたリサは、気まずそうに俯いている。

少々不思議に思つたが、こう言う時のリサは黙つていれば話すと学んだので待つていると、やがて小さい声を発した。

「あの……トランプしませんか」

「ああ、そうか、別にいいよ」

不安で眠れなくて暇を潰しに来たのだろう。レオは立ち上がってテーブルを薦めると、収納袋からトランプを取り出した。

「気に入ってくれて嬉しいよ。ギルは金を賭けなきゃやらないって言つし、アルザダには賭博関係は一切やらないつて断られるし……」

言つていて「俺、人徳無いのかなあ」と不安に思つたレオは、取り合えず言葉を区切つて席に着いた。

日本と同じ遊びが出来るなら、いつでも歓迎だった。賭けはもうこじこじりだが、リサは賭けたくないと言えばそのままで相手してくれる。

暫く殆ど会話も無いままポーカーを続けたが、やがてリサが声をかけてきた。

「レオはさんは、どうして……そんなに必死に、私を助けてくれるんですか」

その質問に、カードを3枚取り替えながらレオが答える。

「んー、何でだろ?」

真剣に聞いたリサとしては、その答えはちょっと氣に入らなかつたが、眉を顰めたりサに、慌てて訂正するようにレオが続けた。

「ああ、いや、本当に解らないって言つか……最初はお姉さんを見殺しにしたとか、何かほつとけなかつたとかそう言つのだつたけど、いつの間にかそうするのが当たり前になつてたつていうか……」

好意の事も正直に言おつかと思つたが、以前のように警戒されるといけないので黙つておいた。

「そう、ですか……」

それからお互い少し黙つていたが、やがて手札を晒す時が来る。

レオは3のスリーカード、リサは8のフォーカードだった。

「また、私の勝ちですね」

そう言つて彼女はクスクスと笑う。

「リサは本当に強いなあ」

初心者に惨敗しているレオは、困つたように頭を搔いた。

それから何度もポーカーを続け、暫くするとリサは部屋へ帰つて行つた。

そして、明け方、二度目の魔物の襲撃があつた。

奴隸の国（後書き）

ちなみに、バスマラさんのお前の由来はネーミング辞典の162ページ下から2行目か、エキサイトスペイン語でB a s u r aと打つ下さい。

それと申し訳ありませんが、少々難しい所に入るため、集中するので、感想等への返信遅くなります。

友人にチェックしてもらって、本当に不味い所は確認するので、ご容赦ください。

セシリアとの会話、靈木関連追記しました

忘れられていた軍

「魔物の群れだつ、冒険者は全員強制召集をかける、北の門の前に
こい！」

騎士風の男が、宿の中で何度も同じ言葉で怒鳴っている。

素早く忍び装束に着替えて部屋から出たレオは、リサの部屋をノックした。

「はい」

彼女も起きていたようで、緊張した様子で扉を少し開けた。

「リサは宿で待っていてくれ。不味くなつたらアルザダと東の門へ行つて、荷馬車で逃げる準備をしておくんだ」

頷いたリサを尻目に、レオは廊下を歩き出す。

「ゲオルグ、ギル、いけるか」

丁度2人も部屋から出てきた所だった

「問題ない。北門へ急いで」

食料を奪つて野を駆ける魔物の群れを、数度切り裂いた所で、死んだ馬と共に木陰で蹲る老剣士の姿を見つけた。

老剣士の足は斬られて千切れかけており、顔色もかなり悪い。レオが駆け寄ると、襟首を掴んで必死の形相で語り始めた。

「た、頼む……戻つて伝えてくれ……この先に、魔物の軍が……」

恐らくは昨日の偵察兵だろうが、このままでは長くあるまい。そう思つたレオは周囲を警戒するが、レオの凄まじい移動速度に着いて来れる者はおらず、近くに味方の姿はみえない。

安堵して治癒魔法を使う。

全身の傷が見る見る塞がり、足も完全に繋がつた。驚愕する老剣士の耳元で、小さく囁く。

「一つ頼みが。私が治癒魔法を使つた事は内密に

「あ、ああ……解つた」

老剣士は目を白黒させながらも、取り合えず頷いた。

しかし千切れかけていた足は違和感があるらしく、立ち上がつた老剣士は少しふらつく。

そのまま放置する訳にもいかないので、レオは彼を背負つて一旦街へ戻る事にした。

老剣士の情報が行き渡つた街は、かなりの混乱を起こしている。今回は少しだが街の中に進入を許してしまい、大量の食べ物が奪

われていた。

「駄目だ。朝の、強制召集を装った騎士の行動のせいでギルドも突つ張つてるが、アタシらの強制召集は免れない」

冒険者ギルドに話を聞きに行つていたゲオルグが、苦々しく呟く。
朝の強制召集騒ぎは完全に焦つた国の独断で、無理矢理驅りだされた低ランク冒険者に多少の犠牲者が出ていた。

「やつぱりだよなあ……これでもう俺達は街からは離れんな」

諦めたようなギルの言葉に、リサが申し訳なさをこめて囁く。

「「」みんなさい、私のせい……」

これまで殆ど何も言わずに着いて来たリサの、突然の反応に一同は少々面食らつたが、ゲオルグはいつもの様に笑つた。

「魔物は別にリサちゃんのせいじゃないさ。昨日も言つたけど、好きで着いて来ただし……って、そういうやまたアルザダの姿が見えないけど、どこ行つてるのさ」

「食料が奪われたから、売れ残りを軍が買い取りたいと言つてきたそうだ。今交渉に向かってるが、俺達の分は残してくれるらしい」

「やうか。まあ、昨日の内に旅支度をしてたから、保存食もあるし、アタシらは食料には困らないだろうね」

暫し黙つていたギルが、ここで口を挟んだ。

「なあ、レオは、リサとアルザダを連れてダールに戻るべきじゃないか？話ではゴブリンやホブゴブリンが主だと言うが、数は脅威だ。幸いランクも低くて強制召集の対象外のレオも居る。ダールに移動するくらい問題にならないだろ？」

「それは

「嫌です」

キッパリとしたリサの声に、言葉を遮られたレオを含む全員が再度面食らった。

「けどねえリサちゃん、戦争になればアタシらも自分の身を守るのが精一杯だし……」

「お願いです。」ここまで皆を振り回した責任を、取らせてください

それを聞いたギルとゲオルグは、渋い表情で顔を見合わせる。だが、レオは別な事を考えていた。

「俺も、これはチャンスだと思っている

仲間の視線がレオに集まり、その言葉の先を待つた。レオも一瞬躊躇つたが、決断を変える事は無い。

「例のバスマ公爵のせいだ、正攻法ではスタンプは借りられない。けど、この状況なら戦果を挙げれば可能性はあるかもしれない」

今、国は冒険者に借りがある。

その上、今後を考えれば何とか繋ぎとめて置きたい相手だ。知名

度のあるゲオルグやギルを連れて行けば、無視する訳には行かないだろう。

「確かに……でも、一筋縄ではいかないよ

ゲオルグの言葉に、ギルも頷く。

「だろうな。下手に出てるのも、今だけだと思つぞ」

「解つてゐる。前もつて約束を取り付ける事は必須だらう。これから会いに行くつもりだから、2人にもついて来て欲しい。リサは宿で待つてくれ」

そう言つて立ち上がつたレオに、仲間2人がついて行く。リサは不安げに彼らを見つめていたが、やがて部屋に戻つていつた。

領主のクラウスの館は、かつて国だつた名残もあり、城をそのまま使つている。

その会議室は今、荒れに荒れていた。

白髪交じりの長い髪を撫でつつ、クラウスが苛立たしげに呻く。

「クソッ。冒険者など、魔物を倒すくらいしか脳が無いのだから、黙つて言われた通りに戦えば良い物を……」

会議室のテーブルの上には、冒険者ギルドからの抗議文が散らばつている。

冒険者ギルドは確かに、こうした場合頼めば強制召集をかけて

くれるのだが、だからと言って勝手にそれを騙れば問題になる。

騎士団にも悪態をつきたかつたが、他の貴族が居る手前、大っぴらに言づ訳にも行かない。

「失礼します。クラウス様、冒険者が謁見を申し込んでいるのです
が」

「ランクはいくつだ」

「Eですが」「

クラウスは溜息をついた。

この忙しい時に、Eランクの冒険者の相手などしていられない。

「放つておけ、兵力にもならんのだ。話を聞く価値も無い」

「ですが、元Aランクのゲオルグと、ランクはCでも、冷静な判断と実力に定評のあるギル、それに、軍に食料を納めたアルザダと言う商人が共に来ていまして……」

こうなると話は別だ、元Aランク冒険者に、非常時に食料を持ち込んだ商人まで居る。

彼らを無視した事が伝われば、既に気まずい雰囲気になつている冒険者との関係が更に悪化しかねない。

しかし、彼らの名前には聞き覚えがあつた。

「仕方ない、通せ。因みに代表はなんと言づ冒険者だ」

「はい、レオと名乗っています」

これには抑えきれない舌打ちがでた。

レオと言う冒険者の仲間と、彼の奴隸であるディアマンティ人のリサと言つ少女の話は、バスラ公爵から聞いている。
どの道断らなければならぬが、かと言つて無視も出来ない。

暫くして、レオが会議室へ入ってきた。

会議室は広くないので、本人のみが通されたのだ。
その場に居た貴族達の視線が、レオに集まる。

「失礼します。私はレオと言つ冒険者です」

彼は黒い服を着たエルフだった。

「構わん、今は火急の時だ。用件だけを申せ」

「はつ。実はお願いがあつて参りました」

その先の言葉が理解できたクラウスは、溜息をついた。

「お前達の話は、バスラ公爵から聞いている、リサとか言う青い髪のディアマンティ人の女の事だろう。スタンプの借用の事なら駄目だ、幾ら積まれようとも貸す事はできん」

その言葉に微かにレオが身を震わせる。

バスラにはリサを見せていないハズなのに、特徴まで伝わっている。

だが、早く帰れと手を振られても、レオはその場に留まつた。

「借用を確約して下されば、必ずや大きな戦果を立てるとお約束します」

「駄目なものは駄目だ、バスマ公爵を怒らせたのはお前の失態だろう。絶対に貸すなど言っている彼を無視すれば、我々の方が被害を被るんだ」

「そこを何とか、お願ひ致します」

「べビーリー、お前達に貸すのは絶対に無理だと言つていいー。」

怒鳴り散らしても頭を下げたまま動かないレオに、呆れたクラウスは大仰に舌打ちして、吐き捨てるように言つた。

「敵将の首でも持つてくればくれてやる。解つたらひとつと下がれ！」

尚も食い下がろうとしたレオだが、使用人が肩に手を置いたので仕方なく立ち上がり、部屋を出た。

「宜しかったのですか？」

渋い顔で聞いてくる隣の貴族に、クラウスはもう一度舌打ちしながら答える。

「奴が敵将に迫つたら、撤退命令を出せばいい。それを聞かずに首をとつたら、命令違反の角で食い下がる事もできる。どの道Eランクではどうにもならんさ」

それを聞いた貴族は、何度も頷いて書類の整理に戻つた。クラウスも、やれやれ。と言つと手元の書類に目を通す作業に戻る事にした。

「どうだつた

館の前で待っていた仲間の中で、ギルが代表して聞く。

「駄目だ。借りられる気配は無い。こいつの情報を調べてまで、バスラが話を伝えていいようだ」

それを聞いた3人は肩を落とした。

「完全に田をつけられられたな……」

ギルが渋い顔で言った。

貴族に田をつけられると厄介な事になるのは解っていたが、これほどとは思わなかつた。

恐らく、この国でも有数の貴族と呼ばれるバスラに、あのような態度を取つたのが原因だろう。

「ただ……」

「ん?」

ギルが反応したが、レオは「いや、何でも無い」と首を振つた。

「皆は宿に戻つてくれ。俺は敵についてもう一度セシリアに聞いてくる。余り詳しくは無いようだが、聞いて損は無いだろう」

そうして、領主の館でレオは仲間と別れた。

昼間、着替えて少し休んでから部屋を出たゲオルグが食堂に入る
と、丁度セシリアの部屋に寄っていたレオが宿の食堂に戻ってきた。
その後、真剣な表情で話し出す。

「セシリアの話だと、現状歪を広げて集結している途中で、更に魔
物は知能が低いものが多いため大軍だと意思疎通が難しく、集合も
進軍も遅いらしいから、まだ2～3日は余裕があるそうだ」

それを聞くと、ゲオルグが安堵したように溜息をついた。

「そいつは良かつた。もう既に鳥や早馬で援軍を要請してるので話
しだし、それが着くまで持たせれば、外壁が落ちる事は無いだろう
ぞ」

「そうだな、守りの堅い騎士ならゴブリン相手には殆ど消耗しない
だろうし」

冒険者2人はそれで安心したようだが、アルザダやリサは少し心
配そうにして押し黙っている。

レオは暫く何か考えるように押し黙っていたが、やがて首を振つ
て言った。

「ともかく、今は時間も有るし魔軍の情報が欲しい。俺は一度セシ

リアと一緒にエルフの森へ行つて話を聞いてくる。人間には風当たりが強いらしいから1人で行くが、そう遠く無いようだから、遅くても明後日までには戻る」

強い口調で言つレオに多少面食らつたが、取り合えず皆頷いた。

「解つた。アルザダはどうするんだ」

ギルの問いに、アルザダは困つたように笑う。

「ひづなれば一蓮托生ですよ。戦いが終つた後の為に、多少仕入れをしておきます」

それからレオは部屋に戻つて多少の準備をし、セシリ亞と買い取つたエルフの奴隸と共に街を出た。

残されたゲオルグ達は、予備の剣や弓矢等装備を揃えて待つていた。

レオが戻つたのは、それから2日後の昼だった。

「あれ、レオ、戻つてたのかい」

丁度ゲオルグが食堂から出る時、忍び装束のレオが2階の部屋から降りてきた。

突然声をかけられたレオは、驚いたように身を強張らせたが、何とか返事をする。

「ああ、実はさつき戻つたんだ。話は後であるから、ちょっと出か

けてくる

そう言って足早に宿を出て行くレオを、ゲオルグは不思議そうに見送った。

夕刻、皆で一度食堂に集まるはずが、レオが来なかつた。どうやら買い物をしここにいったまま戻つていないらしい。

探してみると冒険者ギルドの近くの酒場で、老剣士と話しかんでいた。

「お、お、お、皆待ってるんだぞ。早く来いよ

「あ、ああ、すまん」

宿に戻る途中、白いローブの青年を見かけた。

「ちよ、ちよっと、すこません」

レオは彼を見るとい、慌てて肩を掴んだ。

「なんでしょう」

「ホワイトパールって人の知り合いじゃありませんか?」

「先生を存知なのですか」

「はい、実は……」

そこまで言つて言葉を止める。

レオは何やら悩むように沈黙した後、目を瞑つて頭を振つた。

「ごめんなさい。話したい事があるのですが、今は戦いに集中したいので、終つてから訪ねてもいいですか」

「はい、構いませんよ。領主に魔軍の危険性について話に来たので、城の通りの赤いレンガの宿に泊まっています。貴方も魔物と戦うなら無理に」

「ありがとうございます。大丈夫、我々は前線でゴブリンを食い止めるだけです。無理はしませんよ」

「そうですか、では、お気をつけて」

青年とレオはお辞儀しあつて別れた。
隣に戻ってきたレオにゲオルグが聞く。

「アンタ、ホワイトパールと知り合いなの？」

「知り合いつて程でもないよ。一度会つただけで」

ゲオルグはあまり他の冒険者には興味が無いようで、それを聞いても「ふーん」としか言わなかつた。

その後食堂でレオの報告を聞いたのだが、

「特に用はない情報は無かつた。強いて言うなら、『ブリオン主体なら知能は低いから、落ち着いて防戦に徹すれば問題ないと』の事だ」

としか言わなかつた。

何やらその後リサがレオに詰め寄つていたが、肩を竦めて首を振つていた。

それからレオは全員に見た事のない金属で出来た指輪を渡した。

「皆これ着けてくれ、気付け効果のある魔法が3回分込められた指輪だ。多少の怪我なら同時に治してくれる」

「ま、良く買えたねこんなの

「元々持つてたって言つか……まあ取り合えず、着けておいてくれ。それとリサ、代わりに前に渡した指輪を返してもらえるか」

「はい」

返された指輪を仕舞い、全員が渡した指輪を着けるのを見ると、レオは満足げに頷いた。

翌日、いよいよ魔軍が近づいてきた。

召集がかかり、ゲオルグが少し遅れて行こうとするが、それよりも遅れてレオが宿からてきた。

何やら中に着込んでいるらしく、いつもより着膨れしていた。

「中に何着てんだい」

「静寂の森でエルフに貰つた、矢を止める服だ。乱戦が予想されるから、革や布だけじゃ心もとないだろうつて」

「そんなも「こも」で、何時も通り動けんのか」

そう言われると、レオはゲオルグの前から宙返りして、背後に降り立つた。

「アンタの身体能力甘く見てたよ……」

ゲオルグが呆れたように笑うと、レオも苦笑した。

「取り合えず行こうか」

北門に行くとギルとリサが居た。ギルは思い切り渋い顔をしている。

話を聞くとリサも戦いに出たいと言つてきたので、レオが慌てて止めようと、声を荒げた。

「リサっ、幾らなんでも戦場に出るのは不味いだろ」

「大丈夫です、後方支援に徹しますから」

「矢だつて飛んでくるかもしないし、魔法だつてそうだ」

「解つてます。でも自分の力も使わなきゃいけないんです」

その後もレオは必死に止めたが、どうあってもリサが譲らず、絶対に前に出ないと誓つ約束で参加する事になった。

「すまん、ゲオルグ……俺は前に出るから、リサを頼めるか」

「任せな。アンタも、いくら矢止めがあるからって、無茶するんじゃないよ」

レオはそれに相槌を打ちつつ迫り来るゴブリンを見ていた。北の森から、魔物の軍はゆっくりと歩みを進めてきた。

やがて戦闘が始まり、ゲオルグとギルは前衛で、リサは矢避けの板から魔法を放つて戦っていた。

レオは敵陣に入り込んで、陣形を霍乱しながら戦っている。ゴブリンなど物の数ではないとばかりに、一心不乱に駆け巡るレオを見て、ゲオルグとギルは溜息をついた。

「相変わらず呆れた強さだねえ」

「だな、あれはほつとつて、こつちは地道にやひつ」

レオの強さは明らかに田立っていた。

今までの田立たないように。と言つレオの行動から考えて少し異様かと思つたが、今は後方にリサも居るし気が張つているのだろう。少々危険かと思つたが、どう見てもレオがゴブリンやオーガ程度でやられるとは思えない。

数時間後、近隣から騎士団の増援が来た。

元々それ程押されても居なかつたが、騎士団の参入で魔物は少し引き気味になつていく。

それを見た貴族軍が数名、手柄を焦つたのか馬でレオの開けた道を通つて強引に本陣に入る。

レオの方は少しバテて来たようで、最初から見ると動きが悪くなつていた。

と、手が滑つたのかレオの左手から刀が抜けて飛んで行く。

「つたく何してんだ」

それを拾つてやろうと目で追つた時、視界の端に、黒金でできた矢避け着きの荷車のような物が見えた。かなり大きくて目立つはずだが、隠蔽の魔法が掛かっていたらしく、今まで気付けなかつた。

嫌な予感がしたゲオルグは、ギルに向かつて怒鳴る。

「ギル、ちょっとしゃがめ！」

「は？ なんで……」

「いいから！」

「何なんだ一体……いだつ」

ギルと横の兵士を足場に高く飛ぶと、先ほどの荷車が数台で敵の本陣を囲むように配置されているのが見えた。

悪態をつくギルと兵士を無視して、レオに向かつて叫ぶ。

「レオ、戻れ罷だ！」

その声に仲間全員がレオを見る。

レオの方も驚いたようにゲオルグを見た、瞬間

…

「バチンッ！という音と共に魔方陣が展開し、レオを巻き込んで敵の本陣が消えた。

「えつ……」

リサが小さな声をだして呆然と前に歩みだす。

「あんのバカ……ギルッ、リサを頼む！」

「畜生ッ、解つた！」

ギルがリサを抱え、ゲオルグが援護して3人は戦場を後にした。

レオが魔軍と共に消えてから、6日が経つた。

あの後戦闘、リサはレオが遺していった刀を持って毎日北の平野に来ていた。

アイゼンに作らせた簡易な鞘に入った來国俊を大事そうに抱え、ただ黙つて敵の本陣が居た場所を眺めている。

しかし、辺りは夕暮れとなつて来た。何もない平野とは言え、夜になれば危険もある。

「リサ、今日はそろそろ……」

「はい、帰りましょ、う」

彼女はレオが消えてから、周りが驚く程落ち込んでいた。
毎日何も言わずに平野を見に来ているが、呆然とした顔を見れば心中は察せられる。

だが、リサを取り巻く事態は悪化して来ている。

バスラ公爵はあの戦いでレオと共に消えたが、エルフの奴隸として知られてしまっているリサを、主人が死んだのだから売りにかけろと貴族が圧力をかけて来たのだ。

今の所、レオが死んだとは限らない。とか、仲間の遺品になるのだから、そう簡単には渡せない。等と言つて強引に突つ撥ねているが、あれから魔軍の侵攻もなく、貴族の冒險者に対する遠慮は無くなつて来ている。

「こんな事、私だって言いたくないけど、レオの事は別にしてそろ移動した方がいいと思うんだ」

本来こういった事は言わないゲオルグだが、男のギルでは言いにいからと頼まれていた。

「解っています、本当に……でも、もう少しだけ……」

思いつめたよつこ言ひコサに、ゲオルグは困つて頭を搔いた。

宿の食堂に戻ると、ギルとアルザダが黙々と食事を食べていた。チラリと視線を向けてきたが、ゲオルグが気まずそうに田を逸らすと小さく溜息をついた。

2人が席に着くのを待つて、ギルが切り出す。

「リサちゃん、その、今すぐと話じやないが、いつ頃街を出るか考えて置かないか……」

その言葉にリサが身を強張らせた時、見覚えのある老剣士が現れた。

「なあ、お前達レオと話ひの知り合いだらう、ちょっと良いか」

皆驚いて彼を見たが、取り合はず空いている席を勧める。老剣士は勧められた席に着くと、一息ついて語り始めた。

「実はレオと言ひの男から、リサ、ギル、アルザダに伝言を。と、頼まれていてな。お前達で間違いないな?」

3人は困惑しながらも頷く。

「では、『6日経つても俺が戻らなければ、リサを連れて街を出でくれ。俺の荷物はリサに預ける』だそうだ。確かに伝えたぞ」

「なつ、他に、他に何か言ってなかつたかい」

慌てたゲオルグが詰め寄つたが、老剣士は首を横に振つた。

「いいや、ワシが聴いたのはこれだけだ。それ以上の事は聞いても答えてくれなかつた」

それを聞いた仲間達は顔を顰めた。

レオには何か考えがあつたようだが、予定に狂いが出たのならこの先は彼の言う通り移動した方がいいだろう。

皆がリサに視線を向けると、彼女は必死の形相で訴えかける。

「まつて、待つてください、後1日だけ……お願いします」

涙を浮かべて頭を下げるリサに、仲間達は困り果てて視線を交わした。

領主の館に行つた後、レオは商業区の宿に泊まつてゐるセシリアの部屋に来ていた。

ノックすると返事が返ってきて、直ぐに扉が開いた。

「どうぞ、入つてください。昨日は有難う御座いました」

セシリアはそう言つて余つた金貨をレオに手渡した。
それを受け取つてサイフに入れる。

奴隸のエルフも涙ぐんでお礼を言つ。

「本当に助かりました。もう一度人間に買われていたらと思つて、ぞつとします」

あまりに感謝されて照れ臭くなつたレオは、手を振りながら答えた。

た。

「俺はちょっと金を貸しただけですよ。そういうえば、公国では奴隸は貴族しか買えなかつたけど、こいつらでは買えるんですね。それとも代理を頼むんですか」

「いえ、本来は買えないんですが、エルフは神の口ぞえがあつて、同族に限り買える事になつてゐるんです」

この前は、精神的に追い込まれていた所に色々な事を聞いて、その上時間も無かつた為に詳しくは聞いていなかつたが、購入した後首輪はどうしているのだろうか。

「それならアンロックスタンプはどうしてるんですか、お金を払つて貸してもらうとか？」

「いえ、一般人は忘れていますが、エルフを陥れた貴族や奴隸商人の間では有名な話で、報復を恐れている彼らには、誰でも首輪の効果を発動できるよう細工した上で、絶対にエルフにアンロックスタンプを渡してはならないと言つ暗黙の了解があるんです」

「なん……だつて……」

それを聞いたレオは青ざめた。

「なんてこつた、スタンプは絶対に貸せないと言つのは、俺のせい……。

レオは絶句するが、セシリアは気がつかずにそのまま続ける。

「開放されたエルフは、人間が殆ど入つてこれない森の奥深くで静かに暮らしているので、あまり問題では無いのですが……できれば取つてあげたいですね」

そう言つて幼馴染の首輪を見るセシリアだが、レオには最早何も聞こえていなかつた。

そんな……俺の、俺のせいだリサが……。

たった1日で、領主にも話を伝えてしまつバスラの影響力に、更に血の気が引く。

リサの容姿まで含まれたあの情報は、瞬く間に貴族中に広まってしまうだろう。

前日の夜にトランプをして笑っていたリサの顔が思い出される。

一瞬バスラに土下座でもして許しを乞おうかと思ったが、許す条件として何を要求されるかなど目に見えている。
それだけは、もう絶対に不可能だ。

「あの、レオさん、どうかなさいましたか」

「あ、ああ、大丈夫だ」

セシリアの声によつやく我に返つたレオだが、そのまま顎に手を当てて考え込んでしまう。

暫く黙つて考え込んだレオは、やがて低い声で呟くように呟つた。

「なあセシリア、エルフには魔物の軍に詳しい者も居るよな」

レオのあまりの剣幕に少したじろいだが、何とか答える。

「ええ、ハイエルフの長老は何度も戦いを経験しているつて……」

「できれば今すぐに、その人に会いたい。森までどれくらいかかる

「今すぐですか……着くのは夜になると思いますが」

「構わない、俺は一度宿に戻つて話していく。その後直ぐに行こう」
その後魔軍の襲撃時期の予測を聞いて2人のエルフに挨拶をし、部屋を出ると、仲間の待つ食堂へ向かった。

食堂で、一度皆に事情を言おつかと悩んだが、まだ何の策も無いので止めておいた。

その後部屋に戻つて忍び装束に着替え、大急ぎでセシリ亞と合流し、街を出た。

奴隸だつた女性はレオがおぶつて行つたのだが、かなり体力が弱つており、あまり急ぐ事が出来ない。

魔物にも何度か遭い、結局着いたのは夜中だつた。

「さすがに今から長老を起こすのは不味いので、今日は私の家に泊まつてください。明日の朝にでも会えるよう頼んでみます」

気が逸つて仕方がないレオだつたが、こればかりは仕方がないので諦めて朝を待つた。

翌日長老に会いに行くと、仲間を助けた恩人と言う事もあり、かなり手厚く迎えられた。

長老とは言え、見た目はレオと同じで十代後半か二十歳くらいの男性なのだが、数万年は生きていると言われて驚いた。

「始めてまして、アルフと申します。こちらの大陸ではもう、高齢の靈木は無いので、新しい仲間に会えてとても嬉しく思います。恩人でもありますし、是非遠慮せず何でも聞いてください」

レオは付き添いのエルフに会釈して、これまでの経緯を話し始めた。

始めはワイバーンを倒した事などに笑顔で驚いて見せていたが、次第に顔つきが悪くなってきた。

「なるほど、確かにそれは不味いですね」

「どうしても敵将の首が欲しいんです。何とかなりませんか」

アルフはかなり渋い顔で顔を顰めて考えていたが、やがて口を開く。

「レオ殿はワイバーンやジャイアントを単独で撃破したと仰りましたが、本気を出せばどの程度の強さなのですか」

「そうですね……本気を出せば、単独でドラゴンくらいなら倒せます」

実際にこの世界のドラゴンと戦つた事は無いが、ワイバーンの強さはグラビティワールドと同じくらいだった。恐らくは火龍クラスが出ても勝てるだろう。

レオの言葉にエルフ達はざわめいた。それを制止すると、躊躇いながらもアルフが続けた

「それなら可能性はあります、しかし……」

「取り合えず聞かせて下さい。無理なようなら諦めます」

「解りました。では、お話ししましょう。本来は方法として他人に言うべき内容では無いですが……正直、もし本当にスタンプが手に入つたら使わせて欲しい、と言う欲目もありますから」

レオはそれに頷く。

元よりリサを開放した後、用が済んだら協力の代償に彼らにスタンプを渡すつもりだった。

「まず、順番に魔物の軍から説明します。

彼らは確かに力での上下関係がありますが、基本的に知能が低く、そのままでは軍隊と成る事は無いのです。しかし魔神と言う存在が原始の海^{ヌシ}から数百年に1度生み出される事で、そのカリスマに惹かれて命令に忠実に動き、軍隊となります。

魔神はかなり強いですが、それでも単体の生命。それを要にしている彼らが最も恐れるのは、精銳による魔神の討伐です。

よつて彼らの序盤の戦いは、繁殖力の高いゴブリンやオーガを餌に将来脅威になりそうな精銳を炙り出し、その芽を摘む事から始めます。

具体的に言うと、数代前の魔神が敵の城の地下に作つた巨大な魔方陣へ本陣ごと転移し、本陣まで攻め込んでいた強者を孤立無援にして潰すと言うものです。

その設備はとても強固に出来ており、壊す事ができずに戦争では苦労しました。

これにより戦場で敵将を倒す事は困難になりますが、転移で飛んだ先では敵に逃げる場所はありません、外壁は無いはずですし、そ

「Jで詰め寄つて殺し、全力で逃げればアサシンの貴方なら……」

「J今まで言つてアルフは首を振つた。

「すみません、夢物語を語つてしましました……」

自分で言つていて不可能だと思つたのか、諦めたよつて溜息をつく。

だが

「実はちょっと、変つた力がありまして」

そう言つて、目の前から忽然と姿を消したレオを見て愕然とした。

再び現れたレオにエルフ達は皆驚愕、アルフが興奮したように続ける。

「凄い……魔法も使わずに姿を消せるなんて……」

「少々事情があつて、Jついた能力が使えるんです。それと

更に、ビューテレポートもしてみせる。

詠唱無しのテレポートが珍しいのか、周囲のざわめきが更に大きくなつた。

「Jの通り、短距離用のテレポートも使えます。長距離は向きませんが、先ほどの能力と組み合わせれば、もし見つかっても逃げ切れる可能性はあります」

それでも少し悩んだアルフだったが、やがて決心したのかレオに

向き直った。

「解りました。そこまで言つなら、我々も全力でサポートしますよう。話から察するに時間はまだ有りそうですし、森の奥の宝物庫から色々と持つてきますので、レオ殿も今日は準備をしてしつかりと休んで、明日の朝発つのがいいでしょう」

その後アルフは宝物庫へ向かい、レオはエルフ達を相手に色々と準備をした。

まず解ったのは、どれだけ隠蔽スキルを使つても、レビュート等の常に効果がある魔法を使つていると、魔法使い相手には魔力でばれてしまうという事だ。

それでも姿が消えていればかなり見つかり難いが、確実を求めるなら魔法は避けたほうが無難だろう。

次に、倒した証拠に体の一部を持つて帰る手段として、保存の為に盗賊が使つていた破壊力の少ない凍結魔法を学んだ。

調節が多少難しいが、凍れば良いだけなので取り合えずよしとする。

そういうしている内にアルフが戻り、作戦会議を行う事になった。

「まず、じちらの地図をご覧下さい」

中心に城が書かれ、周囲に山や森、平野といった大体の地理が書

かれた羊皮紙の地図が広げられる。

「これは魔界の地図で、中心が敵の城になります。」こちらに戻る時は空間の歪を通らなければならないのですが、歪は常に一定の範囲でズレ続けていて、探す必要があります。

最も近いのはドリューク村の近くですが、あの辺りは強力な魔物が多くいるので、探し回るには適していません。

次に近いのは今魔軍が居る所なので、その次の、歩いて3日ほど南に向かつた所にある歪が宜しいかと。ゴブリンの生活する穀物地帯でこちらで言えばダールの近くなので、そこで探すのがいいでしょう。

それと城の中は最後に見てから数千年経っているので、今はどうなっているか解りません。

さて、レオ殿には念のためこちらの地図を2枚と、昔の戦争で使っていた魔法のコンパスを差し上げます。

魔界は空間のブレが酷いのであまり宛にはなりませんが、無いよりはマシでしょう。

それとこれは、奴隸になっていた者達に渡している靈木の若葉と言われる薬草で、多少の傷の治療と精神的苦痛を緩和する効果があります。十枚程しかありませんが、持つていてください

3種類の道具を受け取り、頭を下げる。

靈木の若葉は、エルフの書いたメモには、今では靈木自体の数が減つても貴重な薬草になったと書かれていたはずだ。

「有難う御座いますアルフさん。大切に使わせてもらいます

「もつと手助けが出来ればいいのですが、一緒に行つても足手まと

いで、迎えに行こうにも着いた頃には終つているでしょうか?」

「これで十分です。それじゃ、今日は寝ますね。明日は長い一日になりますだ

「必ず帰つて来てください。お待ちしています」

レオは力強く頷いて屋敷を出た。

その日はセシリアの家でゆっくりと休み、これからに備えた。

翌日、セシリアに見送られて森を出る事になった。

「では5日後にはハウラに行きます。数日は待つので、この間の宿に来てください」

「勿論です。期待して待つていてください」

そう言つて笑いかけ、街へと急いだ。

行きと違つて1人だったので、毎にはハウラに着く事が出来た。

戻つたレオは直ぐに自室に行き、森で貰つた品を収納袋に隠した。こんな無謀とも言える作戦を、仲間達に言つつもりは無い。オリハルコンと宝石を取り出し、こいつそっと街へ出ようとすると、ゲオルグに見つかった。

タイミングは最悪だったが何とか誤魔化して、買い物に出かける。

レオはまず、織物ギルドで長い布を買った。

次に昨日の路地裏に隠れてオートリザレクションが3回分かかつた指輪を4つ作る。

それから冒険者ギルドへ向かい、ダールに逃げる低ランク冒険者に正式な依頼をして、宿の女将宛の金貨の入った小包を渡した。

最後にギルドの隣の酒場に居た偵察兵の老剣士に、魔軍の情報を聞き、伝言を頼む。

予定では5日で戻るはずだが、余裕を持つて6日後にして伝えた。

そこでレオはゲオルグに見つかり、宿の食堂へと戻った。途中でホワイトパールと同じローブを着た青年を見かけ、つい反射的に声をかけてしまう。

転移魔法の専門家である彼は、魔軍の転移について知っている様子で、レオはかなり焦ってしまい、強引に話題を変えた。

ホワイトパールの事も聞きたかったが、今は雑念など無い方がいいので、後日会う約束をしてその場を去った。

食堂での報告では、特に情報は無かったと言つて誤魔化そうとしたが、リサに怪訝そうに詰め寄ってきた。

「何か隠し事してませんか

」「いや、何も無いよ」

眉を寄せて見つめてくるリサに、「ああ、そつまえば」と言つて話題を変える。

「笛こじれを着けてくれ、気付け効果のある魔法が3回分込められた指輪だ。多少の怪我なら同時に治してくれる」

込められている魔法、オートリザレクションは、戦闘不能を直す魔法でこちらの世界では蘇生に当たるかもしれないと思つたが、確証が無いので気付けと言つておいた。

これまで グラビティワールド でのソロ活動でよくお世話をなつていた指輪に、仲間を守つてくれと願いを込めて渡す。

そして彼らが指輪をつけるのを見て、レオは安堵して頷いた。代わりに警笛の指輪を返してもらひ。一人旅では、非常に役に立つはずだ。

部屋に戻ると、織物ギルドで買つた長い帯をサラシのよつに巻きつけ、前面に靈木の若葉とコンパス、背中に昨日保存食専門店で買った干し肉と地図を入れてきつく縛り、皮袋を右脇に、薄く作つてもらつた水筒を左脇に括り付ける。

レオが準備を終えて宿を出ると、またゲオルグに声をかけられた。本当に勘がいい、気をつけなければ。と、ゲオルグを盗み見つつ、北門へ向かつた。

リサに戦場に立ちたいと言われたとき、レオはかなり困つた。予定ではレオは途中で居なくなる。何かあつたらどうするんだと思つたが、核心については言えず、説得し切れなかつた。

レオはもう少し粘ろうかとも思つたが、イージスも持つているし、ゲオルグとギルを後方に置く理由にもなるだろう。ゲオルグ達のためにもなると諦め、了承する事にした。

戦闘が始まり、レオは敵軍から目立つよう^に撃乱攻撃を仕掛けた。あまりにも強すぎる。と思われないよ^{うに}、空を飛んだりクイックで超人的な行動をしたりするのは避けて、徐々に疲れていく風を装う。

やがて増援の騎士団が到着し、手柄を焦つた貴族が馬に乗つてやって来た。

「まで、こっちへ来るなつ」

「喧しい一兵卒がつ、貴様はその場で待機だ！」

返事をしたのは、領主の館で見かけた貴族だった。

「危険なんだつ」

「こ^こは戦場なのだ、そんな事は当たり前だ、いいから貴様はそこにいろ！」

全く話を聞かない相手に舌打ちしつつ、状況を確認する。
敵の本陣が集まつてきている。レオを囮む包囲網が、そこへ誘導するように形をえてきた。

そこでふと、左手の刀を見た。

そういえばエルフ達は装備の魔力など解らないと言つていたが、バルドは鞘に入つた刀の魔力を感じていた。

多少解るようになつて来た位のレオは刀の魔力など、持つていてもさっぱり解らないが、魔物の中には解る者も居るかも知れない。スキルを解いた時ばかりではないし、念のためにこちらで捨て

ておく事にすした。向こうで捨てたら確実に戻らないし、レオの予定ではそれ程戦闘は多くないハズだ、 天羽々斬り があれば十分だろう。

「レオ、 戻れ罷だ！」

投げた刀を目で追つたゲオルグが、 転移に気付いたのにはヒヤリとした。

巻き込むかもしれないと焦つて振り返つたが、 こちらに来る寸前に転移が発動する。

バチンツーといつ音と共に魔方陣が展開し、 視界が暗転した

が、予定通りに行つたのはそこまでだつた。

「があつ……」

戦場で隙を見せる事の意味を、レオはまだ解つていなかつたのだ。

ゲオルグに気を取られて振り返つていたレオの右脇腹に、忍び装束の隙間から滑り込むよつにして、ゴブリンの細い槍が入つた。

慌てて槍を斬り払い、柄を短くしたレオだったが、焼け付くような痛みの前によろめいてしまう。

遠くで転送に巻き込まれた貴族兵の絶叫が上がるが、今はそれ所

では無い。

今がチャンスとばかりに群がる魔物の兵を飛び越えた時、部屋の奥で護衛と共に階段を上る将軍が見えた。

着地と同時に口元の布を取つて少し吐血したレオは、何とかテレポートで追いすがろうとしたが、激痛で集中する事ができない。地に下りたレオは槍を抜こうとするが、元は狩猟用だつたらしく返しがついていて簡単には抜けない。

「クソ……ツ」

かなり痛いが、奇襲以外では切り札の魔法は使えない。攻撃を避けつつサラシから靈木の若葉を2枚取り出して口に入れた。槍先は刺さつたままだが、一応出血は止まり、痛みで混乱した頭にも多少の冷静さが戻る。

周囲の魔物を斬り伏せ、飛び上がつて様子を見たが、将軍は既に部屋を出た後だった。

気を取り直して状況を確認すると、貴族の兵は最早ほぼ全滅していた。

それに安堵したのか、転移を行つた魔術師がぞろぞろと階段を上つていく。

レオは『断裂』を使い、広範囲の敵を殲滅すると、敵陣に突つ込むようにして『透身』と『無心』を使い、姿を消した。

しかし幾らレオが驚異的身体能力を持つとはいえ、苦痛を絶えながらぶつからないように進むのは困難で、階段へ着いた時には最後の1人が柵を越える所となり、飛び込むような格好で滑り込んだ。

「ん?」

強引に滑り込んだせいで、魔術師のローブの裾に当たってしまい、冷や汗がながれる。

魔物の魔術師は多少首を傾げたものの、それ程気にせずに階段を上つていった。

床に少し血もついてしまったが、元々そういう用途の部屋でもあり、薄暗いので気にならなかつたようだ。

魔物の城は全体的に薄暗く、1階は床も綺麗とは言えないものだつた。

地下室を出たレオはまず、兵士達の詰め所を探す。

レオは名称が解らなかつたが、城の内部はトロールと呼ばれるオーラより少し大きく、知性もある魔物が多く居た。

声を殺して彼らの後をつけながら城内を散策し、開けっ放しの部屋へ入つた。

中は雑魚寝のようで、藁に布を被せた簡易ベッドが並んでいる。2~3匹ほどトロールが居たが、交代制なのか今は眠つていた。近場のベッドを巡り、少々鎧の見えるナイフ、所々黄ばみがある布、枕元にあつた酒を盗んだ。

それを持って2階へ上がり、人通りの少ない物置の奥で隠蔽魔法を解いた。

「いつてえ……」

靈木の若葉の効果も切れてきて、苦痛で汗が噴出し始めていた。時間もそれ程余裕がある訳ではない。急いで槍先を取り除く作業を始める。

天羽々斬り を使わるのは誤つて伸ばしてしまつと大変な事になるからだ。

酒を掛けた布でナイフを拭い、ある程度汚れを取った後、もう一度酒で濡らし、サラシでふき取った。

始める前に靈木の若葉を数枚取り出し、2枚程噛み砕いて少しづつ飲み込んでいく。

布を巻いた來国俊の鞘を咥え、短くしていた槍の柄を持つてナイフで抉り出す。

「 ッ！」

血を止める代わりにくつ付いてしまった肉を裂き、槍先を取ろうとするが、切れ味の悪いナイフでは激痛で上手く行かない。仕方なくある程度切った所で 天羽々斬り を取り出し、返しの周りを切つた。

痛み無く切れた事に安堵し、靈木の若葉を飲み込んで槍先を取る。

傷口を抑えるが血が溢れ、鞘をかみ締めて酒を掛けた後、懷から出していた靈木の若葉の残り3枚を全て食べた。

何とか傷口が閉じたので、服についた血を絞つて布で拭き、右脇にあつた皮袋を見た。

皮袋には大きな穴が開いてしまったので、2枚ある羊皮紙の地図の内、1枚を三層の皮袋の穴の部分に入れた。

作業を終えたレオは隠蔽スキルを使い、急いで部屋から出て行く。

將軍を探すために歩き回りとした矢先、大量の剣を腰に下げて槍を背負い、赤い鎧を着た、エイリアンのような黒いテカテカした顔の悪魔と、その従者と思しき人狼のような魔物が通路の奥に見えた。

かなり豪華な鎧だったので、上位種かと思い念のためく一体化>

を使う。

レオの輪郭がぼやけ、体が溶けるような違和感に襲われる。

ただ、先ほどチラリと見た将軍は肌が赤く角が生えていて、白い鎧を着ていたはずだ、彼らは將軍ではあるまい。

く一体化スタミナによって、魔力とS.P.がガリガリと削られていく。できれば長居はしたくないと、無視して通り過ぎようとした時、背後で悪魔が呟いた。

「はて、こちらから強い武器の気配を感じたのだが……」

天羽々斬り を使った時の事だろう。

気付かれてはいない筈だが、レオは反射的に身を強張らせる。

「勘弁して下せえよグレイヴ様。こないだも同じような事言つて、部下殺してまで武器を奪つて、謹慎させられたばかりでしょ。」
真面目に戦えば、王以外で最強とまで言われてんですから、もう少し自重してくださいよ」

「それは解つているが……」

小言をもらつてもグレイヴは首を傾げ、未だ納得が行つていな様子だ。

彼は従者の人狼に連れて行かれたが、騒ぎが大きくなれば、物置の血の跡が見つかるのも時間の問題かもしれない。

それから一時間近く城内を駆け回つたが、一度見失つた将軍の姿は簡単には見つからなかつた。

見かける敵は雑魚ばかりで、使用しているスキルはく透身トシモンくく

無心^{アバランチ}だけとはいって、使うのには魔力とSPを消費する。レオは常人を遥かに越える量を持っているが、それでも無限ではない。

いつその事魔神の方を狙おうかと思ったが、上階にレオでも解る魔力の動きを感じて止めた。

恐らく、周囲を包む常在系の攻撃魔法か結界の類だらつ、暗殺には不向きな相手だ。

けれど傷も完治した訳ではない、徐々に痛みがぶり返してきているのだが、靈木の若葉は残り3枚だ、帰りの道程を考えれば耐えなければならない。

一度外に出て回復を図りたいという思いが幾度となく頭を巡る。

戻るのは駄目だ、この機を逃せば隠蔽スキルを警戒される。それに初見で通じなかつた罠など、俺相手には2度と使おうとはしないだろうし……。

諦めかけたその時、見覚えのあるロープを着た老魔術師が廊下を走るのが見えた。

そのロープは転移魔法を行つた魔術師達のロープに似ているが、多少豪華にしたような物だつた。

<一体化>を使って後を追おうとして一瞬逡巡する。

恐らく、魔力的にもSP的にも上位の者が居る階に行けるのは一度切りだ、もしハズレなら後がない。

だが、1時間探し回つてようやく巡ってきたチャンスだ。これを逃したらもう次はないだろう。

そう自分に言い聞かせ、「一体化」を使って後を追つ。

4階へ上った老魔術師が、大きな扉の前で息を整えるのを見て、アタリだと思った。

扉の枠の上に飛び乗り、壁に張り付く。

やがてノックの音が響いて、返事が帰ってきた。

「入れ

「失礼します」

老魔術師が扉を開けるのに合わせて、扉を少しだけ外側に押す。腕に違和感を覚えた老魔術師は、自分の腕を見て眉を顰めた。

その隙に室内に身体を滑り込ませ、反対側の枠に手を掛けてその上に上がる。

部屋の中に居たのは、赤い顔に巻き角を生やし、白い鎧を着た将军だった。

「何をしている」

「いえ、何やら腕が……」

それを聞いた将军は溜息をついた。

「いくら魔術師とは言え、急げすぎじゃないのか。お前とて魔族の

一員なのだぞ……良いから、とつと入れ

「し、失礼しました」

慌てた老魔術師は、室内に入ると言ごとにくそつに額を搔いた。

扉の上に張り付いたレオは、ゆっくりと息を吐いて苦痛に耐える。

「どうしたんだ」

「それが……例の黒いアサシンが、忽然と姿を消したとかで……」

それを聞いた將軍は、元々皺だらけだった顔をさらに顰めて怒声を上げた。

「何をやつているつ、今回は奴を確実に引き込むために、予定より早く飛んだんだぞ！」

「も、申し訳ありません、門は閉まっているので、城内に居るはずなのですが……」

話が長引きそうになり、レオは焦ってきた。顔を伝う脂汗で口元の布は最早びしょびしょになるほどだからだ。

汗が落ちないように祈りつつ、会話が終るのを待った。

「転移を使ったのでなければ、魔法を使って姿を隠しているはずだが、城中の魔術師を使って意地でも探し出せ」

「しかし、奴は怪我をしても魔法を使わなかつたと言つので、魔法は使えないのではないかと」

「魔法の道具を使つてゐるかもしぬないだらう、いいから今すぐ探しに行け！」

老魔術師は震え上がつて頭を垂れた。

「は、はいっ、了解しました。必ず見つけます」

そう言つて老魔術師は部屋をでた。

扉が閉まるのに合わせて、レオが床に降り立つ。

「全く、またあの我慢な魔神に小言を言われるではないか……」

そう言つて、机の上の羊皮紙に目を向ける将軍の背後に、息を殺して回り込む。

ゆっくりと腰から 天羽々斬り を鞘^{ササシ}と外し、首の位置に構え、痛みで逸る気持ちを抑えて静かに機会を待つた。

やがて将軍が羊皮紙から目を離し、「ふう」と言つて背もたれに身をゆだねた瞬間

漆黒の刃が、横一線に払われた。

鮮血を避けるため、僅かに後方に飛び、鞘を腰に戻す。

震える手を何とか動かし、皮袋を取り出して床に落ちた將軍の首を押し込むと、強引に懷に入れた。

扉の前に立ち、力チカチカチと鳴る歯を食いしばって耳を当てて外の様子を伺う。

気配は無い。

少しだけ扉を開けて更に外の様子を伺うが、誰も居ないようだ。

素早く外に出て扉を閉め、全隠蔽スキルを使い直す。

その後1階まで降りようとしたのだが、警戒が厳重すぎたので断念して戻る事にした

2階へ戻ると、ちょうど血痕が見つかったのか、さつきの部屋に人が集まり始めていた。

急いで建物の反対側へ行き、同じような物置を探して中に入る。小さな窓には柵がかけられており、グレイヴの事があって迷ったが、切り取る事にした。

隠蔽スキルを一旦切つて、少し大きめに窓の周りを切り取り、柵を取つ手に引き抜いて床に置く。

姿を消して下の様子を見ると、丁度近場の衛兵が入り口の衛兵に話を聞きに行く所だった。

一思いに飛び降り、周囲を警戒するが、気付いたものは居ないようだ。

衝撃で血を吐きそうになるのを何とか堪え、街の外へ向かつた。

アルフからは外壁は無いはずだと聞いていたが、かなり高い外壁があつて冷や汗をかく。

グレイヴの事があつて城を出てから「一体化」を使っているため、疲れで足元が覚束なくなつてきていた。

それでも何とか門を見つけると、暗殺の話はまだ来ていないのか、空いたままだつた。

急いで門をくぐり、「一体化」を止め、距離を取るために走つた。スキルは魔力も使うがSP^{スタミナ}の消費の方が圧倒的に多い。

「はあ……はあ……」

完全に息が上がつてしまつているが、外壁の周りは草原だ、今スキルを切つて休めば目立つので、離れなければならぬ。

外壁が小さくなつた頃、ようやく木陰を見つけてスキルを解くと、それに合わせたように門が閉まつていつた。

とりあえず、傷に解毒と治癒魔法をかけ、SP^{スタミナ}と魔力を持続回復させる魔法を使う。

痛みから解放された事に安堵しつつ、警笛の指輪をはめて上着を脱いだ。

水鉄砲で汚れを落とし、水筒で水を飲むと、袋に入った首に凍結魔法をかける。

流石に極限状態が続いていたので、服を着て少しだけ木陰で休む事にした。

だが、暫くすると外壁の門が開いて犬のような物に跨つた者や、巨鳥に乗つた者が飛び出してきたので、再び進まざるを得なくなる。元々 グラビティワールド はMPやSPの回復が遅いゲームだつたが、現実では更に遅いようで、あまり回復できなかつた。

それでも気を取り直して走り出したのだが、問題はそれだけでは無かつた。

次の日の午後、予定通り穀物地帯に入つたのだが、畑を見たレオは愕然とした。

「ウソだろ……」

穀物地帯を通過すると言つ事で、食料についてはある程度現地で調達しようと思っていたのだが、畑はその殆どが枯れていた。

魔物が瘦せていて、食べ物は少ないだろうとは思っていたが、広大な畑が殆ど枯れていると言うのは、流石に想定外だつた。

無事な場所もほんの少しあるにはあるが、オーガやトロールが見回りをしていて安易に取りには行けない。

今は目立つ行動は避けたい、殺しても良いなら奪えないことも無いが、森に入ったほうが無難だらうと考えを改めた。

しかし、森の中も木の実は喰い飛されており、ウルフのような食用にできそうな魔物も居ない。

見るからに毒がありそうなカラフルな大蛇や、紫色の植物の魔物などは居るが、とても食べられるとは思えなかつた。

干し肉はとうに底を突き、メモの知識を生かして必死に薬草や山菜を探し、靈木の若葉を1枚噛むと、水鉄砲で作った水筒の水を多めに飲んで飢えを凌いだ。

何とか2日目の中には歪の移動範囲内に入ったのだが、魔界の森は魔物が多く、どんなに隠れても、警笛の指輪をつけて寝ると2時間としない内に起こされた。

しかも移動し続ける歪は1人で探すのは非常に困難で、同じ場所に留っている事もあり徐々に焦りがレオを蝕んでいた。

丸1日近く探し回った頃、既に靈木の若葉は切れ、魔法によって魔力とSP^{スタミナ}は回復していたものの疲労困憊という体になつた時、上空から3羽の巨鳥と1頭のレッドワイルドバーンが飛来した。

巨鳥からは人狼の従者と兵士、レッドワイルドバーンからはグレイヴ^ガが降り立つた。闇雲に探しても見つからないと考え、歪を張り込もうと言うのだろう。

隠蔽を警戒してか、兵士は結界魔法を、グレイヴは常に微弱な雷を纏っている。

グレイヴが居るので、レオは仕方なく持続回復の魔法を止めてく「一体化」を使った。

「いいかっ、絶対に結界を切らすな。標的を見つけても無理に挑まず、必ず笛か魔法で連絡しろ!」

グレイヴがそう怒鳴ると、兵達は敬礼をして素早く散った。

彼らに先を越されると不味い事になるだろう。雑魚の兵士なら一瞬で倒せるだろう、しかしその道 天羽々斬り を使えばグレイヴにはばれてしまう。

見つかっても強引に突破する事は出来るが、そうなれば中継地予定のダールに寄る事が出来なくなる。

幸いこちらは、一日中探し回つてある程度予想範囲を狭めていた。賭けになるがそこを探すしかない。

彼らから距離を取りつつ、必要な時だけ隠蔽スキルを使い1時間程探してようやく歪を見つけた。

だが、安堵したのも束の間、視界の端にグレイヴが見える。

必死に走るが、^{スタミナ}「一体化」でSPが削られ疲労と睡眠不足で思うように走れず、徐々に距離を詰められていく。

やがてグレイヴの魔法範囲が足に着こうかという頃、ギリギリで歪に飛び込むことが出来た。

距離を取つて様子を見ると、グレイヴは歪から出て暫く辺りを歩き回つた後、やがて魔界へ戻つていったようだ。

魔界に入つてから3田畠の夕方にじてようやく元の世界に戻つたレオは、何とか中継地点のダールまではコンパスを頼りに南を目指した。

街道に出た時には安堵で膝を突いてしまつたが、まだ安全になつた訳ではないと思い直し、ゴブリンやオーガを蹴散らしながらダールへ向かつた。

数時間歩いて、夕刻、外壁の衛兵が、レオを見て慌てて駆け寄つた。

「お、おい大丈夫か

その頃には最早レオは足取りもおぼつかず、視線も定まらない状態になっていた。

「魔物の……将軍のく、首……」

そう言つて広げられた皮袋の中をみて、衛兵は目を剥いた。隣国が魔物の軍に襲撃されているのは聞いていたからだ。

「ハウラに……持つて……」

「これを持つて行けばいいのか?」

衛兵がレオから袋を取ろうとするが、レオはその手を振り払う。

「駄目、だ……俺が……でも、少しだけ、やすませ……」

「わ、解った。とにかく入れ」

レオは衛兵に肩を借り、宿の名前を言つて街へ入った。宿に入ると女将が慌ててカウンターから出でてきた。

「ちょっとレオ、どうしたんだ!」

「女将……頼み……が

「頼み?なんだ、何でも言へなつ」

掠れるよつなレオの声に、女将は口元に耳を当てて聞いた。

「ギ……ルドの……ファイルに……この袋、凍らせ……魔術師を……」

「解った。ファイルに頼んで魔術師を探してもらつから、アンタはとにかく部屋で休め」

女将はそう言ひつと衛兵にマスターキーを投げつけ、前掛けを脱いで宿を出る。

「ど」でも良いからベッドに寝かせろ、先客が居たら隣に移らせなー！」

朦朧とする意識の中、何とかベッドについたレオは、そのまま泥のように眠つた。

「 オ、レオッ、そろそろ起きるんだ」

女将に呼ばれて目を覚ますと、既に翌日の暁だった。
ベッドの脇に、食事が置かれている。

「腹痛くなるだらうけど、取り合えず食うんだ。ゆっくり食つて、また少し休め。ファイルが駆け回つて良い魔術師2人捕まえてくれたから、袋は大丈夫だ。それと、他に何かあつたら、今のうちに言つてくれ」

レオは食べながら簡単に経緯を説明した。
女将は心底呆れたとばかりに頭を抱え、黙つて聞いている。

「すいません……あ、お金は後で届くよつとしてあるんで、ツケでお願いします……」

「はいはい。しかし、バカな奴だとは思つてたけど、アンタマジで本物だよ……」

反論したくない女将の言葉に頭を下げつつ、ビラセなのでもう一つ頼む事にした。

「それと、鍛冶ギルズの近くのバルディンと言つづワーフの工房に行つて、刀を取つてきてくれますか。事情を話せば返してくれるのはずなので」

「わかった。持つてくるからもう少し寝ときな

2時間ほどしてレオが目を覚ますと、窓の外に女将が見えたのでロビーに向かう。

すると女将が、刀と保存食を持つてきていた。

そろそろ出ると言つと、従業員に皮袋を取りに行かせ、待ちながら話をする。

「鍛冶屋から伝言だ、『使い終わったら直ぐ返せ』とだ」

バルドリヒに言つて草に苦笑しつつ、刀を受け取る。

「これ俺の物なんだけど……」

「せう言つと思つて聞いたり、『あんな見送りをせとひ、たつた10日程度で戻つてくるヤツにほいの位の扱いで丁度いい』だとさ

何とも言い返せないレオは、観念したように笑う。それを見た女将も、面白そうに少し笑っていたが、丁度その時、従業員が皮袋を持ってきた。

それをレオに渡すと、いつもの顔に戻つて言つた。

「さて、そろそろ行くんだろうけど……気をつけるんだよ、ここまで来て油断して死んだりしたら、承知しないからねー！」

女将の叱咤に、苦笑して頭を下げる。

「絶対に辿り着きます。いつも世話になつてばかりで、すみません
「ウチは冒険者の世話を焼くのが仕事だからね。ほら、とつと行きな、リサが待ってるんだわ」

呆れたように微笑む女将に頷いて街を出ると、全快したレオは空を蹴つて真っ直ぐにハウラへ向かつた。

森の中を蛇行しながら進む陸路と違つて、空では一直線に進む事が出来る。

途中何度か巨鳥に出合つたが、刀も戻つたレオの敵ではない。

問題と言えば警笛の指輪をつけて寝ても、何も襲つてこない事があつて、一度將軍の頭部が解凍された事があつたくらいだ。

5日の道を2日で通る予定だったが、これまでのアクシデントで疲弊していため3日掛かり、昼過ぎ、遂にハウラが見えてきた。

地に下りて門へ向かうと、衛兵が困惑したようにレオの顔を見た。

「な……お前死んだんじゃ……」

レオはそんな衛兵に構わず、皮袋から將軍の首を取り出す。顔に驚愕を浮かべる衛兵を前に、高らかに宣言する。

「敵将の首だつ、今すぐ領主に取り次いでもらいたい！」

衛兵は驚愕して腰を浮かせ、「わ、解つた、ちょっと待つてくれ」と言い残して門の中へ消えた。

暫くして門を通され、直接領主の館へ向かった。

元城という事もあり、通された謁見の間は完全に玉座の間といつ雰囲気だった。

首は本物かどうか確かめると言われ、実際に將軍を見た兵士や偵察兵、魔物に詳しい者などによって鑑定が行われている。不機嫌そうに待っていた領主のクラウスは、本物と思われると言う報告を聞いて、「そうか」とだけ答えた。

「まあ、違つだろ」と意見は無かつたし、あれは確かに敵将の首だらうな

クラウスは渋々と言ひ顔で認めた。

「では、約束通り

レオが続けてスタンプを要求しようとすると、クラウスは手を上げてそれを遮った。

「しかしな、同行していた貴族兵が戻つてこないのはどうこう訳だ

「それは、彼らが自ら付いて来たのです。私も止めましたが、聞く耳を持つて貰えませんでした」

「貴族兵の中には、バスラ公爵も居たと言つ、まさか故意に見捨てた訳ではあるまいな」

それならば確かに疑われても仕方の無い部分もあるだろう。
だが、転移先ではそのような余裕は無かつた。負傷していた事を告げ、血塗れのサラシを見せると、クラウスは顔を顰めて「もう良い仕舞え」と手を振った。

「しかし、あの条件は戦時下で出したもの。一時休戦となつた現状では首の価値も下がるからなあ」

「それは私が將軍を倒して、敵が混乱しているからです！」

必死に抗議するが、クラウスはとぼけた様子で視線を逸らし、周りの貴族は薄く笑っている。

長旅の疲れと暗殺の重圧で、精神的に疲弊していたレオは、青筋を浮かべながらも今暴れれば台無しになると何とか堪える。

「そうだな、手柄は手柄だ、あの首は私ならば有効に使えるし、条件着きで良ければスタンプを貸してやろう」

「条件？」

「そうだ、お前にはこの領の軍に入つてもう一つ

「なつ……」

つまりは都合の良い手駒になれと言つた話だ。

しかもそれを受けたからと言つて、直ぐにスタンプを貸すとは限らない。レオがどれ程スタンプを欲しているか解つて居るのだから、反逆を恐れて焦らして来るだろつ。

もういつその事この城の兵士を皆殺しにしてスタンプを奪つてやろつかと思い始めた頃、謁見の間の隅から、凜とした女性の声が響いた。

「随分と興味深い話をしているな

声のした方を向くと、金髪の女性騎士が警備の兵士と思われる男を氣絶させて脇に置いていた。

彼女を見たクラウスは、震え上がって危うく玉座から落ちる所だった。

「ふ、ブルーローズ様、どうじで……」

「その名で呼ぶなど言つてはいるだろつ、恥ずかしい……私の事はシャンティと呼べ」

ブルーローズことシャンティは、氣絶した衛兵を蹴飛ばすと、クラウスの傍らへゅつくりと歩み寄りながら話続けた。

「言われた通り密間に待つていたが、なにやら城内が騒がしくなつてな。歩き回つて聞き耳を立てると、敵将の首が届いたとか言つてゐるではないか。

そこで様子を見に来てみれば、絶対に私は通せないと言われたので、衛兵を気絶させて来たんだ。ま、無作法だつたがそこは許せ」

顔だけ見れば美女のシャンティを前に、クラウスはガタガタと盛大に震え、周りの貴族も真っ青になつてゐる。

そんなクラウスの肩に左手を置くと、震える彼を無視して右手を件の柄に置き、困惑しているレオに向き直つた。

「名乗りが遅れたな、私はシャンティ。Sランクの冒険者で、今はナルバ共和国の親衛隊団長をしている。対魔軍の増援としてこの街に来たのだが……迷惑をかけたな、エルフのアサシンよ」

「なるほど、貴方が……」

シャンティは青い鎧を着ている、恐らくはそこからブルーローズと呼ばれる事になつたのだろう。

「さて、前置きは終わりだ。私の耳が腐つていなければ、そこの者は敵将の首を単独で取つて命からがら戻り、金も地位も名誉も要らないから約束の物をよこせと言つたが、貴様はそれを誤魔化そうとした。と言う風に聞こえたのだが、違うか？」

クラウスは冷や汗をながし、何度も喉を鳴らしてから震える声で答えた。

「し、しかし、エルフにアンロックスタンプを渡すのは、色々と不味い事が……」

「だからこそ無茶を言つたのだろう、そしてそれを実現された。これはエルフの失態ではなく貴様の失態だ。しかも敵将の首と言う成

果は自分で使おうとしたらしいでは無いか。

確かにお前の方が共和国から多くの報酬をもぎ取れるだろ。だが、そんな事が許されたとしても思つていいのか？

最早返す言葉が無いのか、黙りこくつたクラウスに、シャンティは「スタンプは何処にある」と聞いた。

「部屋の金庫に……けれど渡すのは……」

尚も食い下がるクラウスの前に、瞬きの間に白銀の剣が添えられた。

「2度は言わん、鍵を寄越せ」

シャンティは震える手で懐から出された鍵を引っ手繩ると、レオに声を掛けて謁見の間を後にした。

使用人に場所を聞いてクラウスの部屋に向かつ途中、人通りの無い廊下で、シャンティは突然話しお出した。

「これは独り言なのだが」

気が抜けて朦朧としていたレオは、その言葉で現実に引き戻される。

顔を上げたレオを視線で確認すると、シャンティは続きを語りだした。

「この国は強いエルフに対して警戒感を持っている。今はまだ無い

がいすれ近隣の領主から、私にも君を捕縛しても軍に入れないと言う命令が下ると思う」

それを聞いたレオは頭を抱えた。

折角長旅から戻ってきたのに、直ぐに発つ事になりそうだ。

「私は誰からも君の名前を『聞いていない』から、報告書にも書く事は出来ないが、数日中にはこの街を出て、奴隸制度と関係の薄い教国か、魔術帝国へ向かった方が良いだろ?」

「色々とすみません、『迷惑お掛けします』

それでも何日か余裕が出来るのは助かる。正直もう歩くのも辛い。よりよりのレオをみて、シャンティは面白そうに笑った。

「別にいいや、罪は全部領主のクラウスのせいにするし、そもそもこの国のエルフに対する扱いには不満があつたんだ。首になつても冒険者に戻るだけだし、『気にする事は無いよ』

部屋の前に着くと、シャンティは扉を蹴破り金庫を開け、スタンプについていた鎖を剣で断ち切った。

そのままそれを投げて寄越し、レオに向き直ってニヤリと笑つて敬礼をする。

「じゃあな英雄、また会えるときを楽しみにしている」

「はい……」

鋭い眼光でじっと見つめるシャンティを見て、助けてもらつた手前正直には言えないが、出来ればあんまり頻繁に会いたくないタイ

「普段なあと思つ」レオだった。

街へ出たレオは、仲間がどうなつたか聞いつと想い、老剣士の待つギルドの隣の酒場へ向かつた。

酒場へ入ると、一度旅支度を終えた仲間達が老剣士と話しこんでいる所だつた。

「あれ、まだ居たのか」

疲れたレオが何の感慨も無い再開の挨拶をすると、驚いた一同が目を見開いて振り返つた。

刀と収納袋を持っていたリサは、右手に持っていた収納袋を取り落とし、目に涙を湛えていたが、疲労困憊でスタンプを取り出すレオは気付いていない。

「ほら、見てくれよリサ、アンロックスタ　　「ばかあつ！」

ゴフウツ

渾身のグーを左頬に貰つたレオは、スタンプを床に落としけ、右手でわたわたと握り直す。

白金で出来たスタンプは落としたくらいでは壊れないが、苦労して手に入れたレオは落とさずにすんで安堵の溜息をついた。

ふと、そのレオの胸にリサが泣きながら抱きついて來た。

そのまま大声を上げて、いつかのよつに号泣を始める。

疲労で頭がぼやけたレオは、「あれ、リサってこんなカンジだつたっけ？」等と見当外れな事を考えて仲間を見渡すが

ゲオルグは「抱き返してやれよ」とばかりに顎をくいぐいと上げ、

ギルは意地の悪い顔でニヤニヤと笑い、

アルザダさえも困ったように苦笑していた。

遂に助けも逃げ道も無くなつたレオは、羞恥と照れで耳の先まで真っ赤に染めて、ぎこちなくリサを抱き返した。

彼の戦い（後書き）

さて、解った方も多いかとおもいますが、ここまで話のコンセプトは「スパイ映画みたいな事をファンタジーでやる」です。忍者と言えば暗殺ですね。

女性の登場人物が続いてますが、ブルーローズさんは男で「ブルーローズは止めてくれ」と言う設定だったのが書いてる途中で、「ブルーローズって名前の男」が思つた以上に寒い事に気付いて性別変更しました。

もつと良く考えて名づければ良かつたです。

それと靈木の若葉の件ですが、10話で奴隸のエルフとの会話を入れるつもりだったのですが、丸ごと11話のトリガーになってしまい、唐突な感が出てしました。修正しておきます。

本当はここまでに10件くらいお気に入り登録してもらつて、この先は友人に希望とか聞いて多少プロットいじりつつマジタリ書くつもりでした……。

作者は基本もうちょい真面目な物をこうとするのですが、この作品に関しては本当に悪乗りで始めたので変更しきれません……そこばっかり承ください……。

次回ですがちょっと先を考えると、誤字脱字修正……それと体重が減つてしまつた作者の蘇生の為に休憩入ります。このままでは死んでしまうのでご了承ください。

」の先もマッタリ読んで頂けると嬉しいです。

あれから3日経つても、リサは機嫌を治してくれなかつた。

レオがハウラに着いた初日は、憔悴していた為か仲間も皆気遣つてくれていたのだが、次の日に皆に事情を説明し終わると、全員が呆れ果てた様子で寧ろリサに味方し始めた。

スタンプは初日にリサの首輪を外した後、セシリアに渡してある。

その際に、これを切つ掛けに人間に復讐をするなど考へないよう¹にと諭すと、セシリアは苦笑しながら言つた。

「解つています。人間は気に食わないですが、レオさんの仲間が人間だという事は解つてますし、人間は気に食わないですが、長老達は『戦乱の渦に入つても良いことなど何も無い』と、言つていますし、人間は気に食わないですが、数で言えば圧倒的に多いですから」

「あー……うん、解つてくれればいいんだ……」

レオとしては三度同じ事を言った件について多少突つ込みたかったが、セシリ亞の冷たい目を見て諦める事にした。

本来であればスタンプも渡し、ダールの知人に手紙や刀も送つたし、翌日でも魔術帝国辺りに向かつてハウラを発つても良かつたのだが、戦いの前に出会つたホワイトパールの弟子への面会が中々実現できず、出発が延びてしまった。

と言つのも、元々ホワイトパールの弟子は魔軍が使つてくるであろう大規模な転移魔法について貴族達に警告しに来ていたのだが、実際に見るまでは信じてもらえず、実際に見てからは対策の為にと、周囲から来た援軍達やブルーローズを相手に敵の戦術に関する説明や、転移魔法の解説をしていたのだ。

体験者として参加すれば早かつたが、立場上政治に関わる人間には会いたくないので、無理を言つて時間を作つてもらう事にしている。

よつて、あれから3日経つた今の問題は、リサの機嫌だ。

仲間達は、ギルドの依頼や買い付けで宿を留守にしている為、休んでいるレオは必然的に世話役として残つたりサと2人きりになつてしまつ。

再開の場面で、全員にレオに泣きつく姿を見られてしまつたからかりサも声を上げて非難してくる事は無いが、そのせいで余計に機嫌は悪くなつている。

レオはと言えば、昨日の晩に魔界の事を説明した時、皆に非難の雨を降らされ「どれだけ叱られても仕方なし」と酷評を受けてしまつたので、現在は全力でリサに気を使つている。

昼過ぎ、入り口と食堂の間にある、休憩所の一角に置かれた長方形のテーブルで、中央に座つたりサの正面を避ける為通路側の端に座つたレオは、焦燥で喉を鳴らしてから言つた。

「ええと、喉が渴いてたら何か……」

「飲んだばかりなので要りません」

素氣無く断られたが、喉が渴いているのはレオの方だけなので当然といえば当然の反応だろう。

仕方なく自分の分だけ飲み物を頼み、喉を潤して何とか会話を続ける。

「暇なら本でも」

「昨日買つておいた本もまだ途中です」

どうやら、暇で窓の外ばかり眺めている訳ではなかつたようだ。

「せつだ、服でも買ひに」

「もうすぐ街を出るんですから、今買つても仕立てが間に合わないんじやないですか」

首輪が外れて嬉しくても、また似たような事をしそうで簡単には許せない。と思つていたリサだったが、レオの的外れなご機嫌取りの連續に呆れ、もう許してしまおうかと思い始めていた。

そんなリサの内心など知る由も無いレオが、「小物や甘味は既に断られているし、これ以上なにを差し出そつか……」などと考えて唸つていると、宿の入り口に見覚えのある白いローブを着た青年が現れた。

彼はレオを見つけると軽く会釈し、レオ達の居る休憩所のテーブルへと歩み寄る。

「ホワイトパール先生の弟子で、リスイと言います。そちらも急ぎだつたのに申し訳ない、中々帰させてくれなくて……」

フードを取つて右手を差し出したリスイは、20歳前後で金髪の、優男と言つた風貌だつた。

レオはその手を握り返し、懐の手紙を確認すると小声で返事をする。

「いえ、それは構いませんよ。ただせつかく来てもらつた所悪いんですが、少々内密にしたい話もあるので、そちらの宿で話せますか」「冒険者向けの宿は壁が木製で、中の会話が筒抜けだ。異世界云々の話は、場合によつては聞かれたら頭を疑われかねないので、レンガ造りのリスイの宿で話したかつた。

「わかりました」と言つて頷いたリスイを見てリサが同行しようと立ち上がつてしまい、レオが慌てて制止した。

「待つてくれ、リサは留守番を頼む」

それまで無表情を貫いていたリサの顔が、レオの言葉で思い切り顰められた。

「3日前まであれだけ無茶したばかりだつて言つのに、今回も聞かせてもらえないんですか」

「う……」

これまでとは違つ本氣の怒りの声に、レオは反射的に2歩ほど後退してしまつ。

しかし他の仲間ならまだしも、リサにだけは軽蔑されたくないレオは何とか踏みとどまつた。

「……今度は帰つてから全部正直に話すから、頼むから待つて……ぐださいお願いします」

レオが何とか声を絞り出すと、リサは返事もせずに部屋へ戻つてく。

「あら、ちよつとタイミングが悪かったかな？」

がつくりと頃垂れるレオの背中を撫でながら、リスイは気楽な調子で言った。

これまでの苦労が水の泡となってしまったレオは、そのまま休憩所で小一時間休みたいと思つたが、あまり時間も無いので何とか心を立て直す。

「いえ、多分どのタイミングでもこいつなつたと思います……」

そのまま背中を撫でられつつ、レオは自らの宿を出て赤いレンガの宿へと向かつた。

リスイの宿泊している宿は、領主の居た城の近くとこいつともあり、富裕層向けのわりと大きな間取りとなっていた。

もうすぐ街を出るのか、入り口の扉の脇に荷物が置かれている。部屋に入つたレオは、中央に置かれた艶のあるテーブルセットを勧められた。

勧められるまま分厚い絨毯を踏みしめて席に着くと、対面にリスイが腰掛け、苦笑しながらレオに話しかけた。

「それにしても、貴方には驚かされる。私の忠告を完全に無視した

事もそりそりと、何よりあんな功績を立てた方がこんな性格とは……
「ああ、すみません悪い意味では……」

「まあ、悪い意味で言われても仕方ない姿でしたし……」

どういつ意味で言つたかは想像に難くないが、あまり掘り下げても聞いたレオの方が落ち込むだけなので、深くは聞けない。またしてもネガティブになりかけるレオを、パンツという手を叩いた音で引き戻すと、「では」と言つて里斯イは本題へ入った。

「先生の事についてどうしても話したい事があると言つてたけど、どんな内容ですか」

答えなければここに来た意味の無い質問だが、やはり知性的な人物相手に異世界がどうのと言う話をするのは、躊躇われるものだ。幾ばくか逡巡したものの、言わなければ進まないと言い聞かせ、レオが口を開いた。

「その……少し前にホワイトパールさんと思われる人物に会つたのですが、その時の状況が少し特殊でして」

「ああ、先生が現れる時は大抵が特殊な状況なので、ある意味それで普通かと思います」

あくまでも冗談めかして答える里斯イをみて、専門家でもあるし、たとえ信じてもらえないって言つてみて損はないだろうと思えた。この先を言って困惑されたり訝しがれたりしませんようにと祈りつつ、レオは躊躇いがちに言葉を続ける。

「実は、俺が彼に会つたのは異世界で……して……」

部屋の空気が凍りついた。

『異世界』の単語が出た瞬間、リスイの穏やかな表情は激変し、真剣な表情で睨むようにレオを見つめている。

そのあまりに予想外な反応に、レオは一の句が告げられなかつた。

「どうぞ、続けて」

本当に続けて良いのかと確認したくなる程の眼光を向けられ、レオは困惑しつつもどうにか話を続けた。

「彼は人気の無い場所で、光る装飾のついた巨大な門の前に立つて、俺を見つけると『この門の向こうへ行ってみないか』と誘つてきたんです。そうして門を越えて気付いたら、ダールの北にある平原に」

「レオさん」

だが、レオの説明はリスイの声によつて中断される。

不気味なほどに低い声を上げたリスイの顔には、最早隠す事無く憤怒の色が浮かんでいた。

その顔を見たレオは、一瞬的外れな焦燥を感じたが……その後リスイが続けた言葉に、無理矢理現実に引き戻された。

「一応忠告しますが、この世には言つても良い冗談と、悪い冗談があります。もしそれが冗談であれば、間違い無く後者の方ですよ」

数瞬我を失つていたレオだったが、脳がその言葉の意味を解する

と同時に慌てて訂正する。

「ま、待って、最後まで聞いてください。その時この手紙を渡されたんです、ここに書かれてるカーネクスと言う人物に心当たりはありませんか」

直ぐにでも追い出されそうな雰囲気に焦つたレオは、腰を浮かせて手紙を取り出した。

差し出された手紙を、懐から杖を取り出したリスイは、細心の注意を払って受け取った。

緑色の宝石が付ついた杖をレオに向かた彼は、レオと手紙を交互に見ながらも何度も裏返して手紙をチェックする。

だが、リスイの表情は次第に険しくなり、そのうちに手紙を見つめたまま考え込むようにして動かなくなつた。

暫しの間「ありえない……けど、確かに印の魔力も紋章も、筆跡まで先生の……しかも、この宛名は……」等と独り言を言つていたが、やがて顔を逸らし、横目でレオを見ながら小さな声で呟いた。

「グリエルモ・エテルノ」

「は?」

突然意味不明な単語を言われ困惑するレオを、無言のままのリスイが探るように見つめる。

「えっと、もし誰かの名前なら俺には解りませんが……」

どれだけ表情を探つてもレオの顔には困惑しか写らない事を確認すると、彼は視線を逸らして頭を振つた。

リスイは冷静さを欠いたことを後悔するよつに頭を伏せ、疲れた様子で言つ。

「申し訳ない、さつきのはただの独り言です。まず異世界については、私は先生ほど高位の魔法は使えないから、詳しい事はわからな。それとカーラさんについては、知つてますが教えるには一つ条件があります」

「条件？」

先ほどのリスイの様子からどんな事を言い出すのかと思われたが、彼の出した条件は意外なものだった。

「私の紹介で行く以上、あまり異世界の事を言触らさないで欲しいので、手紙を本人に渡すまでこの件を口外しないよつ、契約の刻印を胸に刻ませてください。手紙を渡せば消えるものだけど、無理をして他人に伝えれば後悔する事になるでしょつね」

「それは俺の仲間にもですか

「誰にも、です」

レオは不審に思つたが、理由を聞いても今は教えられないと言つばかりだつた。

仲間には元々、信じてもらえる目処が着くまで言わないつもりだつたし、他に聞く当ても無いので諦めて受ける事にした。

躊躇いがちにレオが頷くと、リスイは安堵したように溜息をついて席を立ち、対面からレオの前へ回り込んだ。

「服はそのままで。ただ、多少気持ちが悪くなるかと思つけれど、

終ればすぐに直るので抵抗はしないよ」

リスイはレオの隣まで歩み寄つて胸に手を当てる、ボソボソと聞き取りにくい声で詠唱し続ける。

その度に不快感が胸から広がつてきたが、数分耐えた所でリスイはあつさりと手を離す。

吐き気によつてレオが少しそむせてしまい、背中をさすつてそれが治まるのを待つてから、彼は続きを話した。

「では、約束通りカーカスさんの話を。

私の知る限り、先生の知り合いでカーカスと呼ばれる方は1人しか居ません。

訳あって同行は出来ないので間違つていても責任は取れないけれど、恐らくはファーヴ教国の首都にある大聖堂で、依り代の巫女の世話係をしているカーカス・マートンで間違いないはずです」

「依り代の巫女といふと、もしや

レオはハウラに来る途中、ギルが話していた事を思い出した。
愛の神イシスを、その身に宿せる巫女がいる。と言つ話を聞いたはずだ。

「ええ、貴方の話が本当なら、向こうに行けば、場合によつては何らかの啓示が得られるでしょ？」

神様と話が出来そうだと言つのは、大きな前進だ。

もしかすると、元の世界に戻る方法等を聞けるかもしれない。

そう考えた時、一つの光明得と同時に、これまで思いも寄らなかつた不安がレオの中に生まれた。

「どうでレオさん、先生がその後どうなったか知っていますか」

思考が脱線していたレオはその言葉に咄嗟に反応出来ず、うろたえてしまつ。

「えつ、ええと……残念ですが、俺は向こうで会つたきりです」

「……そうですか、申し訳ない。少し、疲れたので話はここまでで。私はこれから北の魔術帝国にある、ラウロという街へ戻るので、北に来る機会があつたら是非寄つてください」

「ありがとうございます、俺も明日には教国に向かいます」

そう言って部屋を出て行つたレオを見送ると、1人部屋に残つたリスイは椅子へ座り直して深い溜息をついた。

話が終つた後、宿に戻る前にどうしても一人になりたかったレオは、衛兵に薬草を取りに行くと告げて街を出た。

あまり奥に入るとモンスターが出るので、森の入り口で倒れていった苔むした倒木に腰掛けると、口元を押さえて考え込む。

最初、異世界の事を知つて居そうなリスイが怒りの視線を向けてきた時、レオは反射的にこの世界の人間を殺した事を怒つてているのではないかと思つた。

よく考えればギルやゲオルグのみならず、リサでさえも盗賊相手には容赦なく攻撃していた。ましてや何の関係も無いリスイが、そんな事で怒るわけが無いと一度は落ち着いた。

だが、会話が進むうち、ある事に気付いた。

レオ自身はゴブリンやオーガといった、知能の低い人型の魔物を倒していく感覚が麻痺してきている。

けれど、もし元の世界に居るホームセンターの後輩や他の知人、それに両親に、レオが3人の人を殺し、知性ある魔物の将軍を殺した事を知られたら、どう思われるだろうか。

彼らに知られたら、嫌悪感を抱かれるかもしれない。そう思うと、急に元の世界に戻るのが怖くなつた。

勿論黙つていれば良いのではないかとも思ったけれど、レオにはそんな重大な事を隠したままにできる自信が無かつた。

(もし本当に帰れると言われたら、俺は……迷わずには帰れるかな)

幾らゲームの能力や財産があるとはいっても、こちうでの生活は色々と不便だし、楽なものではない。

それでも、リサや仲間達と居る時間は楽しいが、レオはまだこの世界全体に対する不信感も捨てきれていない。声に出して言つても八つ当たりにしかならないから言わないが、「なんで俺がこんな目に……」と思うことなどしようつちゅうある。

しかもゲームやネットや小説が好きだったレオが、今更娯楽が殆ど無いこの世界に永住する事になれば、後々精神的に辛くなるだろう。

いつの間にか袋小路に入つてしまつたような感覚に襲われ、まだ何も解つていないというのに、レオは混乱と恐怖に駆られていた。

木漏れ日の中、そんな答えの出せない事を考えていると、あつという間に時間は過ぎてしまった。

目的地の変更も告げなければならないし、あまり遅くなつても皆に心配されるので、レオは座り心地の良い倒木から立ち上がると、

近くにあつた山菜を適当に集めて街へと戻る事にした。

それ程ゆっくりしていたつもりも無かったのだが、レオが宿の前に着いた時には日が大分傾いてきていた。

宿の食堂に入つてみると、既にゲオルグを除く全員が集まつてレオを待つていた。

レオがテーブルにつくと、いつものようにギルが代表して聞いてくる。

「どうだつた、何かわかつたか」

「その事なんだが……例の手紙のあて先が教國の人らしくて、急ですまないが、俺は予定を変更してそつちに行かなきゃならなくなつた」

教國は位置的に魔術帝國より遠い。既に仕入れをしてしまつたアルザダには悪いと思い、レオがここで別れても良いと言つと、アルザダは笑つて首を振つた。

「いえ、レオさんの帰りが遅かつたので、食料品は殆ど買つていません。多少移動に掛かる日数が増えても、問題ないですよ」

それを聞いて安堵するレオに、ギルも頷く。

「アルザダもこう言つてるし、ゲオルグは依頼の報告に行つてゐるが、俺もアイツも教國行きでも別に問題無いぞ。後はリサちゃんだが……」

「……」

「ここまで来て置いて行くと言われたら、今度こそ本当に怒ります

今までの怒りが本気じゃなかつたという意味のリサの発言に、レオは戦々恐々とするが、もう一つ謝らなければならぬ事を思い出した。

「あー……それで、事情を話すと約束してたけど、カーカスつて人の情報を聞くための条件として、手紙を届けるまで秘密を守る為の、契約の刻印とかいうのを受けたんだ。手紙を渡せば消えるらしいんだけど」

そう言つてレオが胸元を見せるが、彼を除く全員がポカンと口を開けてそれをみた。

レオは気にする素振りを見せないが、彼の胸には重ねすぎて最早ほぼ真っ黒と化した魔方陣の円が描かれている。

仲間3人を代表して、魔術師のリサが詰問した。

「あの、こんなの無抵抗に刻ませるなんて……何を話したんですか？8属性の上位攻撃魔法に、毒、呪詛、痙攣、その上転移魔法みたいな刻印まで付いてますけど……レオさんならどうか解りませんが、これ、普通の人なら口を滑らせたら間違いなく即死ですよ」

「え」

てっきりちょっと電撃が走るとか、言おうとするときが動かなくなるくらいだと思っていたレオは、それを聞いて冷や汗をかいた。慌てて解いてもらおうかと思ったが、既に後の祭りだ。あれからかなりの時間が経っているし、リスイはもうとっくに街を出てしまつただろう。

「え、どうしようって言われてもなあ

「いや、どうしようって言われてもなあ」

混乱して助けを求めるレオの声に、魔法に疎いギルとアルザダは渋い顔で視線を交えた。

唯一リサだけは「私を連れて行かないから、そんな事になるんです」と、呆れたように溜息をついたが、流石の彼女も今回はお手上げのようだった。

しかし、それを聞いて力なく頃垂れたレオを見かねたのか、仕方なく声を掛ける。

「ともかく、教団にいけば刻印は消えると言われたみたいですし、行って見ましょうよ」

「やうだな……今更騒いでも仕方ないか……」

当たり前の事を言われて落ち着いたレオは、自分が先ほどの思案で混乱していたのを自覚して目を伏せた。

何故か妙に元気の無いレオを気遣うように、ギルが声を掛ける。

「おじおこじうしたんだ、気分でも悪いのか？」

「あ、ああ、実はこれを刻まれた時ちょっと気持ち悪かつたんだ。出発の準備は大体終っているし、部屋に戻つて少し寝るよ」

レオはそう言い残すと、足早に部屋に戻つていった。

残つた3人は気になつたものの、内容は刻印の事もあつて聞けないので、明日の出発に備えて準備の仕上げをしに散つていった。

部屋に戻つてすぐに眠つたレオは、夜中に目を覚ましてしまつた。明日の出発に備え寝なけばならないのは解つていたが、悩んでいた事もあり一度目を覚ますと中々寝付けなかつた。

仕方なく部屋を出て食堂に向かうと、閉店の準備をしていた店主に、無理を言って酒を売つてもらつた。

休憩所のテーブルに座つて、殆ど人通りの無い街を眺めながら干し肉を肴にちびちびと水割りを飲んでいると、対面に誰かが座つた。

「どうしたんですか、こんな夜更けに」

機嫌が悪かつた筈の彼女が、何故現れたのか一瞬疑問に思つたけれど、レオは困つたように笑つて返した。

「リサ……、寝ておかなくて良いのか

出発は明日の昼なので多少の余裕はあるが、長旅の前だ、しつかり寝ておかないと後々辛いだろつ。

だがリサは特に気にする様子も無く「ちょっと気になつたので」と言つて、持つてきたグラスにレオの水割り用の水を入れた。手に持つたグラスを凝視し、「肌を刺す冷氣よ」と呟くと、中の水が3割程、シャーベット状になつた。

「いいなそれ、俺も試しに……」

「間違いなく、中身が全部凍つてグラスが碎けるのでやめて下さい」

リサの的確な指摘に、悲しい事に自分でも納得できてしまつたレ

オは溜息をついた。

するとリサがもう一度魔法を使い、レオのグラスを冷やしてくれた。

「ありがとう、それにしてもリサは魔法が上手いな」

「こんなの大した事無いですよ。それに得意属性が氷だというだけで、他の魔法はどうちらかと並べると大雑把です。レオさんに比べればずっとマシですが」

そんないつも通りの切り返しにも、「だよな」とほんやりとした返事しか返せないレオに、リサは遠慮がちに訊ねた。

「詳しい事は聞きましたけど、リスイさんに言われた事がそんなにショックだったんですか？」

心配そうに言つてリサに、レオは慌てて手を振つた。

「いや、それとは関係ないんだ」「

酒のせいでのいい口を滑らせてしまつたが、結局は言えない事なので、黙つていれば良かつただろう。

だが、それを聞いたリサは「じゃあ話してくださー」と言わんばかりの顔でレオを見つめている。

本当は話したくなかったが、ここまで来て言わなければ後が怖いし、心細かったのもあって思い切つて話す事にした。

「俺が住んでた東の島国は、凄い平和な所で……実はこっちに来るまで、人を殺した事なんて無かつたんだ」

「それは解つてました」

その言葉に、何とか誤魔化していたつもりだつたレオは、驚いてリサを凝視したが「レオさんは物凄く解りやすいので」と、言われて苦笑した。

「今日、ちょっと故郷の事を思い出す事があつてね。もし平和な向こうの人達がその事を知つたらどう思つかつて、不安になつたんだ」

「なるほど」

リサは一度相槌を打つて考え込んだ。

そして暫し黙つた後、彼女は懸命に言葉を選んで続けた。

「レオさんは、私を助けた事を後悔しているんですか？」

「そんな事は……」

「ない」と答えようとしたが、あの時の事を後悔している自分には、言う資格が無い事に気付く。

それが解つて反射的に顔を向けると、レオの真意を汲み取つたりサが優しく微笑んでいた。

「だったら、私の為にも胸を張つていてください。助けなければ良かつたなんて言われたら、私だって流石にショックですよ」

初めて聞くリサの本心を前に、レオは何の反論も出来なかつた。実年齢の半分程度しか生きていらないリサに諭されたレオは、何だか急に情けなくなり、苦笑して頭を搔く。

「ああ、やつだな。」めん

いつも通りのレオの反応を見て、満足げに「解ればいいんです」と言ってグラスの水を飲んだリサは、暫く外の暗い街道を眺めてから言った。

「……明日、出発の前に少し街を歩きませんか。教国までは、農村ばかりらしいです」

「いいね。それじゃ、コレほんままでにして寝直す事にするよ」

そう言つてレオが水差しやグラスをお盆に乗せて立ち上がると、部屋に戻る途中のリサが別れの挨拶をした。

「おやすみなさい、レオさん」

暗くて表情まではよく解らないけれど、その声だけでレオは肩の荷が下りた気がした。

「ああ、おやすみ。リサ」

水割りのセットを食堂に戻し、部屋に帰ったレオは、この世界に来て初めての、安らかな眠りに落ちていった。

三章 白いローブの青年（後書き）

おお作者よ、復活に2週間もかかるとは情けない。

一週間で蘇生できると思つてた時期が、ボクにもありました。

プロットの練りが甘いのも痛感して色々と準備がかかりました。
すいません……。

さて、内容ですが、伏線メインの内容で意味深な発言はアレなん
ですが、ファンタジーなのでその辺は「愛嬌」と言つ事でお願いしま
す。

それと感想で葉っぱの回復力弱いけど、あれで高級なのか……と
いつ話が出ました。詳細は8話くらい後で出てくるのですが、あの
葉っぱのメインは傷の回復ではなく、精神面での回復効果です。
偉い人は肉体的な傷よりストレス等の方が切実な問題なので、そ
っちの需要がメインとなります。

プランク明けでちょっとクオリティが不安な部分もありますが、
楽しんでもらえたら幸いです。

捨てられたもの

出発の前に、アルザダの護衛依頼を正式なものにする為に冒険者ギルドへ行つて受付をしたのだが、レオの話が広まり始めているのか、白髪頭のギルド長が出てきて強引にランクアップさせられてしまつた。

特例で試験は無い代わり、事務的な手続きが必要なようで、ロケットの色がランクEの黄色からDの青に変る頃には1時間程かかりました。

一緒に街を回る約束をしていたリサ意外は、既にギルドを後にしている。

「「めんつサ、こんなにかかるなんて」

「別に良いですよ。時間が掛かったのは、ギルドの都合ですか？」

文句も言わずに待つてくれたリサに頭を下げたレオは、眉を寄せて唸つた。

「あんなに強引にランクアップさせられたって事は、確実な情報として回つて来てるのかなあ」

「街を歩くのも、早めに切り上げて出た方が良いかもせんね

「はあ……まあ、仕方ないか。徵兵されるよつはマシだ」

一昨日までアルザダの手伝いをしていたレオ達は、商品の積み込みの間街を巡るつもり予定だつたけれど、この状況では早めに門へ向つて手伝つた方が良さそうだ。

せつかくリサと街を周ろうと思っていた時間が削られた事に溜息をついたレオだが、待つていたリサと共にギルドを出る時に、丁度見送りに来たセシリアとかち合つた。

「ここにちはレオさん。あら、そちらの方田髪だつたので人間の老人かと思つたのですが、違つたんですね」

「ブツ」

レオとしてはセシリアの突然の暴言に驚いて噴き出してしまっただけなのだが、慌てて口元を抑えてリサをみると、彼女は冷笑を浮かべてレオを見ていた。

「どうしたんですかレオさん、今の冗談がそんなに面白かったなら、もつと笑つていもいいんですよ」

「ち、ちがうんだ……今はただ、ちょっとビックリしたというか……」

リサはそんなレオの残念な弁明を軽く流すと、何故か困惑してい るセシリアに向き直つた。

「因みに、こちらのエルフさんは何方ですか

「ええと、彼女は前に魔軍の事を教えてもらつたセシリアだ」

「セシリアです。あの、レオさんには何度もお世話になつてゐるの

で、見送りをしようとした。「

「スタンプの件とかで、ヘルフとの繋ぎ役を頼んだんだ。ほんと、それだけなんです」

必死に紹介を続けるが、リサは特に興味が無いと言った風に流した。

「やうなんですかー」

『気まずい空氣を感じ、セシリ亞も慌てて手を振つて弁明を始めた。

「『』、『』めんなさい。森を出たのも最近だつたし、人間とはあまり会話した事が無いので、つい』

流石のレオも『』の弁明には納得が行かず、小声で責めるよつて言葉を続ける。

「こや、つこいつかり『』の内容じやなかつただろ……」「

「本当に『』めんなさい……でも、ドワーフと話す時は最初にあの位言つたほつが会話が盛り上гарるので、異種族は『』やつなのかと……」

言われてみれば、バルドもよく鬱を馬鹿にされると『』していた気がする。

確かにドワーフには彼のような性格のものが多いな、セツキの挨拶で概ね正解なのかもしけない。

「やういう事なら、もう良いですよセシリ亞さん、知らなかつたら仕方ないです。レオさんは別ですが」

恐縮してしまったセシリアを宥めるよつこリサが言った。

「俺は別なのか……」

「何か言いましたか、1時間待たせた上に私を笑ったレオさん?」

そう言つて再度笑うリサを前に、許されたはずの案件まで蘇つた事に恐怖したレオは、無難に話題を変える事を選んだ。

喉を鳴らした場面で、目を逸らした先に丁度軽食屋が目に留まりた。

「その、せっかく来たのに立ち話もなんだろう、何か飲みながら話さないか」

特に反対意見も無かつたので、レオはそのままそそくせと軽食屋の中へと駆け込んだ。

茶菓子と薬草茶を頼み、セシリアに向き直つたレオは用件を聞く。

「それで、何か用件があつて来たのか」

頷いたセシリアは、戻ってきた時にスタンプと一緒に返したはずのコンパスと、真新しい地図を取り出した。

「はい、実はスタンプを届けた時に、長老からまだこの大陸に慣れていないレオさんに、お礼としてこれを渡してくるようにと頼まれたんです」

彼女の話によると新しい地図はこの大陸の地図のよつで、4つの国を分ける線が敷かれている。

その中の一つ、西にある最も大きな国にはナルバ共和国と書かれており、その東の端、中央より少し北の位置に現在居る町、ハウラの名前が書かれていた。

その少し北にはクラム魔術帝国と書かれた地域があり、その国境沿いを行つた場所に両国の間に割り込むような形で教国と書かれた場所があった。

「この地図とコンパスは、レオさんに差し上げます。国境は状況に合わせて書き換えたもので、森の位置も今では多少変つているかもしませんが、平野や山は田印になると思いますし、遠慮なく持つていってください」

「ありがとうございます、正直助かる。聞いた話から想像するのと、実際地図を見るのとじや違つからな……アルフにもお礼を言つておいてくれ

レオが差し出された地図とコンパスを受け取ると同時に、頼んでいた茶菓子と薬草茶が届いた。

それをテーブルの中央に置くと、受け取った地図を再度広げて見る。

「どうぞ、遠慮なく食べててくれ。それにしても、あまり森をでないつて言うエルフが、よくこんな作られたなあ」

「変わり者が居たんですね。本人は馬に乗つてあちこち歩くのが好きで、地図を作つたのはついでみたいなものだつたらしいですけれど」

「へえ……」

最後にもう一度地図を眺めて仕舞い直すと、豆を潰して焼いた菓子を頬張りながら、レオはエルフの森に行つたときの事を思い出し

ながらしみじみと言つた。

「しかし、アルフもよくあの場面で信じて色々と貸してくれたよな。貸してもらえたかったらかなり厳しかったけど、あの時の俺はかなり胡散臭かつたきがするんだが」

「ハイエルフの方々は基本的に嘘はつしませんから、信じるのは当たり前ですよ。レオさんは色々と特殊なようですが、嘘を言う人は見えないです」

真剣な表情で褒めるセシリ亞に、

「そ、そうか」

と言つて照れながら茶を口に運ぶレオだが、干され気味になつていたリサに背後から毒づかれた。

「話を逸らすのと忘れるのは、随分と上手いみたいですね」

「うあつ」

驚いたレオは、飲みかけた茶を少し零して服を汚してしまった。流石に悪いと思ったのか、リサがテーブルの端にあつたフキンを手渡す。

「大丈夫ですか。全く、いつも気をつけてって言われてるじゃないですか」

「いつも?」

飲み物を零した事など滅多に無いレオは、いつの事だらうと小首をかしげた。

するとりサは、何故か顔を伏せて「何でも無いです、間違いました」と言つたきり黙りこんでしまう。

仕方なくセシリ亞に首輪を外したエルフ達の話を聞きながら、食事を済ませ店を出たのだが、リサの顔色は悪いままだった。

「リサ、 具合でも悪いのか」

心配になつたレオが声を掛けたものの、リサは困ったように笑つて首を振つた。

「本当に何でもないんです……」「めんなさい、ちょっと忘れ物を思い出したので、一度宿に行つてから北の門に向かうので、先に行つていてください」

様子のおかしいリサが気にかかつたが、隣にはセシリ亞も居るので、レオは黙つて頷いて北の門へ向かった。

リサの姿が見えなくなつた所で、レオはセシリ亞に疑問に思つていた事を口にする。

「そういえば、あんなに人間を毛嫌いしてたのに、リサには普通に接してくれるんだな」

言われたセシリ亞は、少し呆れたよつに苦笑した。

「幾ら私でも、あんな娘相手に突つ掛かつたりはしませんよ。レオさんが助けたがつていた相手と言つのもありますし、あの子まだ16歳くらいでしょう?」

「ま、確かにな……」

普段しつかりしているのでたまに忘れそうになるが、リサはまだ精神的には大人とは言えないであろう年頃だ。

気を使ってくれたセシリアには、感謝しなければならないかもしれない。

「けど、レオさんは本当に変っていますよね……一人の相手にそんなに必死になるなんて、他のハイエルフの方々からすれば、考えられないのではないか」

「ん、なんでだ？」

一人の相手に固執するのは、種族関係無くあり得る事じゃないかと思つていたレオは首をかしげたが、セシリアは本当に不思議で仕方が無いという風に続けた。

「アルフさんもそうですが、この大陸のハイエルフは、普通個別の人物に対してもあまり感情を持ちません。遠い異国からやつて来たレオさんは別ですが、自分の森の者でも、その森のエルフ全体という意味で配慮する事がが多いです」

「へえ」

上位種故の感情と言ひモノなのだろうか、元が人間のレオには良く解らなかつた。

「生まれた時から皆そうだと言われているので、特例なのでしょうね。魔物の将軍も凄い魔法を使って一人で倒して来てしまつし、レオさんには驚かされてばかりです」

「その話は止めてくれ。仲間にも散々怒られたし、正直今考えれば無謀だった。魔物をナメてたよ」

レッドワイバーンやジャイアントにあまり苦戦しなかつた事から、この世界の魔物は大した事が無い、だろうと思っていたレオだったが、実際に行つた暗殺計画は見事にその奢りに足元を掬われた形になってしまった。

本人としては、今はあまり思い出したくない過去である。

その作戦によって、友人や仲間達が首輪の呪縛から解き放たれたセイリアはもう少し食い下がりたかったが、無謀と言つ所はイマイチ否定しがたいので、諦める事にした。

「本来なら、お礼に私も同行したいのですが、私にも使命があるので……」

顔を伏せるセシリ亞に、レオも沈痛な面持ちで答える。

「行方不明のエルフ達……か、俺の事は気にするな。幸い仲間には恵まれているし、俺も見かけたら助けて静寂の森に行くように伝えておくから、セシリ亞もそのまま旅を続けてくれ」

「お願いします。ここ数十年あまり見つからなくて……人間嫌いな私も、最近になつて森を出る事になつたくらいなので」

頭を下げたセシリ亞を見た視界の端に、北門への道が見えた。レオが門の脇に目を向けると、丁度ゲオルグとギルが荷馬車に荷物を積み込んでいた。

それを見たセシリ亞は、微妙に顔を引き攣らせながらレオの後ろ

に隠れて聞く。

「あの、レオさんはアレに乗つて旅をしているんですか」

「そうだけど……どうしたんだ？」

「レオさんには何でもない事みたいですが……普通エルフは、人間の作った乗り物や道具には嫌悪感が沸くものなんですよ」

顔を引き攣らせたままレオの後ろに隠れ続けるセシリアからは、荷馬車だけでなくゲオルグやギルに対しても嫌悪感があるように感じられる。

レオに気付いたゲオルグは隣に居るのがリサで無くセシリアだと言つことに気付き、首を捻つた。

「あれ、誰だいその娘。一緒に居たりさはどりしたのや」

「リサは忘れ物を思い出して、宿に行つてるんだ。こいつはこの前話した、エルフのセシリアだ」

「なるほどねえ、アタシはゲオルグ、よろしくね」

そう言って差し出したゲオルグの手を、セシリアはレオの背に隠れつつじっと見つめた。

「どうも……」

暫くその状態が続き、意味が解つていないゲオルグが手を出したまま首をかしげて、解つているレオもどうしたものかと唸り始めた頃、ようやく前進したセシリアは手をちょっとだけ当てて直ぐに引

つ込んだ。

場が微妙な空気に包まれ、3人とも何と言ったものかと悩んでいると、見かねたギルが荷物を置いて割って入る。

「何やつてんだよグオルグ、この前レオに、エルフの事情教えてもらつたじやねえか……悪いなセシリ亞さん、俺はギル、グオルグの連れだ。『イツは何も考へないで生きてる奴だからさ、さつきの事は多めに見てやつてくれ』

自分を貶し尽くした自己紹介に、若干不満そうなグオルグだったが、ここはギルに任せた方が良いと思ったらしく、渋い顔をして押し黙った。

セシリ亞もギルの方はまだ話しやすいようで、レオの横にで頭を下げた。

「静寂の森から来たセシリ亞です。こちらの方こそレオさんにはお世話になつて……そうだ、長老のアルフから仲間の皆さんに伝言で、『我々の事情で仲間のレオさんを危険に晒してすまなかつた』と」

またこの話題か。とレオは顔を引き攣らせて明後日の方を向き、それを見たギルは苦笑した。

「それは別にいいだ。聞いた話じゃ、レオの方が教えてくれつて頼んだみたいだし、そっちにも事情があつたんだ、謝るような事じゃない」

話の流れは悪いものではなかつたが、いい加減この話題から離れたかったレオは、強引に話を逸らす事にした。

「ところで、準備の方は終つたのか？」

「俺達の分は終ってるだ、アルザダの方はもうひょいだな。そこに置いてある分で最後だ、本人ももうすぐ取引先から戻つてくれるはずだ」

「なら俺も手伝おう、セシリ亞は――」

「勿論私も手伝います」

「そうか、ならあの袋を頼む」

なるべく急ぎたい状況でもあるし、リサを待つ事も兼ねて、全員で残りを積み込むことにした。

積み込みはレオ達が手伝った事もあり、10分程で終った。多少打ち解けた4人は、荷馬車に腰掛けこれまでの旅について話していた。

「ホント、あの山菜食つたときは、リサに掘つてもらつた穴に吐き続けながら、絶対レオを殺してやるつて思つたもんだよ」

「そ、その事は散々謝つたじゃないか……」

頭を搔きながら目を伏せるレオを、セシリ亞が驚いたように見つめる。

「レオさんつて、あんなに凄いハイエルフなのに、山菜と毒草の区別がつかないんですか？」

「いや、あの時はまだ、このメモの内容もちゃんと覚えてなかつたし、他にも考え方をしててボーッとしてたんだよ」

荷馬車に積んであつた収納袋から、薬草が書かれたメモを取り出したレオだったが、それを見たセシリ亞は更に眉を顰める。

「それって、ハイエルフの方が私達普通のエルフにも解りやすいよう、薬草の特徴を纏めてくれたメモなんですけど……」

レオがメモを持ったまま固まつて一の句を告げられずに居ると、ゲオルグがニヤニヤ笑いながら詰め寄ってきた。

ゆつくりと剣を鞘ごと取り外すゲオルグを見て、レオは荷馬車から立ち上がりつて数歩後退する。

「おやあ、他のハイエルフはこんなの読まなくとも、山菜と毒草の区別は付くみたいだけど、アンタひょっとしてわざと間違えた訳じやないよねえ？」

ゆりゅうと矛先を探すゲオルグの剣を前に、レオは背中に冷や汗を流しながら後退を続ける。

「や、ヤダなあゲオルグさん、あの毒草は俺も食いかけたんですよ、知つてたらわざわざ食べようとする訳ないじゃないですか」

必死の弁明も虚しく、ゲオルグの剣はレオの足元を小突き始める。突然豹変したゲオルグにセシリ亞が硬直し、これから始まる見世物に期待したギルは面白そうに笑う。どうしたものかとレオが視線を巡らせていくと、取引先から帰ってきたアルザダが田に留まつた。

「荷物はもう積み終つてましたか。おや、こちらの方は？」

丁度ゲオルグの背後から現れたアルザダは、2人の様子には気付かずセシリアに目を向けた。

「アルザダさん、丁度いいところに……彼女が前に話してた、エルフのセシリアです」

「あ、始めまして、静寂の森から来たセシリアです」

レオの背後から痛い視線を感じる気がするが、振り返つたら負けだと言い聞かせ、何とか平静を保つ。

「どうも、商人をしているアルザダです。といひで、リサさんはどちらに？」

「忘れ物を取りに……って、そう言えば遅いな」

アルザダに言われて気付いたが、途中で宿に寄つたとしてもそろそろ着いていなければおかしい時間だ。

様子を見に行きたいが、人間嫌いのセシリアを一人残していくのはどうだろうと思いレオが視線を向けると、彼女は苦笑していた。

「私は良いですから、様子を見に行つてあげてください」

「すまない、ちょっと宿に様子を見に行つてくる。直ぐ戻るから、待つてくれ」

そう言つて走り去つていくレオを見送りつつ、ゲオルグがやれやれという風に言った。

「しかし、レオの世話好きも随分板についてきたねえ」

「そこがレオらしくていいじゃねえか。お前だって、アレが面白そ
うで着いて来たんだろ?」

心底面白そうに笑うギルに、「まあね」と曖昧な返事をしたゲオ
ルグは、小さく笑って荷馬車に乗り込んだ。

レオ達と分かれたりサは、宿泊していた部屋へ戻っていた。

後ろ手に扉を閉め、部屋の中で一人になると、軽食屋での出来事
が思い起こされる。

食事中に、飲み物を零していくも叱られていたのは、レオではな
くリサの父親だった。

商売仲間を家に呼んで、話をしながら食事をするのが好きだった
父親は、酔つてよくお酒を零しては母に叱られていた。

レオが、自分が何とかしてみせると言つて笑つた時、リサは北の
町で落ち合おうといつたきり居なくなってしまった父が、ようやく
現れたよつの気がしていた。

だが、彼はリサの父親になりたくて彼女を助けた訳ではない。

父親のように思っているリサの感情は、レオにとつては不条理な
評価なのかもしれない。

けれど、未だ精神的に幼さの残るリサにとつて、今最も必要としているのは恋人ではなく、無くしてしまった家族に代わる者だった。それを自覚した時、宿に置いたまま捨てていこうとした奴隸の首輪を、どうしても取りに戻りに戻りたくなった。

嫌な思い出しかない首輪だが、レオに拾われた時には全ての持ち物を無くしていたリサにとっては、家族の思い出が宿る、最後の品だ。

リサの首には、レオの治癒魔法でもなかなか治せない痣が残っているので、今もレオが買つてきたリボンが巻かれている。

今はこれががあれば大丈夫だと思つていたリサだったが、自分の弱さを自覚した今、首輪が捨てられなくなってしまった。

そつと首輪に指を這わせると、両親や姉の事が鮮明に脳裏に浮かぶ。

「『めんね……』

ぼんやりとした口からでた謝罪は、誰に対してものだかりサ自身も解らないけれど、その言葉で、やはりこの首輪は手放せないと、嫌でも理解させられた。

そのまま、取りとめも無い昔の思い出に浸つていると、あつとう間に時間が過ぎてしまい、突然ドアをノックする音が部屋に響いた。

「リサ、まだ居るのか？」

扉の向こうから響くレオの声に、リサは反射的に首輪をポケットに入れた。

「はい、今出ます」

リサは扉の前で一度立ち止まり、表情を作つてから扉を開いた。廊下に出ると、レオがいつものように頭を搔いておずおずと聞いてきた。

「その、さっきの事でまだ怒ってるなら……」

「いえ、私はもう何も怒つてないですよ。とにかく、出発の準備はもう終つたんですか?」

「ああ、アルザダの荷物も積み終わつたし、後はもう出るだけだよ」

感傷に浸つていた間に、かなり時間が経つてしまつたようだと気が付いたリサは、困つたように笑う。

「『めんなさい、遅くなっちゃいましたね。行きましょうか』

それは見ていたレオが心配になるような表情だったが、今のリサには精一杯の笑顔だった。

2人が北門へ戻ると、荷馬車からすこし距離を置いた所に立つセシリアが、頭を下げてきた。

「それではレオさん、お元氣で。また近くに来る事があつたら、森

にも寄つてください」

「ああ、色々と世話をこなつたな。セシリ亞も頑張つてくれ」

セシリ亞が頷くのと同時に、荷馬車からギルの声が響いた。

「お、来た来た。おーい、そろそろ行へぞー」

最後に会釈したレオとリサが荷馬車に乗り込み、一台の荷馬車はセシリ亞に見送られながら走り出した。

門で衛兵に「もう少しゆづくりしていつても……」と引き止められたが、正式な命令は出でていない為か、何とか街を出る事ができた。

ダールと違つて出会つた人は少なかつたが、色々な出来事があつたリサは、そつとポケットの中にある首輪を握りながら、小さくなつていくハウラの門を見つめていた。

捨てられたもの（後書き）

スタンプがこんなに辛いものだつたなんて……。

お待たせして申し訳ないです。よつやく出来ました……。

内容についてですが、『彼の戦い』までのしわ寄せの影響で、リサの話が多くなっていますが、次回からは仲間の話が出てくるので「安心を。

それと感想でスタンプについての意見が多く寄せられたのですが、実は1話分省略した話があつて、そこで補足するつもりだったのが、そこまで説明ばかりだった事や、どの道『彼の戦い』でスタンプは終わりだと言う事もあり省略しました。

違和感強い方が多いようなら、余裕ができるから加筆しますのでご意見頂ければと思います。

国境の村（前書き）

更新遅くなつて申し訳ありません、スランプ時に無理に書き続けたせいもあって本格的に体調崩してしましました。

間結構空いてしまったので、今の所問題ないと想いますが後に変更点あるかもしれません、ご了承ください m(_ _) m

北周りに教国を目指し、一つ目の村が見える頃には、一行がハウラを出てから一週間が経過していた。

予定ではもう少し遅くなる筈だったのだが、保存の利く食べ物や調味料を一つ目の村で捌くはずが、北にあつたその村は、ハウラに来る前に魔軍の略奪に遭い、多くの者が今も近隣の村に逃げ込んでいて廃村に近い状態だった。

アルザダの頑張りもあり多少は売れただれど、それでも多くの在庫が余ってしまい、リサが魔法の冷氣で持たせながら旅路を急いでいたのだ。

この辺りはウルフの上位種であるワイルドウルフが出没するポイントで、ウルフより匂いに敏感なワイルドウルフが背後から群れを連れて現れる事が多いので、レオを含む前衛3人が後続に、リサとアルザダが前方の馬車に乗り込んでいた。

手綱を2人に任せているレオは、相変わらず水鉄砲の練習をしている。

冷気をかける事ができれば練習にもなるのだが、誤って凍らせてしまうと商品としての価値が落ちてしまうので、任せてもらえなかつた。

それでも最初に比べれば魔力の操作上達してきており、消防の散水並みだった水圧は、家庭用の物程度には落ちてきていた。

表の座席に座つて、氣だるそうに手綱を握っていたギルだったが、ふと思い出したように振り返ると、レオの隣で横になつているゲオルグに声をかけた。

「なあ、そういうやう前のおんでた所この辺だつたら。ちよつとよつていかないか」

ギルは真面目な調子で言つたのだが、面倒そつに溜息をついたゲオルグは、寝返りを打つて背を向けた。

「別に、今は急いでるし、去年は一度戻つてゐからいいぞ」

「ん、行くならアルザダさんには俺から言つけど、本当に良いのか？」

レオとしては氣を使って言つたつもりだったが、ゲオルグはうざつたそくにヒラヒラと手を振つた。

「いいんだよ、どうせ生きてる知り合いは居ないんだ。墓参りだけなんだから、そう頻繁に行かなくてもいいぞ」

「あ、そうだつたのか……すまん」

「別に気にしなくていいよ。共和国と魔術帝国は昔から仲が悪くて、小競り合いなんてしようつちゅうだから、それ程珍しい事でもない」

それきり黙つてしまつたゲオルグから視線を外すと、ギルが申し訳なさそうにレオを見ていた。視線が合つと、気まずい雰囲気を壊すためか、ギルはそのまま軽い調子で聞いた。

「と」いふでレオ、確かに初めて会った時空飛んでたよな

「ん、そり言えればワイヤーバーンの時は飛んだな」

あまり目立ちたくないかった為、ハウラに戻る時に全力で駆けた時以外は空を飛ぶのは避けていた。

飛行魔法の話に興味を持ったのか、ゲオルグも顔を上げてレオを見つめる。

「え、なにアンタ空飛べんの？」

レオが頷くと、割り込まれそうになつたギルが身を乗り出して聞いてきた。

「なあ、次の休憩の時ちょっと俺を乗せて飛んでくれねえか？」

「別に……構わないけど」

「クッ」

予約が取れたギルは嬉しそうに拳を握り、先を越されたゲオルグは苦笑しげに呻いた。

2人の余りのテンションの高さに、ぼんやりとしていた頭が醒めたレオは、慌てて付け加える。

「ただ、あんまり目立ちはたくないから、人が来たらやめるからな」

「ああ、わかつてゐつて。しかし、空を飛ぶなんぞ、昔大枚はたいて巨鳥に乗らせて貰つた時以来だな」

ギルが楽しそうに言い、軽快に手綱を振ると、ゲオルグは心底つまらなそうな顔で座席に寝なおす。ただし、寝るときに「二人目はアタシだからね」と言うのは忘れずに。

別に面倒という訳でもなく、楽しみにしている2人に水を注すのも悪い為、極小さな声でレオが呟く。

「良いけど、空飛ぶつっても大した事無いと思うが……」

その呟きには誰も気付かないまま、荷馬車は真っ直ぐに数時間後の休憩地点へと向っていた。

休憩地点に着いたレオは、安全の為に寝袋数個で作った着地点を用意すると、革のベルトを数個使ってギルの身体を固定していた。前の荷馬車からリサとアルザダも降りてきて、何をしているのかと聞いてきて、ギルが事情を説明すると、納得したりサは自分も乗せて欲しいと頼んできた。

「アルザダさんは興味ないんですか？」

「私は高い所は苦手なので……遠慮しておきます」

気まずそうに言つアルザダに軽く謝り、周囲の警戒を頼むと、レオは自身にレビューをかけた。

準備を終えたレオは、ギルを背負つて一息に空へと駆け上がりついた。

常人の数倍の身体能力を持つレオの全力の上昇に、ギルが感嘆の声を漏らす。

「おほひ、じりやすげえな。見ろよレオ、むつあにひ等あんなち
ちやくなつちまつた」

トを覗くと、確かに荷馬車の脇に居るリサ達が小さく見えていた。

「もうだな……けど、悪いがこれ以上は上がれないんだ。あんまり
高い所で魔法が切れたら困るし……」

「まあいいや。お、見ろよ森の向こう、次の村が見えてるぞ」

「あれがそうか、じゃ、あっちの方には行けないな。反対に行くか」

身を翻し、山道を逆走するレオだったが、ハウラに戻る際森の上
に入り込むと巨鳥に襲われると学んでいた為、背中にギルを乗せて
いて戦闘は無理だという事もあり、あまり自由に飛ぶ事は出来なか
った。

それでも最初の内は遠くを見渡して楽しんでいたギルだったが、
徐々にその言葉も途切れ、彼の着るチーンメイルが鳴らせるカチ
ヤカチヤという音だけが響くようになった。

「なんか……すげえ高い山を走ってるみたいな感じだな……」

「まあ、実際走ってるだけだしな……」

飛んでいると言つても、自由に滑空している訳ではない。レオが
空中に作った足場の上を走つて居るだけなのだ。

慣れてくると飛んでいるというより、吊橋の上を走つているよう
な感覚になってしまい、面白みに欠けてきたのだろう。

「なあレオ、そろそろ……降りないか」

「ああ……」

「ど」「じ」となく残念な空氣が流れ始めた所で、空中散歩は終わりとなつた。

着地点に降りると、リサとゲオルグが駆け寄ってきた。

「ギル、どうだつた？」

田を輝かせて聞くゲオルグに、ギルは何とも言ひにくそうな表情で頭を搔いた。

「いや、なんか思つてたのと違つて、飛んでるつて感じじゃなくつてな」

上空で感じた残念な空氣をギルが説明すると、リサとゲオルグは落胆の表情を浮かべてレオを見た。

「そんな田で見るなよ……俺の飛行魔法はこれしかないんだ。足を踏み外したら危ないし、つまらないつて言われてもなあ……」

「怪我しないように、って事なら仕方ないですね」

諦めの表情を浮かべるリサとは対照的に、ゲオルグは口をへの字に歪めて腕を組んだ。

暫く考え込んだ後、首を捻りつつレオに聞く。

「なあ、さつきの飛行魔法、アタシにかけるつてのは無理なのか？自分で走つた方が面白そつだ」

「いや、あんな高度な魔法他人になんて無理だと思つぞ」

無茶振りと思つたギルが割つて入つたが、実はレビテイトは他人にもかけられる魔法だった。

けれど慣れるまで操作が難しく、向こうでは落ちてもダメージは無かつたが、こちらでは高度に寄つては死んでしまう事もある。

「やれる事はやれるが、危ないから止めた方が……」

それを聞いたゲオルグは一ヤリと笑い、その顔を見たギルは「なんでやれるって言うんだよ」という表情でレオを見た。
ギルの言わんとした事に気付いたレオだったが、時既に遅く、ゲオルグに詰め寄られてしまう。

「高いとこに行かなきゃ良いんだる。大丈夫だつて、アタシは身体も頑丈だし、木の上くらいまでしか行かないからさ」

ゲオルグの性格を考えると、何とか断つた方が良いかもしれないと思つたレオだったが、気晴らしにもなるだろうし、フォローしてやれば大丈夫だろうと思い直した。

「まあ、そのくらいならいいか。俺も並走するから、行き過ぎるなよ」

「わかってるって、良いから早くやつてくれよ」

ゲオルグの足元にレビテイトのイメージ　円とルーン文字が浮かぶ　を浮かべたレオだったが、魔法をかけられた本人は首を傾げた。

「まだかい？」

「え、もう魔法はかけたはずだけ……」

そうなのか。と、生返事をしたゲオルグはその場で足を上げたり、ジャンプしたりしたのだが、一向に空中に足場を作れる様子は無い。空中を足で掴む感じで、とか、足の裏をなるべく水平に等とアドバイスをしながらも、レオが何度か魔法をかけなおしたのだが、結局アルザダが村の方から来る旅人を見つけるまでかかっても、ゲオルグが空を飛ぶことは無かった。

ゲオルグは不満そうにぶつくさ言いながら諦めたようだが、レオはそう単純には済まなかつた。

思い返してみれば、リサが放った魔法を完全に食い止めたレジストシェルも、元のゲームの時とは性質が違っていた。
大き目の薪の上に腰掛け、配給された食糧を食べながらどうしてだろうかと考えるレオの所に、ギルがやつてきて声をかけた。

「よひ、どうしたんだ」

「ギルか。ちょっと考え事してただけだよ、何か用か？」

相談したい所だったが、呪いの事があるので正直には言えずにはぐらかすと、ギルはレオの隣に腰掛けた。

「いや、用つて訳でもないんだがな。さっきの荷馬車で話した事で、ゲオルグのやつ贋曲げちまって、こつちに追いやられたってわけだ」

肩を竦めて冗談めかして言つギルに、「俺の隣は流刑地なのか」

とレオが頃垂れながら呟くと、ギルは「ヤーヤ」と笑いながら答えた。

「困った事がある奴は、皆レオに吸い寄せられていくんだよ」

「全く嬉しくない引力だな……ところで、随分詳しいみたいだつたけど、ギルとゲオルグって付き合い長いのか」

「別に長いつて訳でも無いぞ。この近くで野垂れ死にかけてたゲオルグを拾つたのが始まりだつたんだが、最初は一緒に旅してた時、護身用にって剣を教えたら、あつと言つ間に追い越されちまつてな。俺じや高ランクのクエストは着いていくのも覚束ないつてんで、すぐ別れたんだ」

更にギルは明後日の方向を見ながら、「それに、あの頃はロランク止まりだつたしな」とギリギリ聞こえる程の小さな声で言った。

「へえ……」

何となく興味が沸いてチラリとゲオルグの方を見ると、向こうもレオ達のしている話が気になるらしく、目を据えてこちらの様子を伺つていた。

慌てて食事に集中したレオは、話し相手のギルに視線を戻すと、話題を変えた。

「ん、けどゲオルグに剣を教えてたつて、ギルって歳いくつなんだ？」

「今年で31になる」

「なるほど」

何だか妙に気が合う相手だとは思っていたが、レオの元の体の年齢と近いと言うのもあったのかもしれない。

一人で納得して頷いているレオを不審に思ったのか、ギルも聞いてくる。

「そういうレオはいくつなんだよ。ハイエルフは見た目と釣り合わねえ歳だってのは前聞いたけどよ、実際何百歳くらいなんだ？」

別に隠す事でもないしと思い正直に答へようとしたが、よく考えるところの世界での一年が何日だか解らなかつた。

「ちなみに、一年って何日だっけ？」

「360日だる。って何の質問だ今の」

元の世界と殆ど大差が無い事に安堵し、首を傾げるギルを何とか笑つて誤魔化すと、レオは28歳だと告げた。

これにはギルは大いに驚いたようで、大きく口を見開いて声を上げた。

「つて事は、お前も年下だったのか」

「ああ、3つ年下だな」

「やうか……」

何やら考え込むように黙つてしまつたギルを尻目に、食事を終えたレオは荷馬車でこり固まつた身体を伸ばした。

「なあ、ちょっと運動がてらまた剣の練習しないか。この所、ずっと座つてばかりだし」

「剣の相手ならゲオルグの方がいいんじゃねえのか?」

肩を竦めて自嘲氣味に言うギルに、レオは呆れたように溜息をついた。

「ゲオルグは……強いけど、熱くなると終らなくなるんだよ……」

「確かに、それは厄介だな」

納得したように笑つたギルは、立ち上がりて荷馬車から木刀を取り出す。

レオもそれに続き、二人は荷馬車が出発するまで、小一時間ほど身体を動かした。

出発してから3～4時間程度行つた所で、寂れた村が見えてきた。近くの商店に交渉しに行つたアルザダとギルを残し、レオ達3人は先に宿を取りに行く。

その途中、ゲオルグが不意にレオの肩を掴んだ。

「東の宿は止めときなよ、あの宿は安いがあんまり清潔じゃないんだ。西の方に小さいが良い宿がある、案内するから付いてきな」

踵を返して西へ向うゲオルグを見て、事情を知らないリサがレオに不思議そうに聞いてきた。

「ゲオルグさんどうかしたんでしょうが、いつもとちょっと様子が違うよ」

「色々と事情があるみたいだ。俺からはちょっと……気になつたなら、後で本人に聞いてくれ」

リサは頷くとゲオルグの後に続いた。

あの2人は普段からよく話しているし、間にレオが入る必要も無いだろう。

西にあつた宿で、手続きを済ませて部屋に荷物を置くと、魔軍の情報を聞くために道中で見つけた冒険者ギルドへ向った。

通信手段の少ないこの世界では、最新の情報を得るのは難しいかも知れないが、注意して置いて損は無い。

だが、予想通りと言つべきかギルドのカウンターに居た若い男は、レオの魔軍に関する質問に首を捻つた。

「うーん、ハウラが襲われたって話はきいたけど、他に魔物の軍の話は聞かないなあ。なんでも、身長3メートルくらいで筋骨隆々の化け物みたいな顔したエルフが、単独で魔物の将軍を倒したって噂だし、向こうもまだ混乱してるんじゃないかな?」

「へ、へえ……」

あまりにも尾ひれがついた噂に、どこから突っ込んでいいか解らなくなつたレオは、魔物の事以外は聞かなかつた事にした。

帰り際、魔物の侵攻は暫く無いと踏んでか、かなり緊張感に欠けるギルドの受付に忠告をしておく。

「まだ話が伝わっていないかもしれないが、魔界じゃ飢饉があつたら

しくて魔物は飢えきつてゐるから、これが魔軍とは関係なく数が多くなるかもしねえ。気をつけたほうが良い」

「その話は初耳ですね。確かな情報でしょうか?」

「ハウラで聞いた話だ、間違いないと思つ」

それを聞いた受付の青年は、困り顔で頭を搔いた。
情報があつたとしても、ここのように多少大きい程度の村では殆どそれの対応など無いのだろう。
溜息と共に言われた礼を受け取ると、保存の効きそうな食材を買
い足して宿へ戻つた。

食堂へ行くと丁度リサとゲオルグが話をしている所だった。

ゲオルグの話をしていたようだが、一区切りついた所だったよう
でレオが近づくと、空いている席に着くよう促される。

「ギルドの方はどうだつたんだい?」

ゲオルグの問いに、少々顔を顰めたレオが答える。

「あの後はあまり動きは無いみたいだ。といつても、明らかに樂觀
してゐる風だからそもそも情報を集めてないだけかもしねえが」

「ただでさえこの辺りは国境の小競り合いで厄介ごとが多いんだ、
あんまり期待するのも酷つてもんさ。ともかく、全然話も出てない
つて事は良い事じやないか」

「ま、そうだけどな」

序盤でいきなり要人を失った魔軍の方も、今は荒れている事だろう。

自分達で納得している一人を他所に、横で聞いていたリサは首を捻つた。

「確かにここまで、そんなに魔物も多くなかつたですね……でも、よく考えたら魔物って動物みたいなモノが殆どなのに、どうして少ないんでしょう」

リサに言われて氣付いたのか、ゲオルグもこれまで倒した魔物を思い出すように中空を見た。

「言われてみれば、腹減つたら軍の意向なんて無視してこっちの世界に来そうなヤツが多いね」

何でだろう。と、首を捻るリサとゲオルグにレオが答える。

「向こうに行つて見た感じだと、そこそこ頭がいい奴が管理しているみたいだつたな。煙とかもある程度整備されてたし」

「ああ、思い出した。前に魔物の研究してるとか言う、ヘンテコな学者に聞いた事があつたな。大昔に召喚された悪魔と魔物の混血種は、強くて頭もいいとか」

ゲオルグの話が本当なら、魔物達も意外と人間に近い生活をしているのかもしれない。

向こうでの戦争は新しい魔神が生まれるまで無かつた事から、将军の死で混乱が続いているようだが、その混乱が収まればよいよ

本腰を入れて襲つてくるだらう。

リサとゲオルグは話に昇つた学者について話している。

それを横目に、もう一度魔物が攻めてきた時、自分はどうしていだらうかと考えながら、レオはぼんやりと一人を眺めた。

何となく口寂しくなつたので、厨房に行つて軽食と水の入つたカップを取つて戻ると、別行動になつていたギルとアルザダが戻つてきいていた。

二人共、少々肩を落として溜息をついている。

「やれやれ、あの雑貨屋の老婆にはやられました」

疲れ果てた様子のアルザダの肩を叩きながら、ギルも呆れたように咳いた。

「あそこまでしつこく値切つてくれるとはなあ。まあ、こんな日もあるだろ？」

さ

どうやら相当値切られてしまつたようだ。

苦笑したレオが手に持つた食べ物をアルザダに差し出すと、「ありがとうございます」と咳いてもそもそと食べだした。

落ち着いた頃合を見て魔物の話を始めたが、話と言ひほど大したものでもないので、直ぐに終つてしまつた。

日が暮れ始めると、酒場としても開放している宿の食堂は人気が多くなつてきた。

騒がしくなるかと思つたのか、頃合を見て疲れきついていたアルザダとリサは席を立つている。レオも立とうとしたのだが、襟首をゲオルグに掴まれてしまった。

「うふつと付かぬでよ」

「え、いや俺は……」

断ろいつとした時、ギルがそそくわざと席を立つて部屋に戻るのに気が付いた。

いつもならギルが付き合いつのだろうが、今日は雰囲気が良くない。しかし故郷の近くを通つて、飲みたい気分になつてゐるのだろう。何となく事情が解つてしまつレオは、諦めの溜息と共に椅子へ座りなおした。

「たまにはアソンタもどづだい」

差し出されたウイスキーのよつた酒の入つた簡素なボトルに、容易に想像できる翌朝のリサの表情を思い浮かべ、項垂れながらグラスを合わせた。

一口飲んで喉を潤すと、わざと逃げたギルを恨みつつ損な役回りを演じる。

「しかし、そんなに怒らなくても良いだり

「ん?」

解つてゐるとしか思えない顔でとぼけるゲオルグに溜息をつきながら、もう一度指摘する。

「ギルの事だよ。あいつだつて悪氣があつて言つた訳じゃないんだから

「そんな事は解つてゐる。ただ、アタシにだつて色々あるんだよ

レオとしてもあまり深入りしたい話題ではないが、このままの状態では不味いのではないかと思い唸つていると、ゲオルグが一度グラスを煽つてから続けた。

「旅の途中もあるし、何口も引き摺つたりはしないさ。この話は終り。ほら、アンタも飲みなよ」

しぶしぶレオがグラスに口をつけなおすと、ゲオルグは嬉しそうに笑つた。

店は仕事帰りの農夫達と宿に泊まつている冒険者でそこそこ繁盛しているため、少し大きな声で会話を続ける。

「ところでギルに聞いたけど、ゲオルグってギルに戦い方を教わったんだって？」

未だ何故自分が刀の扱いが出来るようになったのか解らないレオは、戦いの中での駆け引き等はまだまだ練習中の身だ。

今まさにギルに教わつてているレオからみると、ゲオルグは兄弟子と言つ事になるかもしねれない。

「教わつたつて言つても最初の頃、ちょっとだけで、アタシの性分にも合わなかつたから、基礎の部分意外はあんまり影響受けでないけどね」

思い起こしてみれば、ギルとゲオルグの立ち回りは真逆だ。援護やサポート重視のギルと敵陣に切り込んでいくゲオルグでは、戦い方が全く違うのだろう。

「それにランクが上がつてからは、すぐに別に行動しようつて言わ

れだし、期間としてもあまり長くなかったのか

当時の事を思い出しているのか、少し遠い田をしたゲオルグが付け足す。

「なるほどな」

相槌を打ちながら酒を煽るレオに、今度はゲオルグが聞いてきた。

「そういうアンタはどうなんだよ。あんな扱いにくそうな剣自然に使つてる割に対人戦は弱いし……どういう鍛え方したら、そうなるんだよ」

「う……」

刀の扱いはこの世界に来ると同時に、いつの間にか身についていたモノだ。説明を求められてもレオには答えられない。

「これは、その……呪いの事とも関係するから、今は言えないんだ

「ふーん」

全く納得は行つていないようだが、呪いの話を出されでは追求しようもないでの、少し考えて諦めたようだ。

だが最後に、釘を刺してくる。

「今は言わなくていいけどさ。教国についたら、ちゃんと説明してくれよ。ギルやアルザダなんかは、恩人だからってあやふやにしたままで文句言わないけど、アタシは知つておきたいと思ってるんだ」

「あ、ああ」

普段あまり思慮深いとは思えないゲオルグからの意外な言及に、レオは少々面食らつて頷いた。

一旦両者が黙り込み、暫く酒場の喧騒だけが耳に入つていたが、あまり面白くない話が続いていた為か、ゲオルグが急に話題を変えた。

「ポーカーでもやんないか。結局アタシとは一回しかやってないじやん」

「え」

確かにポーカーは元の世界を思い出せるのでレオも好きだが、ゲオルグとやるとなると話は別だった。

賭けをしていた訳ではないのだが、前にレオが一度勝負してから、仲間達は全員「ゲオルグとはポーカーはしない」と心に決めていた。実の所、ギルが金を賭けないならやらないと言つていたり、アルザダが絶対にやらないと言つているのは、ゲオルグ対策でもあるのだ。

「待て待て、魔物……魔物の話をしないか？例えばこれまで倒した一番デカイ魔物とか」

「誰かさんが一人で倒した、ジャイアントよりデカイ魔物を倒した事なんて無いさ。良いからとつとトランプだしなよ」

話を逸らすつもりが、ジャイアント戦の事を思い出させる事で余計に逃げ道を無くしてしまった。

これから起こる事を考えて冷や汗を流しつつ、顔を引き攣らせた

レオは収納袋からトランプを取り出しそうに手を動かす。

開始から三時間程が経ち、辺りはすっかり暗くなり、客も粗方帰り始めている。

ポーカーと言つても金は賭けていないのだが、テーブルの上には点数代わりの鉄貨と、ゲオルグが飲み干した空の酒瓶が数本置かれている。

四度ほど分け直した鉄貨は、今回『も』殆どがレオの前に移動していた。

「ぐ……ぬぬぬ……」

何度もやつてもリードさえ取れないゲオルグは、空になつたボトルを片手に、握りつぶすような勢いでトランプを握んで震えている。今にも爆発しそうなその有様に、対面に座るレオはいつでも逃げられるようにと腰を浮かせて構えていた。

と言つてもこの惨状の原因の半分はテーブルに転がっている酒瓶のせいだ。

やはり故郷が近いと言つ事もあつてか、レオが止めるのも聞かずハイペースで飲んでしまつている。

もう一つの原因であるトランプだが、ゲオルグはそれ程運が悪い訳ではない。

だが、手札がそのまま顔に出てしまうのだ。

それは読み合いが主なポーカーに置いては致命的である。どんなに良い手が来ても、降りられてしまえば終わりだからだ。

しかしどんなにレオが指摘しても、一向に改善される事は無く、手が良ければにやけ、悪ければ眉を顰める。

さらに悪い事に、レオがわざと負けたりすると勘の良いゲオルグは直ぐに気付き「手加減してんじゃないよ……」と、殺意の籠った視線をぶつけてくる。

レオにしてみれば正しくハ方塞がりだった。

始める前から決まっていた終わりが徐々に近づいて来て、レオは「ゴクリと喉を鳴らした。

「え、ええと……ツーペアだ」

レオが手札を晒すと、ゲオルグの手からカードがパラパラと落ちた。

彼女の手札は、何の役も揃っていない。

これにより、ゲオルグの持つ点数は五度ゼロになった。

何とか宥めようと言葉を選ぶが、レオ自身も焦っている為に何も浮かばなかった。

やがて、猫背になっていたゲオルグがポツリと呟く。

「イカサマだ……」

「いや、イカサマなんて使う必要が……」

つい本音で突っ込んでしまい、慌てて口をふさぐが、最早後の祭りである。

視線だけで殺されるのではないかと言ひ程の勢いで睨まれ、思わずたじろぐ。

「じゃあ、何で毎回アタシのストレート負けなんだ」

「だから、手札の良し悪しを表情に出さないよ！」

「アタシは表情になんてだしてない！」

酔っ払いの怒鳴り声に酒場は静まり、レオの背中には冷や汗が流れる。

「ちょ……ゲオルグ、冷静に……」

泥酔したゲオルグはながら、空っぽのボトルを放つて腰から剣を抜く。

「ま、まで、剣は抜かないって約束したじゃないか！」

鞘に収まつたまとは言え、殴られればただではすまないだろう。泥酔しているはずなのにしっかりと標的を見据えるゲオルグに戦慄しつつ、完全に酔いの醒めたレオは数歩後退した。

半泣きのゲオルグは、ゆらゆらと頼り無い足取りでレオを追いかける。

このまま店内で剣を振り回されると宿を追い出されかねないと思つたレオは、全力で宿の外へ駆け出す。

「待ちやがれレオオオオオ……」

こうして、泥酔状態のゲオグルの怒声を背に、レオは小さな村の中を暫く駆け回る羽目になつた。

国境の村（後書き）

どうも、作者です……。

内容忘れられそうなくらい間が空いてしまいました。——

勘も鈍つてると書つか、見直してもこれで良いような悪いような
といつ、完全なブランク明けモードになってしましました……。
徐々に戻していくつもりですので、暖かい目で見守って頂けると
助かります。

内容についてですが、次回もアルザダの話といつ事で、脇道逸れる回が続きます。

間空いた直後で説得力ありませんが、なるべく早めに出せねばと思ひます。

友と敵と

一行を乗せた馬車が昨夜一泊した村を出て、数時間が経過していた。とは言え、木々の生い茂る高い山に囲まれた山道を縫うようにして続く細い道は、既に人里からは遠く離れているような印章を与える。

そんな穏やかな風景を尻目に、顔色の悪いレオは荒い山道での馬車の振動で酔つてしまわないよう、神経を尖らせていた。

結局あの後、飽きるまで走り回ったゲオルグを担いで宿の主人に謝り倒す事で、追い出される事は回避できたレオだが、気疲れと揺れ続ける山道のせいでの昨日とは別な酔いを味わい初めていた。

「はあ……」

一際大きな溜息をつくと、隣に座るギルは、ばつが悪そうにレオを見ないまま顎を掻いた。

風当たる為に馬車の中から騎手のギルの側へ移り、肘掛け寄りかかっていたのだが、必死に吐き気を堪えていると何となく隣に座るギルへの怒りがふつふつとこみ上がりてしまい、チラリと非難の色を含んだ視線を投げかける。

「まあなんだ……次の休憩所行つたらテント建ててやるから、少し休もうか」

「いや、さすがに進行遅れさせるのは不味いだろ」

本音を言えばレオにとつてとても魅力的な誘いなのだが、レオが休みたいと言つてしまふと、もし困るような状況であつてもアルザダもなかなか断れないでの、簡単に領く事は出来ない。

そんなレオの心中を察してか、ギルは肩を竦めた。

「別に休むのは罪滅ぼしでつてだけじゃないぞ。俺らの主力はレオとゲオルグなんだ、冷静に考へても、一人が潰れてる状況でこの先の国境付近通るのは避けてえしな」

一向が通つている山道は、魔物の増加を警戒して国内寄りの経路ではなく、魔術帝国との国境に沿つて進むルートをとつてゐる。

この道は途中何度も細い道がある為に、軍の配備もまばらで、盜賊が多く出没する地点もあるのだ。

「俺はともかく、ゲオルグは大丈夫じゃないか？村を出る時は平気そうだつたけど」

「ありや、あいつの精一杯の虚勢だよ。昨日はかなり飲んでたみたいだし、昔まだ俺が剣教えてた頃、女騎士に喧嘩売つてボロ負けした時もあんな感じだつたからな」

「なんだそなのか。やたら酒強いんだなと思つてたんだが……」

さすがのゲオルグも今回は悪いと思つてゐるのだろう、あまり迷惑をかけたくない無理をしてゐるのかもしれない。

ただ、考へように依つては「無理をしたせいで不利になつては元も子もないだろ」とも言える。

何ともゲオルグらしい気の使い方に、ガタガタと揺れながら前を走る荷馬車を溜息混じりに眺めた。

「なら、開けた場所についたら休憩にしよう。アルザダさんに謝らないとな」

体調が悪い事もあり、それっきりぐつたりと手すりに寄りかかって動かなくなつたレオを、ギルが肘で小突いた。レオが顔を向けると、ギルが身を寄せて呟く。

「今度この前みたいな事になつたら、レオに付いてやるからよ。持ちつ持たれつって事で」

呆れたレオは、溜息混じりにあんな無茶な事は一度としない……と、言いかけたが、脳裏に四面楚歌でリサに謝り続けた辛さを思い出し、フリーズしてしまった。

暫し考えた後、心中で、無い筈ではあるが保険として頷いておこう。と弁明したレオは、なるべく小さな声で答えた。

「じゃあ念のため……貸しとこう事に」

「何の話をしてるんですか？」

話の途中だつたが、二人の挙動を不審に思つたリサが荷馬車から顔を出した為、レオは慌てて話題を変える。

「い、いや、大した事じゃないんだ。とにかくリサ、ちょっと聞きたいんだけど、魔法つて」

咄嗟に昨日の飛行魔法の事を思い出し、つっこみ出してしまつた

が、異世界の話が出来ない為に肝心な事が言えない。

困ったレオは、仕方なくリサが使える魔法について聞くことにした。

「 その、リサはどうのべるいの物まで使えるんだ？」

「ええと、あまり大規模なものは使えないですが、得意な属性の氷なら以前レオさんに使った雷撃より上位の、氷の玉を振り回す魔法なんかも使えます」

リサはそこまで言つて、自らの髪を指した

「ちなみに髪が半透明のも、無意識に返還している魔力が理由です。私達の一族は体内で出来る魔力量が普通より多いので、魔力が集まりやすい髪が変色しているんです」

「なるほど、染料みたいな物か」

「はい、ディアマンティ人以外でも、高位の魔術師なら髪が変色している人は居ます」

関心したレオがしげしげとリサの髪を眺めると、リサは少し拗ねたように口を逸らした。

「そんなに見ないで下さい、どうせ老人みたいな白髪なんですから」

「いや、セシリ亞も冗談のつもりだつて言つてただろ。リサの髪は透明だし、どっちかと言つと宝石を糸にしたみたいだよ」

「あの時笑つてたくせに、今更褒めても遅いですよ」

とは言いつつ、褒められる分には悪い気はしないのか、そのまま魔法の話を続ける。

「生み出せる魔力が多いと言いましたが、私は父が短期的に頼んだ魔術師に基礎を教わっただけで、使える魔法はだいたい一般の魔術師の少し上くらいです」

肩を竦めて言つリサだったが、ギルは感嘆の声を上げた。

「少し教わっただけだつたら、一般的魔術師くらいでも十分凄いんじやないのか？」

隣で聞いていたレオも頷いたが、リサは少し言い難そうに頬を搔いた。

「それは……その……姉さんと旅をしてる過程で、逃げる時なんかに地面を凍らせたりして練習を……」

騒がしい荷馬車の上で小声で呟いたため、よく聞こえずに訝しむ二人に、リサは大きく咳払いをして話題を変えた。

「ど、ともかく、私が使るのは前に見せた雷撃クラスの魔法全般と、それより少し上位の氷魔法です。それ以外にも生活用の魔法はある程度使えますが、魔力がある人なら誰でもやれる程度のものです」

解説を聞いたレオは暫し考え込んだ。

ギルやゲオルグの実力は、剣の腕を見れば解るが、リサについても一度全力を見ておいたほうが良いかもしない。

（それに、ついでに俺の魔法についても試してみたい所だ。休憩の時にでも言ってみるか）

消耗した状態で移動はしたくなかったが、休憩中に持続回復魔法で回復すれば良いだろ？

と、レオが考え込んでいる間にギルが割り込んできた。

「なあリサ、魔法の基礎は学んだって言つたが、剣に魔法を着けたりは出来ねえのか？」

顔は平静を保っているが、ギルの声には期待の色が籠っていた。だがリサはあつさりと首を横に振る。

「魔法の付与は素材についても知識が深くないと……魔力はイメージ的には液体のような物なので、一箇所に留めるのには高度な技術が必要なんです」

「やつぱそっかあ」と肩を落とすギルを尻目に、リサはレオが全員に渡した指輪を取り出した。

「その上、レオさんが渡してくれたこの指輪くらいの物でも、作るのに数週間はかかります。剣となると年単位が必要かと」

「へ、へえ……買ったものだから解らなかつたよ」

実際にはレオが路地裏で数分で作ったものなだけに、若干引き攣つた顔で誤魔化していると、ギルが辺りを見回し始めた。

釣られて見ると、徐々に道幅が広くなってきていた。もつ少し進めば、荷馬車を止めて休めるだけのスペースを確保できるだろ？

「開けてきたな、そろそろ休むか？」

「ああ、続ikipは休憩しながら話そう。アルザダ達に知らせてくれる」

頷いたレオは転移魔法を使い、一瞬で前方の車両へと移った。その光景を半ば呆れ顔で見ていたリサは、レオが荷馬車に入つていくのを眺めながらボソリと呟いた。

「魔法の基礎も解らないのに転移や飛行の魔法を使うなんて、常識はどうへ行つてるんでしょうね」

「ま、レオが何者かは俺も気になるが、向こうに着いたら言つてくれるだろ。アイツは悪巧みできるタイプじゃないし、大した事無い正体だと思つぞ」

ギルの言葉で悪巧みをするレオを思い描いたリサだが、どう頑張つても上手く行く様子が浮かんでこない。

「そうですね、レオさんの悪巧みを心配するよりは、明日の天気を心配した方が有意義な気がします」

リサとギルが、暫くそんな取り留めの無い話をして笑つていると、報告が終つたレオが転移で戻り、再び元の肘掛けに寄りかかつて頃垂れ始める。

その様子を見た二人は、やはりコイツに悪巧みは無理だろうと苦笑するのだった。

数十分後、未だ森の中ではあるが、ある程度開けた場所で荷馬車

を止めた五人は食事やテントの準備を始めていた。

ギルが組み立てたテントが出来上がるや否や、ゲオルグが中へ飛び込み、呆れたギルとレオは先に食事を取る事になった。

ゲオルグと見張りをしているアルザダ意外の全員が集まつた所で、ついでにと言つ事でリサの全力の魔法を見せてもらひました。

「別に良いですけど、切り札を使うとかなりの魔力を消費するので、回復するまではサポートも弱りますよ」

「休憩が終つたらゲオルグも俺も多少はマシになるだろ? し、盗賊くらいなら大丈夫さ」

いつものレオならそれもそうだと思う所だが、乗り物酔いでぐつたりしている現状ではあまり説得力がない。

ただギルも居る事だし、レオに至つてはまだ見ぬ魔法に目を輝かせている。若干納得が行かないリサかつたが、これ以上は言つても仕方がないだろう。

「行きます」

宣言と共にリサの持つ杖から光が漏れ、詠唱が始まる。

「肌を刺す冷気の結晶、刃の欠片、心の拳、我が腕の分身をここに」

詠唱が終わり、中空に現れたのは、氷の刃が無数に集まつた直径二メートル程の球体だった。

リサが杖を僅かに動かすと、その球体は回転しながら高速で木に突つ込み、轟音を上げ抉るようにして切断する。

球体は木を切断すると、半円を書いてリサの下に戻り元の中空で静止した。

上位に位置する魔法が成功したせいか、リサは得意げな表情を浮かべてレオ達を振り返った。

そんな笑顔を向けられても……と、思ったレオだったが、ギルも何と言つたものかと悩んでいるようなので、とりあえず感想を述べる。

「えっと……かなりエグ もとい、かなり威力の高そうな魔法だね」

最善の答えを選んだレオに合わせ、横に座ったギルも藪蛇にならないよううに頷く。

「ああ、この魔法ならレオだってイチコロだぜ」

その例えはどうなんだと思ったレオだったが、ギルの以下の関心はあの玉がこっちに飛んでこないかどうかからしく、視線は氷球に向かたまま動かない。

二人の評価に気を良くしたリサは、氷球を旋回させながらレオに向き直る。

「先生に教えてもらつたものなんですが、この氷球、維持してゐる間は何度でも使って燃費がいいんです。操作はちょっと難しいですが、試しにレオさんも使ってみてください」

先ほどの氷球を盜賊相手に使つた図を想像したレオは、引き攣つた笑みで断つうとしたのだが、魔法に関してはリサが教師役をしている面があるので、断りきれず結局使ってみる事になった。

「いいですか、操りやすくするために、球体にする必要があるんで

す。取り合えず刃は要らないので、球体だけをイメージしてください

「解った」

ようやく覚え始めた魔力制御で、必死に球体をイメージして詠唱したレオだったが

案の定、現れた四メートル四方の真四角な氷の塊は、少しも浮くことなく地面へ落下した。

何度かやり直してみたものの、結局現状のレオの魔力操作では一瞬空中に留めるくらいが限界だという結論に至った。

途中から意地になってきたレオが、既に二回ほど再現していたりサに「もう一回だけ見せてくれ……」と頼んだのだが。

「レオさんじゃないんですから、あんな消費の激しい魔法ほいほい使っていたら、魔力枯渇を起こして倒れてしましますよ……」

と、言われて断られてしまった。

グラビティワールド の基準で言えば、レオでも使えるレベル30程度の魔法と同等の消費しかないようなのだが。

と、そこまで考えて元の世界の魔法の事に思い至った。

「そうだ、魔力を回復させる魔法があるんだ。それをリサに使つから、回復したらもう一度やって見せてくれ」

本人は「何で今まで忘れていたんだろう」という想いだけで言つ

た言葉だつたが、それを聞いたリサは信じられないモノを見るような目で、呆然と口を開けたままレオを見つめた。

「あの、何の魔法を使つて言いました？」

「いや、だから魔力を回復させる魔法を……」

魔界から逃げる時に使つたMPを持続回復させる魔法を思い浮かべつつ、生返事を返すレオに、さすがのリサも眉を顰める。

「聞き間違いでなければ、魔力を使って魔力を生み出す魔法という風に聞こえたのですが……何かの間違いですよね？」

ようやく言葉の意味を理解したレオは、硬直して冷や汗をかいた。冷静に考えれば、魔法を『何でも出来る技術』と考えているレオは特に疑問に思わなかつたが、原理を理解しているこの世界の人間にしてもみれば、ゲームに出てくる魔法などとんでもない物の方が多いだろう。

魔法を知らないギルは首を捻つてゐるが、リサは戸惑いに近い表情を浮かべていた。

「昔怪しい魔術師に教えて貰つた魔法なんだ、効果も回復するようなしないようなつてレベルだから、自分の魔力を分け与えてるみたいなモノかもしれないな」

必死で誤魔化すレオに、何となく釈然としないものを感じながらリサは渋々頷いた。

「安全な術なら、試しに受けでみてもいいですけど……」

魔法自体はレオが自分にかけた事もあり、他人に補助魔法をつてもなんとも無い事は昨日のゲオルグの一件で確認済みだ。

未だ不安げなリサに頷きかけると、いよいよリサの周囲に魔力持続回復魔法 マナリジエネイト のエフェクトを思い浮かべる。しかし完全に発動した状態を過ぎても、リサは首をかしげたままだった。

「何もおきませんけど」

「そ、そうか」

成功したらしたで面倒ではだったが、戦力的な面では少し残念な思いもある。

訝しげな表情のリサとギルを何とか誤魔化し、テントの方に視線を向けると丁度ゲオルグが出てきた所だったので、少し休むと言い残したレオは一人テントへと向つ。

蒼い顔で唸つているゲオルグに、テントを使うと一声かけると、中に入つて横になつた。

一人になつて考えるのは、やはり先ほどの魔法の事だ。

この世界の事を知れば知るほど、レオの異常さは表立つてくる。確かに異様なまでの力を持つてこちらに来れたのは、元の体で繰るよりはマジだったかもしれないけれど、そう簡単に喜べるものではなかつた。

皆に対する説明も、刻印の事もあって誤魔化しているが、教国についた後に何と言えばいいのか、今はまだ想像もつかない。

「教国か……」

だが、そんなレオの戸惑いとは裏腹に、教国はもはや目前まで迫

つていて。

早く事実を知りたいという思いと、何を言われるか解らない恐怖に挟まれながら、レオはゆっくりと浅い眠りへ堕ちていった。

暫くしてレオが目覚めた頃には、既に荷物は片付けられ、荷馬車の準備は終つてしまっていた。

ゲオルグが復帰したのでリサと一緒に後続の車両に乗り込み、レオはギルとアルザダが交代で操作する先頭の荷馬車へと乗り移る。体調もある程度回復したので、課題である魔法の制御の為に水鉄砲で練習していると、アルザダとギルの声が聞こえてきた。

「そういうや、あの木箱ずっと積んであるが、売れ残ったのか？」

ギルが指した方を見ると、確かに見覚えのある小さな木箱が置いてあつた。

「ああ、あれは透貫石と言つて、魔法で出来たものを素通りする特殊な鉱石なんだ。と言つても、純度が高いものしか通過できないから、高価で珍しい上に武器全体に使うには量が必要で、滅多に買う相手はないんだが、最近魔術帝国の方で少し需要があるらしいからドリュークで仕入れていたんだ。本当は途中で売るつもりだったんだが、教国までいく事になつたから温存して置いたんだよ」

「お前が売れ残りを出すなんて珍しいと思つてたが、そういう訳だつたか？」

ギルが関心したように唸ると、アルザダは肩を竦めた。

「まあ、実際に売れるかは五分だけど、その分儲けは大きいのでね」

「相変わらずしっかりしてんなあ」

木箱をぼんやりと見つめながら、ギル達の会話を聞いていたレオだつたが、二人の様子からふと気になつた事があつた。ゲオルグはともかくとして、常識派のギルが、雇い主のアルザダと話をする時、いつも普段通りの口調というのは少し違和感があつた。

「そう言えば、ギルとアルザダさんって初めて会つた時も一緒にだつたみたいだけど、付き合い長いのか？」

「はい、私とギルは同郷の出でして、子供の頃から一緒にだつたんです」

やはりそうか。と頷くレオに、ギルが続ける。

「アルザダは商店の三男でな、俺が村に戻つた時、行商に行きたいから護衛をしてくれつてしまふと頼んできたんだ。護衛は俺一人だつて言われて、最初は断るつもりだつたんだが……」

「あの当時はガキ大将だったギルが、外の世界でも最強だと信じてましたからね。ギルさえ居れば安心だと思つていたんですよ」

この世界の移動は、徒歩や馬を使ってモノが主流だ。駆け出しの冒險者一人と初めて旅に出る行商人の一人では、さすがに無謀といふものだろう。

当時を思い出したのか、ギルは困り顔で笑つた。

「最初は絶対無理だと突つ撥ねたんだけどなあ。あんまりしつこいから、俺に払う分の金で、もう一人雇つて行く事になつたんだが」

「最下級の魔法もろくに使えない魔術師と、酔つ払いの剣士……今思えばよく生き残れたモノですよ。あの時のギルへの出世払いは、随分と高くなきました」

恥ずかしそうに頬を搔くアルザダに、当時を思い出しても、ギルが楽しそうに笑つて返す。

「んな事言つて、あつと言ひ間に稼いで返したのはどこの誰だ。まあ、お陰で俺も、それ以来殆ど食いぶちには困らなかつたがな」

「あんなハズレを引くのは、もう一度と御免ですかね。あれからは紹介が無い護衛は、実際に会つまで雇わない事にしてます」

いつも慎重なアルザダの過去の失敗談が聞けて、何となく嬉しくなつたレオだが、そんな話の一つも出来ない現状に、一抹の寂しさを覚えた。

前に座つたギルも、そんなレオの様子を知つてか知らずか自嘲気味に笑つた。

「本当、お前はしつかりしてる……いつまでも彼方此方フラフラしててる俺とは正反対だな」

「どこのか遠い目をして晒つギルに、アルザダは微笑みかける。

「前にも言つたけど、ギルさえその気なら、私は、一緒にやつていく相棒と言つ事にしてもいいんだよ」

「ソイツは確かに魅力的だが、今はまだ遠慮する。俺もまだまだ強くなりたいって夢もあるしな……ま、半分諦めかけちゃいるが」

ギルの求める強さを、偶然の出来事で手に入れたレオは、彼らの何でもない会話を聞いて、心底ギルを羨ましく思つた。

だが、この力はこの世界に来た時に降つて沸いた正体不明のものでしかない。懸命に生きてきたギルの人生と交換したい等と、思うこと自体があこがましいだろ？

もしこの世界に来たのがレオ一人で無かつたならば、ギルの言葉を聴いても別な事を思つたかも知れない。しかし、現状ではレオの過去を知る人物など、この世界には独りも居ないのだ。

「どうしたんだレオ、水鉄砲は飽きたのか」

唐突に声をかけられ、レオは驚いて顔を上げる。

自覚は無かつたが、魔法の事もあって少々感傷的になつていたようだ。

「ちょっと魔力の調整をしてたんだ。ところで、ギルは休んでおかなくていいのか、今日は村を出てから殆ど休んでないだろ？」

午前は後続の荷馬車の操縦、休憩中はテントの設営を一人でしていたのだ、多少なりとも疲れは出ているだろう。

だが、ギルは肩を竦めて笑つた。

「俺が何年冒険者やつてると思ってんだ、こういうのはお手のものだぞ。自分で言うのもなんだが、今のランクだつて寧ろこういう所の評価で上がつた分が多いくらいだ」

言われてみれば冒険者といえど基本的には旅行者だ、腕つ節も重
要だが、それだけが評価の対象ではないだろう。

寧ろこういった雑務が出来た方が、冒険者仲間からの評判は上がりやす
く、顔も広くなるというものだ。

その部分ではゲオルグなどは酷評になるよつな……と、思いかけ
たが、あのキャラと頭では好かれる事の方が多いそうだ。

今後の事を考えれば、レオも荷馬車の操縦等も一応覚えておいた
方が良いかもしれない。

一瞬「あのゲオルグでさえ覚えてるんだから……」と思つたレオ
だったが、さすがに口には出さなかつた。

「なあギル、今度荷馬車の操縦教えてくれないか。さすがにこんな
悪路じや練習には向かないだろつし、直ぐにつて訳じやないんだが」
「おお、任せる。実はあのゲオルグに教えたのも俺なんだぞ、
それなりに自信もあるんだ」

心中を見透かされたよつなギルの返事に、沈んでいたレオもつい
吹き出してしまつた。

「そりゃ、安心だ。世界一の授業を期待してゐる

と、その時、背後で聞き覚えのあるアラーム音が鳴つた。
ビィィィ　という音は、聞きなれた指輪の警笛だ。その意味
する所は……。

「敵襲だ。レオ、アルザダを頼む。俺は後ろの荷馬車を操縦をする

飛び降りるよう荷馬車を降りたギルに、レオは額きつつ後方を振り返った。

既に十人近い盗賊が現れ、荷馬車を囲み始めていた。

消耗しているリサは直接攻撃ではなく、地面を凍らせたり雹を飛ばして進行を妨害したりといった補助に徹している。ゲオルグも奮闘しているが、さすがに数が多いため、荷馬車を降りて相手をしているようだ。

だがレオに他人の心配をしている余裕があつたのは、そこまでだつた。

ギルが後方に行くや否や、人数の減つたレオ達目掛け二十人近い盗賊が押し寄せてきた。

僅かに舌打ちしたレオだったが、さすがに魔界を生き抜いた過程で戦闘にも慣れつつある。

矢が飛んできたが、レオは慌てず、即座に自身とアルザダに低レベルのプロテクトアーマーを使う。

「はっ」

地面に向けて炎系の魔法を仕掛け、散乱した土くれに怯んだ隙に四人の手足を切り裂き、へし折った。

しかし幾ら炎系の魔法で、エフェクトが爆破風とは言え、元々搅乱用の魔法ではない。一度目は音と派手さで怯むものの、二度目以降は目に見えて効果が衰える田くらましだ。

叫び声を上げて突撃してくる盗賊の足を、払うようにして蹴りを入れる。

ある程度は加減したが、骨が折れる軽い音がして敵は倒れこんだ。

ふと、こんな山奥で手足が不自由になつた盗賊たちが、この後ど

うなるのかと言つ考へがレオの脳裏に浮かんだ。更にそれを差し引いても、効率の面から見ても決して賢いやり方とはいえない。

自分でも舌打ちしてしまう程の甘い考へだが、レオは未だ元の世界に未練がある。頭では既に殺した事もあると解つても、簡単に割り切れるものではなかつた。

更に五人ほど行動不能にしたが、勢い良く走り込んでくる敵は増えるばかりだ。

「クソ……数が多い。アルザダさん、一度向こうと合流しよう」

恐らく最初から、商人の乗つているこちらの荷馬車を本隊が狙っていたのだろう。ギル達の方は、既に半数以上を片付け、こちらに進んできていた。

止まれば不利になるが、さしものレオも大きな荷馬車を全方位から襲われ続けるのは辛い。後方の荷物は多少諦めても、合流した方がいいだろう。

レオの提案にアルザダが頷き、荷馬車が停止した瞬間、森の中から魔力の流れを感じた。

「不味い、逃げろっ！」

「え　」

慌てたレオが、呆けた声を上げるアルザダに向け、レジストショルを使おうとするが

それよりも早く、森から飛来した一本の氷柱がアルザダの胸を貫いた。

「あつ……」

胸に刺さった氷を、アルザダが呆然とした表情で眺め、ゆっくりと前屈みに倒れていく。

「よつし、よくやつた。なあアンタ、雇い主は死んだんだ。積荷半分渡してくれりや、他は見逃してやつても」

田の前の親玉風の盗賊が何か言つていたが、レオにはその内容が理解できなかつた。

「邪魔だ」

邪魔と言つよりは田障りだつたその男を、レオは加減無しで蹴飛ばした。

男はバキバキと骨の折れる音を鳴らしながらボールのように吹き飛び、森の中へ消えた。

その凄まじい光景に周囲の盗賊は氷つき、唯一僅かに冷静さを取り戻した魔術師が杖を構えたが、こちらも加減無しのレオの雷撃によつて黒こげにされてしまった。

ガアーンツという鉄を裂くような轟音と凄まじい雷光に、ただでさえ硬直していた盗賊達は更にその身を強張らせた。

「何……だそりや……」

盗賊の誰かが呆然と声を上げたが、そんなことは最早レオにはど

うでも良い事だ。

全力で荷馬車に駆け戻ると、群がっていた盗賊達は怯えたよう以後退した。

本気を出したレオが荷馬車に戻るまで、一一秒とかからなかつた。「たつたこれだけの距離に居たのに」という思いが、脳裏を過ぎる。

「ア、アルザダ……」

声をかけたレオに、僅かにアルザダが顔を上げる。

何とか治してやりたいと思うレオだったが、ついさっきまで冷え切つていた筈の頭はパニックを起こし、治癒魔法のエフェクトが浮かんでこなかつた。

「レ……」「

何か言いかけたアルザダだったが、言葉は途中で途切れ、呆然とした表情のままパタリと椅子に倒れこんだ。

徐々に消えていく氷柱を呆けた顔で眺めるレオに、対照的に冷靜さを取り戻した盗賊達が剣を構え直す。

その時、アルザダの指に嵌められた一つの小さな指輪が、淡い輝きを放つた。

それは、本来この世界には存在しないはずの物質で作られた、一

つの魔法と願いが込められた指輪。

輝きは徐々にアルザダの体全体を包み込み、グラビティワールドでは誰もが一度は受けた事のある、とある魔法が発動する。

その魔法の名は、オートリザレクション。

ゲームならばあつて当たり前の、だが現実にあれば余りにもどんでもない効果を持つ魔法だつた。

アルザダの生氣の抜け顔に意思の色が戻り、開いた目が指輪を見、そしてレオを見る。

レオを恐れて離れていた盗賊達はその光景は見えていなかつたようだが、動きの止まつた二人の様子を伺うように動き始めていた。

それに気付いたレオは、ともかく蘇生について気付かれないうつ、迅速に敵を殲滅しなければと思い至る。

「アルザダさんは荷馬車の中へ」

そういう残し、急いで周囲を見渡す。

荷馬車前方に居る盗賊達は十名ほどだ、彼らには悪いが、アルザダの様子を疑問に思う前に殲滅しなければならない。

全力を出したレオにとつて、普通の人間などただの脆い的に過ぎない。

鎌鼬が切り裂き、雷光が貫き、残つた者も転移と飛行魔法で空間を制したレオの刃によつて、瞬く間に斬り伏せられた。

それでも精一杯の手加減はしたが、特に魔法で攻撃したものの中には、虫の息になっているものが多くなってしまった。

奮闘の甲斐もあり、ゲオルグ達が合流する頃には一頻り戦闘は終つていた。

アルザダの血塗れな服を見られると面倒なので、彼らを遮るよう荷馬車の前に立つ。

「うお、随分派手に暴れたねえ」

ゲオルグにとつては何気ない言葉だったのだろうが、その一言はレオを震え上がらせるに足るものだつた。

咄嗟に返事をすることが出来ず、ゴクリと喉を鳴らす。

だが、ただでさえ口元を布で隠し、表情が伺えないレオの僅かな変化に気付いた者は、たつた一人だけだつた。

「 囲まれてたからな、仕方なく全力を出しだけだ。だよな、
アルザダさん」

余りに現実離れした光景の連続に、完全に我を失っていたアルザダは、レオの声でようやく意識を取り戻した。

「え、ええ……そう、ですね」

レオの顔を伺いながら、呟くように言ったアルザダの言葉に急に寂しさを覚えたレオは、それきり何も言わずに荷馬車の中へ入つていつた。

いかにも不自然なやり取りだつたが、倒したとは言え盗賊の出た場所に留まるのは危険だ。

煮え切らない表情のまま背後の荷馬車に戻つていくゲオルグに、

レオは安堵の溜息をつく。

アルザダに服を変えるように囁うと、レオは疲れきって椅子へ

たり込んだ。

そんなレオの様子を、着替えを終えたアルザダは躊躇いがちに見守っていた。

ところが暫く待つてもギルが戻つてこず、自分でもじうにも成らない理由でレオが苛立ち始めた頃、ようやく荷馬車に誰かが乗り込んできた。

顔を上げたレオが非難を込めた視線を送るが、そこに居たのは予想外の人物だった。

「隣に座つても良いですか」

驚いて何もいえないレオが呆然と見上げていると、リサは返事を待たずに座つてしまつた。

突然の行動に困惑するレオだったが、それつきりリサは何も言わず、ただ黙つて座つているだけなので、少しずつ冷静さを取り戻していく。

考えてみれば、リサには前回殺した盗賊が始めての殺人だとバレている。

来るのが遅かつたのも、気を使つてギルに交代するように頼んでいたのだろう。

せめて礼だけでも言おうと口を開きかけたレオだったが、結局何も言えずに閉じてしまつ。

それでもリサは、何も聞かずに黙つて隣に座つていた。

それが何故かとても辛くて、俯いたままのレオは、精一杯の力で涙を堪えた。

数時間後、日も暮れかかりある程度道も開けたところで夕食を取る事となつた。

食事といつても長旅の間の、さほど多くない量の物だったが、レオは一口食べるのが精一杯だった。

祝勝も兼ねて多少酒を飲んだゲオルグが、見張りのギルと共に昔見た絶景の渓谷の話などをリサにしている。

さすがに会話に入る気になれないレオが一人荷馬車に寝転がり、ぽんやりと星を眺めていると、誰かが隣に座る気配を感じた。

「少し、宜しいでしょうか」

視線だけを向けて確認すると、声の主はやはりアルザダだった。

「どうぞ」

生氣の無い声で返事をしたレオの隣に、アルザダが腰を下ろす。

「今日は有難う御座いました、これで命を救われたのは、一度田ですね。それなのに私は……」

「別に、気にしなくていいよ。アルザダさんの護衛は、俺の仕事だつた。それが出来なかつた時点で、俺の過失だ」

ビニが投げやりに言つてレオに、アルザダは小さく首を振つた。

「いいえ、この指輪は今日貰つた物ではありません。これは、ハウでレオさんが何の対価も求めずに渡してくれたものです。それは、

レオさんが本気で私達の事を大切に思ってくれている事の証明でしょう

「それは

それは単に、この世界にその指輪を渡すだけの人間が他に居なかつただけだ。

彼らが居なくなれば、レオはまた草原に一人残された時と同じになつてしまふ。だが逆に、もし元の世界の知人が居れば、指輪は彼らに渡しただろう。

「良いんです。ただ私は、この恩は生涯忘れません」

そこまで言われてしまえば、もう何とも言ひ返すことが出来なかつた。

助けられた者にとって、最も重要なのは本人がそれをどう思つかだ。

レオは、リサの言葉を思い出す。

『だったら、私の為にも胸を張つていてください。助けなければ良かつたなんて言われたら、私だって流石にショックですよ』

あの言葉は、きっと今のアルザダにも当てはまる。

けれど、今のレオには、あの時のように黙つて頷く事が出来なかつた。

決してアルザダの命が軽いと言つわけではない。レオ自身に覚悟が足りなかつただけだ。

この世界で生きるという覚悟　だがそれは、元の世界に戻れるかもしづらいと言つ希望がある限り、完全に割り切るのは不可能なものだ。

「じめん、アルザダさん。今はまだ、何も言えないんだ」

苦しげに言つたレオの言葉に、アルザダは「解っています」とだけ答えた。

「ただ……」こんな事を言つのは余計なお世話かもしませんが、教国で何があつても、コサさんには本当の事を話してあげてください」

お願いします。と頭を下げるとい、アルザダは返事を待つ事はせず、黙つて自らのテントへと入つていった。

ぽんやつとそれを見送つたレオだったが、自身はとても暖の氣にはなれず、真つ白な頭のままで空を見上げていた。

どのくらい時間が過ぎたのか、気がつくと深夜になつていていたようで、少し体が冷えてしまつっていた。

焚き火の近くに座ると、見張りの交代の時間になつたのか、ゲオルグと入れ替わつたギルも暖まりにきた。

「ん、まだ寝てなかつたのか。ゲオルグの次はお前の番だぞ、寝なくて良いのか」

拾つてきた枝を焚き火にくべながら聞いてくるギルに、心うるさいらずと言つた風のレオが答える。

「なかなか寝付けなくて……まあ、暖まつたら少し寝るよ

ぽんやつと空を見上げながら答えるレオに釣られ、ギルも空を見上げた。

「ああ、星を見てたのか。」この辺は星が良く見えるって有名な所だからな。今の時期だと、龍神座が良く見えるだろ」

「龍神座……？」

何とも突拍子の無い星座の登場に、さすがのレオも眉を顰める。

「つて、龍神座も知らないのか……まあ、大陸に来たのが最近じゃ、知らなくても無理ないかもしけんが」

そう言つと、レオは北の空を指差した。

「あの扇状に並んでる七つの星と、中心にある一つ、合わせて八つの星で出来てるのが龍神座だ。ちなみに龍神様つてのは、北の魔術帝国の更に北にある広大な山脈に暮らしてる真っ白なドラゴンで、翼が七枚あるのが特徴らしい」

「へえ」

ギルが指した方を見ると、確かに一際眩しい星がハツ固まっていた。

正直星が見えすぎて星座が逆に解りにくかったが、元の現実では都心から少し離れた程度の位置に住んでいた事もあって、こんなに星が良く見える場所と言つのは、初めてだった。

「正式には八罪竜つて言つらしいんだが、何で神なのに罪なんだろうな……つて、こんな事レオに聞いてもわからねえか」

そう言つて笑つたギルは、置いてあつた食料箱から一本の酒瓶を

取り出し、グラスに注いでレオに手渡した。

丁度レオの方も飲みたい気分だったので、受け取つてグラスを呑わせると、一口口に含んだ。

「この辺はホント星が良く見えるよなあ、ほれ、あれが翼獅子座だ」
言われて見上げた空には、確かに無数の星が煌いていたが、そもそも翼獅子がどんなモノか解らないレオには、想像のしようが無かつた。

「俺の住んでた所は疊つてる事が多かったから、星は余り知らないんだ」

これは嘘ではない。といつても、レオの場合には単に星座に等興味が無かつただけでもある。

「何だそらのか。もし星座好きなら面白い話ができるのに」

自身は好きなのか、ギルはやたらと星を圧してくる。
筋骨隆々のギルの意外すぎる趣味に、レオは苦笑した。

「なんだ、面白い話があるなら、それだけでも聞かせてくれよ」

「まあ、興味ない奴に言つても仕方ないんだが……さつき言つた龍神様の居る北の山脈には、世界で一番星がよく見える『星見の丘』って所があるらしいんだ」

仕方ない等と言つていた割に、話が始まるとギルは身を乗り出しへ語り始めた。

「何とそこは毎日必ず流星が見える、素晴らしい場所なんだが……困った事に、龍神様は自分の領地に入つた人間を全て感知できる。つまり、そこに行くには龍神様を倒さなきゃならん訳だ」

田を瞑つて悔しそうに語るギルに、話の先が読めたレオはつい笑つてしまつ。

「だからレオ、俺と一緒に龍神様を倒しに」

「遠慮しとくよ」

芝居がかつた動きでがっくりと頃垂れるギルを見ながら、レオはグラスに残った酒を一気に煽つた。

それを大分調整が効くようになつた水鉄砲ですすぐと、木箱に戻す。

「じゃあ、俺はそろそろ寝るよ。また明日な」

少しだけ気を取り直したレオの様子を、頃垂れた姿勢のままで確認したギルは陽気な声を返す。

「おお、またな」

そして、旅路の夜は更けていった。

友と敵と（後書き）

また少し間が空いてしまつて申し訳ないです。○・△

前半と後半で分けようかとも思ったのですが、内容的にそれ程長くも無いのでつなげて出しました。

次回ようやく教国編です……長い中間だった……（；；；；）

教国では、ようやくレオに大きな動きが出てきます。

真面目に書くと決めたため、執筆遅くなってしまっていますが、少しずつでも書いていきますので、これからもよろしくお願ひします。

ファーツ教国

国境の町を出て、一週間近くが経とうとしていた頃、ようやく教国の首都が見えてきた。

教国は宗教や神の直接的な干渉の影響で発言力は大きいが、領土としてみればそれ程広くないので、通常の馬車でも国境を越えて一週間程で首都の近くまで来る事ができる。

とは言えここまで早く着いたのは、レオのある発見のお陰だった。

魔力の持続回復は他人には使えなかつたのだが、S.P.^{スタンダード}の持続回復は、他人にも効果があることが解つたのだ。

というのも、人間相手に試すとリサの時のように問題が起きる事がある為、馬にかけたのが功を奏し、荷馬車を引く馬が殆ど疲れなくなつたのだ。

黙つていた為に最初の内は首を捻つていた仲間達も、効果を確認したレオが説明すると感嘆の声を上げていた。

ただし、疲れないといつても、足や身体に疲労のダメージは蓄積される。

疲労骨折などされてはたまらないので、ある程度は休ませる必要があるが、それでも馬の体力が無限に沸いてくると言つのはほとんどないスピードアップに繋がつた。

盗賊に襲われてからまた少し元気のなかつたレオだが、馬の回復に荷馬車を移動しつつ、足にも気を配つたりと忙しくなく働くうちに徐々に調子を取り戻し、教国に着く頃には殆ど元に戻つていた。

教国に入つてまづ田に付くのは、彼方此方にある古ぼけた塹壕や
バリケードだ。

それらは数十年程度の年季ではなく、数百、或いは数千年という長い月日をかけて、地元の人々が少しづつ作つていつた物のようで、大小さまざまな石で出来た壁からは、細い木が生えている所までつた。

首都に着く途中の小さな村でもあつたのだから、恐らくは教国全体にあると考えた方がいいだろう。

ギルによれば、教国では昔から何時か来る魔物の軍に備えて、そういう物を作つて置くようこと、恒例のように各國に求めていたらしい。

ただ、数千年の長きに渡り魔界から軍が来ると言つ事は無かつた為に、他の國家は領ぐだけ領いて、何もしないのが当たり前だったようだが……。

「教国意外で真面目に作つてたのは、魔術帝国と共和国の国境辺りだけだと思うぞ。といつても、あの辺りは小競り合いが多いから、戦争の準備だったのかもしれんがな」

「へえ……」

隣で、ギルの講釈が続いているが、綱を握つたレオはそれ所ではない。

昨日大ぽかをやらかして馬を怒らせ、アルザダが買つた酒瓶の2割を割つてしまつたのだ。一の舞を避けるためにも、細心の注意を払わねばならない。

因みに先頭の馬車に乗つてゐるのが、指導役のギルとレオだけなのもそれが原因である。

「おいおい、そんなにガチガチで大丈夫かよ。また昨日みたいに怒らせるんじゃないねえぞ」

「わ、解ってるよ……クソ、馬を洗脳する魔法とか使えればな……」

顔を顰めて馬を凝視するレオに、ギルは頭を抱えて溜息をついた。全く上手くいっていないレオと違い、後続の車両を操作しているリサはまだまだぎこちないながらも、きちんと操作できている。

「エルフは動物と仲良くなるのが上手いって聞いてたのに、こりゃ思つたより骨が折れそうだ」

「お、俺は普通のエルフとは違つんだ、ハイエルフだから」

「いや、そこにはハイエルフなら余計に早く仲良くなれるんじゃねえか……？」

「……」

ぐうの音も出ないとほこの事である。

もつと反論したい所ではあるが、余り気を逸らすと昨日のようになにかミスをしてしまうかも知れない。これ以上酒瓶を壊すわけには行かないし……と、心中で言い訳をしたレオは、何も言わずに馬を見つめた。

教師役という立場の為か、何とか笑いを堪えた（が、目が笑つている）ギルが氣を使って話題を変える。

「ところで、馬にかけた回復魔法、そろそろ切れる頃じゃねえのか」

本来魔法の効果時間は身体に染み付いているレオだつたが、手綱を握る事に集中していたせいか、時間の感覚が麻痺していたようだ。軽く相槌を打ち、手綱をギルに渡すと、荷馬車を引く一頭の馬にSP持続回復の魔法をかけた。

荷馬車の後部へ移動し、後続の馬への魔法の継続と体調のチェックを終えたレオが元の席へ戻ろうとするが、ギルは手綱を握ったまま隣の席を指した。

「教国に来たのは初めてなんだろ、景色でも眺めてろよ。この国は町並みが整ってる事で結構有名なんだぞ、折角だし見て置け」

本音を言えば、差し迫る手紙の内容に対する緊張から逃れる為に、荷馬車の操作にでも集中していたかったレオだったが、好意で言ってもらつていい手前断りきれなかつた。

ギルの隣に座つたレオは、背凭れに身体を預け、暫し外の景色を眺める。

実際良く見てみると、教国の風景は中々見ごたえがあつた。

塹壕や壁は一見目立つが、明らかに長い歳月をかけて作られたそれらは、所々苔むし、草木と一緒に風景の一部になつてゐる。

更に城壁や石造りの家々はダールなどと違い、この地方特有の真っ白な石で作られ、それが碁盤目状に並ぶ十字路は、絵の中に居る様な錯覚さえ覚える。

「確かに、良く見ると凄いな」

純粹な驚きと、それすら気付かない程馬に集中していた自分への呆れを含んだのレオの声に、ギルは苦笑する。

「だら。この国は出来た当時から支配構造がしつかりしてるので、町並みは世界一だつて評判なんだ。ま、その分狂信的なトコもあるから、迂闊な事は言えないと云つて面もあるがな」

ギルの言葉で、レオにも何となくこの国の構造が少し理解できた気がした。

元の世界でも、見たことの無い神様を熱心に信仰する人は多く居た。

それがこちらの世界では現実に干渉して来たり、或いは巫女を通して擬似的に実物と会う事さえ可能なのだ。その影響力は計り知れない。

レオは元の世界は特に宗教等はやつていなかつたし、正直こちらの世界の神もどこまで本当かと思う位だが、この国でそれを口に出すのは止めた方が良いだろう。

壇と低い壁が目立つ農民向けの町並みを過ぎると、いよいよ中心部の高い壇の前行き着いた。

大小様々な門の中で、一際大きな門の前で一旦止まる、アルザダと最もランクの高いゲオルグが降りて簡単な手続きを済ませ、門をくぐる。

壇の中は流石は首都と言つべきか、この世界に来てから始めての人ごみがレオを出迎えた。

道には人が溢れており、初心者のレオには絶対に無理だと言えるほど、荷馬車の操作も大変そうだ。

そんな中、門の近くに停められた一台の荷馬車がレオの目に留まつた。

レオが指差した先には、始めて見る鉄製の荷馬車があつた。

「ああ、ありや北方から来た荷馬車だろう。魔法を付与しやすい鉄で彼方此方工夫したとかで何年か前に帝国辺りで流行つたんだが、値も張るし整備も大変だつてんで、直ぐ廃れたらしい。まだ持つてる奴居たんだな」

鉄で出来た荷馬車など、この世界にしては画期的じやないかと思つたレオだったが、考えてみれば動力は馬が精々なのだ。弓矢や盜賊の使うちょっとした魔法には強いかもしないが、移動効率が落ちて商品価値が下がつてしまつては元も子もない。

元の世界の技術については、車やバイクの詳しい仕組みなど元から知らないので元々諦めていたが、目の前の前の鉄の荷馬車を見て、レオは改めて自分には無理だろうと再認識した。

「確かアルザダが北に行く商人に、珍しい石を売りたいとか言つてたな。後で知らせてやるか」

視線を向けたギルに釣られてレオが荷馬車を見ると、一週間程前に話題に上った木箱が変らず置いてあつた。

今の今まで忘れていたが、売つてしまつと言わるとレオの忘れかけていたゲーム魂が疼き、売られる前に一目見てみたいと言う衝動に駆られた。

しかし、流石に勝手に箱を開けるのは不味い。後で売りに行く時にでも付いて行けば良いだろう。

「よつし、小屋付きだ。レオ、宿は此処にしようぜ。帰りもあるし、これ以上奥には行きたくねえ」

レオの知る限り最も荷馬車の操作が上手いギルも、流石に人ごみの中を突つ切るのには慣れていないのか、切羽詰つた声を上げてきただ。

この状況で宿の贅沢を言つても仕方が無いので、レオも特に反論も無く頷き、荷馬車はギルの操作ですぐさま宿の隣の小屋へと向つ。

結果的に宿は当たりだった。と言つても、宿の主の話では、教国は巡礼客用に国が定めた基準がある為、そもそも宿のハズレは殆ど無いらしい。

宿に入るとアルザダに先ほどの商人の話をした。

手紙は何時でも渡せるが、門の前に居た商人はもうすぐ国を出るかもしない。長旅の疲れもあるだろうと女性陣に休憩を取らせ、箱の中身が気になるレオと、いつも一緒に品物を卸しに行くギルとアルザダで、先ほどの鉄の荷馬車の元へと向つた。

魔術帝国から来たと思しき商人は、最初突然声を掛けたアルザダに懐疑的だったが、品物を見て目の色を変えた。

「おお、透貫石ですか……これは助かる。丁度お得意様から、探して欲しいと頼まれていたのでね。良かつたら全部売つて欲しい」

傍らに立つたレオが、開けられた木箱の中を見ると、そこには青みがかつた半透明な鉱石がキラキラと輝いていた。

といつても、透明度はさほど高くない。宝石としての価値はそれほど無いだろう。

「有難う御座います。教国内での取引ですので、念のため此方の書類にサインを」

取り引きの方は上手く行つてゐるようだ。品物は小さな木箱一つなので、護衛と荷物運びが役目のレオは、追加の注文がない限り特に用事はない。

手持ち無沙汰に鉄の荷馬車を眺めていると、相手の商人が苦笑しながら話しかけてきた。

「ここの荷馬車が気に入つたなら、喜んでお売りしますよ」

非難された訳でもないが、盗み見ているのがバレたような気分になつたレオは、反射的に顔を向ける。

「あ、いえ、単に珍しいと思つただけで……俺はアルザダさんに雇われてる身なので、荷馬車はあまり……」

と言つよりレオの場合、一人で行動するのなら空を走つた方が速いのだ。

勿論テント等は持ち歩かなければならないが、魔界に潜入するのでなければ収納袋に入れるだけで事足りる。

「ふふ、まあ冗談ですよ。本音を言えば売りたいですが、今時こんな物を買う物好きは居ませんから」

自嘲氣味に笑つた商人は、鉄の荷馬車に手を掛ける。

「流行と言うのは怖いもので、得意先の技術者に熱弁を振るわれた時は、とてもいい物だと思つたんですが、もう少し慎重になるべきでした……。

まあ、耐魔コーティングなんかもあって、高級品を入れる分には安心できていいいのですが、荷馬車一杯の高級品なぞ、滅多に仕入れる事はありませんから」

彼にとつては一世一代の買い物だつたのだろう、それが失敗だつたと解つたときにはショックだつたに違ひない。

肩を竦める商人に、同じく商人のアルザダは同情するような視線を向けた。

商人は少しの間荷馬車眺めていたが、気を取り直したのかアルザダに向き直つた。

「さて、では商売の続きを」

結局その後幾つか商品を売買した後、ある程度時間も過ぎたので一旦宿に戻る事になつた。

去り際、これまで見たことがない程真剣な表情で、先ほどの商人の方を見るレオを不審に思つたギルが声をかける。

「どうした、何か気になることでもあつたのか？」

問い合わせにも答えず、暫し無言を貫いていたレオは、やがて独り言のように囁いた。

「なあ、あれつて何だか……」

だが、途中まで言つて頭を振り「なんでもない」と言つと、レオはそれつきり黙り込んでしまう。

ギルもアルザダも気にはなつたが、難しい顔で悩むレオの様子を見て、それ以上は聞けなかつた。

宿に戻ると、丁度リサとゲオルグがロビーから出る所だつた。

「お、戻ってきたか。なあレオ、手紙はいつ渡しに行くんだ」

気楽な調子で聞いてくるゲオルグに、レオは緊張で喉を鳴らした。だが、その為に教国まで来たのは確かだ。未だ心中は期待と不安がせめぎあっているが、待つた所で答えが変るものでもない。

「ああ、取り合えず普段着に着替えてから、その辺の教会に当たるつもりだ。手紙を見せれば、取り次いでもらえるだろう」

「アタシ等も付いていいかい? どうせ買い物くらいしかやる事無いしね」

軽い口調を貫くゲオルグだが、以前苦言を言われた事もある。裏には、レオの正体を見定めると言う意味合いもあるのだろう。後に繰くりサも、心なしか控えめな様子で頷く。

「私も……出来れば行きたいです」

直接本人に会えると決まつた訳ではないので、全員で行つても仕方ない気もするが、正直レオも心細い面もあるので、断る気にはならなかつた。

「解つた、一緒に来てくれ。ギルもアルザダさんも、良かつたら来て欲しい」

一人は何も答えなかつたが、黙つて頷いてレオの準備を待つた。

一行は宿の主に近場の教会を聞き、歩いて数分程の教会へ向かう事にした

どこと無く緊張した空氣の中、聞いていた通りの道順を歩いていたのだが、曲がり角に差し掛かった時、先頭のレオがみすぼらしい身なりの中年男とぶつかった。

レオのすぐ後ろに居たギルやゲオルグは、その瞬間にニヤリとしたのだが

「おひとじ」免よ

「すいません」

と言ったまま当たり前のよう歩き続けるレオに、困惑したよつな声をかける。

「お、おこ……レオ……？」

「え、良いのか？」

一人の混乱したよつな声に、レオを含む他三人が疑問の視線を送る。

「いや、だつてお前今　スられただろ？」

何で追わないんだと言いたげなゲオルグの様子に、血の気が引いたレオは懐を探る。

案の定、入れておいた財布と手紙が無くなっていた。

慌てて振り返ると、先ほどの男は今まさに駆け出し、曲がり角を曲がる所だった。

場所が人の多い大通りなので、テレポートはできれば使いたくな

かつたが、逃げられては元も子もない。

角へ向つて走りつつ、人の合間を縫つて着地点を指定すると、テレポートを使い、スリの後を追う。

背後でレオのテレポートに驚く声や、ギルやゲオルグが人ごみを搔き分けて走る気配が伝わってきた。

後で愚痴られるだろうなあと思いつつ、レオを振り返つて驚愕の表情を浮かべるスリに怒鳴りつける。

「手紙を返せ！」

サイフの中身も惜しいが、今は手紙の方が先だ。だがスリの方も突然距離を詰めたレオにパニックを起こしていいるらしく、無視して走り出してしまう。

舌打ちしつつ追いかけるレオだったが、如何せん人が多くテレポートが使えない。

万一他人が居る場所にテレポートしたらどうなるのかなど、レオには解らない。だが、勢いだけでそれを試す気にはなれなかつた。逃げるスリを追いかけつつ、空を飛ぼうかと仰ぎ見たが、流石に大通りには無いものの、脇道には洗濯物を干したロープが張られていて、突っ込んでしまうと時間を食いそつた。

「ああもう、これだから外国は……」

焦りの為か自分でも良く解らない愚痴を言いつつ、走り続けるスリを追う。

しかし、幾ら地の利があると言つても所詮は街のスリ。テレポートを切り札に追い縋るレオを相手に、十分程全力で走り続けた所で体力の限界が来てしまつた。

路地裏に入り、最後の足掻きに手近にある物を放り投げつつ、よろよひとへたり込んだスリの前に、レオが仁王立ちする。

「はあ……ひい……す、すいませんでした……」

精根尽き果てた様子の中年のスリは、盗んだ手紙と財布を呼吸すら乱れていらないレオの前に差し出し、その場に仰向けに倒れこんでしまった。

特に逃げる様子もないスリに溜息で答えたレオは、彼が差し出した手紙と財布を確認する。

手紙は封にも傷は付いていないし、財布の中身もそのままだ。確認を終えたレオがほっと胸をなでおろした頃、ようやくゲオルグとギルが追いついた。

「はあ、はあ　つたぐ、何やつてんのさ。スリに財布取られるアサシンなんて、聞いたこと無いよ」

走る途中で考えたのであるうゲオルグの的確な指摘に、返す言葉も無いレオは「す、すまん」と小さな声で謝る。

幾らレオがスリに会つたのが初めてとは言え、動体視力や感覚等は常人の数倍研ぎ澄まされている。平時ならば、盗られた瞬間に気付いていただろう。

「すまんじやないよ全く……もし逃げられてたら、この国に来た意味がなくなっちまう所だつたんだよつ」

「は、はい。注意力が足りませんでした……」

流石に頭にきたのか、珍しく説教口調のゲオルグに終始平謝りす

るレオを、スリを縛り上げるギルは苦笑交じりに眺めた。

幾らか呼吸の落ち着いたスリを立ち上がりさせると、怒り続けるゲオルグから逃げるよつこにレオが聞く。

「やう言えば、ソイツこれからどうあるんだ？」

スリを結んだロープの端を持ったギルが、思はずよつこ畠を見上げながら答える。

「確か、最寄の教会に連れて行くんじゃなかつたかな。まあどうせ近場の教会にいくつもだつたんだ、ついでに行つてみれば良いだろ」

いつもながら、聞いた事にすらすらと答えるギルに、レオは改めて関心した。

「相変わらず何でも知つてゐるなあ」

「別に何でも知つてゐるつて訳じやないぞ。商談に同行するからには、知つておかなきゃならん事が多いつてだけで」

「スリの今後の話より、今はアタシの話を聞きなさいよ」

何事も無かつたかのように大通りへ歩き出さうとするレオの背中に、放置されたゲオルグが恨みの籠つた視線を向ける。

「もうその辺にしといてやれよ。レオだつて緊張してたんだ、調子が出ない時もあるだろ」

お田付け役のギルに窘められ、そっぽを向いたゲオルグをなるべ

く視界から外し、レオは近くに教会が無いかと周囲を見渡した。

すると屋根の向こうに、鐘の付いた一際大きな建物があるのが見えた。

方角的にも、レオ達が走ってきた方向にある。途中でリサ達にも会流できるだろ？

暫くそちらへ向つて歩いていると、案の定途中まで追いかけているアルザダとリサを見つけた。

「あ、レオさん、手紙は大丈夫でしたか？」

不安そうに聞くリサに手紙を出して見せると、レオは捕まえたスリを指して言った。

「大丈夫だ。後は取り合えず、近くの教会にコイツを引き渡さなきやならないらしいから、そこでついでに手紙の事も聞こいつと思つてレオに縋りついてきた。

「

「」つして会流した一行は、目的の教会へ向つた　のだが、ようやく疲れや抜けてきたスリがその教会を見た瞬間、恐怖に顔を歪めてレオに縋りついてきた。

「ちょ、ちょっと待つてくれ、俺をこの教会へ入れるつもりなのか

ツ」

スリの突然の豹変振りに多少面食らつたレオだったが、否定する要素が無いので頷く。

そのレオの答えに、更に顔を蒼ざめさせるスリを見て、何事かと思つたレオが、事情を知つて居そうなギルやアルザダに視線を向けるが、一人も困惑しているようだつた。

「頼む、後生だからあの教会は……あの教会だけは止めてくれつ。金なら、財布に入つてた額の倍払つ、お願ひだから！」

「いや、金は要らないんだけど」

「」の国の法律が良く解らないレオは、判断を仰ぐ為にギルを見ると、どこと無く渋い顔をしていた。

「悪いけどな、俺達教会に用があるんだ。何でそんなに嫌がるのか知らないが、問題起こす訳にはいかん」

するとスリは、「」の世の終わりを見たかのような顔で膝を付き、傍田にも解るほどに震えだした。

「そうだ、隣の……五分くらい歩いた所に、話のわかる司祭が居る教会があるんだ。アイツならきっと丸く治めてくれるつ、案内もするから、頼むよ！」

必死の形相で縋られ、どうした物かと考えていたレオだったが、スリの背後に居たゲオルグが彼の尻を蹴飛ばし、ギルからロープを奪つて無理矢理引き摺り始める。

「結局、自分が楽したいだけじゃないか。こんな奴の言つ事聞く必要無いよレオ、ほら、皆もわかつたといへよ」

「」、「」の教会には……悪魔が、悪魔が居るんだ ッ！」

「教会に悪魔なんて居る訳無いじゃない、何言つてんだか」

妄言にしては鬼気迫る勢いで暴れるスリに、他の仲間達は顔を見合わせたのだが、ゲオルグは特に気にする事も無く目の前の大好きな教会へと入つてしまつた。

大通りの近くの大きな教会だと叫うのに、聖堂は無人かと思われるほどに静まり返つていた。

宗教が盛んな国だと聞いていただけに、レオはその雰囲気に違和感を覚える。

だが当のゲオルグは特に気にならなかつたようで、そのまま震え続けるスリを引き摺つて奥へと入つていく。

続くレオが聖堂の奥を見ると、書物から顔を上げた司祭らしき男と目が合つ。

その男は、あまりにも異様な姿をしていた。

年齢は二十台前半くらいだろうか、整つた顔立ちに、ラメでも入つているのではないかと思うほど煌く金髪をした白人風の彫りの深い男だ。

ここまで普通なのだが、問題は服装である。

全身ピンク一色のローブを纏い、薔薇をモチーフにした模様が刻まれた真っ赤な帽子を被つっていたのだ。

なんて格好してんだと言いたくなつたレオだが、ひょっとしたらアレがこの世界の僧侶の一般的な格好なのかも知れないと思い、慌てて仲間の表情を伺う。

すると案の定、全員が何度も目を瞬いて目の前の光景に呆然としているようだつたので、何となく安心したレオは一足先に冷静さを取り戻す事が出来た。

混乱している仲間を他所に、取り合えず深呼吸をしたレオは服装については見なかつたことすると、極力普段通りを装い彼に声をかけた。

「ええと……街でスリに遭つて捕まえたので、引渡しに来たんです
が」

「おや、それは災難でしたね。係りの者を呼びますので、少々お待ちください」

至極真つ当な返事をされて、ようやく現実に戻つたゲオルグが生返事をしてロープの端を差し出す。

「あ、ああ、後は任せた」

ピンク色の僧侶がスリを引き摺り、聖堂の奥の扉を開けて数人のシスターを呼ぶと、彼女達はロープを受け取つて元の扉の向こうへと去つていった。

連れ去られるスリから恨みの籠つた視線を向けられたり、目の前の男への突つ込みを我慢したりと気になることは多いが、目下の優先事項は手紙の事だ。

「あの、といひでひよつとお話したい事が　」

「まあまあ、ともかくお座りになつてください。ちなみに、財布を盗られたのはどなたですか？」

質問に答えるようにレオが手を上げると、最前列の席を勧められ、他のメンバーはその後ろの席に着いた。

どうやら先に事情を聞かれるようだ。と察したレオが身構えていると、いさかオーバーリアクション気味の僧侶が両手を広げ「さて……」と切り出した。

「本日は教国にて災難に遭われたようで、司祭たる私……アルバート・フーラメルも大変遺憾に思っております。

まあ、始まりは災難だったとは言え、ここでお会いできたのも何かの縁です。折角なので、詳しい話を聞く前に、この教会についてじ説明しましょう。

この教会は皆様もご存知の通り、この世界で唯一人間と直接対話することの出来る至上最高の女神様、イシス様を信望する為に作られた教会の一つで、この都市の中には同じくイシス様を奉る為の教会が一百以上あるのです。

この数は他の神々を奉る教会に比べて類を見ない多さであり、二番目に多い知識の神トート様の教会と比べても優に六十以上の差をつけて上回っています。

と言つのも、イシス様は非常に慈悲深い事で知られる愛の女神であり、始まりとなる五万年前の伝説からして

「

止まることなく動き続けるピンクの司祭 アルバート の口に呆気にとられ、レオ達は五分ほど黙つて聞いてしまった。

我に返つたレオが、同じく危険に気付いた仲間達と何とか話を止めようと声をかけるも、何度も声をかけても

「もう少しですから、待つて下さい」

と言われ、取り合つてもらえなかつた。

諦めて終るのを待つていたレオだが、もう少しもう少しと何時までも引き伸ばすアルバートに、一時間程経過した所で限界が来た。

「いい加減にしてくれッ、いつになつたらその話は終るんだ！」

「ひとつと言われましても、事情聴取をする上で双方に誤解があつてはいけませんから。まずはこの教会に関して理解して頂かないと…」

…「」

滅茶苦茶な理由をさも当然のように言つアルバートに、頭痛を感じ始めたレオは更に怒りの声を上げる。

「俺は話を聞きたんじやなくて、聞いてもらいに来たんだ。話がしたいなら、礼拝に来た奴にすれば良いだろッ」

米神に青筋を浮かせながら叫ぶレオに、アルバートはやれやれと両手を挙げて頭を振つた。

「全く……いいですか、会話がしたいと言つのなら、まずは相手の話をきちんと聞かなければなりません」

「貴ツ様が言うなアッ！」

渾身の怒鳴り声でも一切怯まないアルバートに脱力したレオは、一旦冷静になつて説得するしかないと結論に至つた。
眉間を揉みほぐしながら、何とか声のトーンを落とす。

「アンタだつてずっと話してたら疲れるだろ、ちょっと休んでこつちの話を」

「ハツハツハ、大丈夫ですよ。なんと言つても、私は牢に入れられた皆様を改心させる為に、毎日二十時間程説法を説いていますから。

その甲斐あつてか、この教会に来た犯罪者の再犯率は殆どゼロなのですよ」

瞬間、レオの背中に戦慄が走る。

「この世界の一日は元の世界と変わらない、二十四時間程だ。その内の二~十時間話していると言う事は、睡眠やその他に割り当てられる時間が、たつた四時間しかないと言う事になる。

そんな非現実的な事実を、さも当然の事のように微笑みながら語るアルバートを見て、レオは先ほどのスリの冥福を祈った。

「ち、因みにその……牢に入れられた人間と言つのは、生きて帰れるのか……？」

止せばいいのに、つい興味本位で聞いてしまったレオに教会の悪魔は変らない笑顔で答える。

「勿論です。何故か自分から壁に頭をぶつけて怪我をしてしまう方も居ますが、私が即座に治癒しますので」

アルバートの回答と、レオの脳内で撤退を決める採決が下されたのは同時だった。

決断と共に仲間に逃げろと言おうと、レオは勢い良く振り返る

が、振り返った聖堂には、レオとアルバート以外の人間は一人も居なかつた。

今思えば三十分程経過した辺りから、仲間達の制止の声は止んでいた。

恐らく、その頃に全員が逃げていたのだろう。彼らをアルバートが止めなかつたのは、初めからスリ事件の関係者だったレオに的を絞つて最前列に座らせていた為だ。

だが、気付いた頃には最早遅い。レオが誰もいない事に焦つている内に、彼方に見える聖堂の出口は、独りでに閉まり初めていた。

「さあ席について下さい。私の話は、まだまだこれからですよ」

クツクツと肩を揺らして晒うアルバートに、最早待つたなしと悟つたレオが出口へ駆け込もうとした時、不意に聖堂全体を小さな光が埋め尽す。

レオが構わず進もうとすると、体に当たつた光の粒が突如凄まじい光を発した。余りの眩しさに堪らず目を瞑ると、風のよつた弱い力に押され、元居た席へと強制的に戻されてしまう。

「なつ……」

再びの戦慄を持つてアルバートを見ると、彼は実に楽しそうに晒いながら、両手を広げてゆっくりと中空に浮かび始めていた。

「クツクツク……如何ですか、私が十年の歳月をかけて編み出した、対逃亡信者用無血拘束魔法　　スターダストノヴァの威力は！」

「な、なんて無駄な努力を……」

風に揺られて漂う光の粒は、屋外では飛ばされて無意味だろうが室内では別だ。

それでも流石に高度な演算が必要なのか、アルバート自身は浮き上がつたまま目を瞑つているが、リサの氷球と同じく維持にはそう魔力を使わないようで、表情は涼しげだ。

何とかテレポートで逃げられないかとレオが目を凝らしても、光の粒は聖堂全体を覆つていてどこに飛んでも直ぐに捕らえられてしまいそうだった。

いつそ椅子を投げ飛ばして道を作ろうかと手を掛けたが、したり顔のアルバートに制止された。

「それは止めた方が宜しいですよ。理由はどつあれ、教国内で教会を破壊すると、大変面倒な事になりますから」

「くつ……」

レオの悔しげな声に満足したアルバートは、広げていた両手を更に高く掲げて語り始める。

「さて、どこからお話しましょつか。そうですねえ……では、まずはイシス様が地上で『ビオリヤアア』ガツハアツ」

今まさに話が再開されるかに思われた時、聖堂奥の扉が勢い良く開かれ、同時に弾丸のような速度で飛んできたモーニングスターがアルバートに直撃し、真横に五メートル程吹き飛んでいった。自らの血の海でもがくアルバートを完全に無視し、投げた本人である背の低い女性司祭はレオの前に来て頭を下げる。

「申し訳ありません、話はシスター達から聞きました。私が留守に

している間に、こんな事になつていたなんて」

そんな事よりアルバートは大丈夫なのかと焦るレオだったが、たつた今大怪我をしたはずのアルバートは既に立ち上がり、何事も無かつたかのように頬に付いた血を拭き取つていた。

変わつた所と言えば、邪魔をされたせいか若干不機嫌そうに顔を歪めているくらいだ。

「全く、何をするんですか。私の大切な法衣がまた血塗れになつてしまつたでしょ？」

「いっそ真っ赤に染めてしまえばいいと思います。今の色よりずっと常識的ですよ、アルバート大司教様」

視界にアルバートを入れもせずに答える女司祭に、先ほどと同じように肩を竦めてオーバーリアクション気味のアルバートが苦言を呈する。

「やれやれ、大司教たる私に危害を加えて平然としているなど……貴方の方が、ずっと常識が無いでしょ。それにこの法衣の色は、イシス様の髪飾りの色と同じです。お揃いです。信仰の証しなのです」

「私は特別に大司教様には何をしても良いと、イシス様よりお許しを頂いていますので。それとその法衣はお揃いでも信仰の証でもなく、あなたが女神様の変態ストーカーである証です」

呆気にとられるレオの前で、一人の司祭の舌戦が繰り広げられて いる。

アルバートの方はまだ話足りない様子だが、女司祭の方はこれ以

上話す氣は無いよつで一瞬背後へ視線を向け、アルバートを指差した。

「相変わらず一方的に全否定とは、貴方には会話をする能力がつてちよつと待ちたまえ君達、私の話はまだ終つて無いんだぞ」

女司祭に続いて現れたシスター達数人に両脇を抱えられ、先ほど のスリと同じように、アルバートは扉の奥へと連れ去られていく。両脇を抱えられたアルバートは、それでも必死にレオに向つて手を伸ばした。

「ま、待て、まだ入信申請にサインを貰つてな……」

手馴れた様子でアルバートを連れ去つていった彼女達をレオがぼんやりと見つめていると、先ほどの背の低い女性司祭が話しかけてきた。

「本当に御免なさい。彼のせいで、最近は滅多に礼拝に来る人が居なかつたので、少しくらい留守にしても大丈夫かと……」

謝られた方が氣の毒になるような女性司祭の謝罪に、最早怒る氣も失せたレオは曖昧に相槌を打つた。

「はあ、ええと」

途中レオが詰まつた事で、未だ自分が名乗つていらない事に気付いた女司祭は頭を下げた。

「ああ、申し遅れました。私はアメリカと言います」

「俺はレオ、冒険者です。ところで、さっきのは」

アルバートが連行されて行つた扉をみながら呟いたレオに、アメリカが答える。

「彼は……その、昔とある街に疫病が蔓延した折に、数千人の命を救つた功績で大聖堂就きの大司教になつた方なのですが……本来見えない筈の、靈体の愛の女神イシス様を直接目で見てしまつてから、あの調子で女神様にアタックを続けた為に……」

「なるほど」

やつてゐる事はとんでも無いが、神様の能力のせいだとしたら、情状酌量の余地はあるかもしない。と、思いかけたレオだつたが

「まあ、その前から大体あんな感じだつたらしいのですが」

「どうやら同情は必要なさそうであった。

世間話を終えた後、レオは簡単にここに来た経緯を伝える。
捕まえたギルやゲオルグは今は居ないが、軽犯罪でもあるのでレオの証言だけで特に問題ないと呟くことだった。

「とにかく其方の用件と言つのは……」

ようやく本題に入れたことに安堵しつつ、レオは懷から一枚の黒い便箋を出した。

差出人の名前は勿論、ホワイトパールだ。

「この手紙をカーケスという人に届けに来たんです。少々事情があって、出来れば直接渡したいのですが」

手紙を見たアメリカは目を見張った。

世界に五人しか居ないSランク冒険者と、教国では知らぬものは居ない、依り代の巫女の世話役の名前が書かれた手紙だ。驚くのも当然だろ？

数秒悩んだ末、アメリカは躊躇いがちに答えた。

「すみませんが、彼もこの国の要人ですので、今すぐ返答する事はできません。

ただ、会いたいという旨は伝えておきますので、恐らく問題が無ければ明日にでも宿に迎えが行くかと思います。それで宜しいでしょうか？」

「はい、宿は南の大きな門の」

詳しい場所と宿の名前を伝え、手紙をアメリカに渡す事で、ようやくレオは教会を出る事が出来た。

用件が終つた事で、忘れかけていた長旅の疲れが顔を出し、教会での一見も重なつてめつきり老け込んでしまつたレオが大通りになると、丁度他の四人が楽しそうに買い物をしている所に出くわした。

「お前ら……」

「ん、なんだもう終つたのか。どうだった？」

何事も無かつたかのように聞くゲオルグに、レオは殺意の籠つた視線を向ける。

元はと言えばレオが財布を盗られた事が原因ではあるが、余りの

も冷たい仕打ちではないだらうか。

だがリサやアルザダは「ゲ、ゲオルグさんが……」等と言い訳しているし、スリの件では迷惑をかけたのも確かだ。
それに何だかどつと疲れが出たレオには、これ以上怒る気力も沸いてこなかつた。

「……話は通してもらつた、明日には迎えが来るだらうってさ」

怒りを納めたレオが経過を報告すると、それまで露天の商品を眺めて風景に溶け込んでいたギルが、ひょっこりと顔を出した。

「それじゃ、俺とアルザダは商売の続きをしにいくぞ。ゲオルグはどうする？」

相変わらず要領の良いギルに、巻き込まれ体质のレオは関心すら覚えてしまつ。

「暫く居る事になりそうだし、アタシはギルドの依頼でも見てくるかね」

夕飯までは戻ると言つ三人と別れ、レオとリサは一足先に宿へと戻る事になつた。

ところがその道中、流石に悪い事をしたと思ったのか、リサが気を使って無言になつてしまつたので、何となく氣まずくなつたレオは、雰囲気を変える為自分から話しかける事にした。

何か話題は無いかとリサを見て、ダールから先送りにして来た問題に気付いた。

「そういうえば、余裕が出来たら、俺が前に使つてたロープをリサ用に仕立て直してもらおうと思ってたんだつた。時間も掛かるらしいし、明日辺り頼みに行つてみようか」

唐突に声をかけられたりサは、一瞬意外そうにレオを見て頷いた。

「でも、良いんですか。この盾といいレオさんが渡す物は、どれも凄い物ばかりな気がするんですが……」

確かにそれらの装備品はゲームとは言えレオが苦労して手に入れた物なのだが、職業を変える方法が無くなってしまった今、後衛用のロープ等は完全に宝の持ち腐れだ。

装備制限等も無いので、鎧や盾や剣と言つた物は使う機会もあるかもしれないが、最強の装備が使えてるので、それすら使う時が来るかどうかは怪しいものである。

売つて金に換えようにも、出所が明かせないのでどう易々とは売れない。それで無くとも貴金属があるので、当分は金にも困らないのだ。

よつて現状一番の使い道は、仲間に使つてもらう事だ。刻印が消えて事情が話せるようになれば、幾つかギルやゲオルグに渡そつと思つてている品もある。

「まあ、凄すぎるのが問題と言つた……俺としても考えた末の使い道だから、気にしなくていいよ

本当に何でもない事のよつて言つてレオに、急に難しい顔になつたリサが躊躇いがちに言つた。

「助けてもらっている私が言つのもなんですけど、幾らなんでもレオさんはお人好し過ぎです。もう少し慎重に判断しないと、いつか狡賢い人に足元を掬われてしまいりますよ」

「う……」

レオに出会うまで、人間関係でのトラブルが多かつたりサだけに心配になってしまったのだろうが、痛いところを通り越して完全に凶星なレオにはその言葉が鋭く突き刺さった。

胸に刻まれたリスイの刻印の件があつたのに、レオの危機感にはあまり変化がないのだ。心配するなと言う方が難しいだろう。

とは言え、仲間と共にまつたりとゲームをして、バイトの延長で寂れかけたホームセンターの平社員になつていたレオにとつて、生存競争のような生き方などそう簡単に出来るものでは無い。

「それに関しては、その……追々慣れて行くと思うから、暫くは手を貸して貰えると助かる」

「勿論そのつもりですけど、レオさん一人の時はどうにもできませんからね」

呆れたような視線を胸の刻印に向けられ、反論の余地が無くなつたレオは黙つて宿屋へ入つていった。

ファーツ教団（後書き）

おはよう御座います。

どうも、作者です。

間が開いたせいか前の話で使つはずだつた話を忘れたりしてこつちに来てしまい、ちょっと場面の切り替えが多くなつてしまいまし
た。

よつやく勘も戻ってきたのですが、虫食いのよつて忘れてる部分
があつて、確認の為にこれまでの話を読み返す作業が多く、相変わ
らずの牛歩執筆です。

手紙の方は次話でよつやく片付きます。長かつたですね。

最後に間開いてたにも関わらず、感想寄せてくれた皆様に感謝を。
それでは今日はこの辺で。また次回、近いづかにお会いしましょ
う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3869u/>

グラビティワールド

2011年10月9日21時19分発行